

COMMEMORATIVE INTERNATIONAL SYMPOSIUM FOR THE THIRTIETH ANNIVERSARY OF NICHIBUNKEN

創立 30 周年記念国際シンポジウム

# 世界の中の日本研究 批判的提言を求めて

Edited by INOUE Shōichi

井上章一編

国際シンポジウム 53

International Research Center  
for  
Japanese Studies

国際日本文化研究センター



COMMEMORATIVE INTERNATIONAL SYMPOSIUM FOR THE THIRTIETH ANNIVERSARY OF NICHIBUNKEN

創立 30 周年記念国際シンポジウム

**世界の中の日本研究**  
**批判的提言を求めて**

Edited by INOUE Shōichi

井上章一編

国際シンポジウム 53

May 19–21, 2018

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

© 2021 International Research Center for Japanese Studies

Print edition : ISSN 0915-2822

Online edition : ISSN 2434-3145

All rights reserved by the International Research Center for Japanese Studies.

No part of these proceedings may be used or reproduced without written permission,  
except for brief quotations embodied in critical articles and reviews.

First edition published in 2021

by the International Research Center for Japanese Studies

3-2 Goryo Oeyama-cho, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192 Japan

Telephone +81-(0)75-335-2222 Fax +81-(0)75-335-2091

URL: <http://www.nichibun.ac.jp/>

## 目 次

[序] 挨拶—日本文研・創立 30 周年記念国際シンポジウム開催に向けて  
小松 和彦…5

### 世界の中の日本研究 批判的提言を求めて

\*印の付いた英語原稿は日本文研の責任のもとで作成した。

新しい問題意識の共有へ—フランスにおける日本（文化）史研究の近況を一例にして  
マティアス・ハイエク…9

[英語原稿]\* Toward Shared Awareness of New Questions: An Example from the Current  
Condition of Historical Studies of Japan (and Japanese Culture) in France  
Matthias Hayek…17

日本研究の国際化及び学際化にむけて ファン・ハイ・リン…25

[英語原稿]\* Toward Internationalization and Interdisciplinarity of Japanese Studies  
Phan Hai Linh…35

世界の中の日本古典文学—翻訳と研究方法の問題点から

アンダソヴァ・マラル…47

[英語原稿]\* Classical Japanese Literature in the Global Context: From the Perspectives of  
Translation and Approaches  
Andassova Maral…57

韓国における日本研究の現状と課題—日本文研創立 30 周年に寄せて— 李 康民…67

[英語原稿]\* Current Condition of Japanese Studies in Korea and Challenges:  
Commemorating the 30th Anniversary of Nichibunken's Foundation  
Yi Kang-min…75

日本音楽の研究の内と外 時田 アリソン…85

[英語原稿] The Ins and Outs of Japanese Music Research  
Alison Tokita…93

共同研究の力点を考える

共同研究「日本の舞台芸術における身体—死と生、人形と人工体」

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ…101

[英語原稿]\* Considering Focus of Joint Research: Joint Research Project “The Body in the  
Japanese Performing Arts: Death and Life, Puppets and Artificial Bodies”  
Bonaventura Ruperti…107

新しい「世界文学」を構築する試み—堀田善衛の『歯車』を中心に—

王 中忱…115

[英語原稿]\* Attempt to Construct New “World Literature”: A Study Focused on Hotta  
Yoshie's *Haguruma*  
Wang Zhongchen…121

- 世界の中の日本研究—批判的提言を求めて—オーストラリアの側面から  
バーバラ・ハートリー…129
- [英語原稿]\* Japanese Studies in the World: Towards a Critical Renewal  
From an Australian Perspective Barbara Hartley…137
- 日文研と私—「日本人論」から「日本から見た世界」の研究へ—  
フレデリック・ディキンソン…147
- [英語原稿] Nichibunken and Me: From “Nihonjinron” to Visions of the  
World Through a Japanese Prism Frederick R. Dickinson…153
- 日本研究グローバル化の試み—日中戦争史の共同研究を中心に 黄 自進…161
- [英語原稿]\* Attempt to Globalize Japanese Studies: Focusing on Joint Research  
on the History of the Japanese-Chinese War Huang Tzuchin…169
- 朱舜水の「拜官不就」と「明徴君」の称号 韓 東育…179
- [英語原稿]\* Zhu Shunshui’s Refusal of Imperial Appointment and  
His Title of a *Zhengjun* of Ming Han Dongyu…195

## 口頭発表

- 日本研究と社会科学—インドにおける日本研究の現状から  
ランジャナ・ムコパディヤヤー…217
- 「自己本位」の日本文学研究のすすめ 尹 相仁…223

## 要旨集

- …229
- [講評] 世界のなかの国際日本研究を再考する  
—国際日本文化研究センター創立 30 周年記念シンポジウム  
「世界のなかの日本研究 批判的提言を求めて」の反省から  
稲賀 繁美…247
- [あとがき] 30 周年のシンポジウムをおえて 井上 章一…258
- [プログラム] 創立 30 周年記念国際シンポジウム …259
- 執筆者一覧 …261

## 挨拶一日文研・創立 30 周年記念国際シンポジウム開催に向けて

小松和彦

国際日本文化研究センター（日文研）は、1987 年 5 月に、「国際的、学際的、総合的な共同研究の推進」と「世界の日本文化研究者たちの支援」を主な目的として掲げ、当時の文部省直轄の大学共同利用機関として設置され、昨年（2017）年 5 月に、創立 30 周年という節目を迎えました。

設立当初は、設立の経緯が異例づくめであったこともあって、日文研設立の評価は毀誉褒貶かまびすしいものがあり、とりわけ一部の歴史系研究者や学会からは、特異な考えに基づいた研究がなされるのではないかとの危惧が表明されたりもしました。

しかし、教職員の忍耐強い努力と、国内外の客員・外来研究員たちの支援もあって、各方面から注目される独創的な共同研究を積み重ね、現在では、そうした懸念を払拭し、国際日本文化研究センターの略称である「にちぶんけん」（Nichibunken）の名を知らない者は日本研究者として恥ずかしいと思われるほど、国内外の研究者から注目される国際的な研究所へと発展してきたといえるのではないかと考えております。

設立当初からの教員はほとんど退職しましたが、次世代への交代も順調に進み、若手所員の活躍もめざましいものがあります。

設立以来組織された共同研究はおよそ 150 を数え、それらに参画した国内外の研究者はおびただしい数にのぼります。海外での研究集会やワークショップも数多く行ってきました。とりわけ欧文で書かれた日本紹介・研究書の収集は世界でも屈指を誇っています。

また、海外から招聘した外国人客員研究者も 500 人を越え、これらの研究者たちは、それぞれの国の日本研究の先導者であり、日本文化の魅力を伝えてくれる伝道師の役割を担っていると同時に、海外の日本研究のネットワーク形成にも貢献していただいております。

このように、日文研は、多様でユニークな学際的共同研究や、世界を駆けめぐっての学術外交・国際的支援、日本関連の貴重な資料収集を進めてきたわけですが、この 30 年間で、日文研を取り囲む社会・文化の状況は大きく変化しており、とりわけ経済効果を優先する昨今、人文社会科学への風当たりが厳しくなっています。日文研もまた、こうした国内外の状況の変化に対応してその研究内容や機能を徐々に変えてきましたが、創立 30 周年という節目を迎えたことをきっかけにして、目下、これまでの日文研の成果や問題の総点検作業を進めているところです。

そこで、30 周年を記念する一連の事業を締めくくるシンポジウムとして、日文研で研究を積まれた方々にお集まりいただき、海外から見た日文研の来し方・行く末に関し

て、忌憚のない感想や批判、アドバイスを頂こうということになりました。

皆様におかれましては、ご多忙のことかと思いますが、ふるってご参加くださるようお願いいたしますとともに、日文研において旧知の方々と旧交を温めていただければ幸いです。

世界中の日本研究  
批判的提言を求めて



# 新しい問題意識の共有へ

## ーフランスにおける日本（文化）史研究の近況を一例にして

マティアス・ハイエク

2018年は、祝い事や記念の非常に多い一年であった。開国に伴って日仏交流の開始、明治維新、第一世界大戦の終戦といった歴史上の重要な出来事の記憶を蘇らせ、現在の世界情勢と一世紀以上前の状況との類似点、また相違点について考えさせられるわけである。

そんな中で、日文研が創立を見て30年経ったが、世界的な政治経済の状況が大きく変動し、それにつれて日本研究そのものも多大な変化を見てきたように思われる。

私は、日文研創立当初は若年でこの変化を振り返って評価するのは困難ではあるが、21世紀の日本研究、とりわけ自分が関わりを持つフランスにおける日本史学（文化史・思想史・科学史なども含めて）の現状を紹介するとともに、「海外で日本を研究する」という課題と、そのような研究の展望と日文研の役割について思考を巡らしてみたい。

### I フランスにおける日本研究の現状

まず、フランスの学界における「文明研究」と「地域研究」という枠組みの問題に触れ、日本の研究の「紹介者」と日本研究への「貢献者」という、海外の日本研究者が抱える二面性について言及しておこうと思うが、その前にフランスの日本研究の現状について、若干の紹介を加えておきたい。

実は、この点について、10年前に行われた日文研20周年記念シンポジウムの際、今日の私と同様な立場にいた学友のジョセフ・キブルツは、次のような意見を述べていた。

「日本研究はアジア研究の一部となって、地域研究としての独立性を失いつつある。日本のイメージは漢字文化圏に統合され、それにしがたい独自の輪郭を失いつつある」とし、要するに日本文化の独自性が海外の研究の中で薄れていくという傾向を見出していた。

その表れとして、1979年に創立され、コレージュ・ド・フランス、高等研究実習院（Ecole Pratique des Hautes Etudes-EPHE）、そして国立科学研究所（Centre National de la Recherche Scientifique-CNRS）などの機関に所属する20人ぐらいの日本研究者を集めた「日本文明」研究班が2006年に中国とチベットを研究する同様な研究班と合併したことを例に挙げ、大学教育においても、研究においても、中国語と中国研究に押されて日本研究が希薄化してしまうだろうと予告した。

この否定的な予言は、半分以上あたっていて、的中したといえるが、それでもなお、肯定的な評価も可能であると思われる。

研究所のほうは、その後東アジア文明研究所にその名を変え、確かに独立した「日本

研究」は後退したようには見える。また、科学研究所全体において、ここ10年の間に日本研究者が二人定年で退所したのに、採用されたのは一人のみで（別の研究所に配属）、それに対して中国研究者が三人、チベット研究者が二人、そして韓国思想史の研究者が一人採用された。

しかしながら、当研究所における日本研究者の人数自体はさほど減っておらず、今でも20人近くいる。それはちょうど10年前、私が現職につく直前に、パリ・デイドロ（第七）大学の日本学科の教員たちが東アジア文明研究所に配属されたからである。それによって、研究の方針もやり方も大きく変わり、後述するように今までにない活発化を遂げたが、この状況はフランスにおける日本研究の大きな変動をよく表している。

つまり、1990年代後半より今にかけては全国の日本学科において学生の数が増え、それに伴って十分とは言えなくても教員職のある程度の増設があった。また、1980年代後半に就職した教員たちも定年を迎え、代替わりも行われつつある。そして従来の古代・中世中心の文学と歴史研究、そして宗教学や民族学的な研究も比較的の後退し、近世と近代の文化史や現代の文学そして社会学、経済学などの社会科学系の研究が一方で増えてきた。

その結果として、科学研究所や高等研究実習院といった研究機関を拠点に、古代・中世の文化史、そして人類学を専攻する研究者がリードしていた日本研究の中心が徐々に大学へ移り、新しい時代を迎えつつある。また、その研究の評価の主体をフランス国内から日本へとある程度シフトしたとも見受けられる。

その一つの理由として、1990年代以降の大学での日本語ブームと、それに伴ってある程度増えた教員職の枠の数をあげることができる。また、50代から30代までの研究者の多くは、日本に中長期的に留学し、日本の学術界で鍛えられ、日本との研究ネットワークを構築してきた。研究テーマも日本での状況に合わせて多様化、細分化し、その専門性が高くなったといえよう。それにつれてまた、日本の学界における外国人研究者の位置も変わってきているように思われる。母国語や英語での論文や発表に加え、日本語で書かれた論考も増えており、外国の研究者の研究成果の知名度が自ずと上がってきた。情報社会の発展も一つの要因ではあろうが、日文研を筆頭に1990年代以降に増えてきた国際日本学的な機関の働きによるところが多い。

自国では自分以外に同一のテーマを専門とする人がほとんどなく、その観点からは評価されにくい。もちろん、フランス日本学会の総会（2年に一回）という発表・交流の場はあるが、もうひとつの対策として日本語で論文を書きそれを公開し、日本の学界に評価を求めるようになり、それでまたネットワーク強化へとつながっていく。

東アジア文明研究所を例にしてみると、10年前よりは研究プロジェクトが多様化しており、また分野が違っても同時代の文化を研究している研究者も比較的によく、小規模ながらグループ研究も可能となった。たとえば、江戸中期に刊行された『日本山海名産図会』という、江戸時代の出版史、知識史、技術史などに関わりを持つ書籍をおよそ5年間でグループで仏訳し、その結果を年内（2019年現在）に電子書籍として公開する

ことになった。また、このようなグループ研究は、機関の境界を超えた共同研究の形をとり、日本の研究者をも取り巻いて国際的な研究にまで発展している。たとえば、フランス国立図書館所蔵の『酒飯論絵巻』を中心にした研究会は2009年より3年間継続的に行われ、その成果をまとめた書籍はフランス語と日本語と、それぞれの国で刊行された。あるいは、国文学研究資料館主催の大型プロジェクトの一環として「江戸時代初期出版と学問の総合的研究」という国際共同研究が3年間実施されたが、イギリス、ドイツ、フランス、そして韓国の研究者が参加し、今度は同資料館主催の「中近世日本における知の交通の総合研究」に我が研究所から4名参加することになった。

このように、大学教員を中心としてきた日本研究は常に学際的であるが、違う分野の研究者が同一の場所で研究するというのは日文研の構造と重複しており、この点から見れば日文研の組織自体が海外の日本研究の模範であるともいえよう。

このような新世代の研究者は、従来のように国内に向けて日本文化を紹介しその独自性を強調するという、「非ヨーロッパの未知なる文明の紹介者」の立場に加え、日本で生成される「知」にも貢献できる立場を確保しつつある。

## II 日本研究者の立場の動向と「国際日本文化研究」の意義

と同時に、国内外において日本研究者はまた別の立場を持っている。まずは自分と同じ分野、もしくは同じテーマを専攻としながら、異なる地域を研究する研究者たちに向けて、日本の事情を紹介する立場である。

すなわち、絶対的な他者性のある文化ではなくて、比較可能な文化としての日本文化を紹介するという一種の比較研究への貢献者としての立場である。

先に述べたように我々の研究は常に学際的ではあるが、分野ごとのつながりもあり、また、比較研究といえ、20世紀前半に歴史学者のマルク・ブロックが比較研究について以下の三つの目的を見出した。

- 一つの説明（理論）の違うコンテクストにおける応用の可能性を検討し、それによってその説明の妥当性を試すため
- ある社会の特徴を鮮明に浮き彫りにするため
- 問題意識を違う時代、違う空間に転用するため

一番目は、一つのモデルを当てはめ、結果論的な普遍主義に繋がる嫌いがあり、二番目は逆に、相違点のみを強調し、文化論的な相対主義に直結する恐れがあるが、従来の我々の研究はできるだけそういうようなバイアスを避けようとしながら最初の二つの方針に沿って行われてきた。そこで、日本の「独自性」を本質的なものと捉え強調するよりも、その独自性を可視化した上で、東アジアという地域の他の文化と比較して、その独自性の為す意味を問い直すという研究の可能性があると思われる。

例えば、同じく中国の文化から多大な影響を受けたという、近似する状況にあって、

どうしてベトナムではAという展開があり、日本ではBという展開があったかという説明を追求するという方針である。または発想を逆転させて、日本ではBという展開があったので、もしかしたら別のところでも今まで見えて来なかった同じような展開があるかもしれないという問題提示に繋がるのである。私は最近「男女の相性占い」の図像化について調べているが、「図像化」という、日本文化の一つの特色を前提にして、可視化された「相性」という観念が、他の地域にも図像化されていなくてもあるいは存在するかもしれないという発想が可能なのである。そして、その他の文化との比較によってまた、日本文化においてこの概念が見せた展開に特徴を見出すことになるかもしれない。

さて、三番目は、他分野・他国の研究者間の知的交流を前提に、視点の変更によって新しい研究の可能性を生み出せるが、言葉の問題がある。いわば言語の壁であるが、そこで、他国での地域研究者の役割が重大となる。所長と副所長による今回のシンポジウムの意義表明にもあったように日本研究の本場である日本の場合では、このような比較研究はもっとも有意義である。

我々は近年、自分の専攻する分野のほかの研究者に対して、日本の事情のみならず、この事情についての日本での学問そのものを紹介するという新しい立場を確保しつつある。それはもちろん、翻訳を通してのことであるが、特に、歴史学の分野において、その動向は著しい。

日本の研究者の論文を翻訳し、日本国外での「日本についての知」を広めるという作業は、海外の日本研究者のもうひとつの課題であり、フランスだけではなくアメリカや中国、韓国などの東アジアの国々でも行われてきた。また、国際化に伴い英語が標準語となり、我々自身の研究はもちろん、日本の研究者の言説をも英訳する必要性が鮮明となってきた。そうすることによって、例えば日本語の原文にまだアクセス出来ない学生や、他の分野の専門家が簡単に一つのテーマについての基礎的研究、あるいは最先端の言説に触れることを可能とするとともに、一握りの専門家が日本の研究からえた情報を独占せずに、むしろ共有した上での議論を可能とし、我々の研究の正当性が自ずと高まる。フランスの日本研究において長い間英語への抵抗があったが、最近はいくつかの重要な研究書が英訳され、国際的に吟味できるようになってきている。我が研究所の人間をまた例に挙げると、堀内アニックの『江戸時代の数学—関孝和と建部賢弘を中心に』やシャルロット・ヴォン・ヴェルシュールの『七世紀から十六世紀までの日中朝交流史』などがそうである。私自身の業績に関していえば、三分の一弱がフランス語で、残り三分の二は英語と日本語であるが、数年前に共編した *Japanese Journal of Religious studies* 40-1: *Onmyōdō in Japanese history* (2013年、林淳との共編著)、そして *Listen, Copy, Read: Popular learning in Early Modern Japan* (Brill, 2014、堀内アニックとの共編著) では、ヨーロッパと日本の最先端の研究を読者に提供し、しかもそれぞれの論調と研究スタイルをできる限り尊重しようとした。

しかしながら、これらはあくまですでに日本研究に携わる読者を想定しており、地域

研究はともかく、比較研究の用材にするには若干困難であろう。

対して、歴史学の分野では 20 世紀末より新しい動きが見えており、近年加速したように思われる。それは、地域研究以外の「歴史学」に属する研究者向けの、日本研究の公開である。

この動きの嚆矢は、1995 年に発行された、*Annales, histoire, sciences sociales* 50-2 号で、ピエール＝フランソワ・スーリと二宮宏之の努力によりブロックとフェーブルが創立したアナル学派のこの雑誌に、網野善彦や勝俣鎮夫による論考が仏訳され、戦後の日本史学観を形作った歴史学者たちの言説がフランスの歴史学者に提供されたわけである。このような動きは同じ時期に刊行された『ケンブリッジの日本史』にも見られ、やはりこの時期は一つの転換期であったと思われる。

さらに、近年では学友のギヨーム・カレー氏の働きにより、吉田伸之や塚田孝、また高埜利彦などに代表される、「身分的周縁」の視点からの歴史研究がフランスに積極的に紹介されたが、2011 年発行の *Annales, histoire, sciences sociales* 66-4 はその第一歩であった。フランスの歴史界の一部がこの問題意識に共感し、高い興味を示した結果、歴史学における学術交流が新たに活発となった。

ここでいう歴史界の一部というのは、パリ・ソルボンヌ大学の近世西洋史研究所のフランソワ＝ジョゼフ・ルッジウを中心にした、近世ヨーロッパの家族史やエゴドクメント（自己史料）を研究しているグループである。ルッジウたちは 2009 年以来、共同ワークショップを日本とフランスで開き、新しい比較研究を開拓しようとしており、そのひとつの成果物として 2017 年の *Histoire économie et société* があり、この号では吉田たちに加え同学派の若手研究者も論文を寄せている。ルッジウ本人は現在科学研究所の人文科学研究部長を任され、同研究所の人文系を総轄する立場にいるが、歴史学における今後の発展が大きく期待できる。

この新しい比較研究というのは、単に近世日本とフランスの事情を比べるというわけではなく、日本史学の方法論と問題意識を、もう一つの歴史観としてヨーロッパの歴史を見つめ直すことが目的である。フランスでは、マルクス系の唯物史観はアナル派や歴史人口学の働きもあり、早くも衰退し、その後社会学や人類学の影響を受けた心性史、文化史において、とりわけ「個人」を視座にした研究が盛んとなったが、その結果として集団や圧力、支配といった点はそれほど問題とされて来なかった。そこで、唯物史論を完全に否定せず、独自に再編成した日本史学の視点から学ぶことが多いと、ルッジウたちは判断するようになったが、これはまさしくブロックのいう、問題意識の転用としての比較研究である。私が編集長を務める雑誌、*Extrême-Orient, Extrême-Occident* の 41 (2017 年) で「身分」をテーマに選び、近世東アジアにおける身分とアイデンティティの問題を扱っているが、このような新しい比較研究は地域研究のうちにも転用できることを示す一例である。

この動きは、今後さらに展開していくと思われる。なぜなら先に述べたように、若い研究者が日本で留学して得た方法論と問題意識を文字通り持って帰ってきており、この

普及に大きく貢献していくのである。

それは願わくは、歴史学に関してだけではなくて、人類学なり社会学なりに、日本流の人類学、日本流の社会学の方法と問題意識が今後海外で用いられるようになることであろう。

### III 日文研のこれからの課題

さて、最後に話題を日文研に戻そう。日文研は創立以来、常に最先端な日本研究を目指し、その担い手である研究者をできるかぎり集めるための研究所でありつづけてきた。また、日文研の연구원と共同研究は、基本的に学際的で、留学時も연구원で滞在していたころも、その学際的な信念がずっと貫かれていることをこの目で見てきた。これらの研究の成果は単著であれ、編著であれ、国際シンポジウムの黒表紙の報告書であれ、世界の日本研究の糧となるものばかりである。

日本の学界においてユニークな機関である日文研は、西洋の研究者はもちろん、アジアやアフリカの研究者にとって重要な研究の拠点であり、パートナーである。

また、近年はデータベースがさらに充実し、海外での日本研究の便に大きく貢献している。

『日本研究』に海外の研究書の書評を載せるという方針も、日本における海外の研究者の足場を固めるためにもたいへん有意義である。*Japan Review* も学術誌としてその居場所を確保し、目覚ましい変化を遂げてきた。

しかしながら、少なくとも西ヨーロッパの場合、個人的なつながりがあっても、組織的な連携がまだまだ乏しく見える。それによって、国際集会以外の国際型共同研究が少なく、日文研との共同作業がそれほど目立たない。

現に、先に述べた日仏の共同研究の多くは日文研とではなく、人間文化研究機構のもう一つの柱、国文学研究資料館と共催のものである。国文研は近年目覚ましい国際化を果たしている。館長のみならず、教員にも外国人を採用したのはごく最近のことだが、それ以前から長年のつきあいのあるヨーロッパとアメリカの機関に働きかけ、国際共同研究を開いてきた。日本語歴史的典籍大型プロジェクトには国際ネットワーク構築委員会を設け、そこにも外国からの委員を多数組み込み、その関係を強化してきた。

組織間の結びつきであるので、一人ひとりに声をかける必要がなく、一人を窓口に選べばその後他のメンバーが連動してくるわけであるが、そこからまた新しいネットワークが生まれるのである。自分自身の経験でいうと、現職に着いて早々、国文研との共同事業に参加する機会があり、それ以来様々な形でその国際共同研究に関わるようになったが、同時に資料館以外の関係者とも仕事をするのが多くなり、自分自身のネットワーク拡大への影響も大きい。

なお、文学や歴史というひとつの分野の範囲での事業であるが、前者に関しては書誌学や文化史的な側面も含んでいるということもあり、共通の問題点を設定することも比

較的に容易である。あるいは、国際型の研究にすることによって、分野の縛りが緩み、新しい視点が発見されやすくなるという利点もあるのではなかろうか。いずれにしても、このような組織レベルのつながりは、フランスの研究機関からするとその利益が大きく、評価を受けるときに重要な業績となる。

日文研は性質上、そのような連携を取るの難しいかもしれないが、少なくとも上述したような日本研究外への問題意識の共有にこれからもっと関わってほしいものである。日文研の研究者は最先端で、各分野を超えて研究活動をおこなっているが、この最先端の研究とともに、現在の学問界において新しい比較研究の用材となりうるものをさらに積極的に紹介する努力がこれから必要となると思われる。

つまるところ、研究対象としての独自性（文化的独自性）ではなく、研究する主体としての独自性（認識論的独自性）を主張すべきであろう。日文研は従来のように日本文化に関する研究の成果を紹介するとともに、このような認識論や問題意識を発信し、相対的な総合化への道を開いていくというのは、これからの重要な課題にもなるのではないだろうか。



# **Toward Shared Awareness of New Questions: An Example from the Current Condition of Historical Studies of Japan (and Japanese Culture) in France**

**Matthias Hayek**

The year 2018 marked many anniversary celebrations and commemorations. They have jogged our memory of important historical events, including the establishment of Japan-France exchanges in the wake of Japan opening its door to the rest of the world, the Meiji Restoration, and the end of WWI, and invited us to consider similarities and differences between the current world situation and that over a century earlier.

Against such a background, over 30 years have passed since the International Research Center for Japanese Studies (Nichibunken) was founded. During this period, drastic transformations in global politics and the economy have caused significant changes in the field of Japanese studies itself too.

As I was quite young at the time of the Nichibunken's foundation, it is difficult for me to review those changes. Thus, I would like to focus on the current situation of Japanese studies in France, more specifically of Japanese historical studies (including cultural history, intellectual history, and history of science), in which I am directly involved. At the same time, I will try to reflect upon the challenge of "conducting Japanese studies abroad", and the role Nichibunken could play in this context.

## **I. Current Condition of Japanese Studies in France**

First of all, I will point out problems inherent in the frameworks of "civilization studies" and "area studies" in the French academic world, and mention the two faces of "introducers of" and "contributors to" Japanese studies, which overseas researchers in Japanese studies are expected to have. Before that, let me briefly introduce the current condition of Japanese studies in France.

Actually, at Nichibunken's 20th anniversary symposium, which was held 10 years ago, my fellow scholar Josef Kyburz, who was in a similar position to that of mine today, expressed his view on the same subject as follows:

"Japanese studies is becoming a part of Asian studies and losing its independence as a field of area studies. The image of Japan is being integrated into that of the East Asian Cultural Sphere characterized by use of Chinese characters, and subsequently losing its own profile."

This means that he already identified trends toward a declining presence of the originality of Japanese culture in studies abroad.

Kyburz took an example of the trends from the fact that the "Japanese civilization" research team, which had been formed in 1979 with some 20 researchers in Japanese studies at the Collège de France, École Pratique des Hautes Études (EPHE), Centre National de la Recherche Scientifique (CNRS), and other organizations, was integrated with similar teams studying

China and Tibet into one in 2006. He predicted that Chinese studies would lower the profile of Japanese studies in both university education and research.

This prediction was proven to be partially accurate, at least regarding research, but I still think it is possible to evaluate positively French research during the same period.

The organization integrating the above-mentioned three research teams was later renamed the East Asian Civilizations Research Centre (Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale [CRCAO]), so "Japanese studies" certainly seems to no longer have full independence. In addition, during the past decade, the entire CNRS had two researchers in Japanese studies retire at the compulsory retirement age, but employed only one researcher in the same field (appointed to a position at another research center), while employing three researchers in Chinese studies, two in Tibetan studies, and one in the Korean history of thought.

Nevertheless, the number of researchers in Japanese studies at CRCAO has not significantly decreased, and the center still has nearly 20 researchers in the same field. This is because academic staff from the Japanese Studies Section of Université Paris-Diderot (Paris 7) were assigned to CRCAO a decade ago, just before I assumed my current position. The collective assignment resulted in major changes in the center's research policy, and, as I explain later, invigorated research activities there. This situation clearly demonstrates drastic changes in Japanese studies in France.

Those changes include an increase in the number of students in departments of Japanese studies around France since the late 1990s until today, leading to an insufficient but substantial increase in the number of Japanese studies instructors. In addition, instructors who started their teaching career in the late 1980s have begun to reach the retirement age, being replaced by the younger generations of instructors. Moreover, studies of classical and medieval literature, and historical, religious, and ethnological studies, which were formerly the mainstream of Japanese studies in France, have relatively declined in their presence, in contrast with the growing presence of early modern and modern cultural history, studies of contemporary literature, and social science studies, including sociological and economic ones, in Japanese studies as a whole.

The changes have resulted in the gradual shift of the center of Japanese studies in France from research institutes, such as CNRS and EPHE, where classical and medieval cultural historians and anthropologists formerly led the field, to universities, paving the way to a new era in Japanese studies. Furthermore, it seems that the center of research assessment in this field has also shifted from France to Japan to some extent.

A factor behind this changing situation is growing interest in learning Japanese at a university in France from the 1990s onward, and the resulting substantial increase in the number of Japanese studies instructor jobs. In addition, many researchers in Japanese studies in their 30s to 50s have the experience of studying in Japan for a medium or long term, and have been trained hard in the Japanese academic world and built academic networks with Japan. Research themes have also become diversified and fractionalized according to situations in Japan, probably leading to a higher level of specialization. It seems to me that these changes have caused changes in the positioning of researchers from abroad in the Japanese academic world. In addition to works written in their native languages or English, the number of works written in Japanese has been growing, and, as its natural consequence, studies by researchers

from outside Japan have been obtaining greater recognition. While the development of the information society can be a factor behind this changing situation, institutions for international Japanese studies, which have increased in number since the 1990s, represented by Nichibunken, have played a major role there.

Researchers from outside Japan have few fellow researchers exploring the same theme as theirs back home, so it is difficult for them to receive due recognition from the perspective of the theme. The biennial general meeting of the French Society of Japanese Studies certainly provides French researchers in Japanese studies with the opportunity to present and discuss their research, but the researchers have begun to take another measure: writing and publishing papers in Japanese to have them reviewed in the Japanese academic world, which helps strengthen the networks those researchers have with Japan.

To take the example of CRCAO, a wider variety of research projects are in progress there than a decade ago, and rather a large number of researchers explore the culture of the same period, though specializing in different cultural elements, and thus have become able to conduct group research, though on a small scale. For example, a group of French researchers have been translating *Nihon Sankai Meisan Zue* (“Illustrated Guide to Specialty Products from the Land and Sea in Japan”)—a book published in the mid-Edo Period, and which is of special interest from the point of view of early modern publishing history, history of knowledge, history of technology etc.—into French for about five and a half years, aiming to publish the completed translation as an e-book within 2019. Such group research initiatives have taken the form of joint research beyond institutional borders, and developed into international research projects where Japanese researchers are also involved. An example is a research group on *Shuhanron Emaki* (“Picture Scroll on Comparison between the Merits of Sake and Rice”) held at the Bibliotheque Nationale de France. The group met constantly for three years from 2009 and published its research achievements as books in French and Japanese in France and Japan, respectively. Another example is the three-year international joint research titled “A Comprehensive Study of Publishing and Learning in the Early Edo Period,” which was pursued as part of a large-scale project organized by the National Institute of Japanese Literature, with participants from the UK, Germany, France, and South Korea. The project has been followed by another project titled “A Comprehensive Study of Interactions of Knowledge in Medieval and Early Modern Japan” organized by the same institute, in which four researchers participate from CRCAO.

As mentioned above, while Japanese studies led mainly by university instructors outside Japan have always featured their interdisciplinarity, they share with Nichibunken the same characteristics of researchers in diverse fields working in the same place. In this sense, it can be said that the organizational structure of Nichibunken itself gives a model for Japanese studies abroad.

These new generations of researchers have been establishing their own status as not only introducers of an unknown civilization outside Europe, who introduce Japanese culture to an audience back home and emphasize its originality, but also contributors to “knowledge” created in Japan.

## II. Trends in the Positioning of Researchers in Japanese Studies and the Significance of International Studies of Japanese Culture

Meanwhile, researchers in Japanese studies also occupy another set of positions inside and outside their homeland. The first position is that of introducers of situations in Japan to researchers specializing in the same field or exploring the same theme as them but studying different geographical areas.

This position can also be called the position of contributors to a kind of comparative studies who introduce Japanese culture not as a culture characterized by absolute alterity but as a comparable culture.

As I mentioned before, our studies are always interdisciplinary, and also unique for relationships between disciplines. In addition, comparative studies are associated with historian Marc Bloch, who found the following three purposes of comparative studies in the early 20th century:

- To consider the possibility of applying an explanation (theory) to different contexts to assess the appropriateness of the explanation
- To clearly show the originality of a society
- To apply the same questions to different ages or different places

The first purpose of applying a model can result in a posteriori universalism, while the second one of emphasizing only differences can lead directly to naïve cultural relativism. However, we have followed these two policies in our research efforts while trying to avoid the universalist and relativist biases as long as we can. In this sense, I believe that, rather than essentializing the “originality” of Japan and emphasizing it, there is the possibility of visualizing the originality, and comparing Japanese culture with other cultures in East Asia to reconsider the meaning of the originality.

For example, you can adopt the research policy of exploring a credible explanation of differences between Vietnam and Japan despite their similarities as areas under the immense influence of China. Or, from the opposite perspective, you can put a question whether there are other areas that have developed from the Chinese influence in the same way as Japan, though such development has so far been unnoticed. I have recently been surveying visual representations of fortune-telling about compatibility between men and women, so in my case, it is possible to use “visual representations,” which characterizes Japanese culture, as a starting point, and question whether other areas may also have the concept of “*aiishō*” (compatibility between both sexes), visually represented or not, which has become visible by the grace of the starting point. Furthermore, a comparison with other cultures may enable us to find a characteristic of Japanese culture in how the concept of “visual representations” has developed.

The third purpose can lead to possibilities for new studies through the shift of perspectives based on intellectual exchanges between researchers in different fields and from different countries, but entails the problem of linguistic differences, or so-called language barriers. Here, researchers in area studies from abroad play an important role. As the Nichibunken Director

and Deputy Director explained in their introductions to this symposium, such comparative studies are most significant in countries like Japan as the home of Japanese studies.

As of late, we have been establishing a new status as introducers not only of facts about Japan, but also of the works of Japanese academics representative of their fields, mostly through translations. This is particularly true regarding studies in Japanese history.

We as overseas researchers in Japanese studies face another challenge of translating academic papers written by Japanese researchers and spreading knowledge about Japan to outside Japan. This challenge has been tackled not only in France but also the U.S. and the rest of East Asia, including China and South Korea. Moreover, recent progress in internationalization has made English a global standard language, so it has become clearer that we have to translate not only our works but also discourses of Japanese researchers into English. That would allow students who do not yet have access to original Japanese texts and researchers in other fields to easily learn about basic studies or the most advanced discourses on a theme, and enable discussions based on shared information from studies in Japan, instead of letting only a limited number of researchers use the information, which might make our studies more appropriate. Although there was a long-lasting feeling of resistance to the use of English in Japanese studies in France, some important academic works have recently been translated into English, enabling them to be reviewed internationally. Again, examples from works by researchers at CRCAO include Annick Horiuchi's *Japanese Mathematics in the Edo Period (1600–1868): A Study of the Works of Seki Takakazu (?–1708) and Takebe Katahiro (1664–1739)*, and Charlotte von Verschuer's *Across the Perilous Sea: Japanese Trade with China and Korea from the Seventh to the Sixteenth Centuries*. Concerning my own works, nearly a third of them are in French, while the remaining two thirds are in English or Japanese. In my recent co-edited works *Japanese Journal of Religious Studies* 40-1: Onmyōdō in Japanese History (with Makoto Hayashi; 2013) and *Listen, Copy, Read: Popular Learning in Early Modern Japan* (Brill; with Annick Horiuchi; 2014), We aimed to provide readers with knowledge from the most advanced studies in Europe and Japan and respect each writer's tone of argument and research style as much as possible.

These works, however, are intended for readers engaged in Japanese studies, so I think it is somewhat difficult to use them for comparative studies, if not area studies.

By contrast, there have been new trends in historical studies since the end of the 20th century, and the trends seem to have recently been accelerated. The trends are ones toward opening the door of Japanese studies to “historians” outside area studies.

The trends were heralded by *Annales, Histoire, Sciences Sociales*, Issue 50-2, published in 1995. In this Annales-school journal, created by Marc Bloch and Lucien Febvre, works by Yoshihiko Amino and Shizuo Katsumata were translated into French through the efforts of Pierre François Souyri and Hiroyuki Ninomiya, bringing discourses of historians who had constructed the overall picture of post-war Japanese historical studies to French historians. Such trends are also found in *The Cambridge History of Japan*, contemporary to the above-mentioned journal issue, suggesting that those times were a turning point in Japanese studies abroad.

Moreover, my fellow researcher Guillaume Carré contributed immensely to actively introducing French readers to historical studies from the perspective of status marginality by

Japanese researchers, such as Nobuyuki Yoshida, Takashi Tsukada, and Toshihiko Takano. The first step toward this initiative was *Annales, Histoire, Sciences Sociales*, Issue 66-4, published in 2011. Part of the French world of historical studies shared, and displayed great interest in, their Japanese counterparts' awareness of questions, resulting in new active academic exchanges in the field of historical studies.

Part of the French world of historical studies here denotes a group of historians who explore the early modern European history of families and ego-documents, represented by François-Joseph Ruggiu, Institute for Research on Modern Western Civilization, Université de Paris-Sorbonne. To explore a new frontier for comparative studies, Ruggiu and his group have held joint workshops in Japan and France since 2009, and published their results in *Histoire Économie et Société* in 2017, where young researchers from the group present papers, in addition to Yoshida and other Japanese researchers. Ruggiu himself currently serves as Director of the Institute for Humanities and Social Sciences, CNRS, and supervises the humanities at the center. We can have lofty expectations for the subsequent development of historical studies.

This new type of comparative studies aims to shed fresh light on European history, with the help of the methodology and questions of Japanese history, as a source of an alternative historical perspective, rather than just comparing the situation in early modern Japan with that in France. In France, Marxist historical materialism declined earlier under the influence of the Annales school and demographic history, and research focus was placed on “individuals” in history of mentalities and cultural history under the influence of sociology and anthropology. As a result, the issues of groups, pressure, and rule were little examined. Therefore, Ruggiu and his group determined that Japanese historical studies, which did not completely deny historical materialism but reconstructed it in an original way, had many lessons they should draw on. This is a good example of Bloch's version of comparative studies as the application of questions. Issue 41 of the journal *Extrême-Orient, Extrême-Occident*, of which I serve as Chief Editor, deals with the theme of “statuses” and the question of statuses in early modern East Asia and identity. This is also an example of the possibility of applying the new type of comparative studies to area studies.

These trends shall further grow because, as I mentioned above, young researchers have brought back home the methodologies and approaches they acquired while studying in Japan, and will contribute to spreading them.

Methodologies and questions in Japanese-style historical, anthropological, and sociological studies will, hopefully, be used abroad from now on.

### **III. Challenges Nichibunken should Take up from Now on**

Finally, we should return to Nichibunken. Since its founding, the research institute has always aimed to pioneer Japanese studies, and to gather as many researchers engaged in its pioneering tasks as possible.

As a doctoral student, and then as a research fellow, I have had first hand experience of the interdisciplinary approach shared by all the research programs at Nichibunken. All its research

achievements, whether works by single authors or multiple authors, or international symposium reports teach valuable lessons to researchers in Japanese studies around the world.

As a unique institution in the Japanese academic world, Nichibunken is an important research hub and partner for researchers not only in Western countries but also Asian and African countries.

In addition, Nichibunken's databases have recently been further upgraded, and are of an even greater use for Japanese studies abroad serving Japanese studies abroad.

Its policy of publishing reviews of books from overseas research institutes in the journal *Nihon Kenkyu* is also very helpful for strengthening the foothold of overseas researchers in Japan. The English academic journal *Japan Review* has also established its status, and made remarkable changes.

It seems to me, however, that in Western Europe at least, collaboration between organizations still remains at an insufficient level, although individual researchers have built close relationships with each other. As a result, only few international joint research projects other than international conferences have been implemented, and few joint works with Nichibunken have had a high international profile.

In fact, many of the aforementioned joint researches initiatives were conducted with the help of another member of the National Institutes for the Humanities, namely the National Institute of Japanese Literature.

The National Institute of Japanese Literature underwent a remarkable internationalization in the past few years. Although overseas researchers have just recently been appointed as its director and instructors, the National Institute of Japanese Literature has long conducted international joint research, inviting research institutes in Europe and the U.S. with which it has relationships. The institute established a Committee for International Networking to promote a large-scale project concerning classical Japanese books on history, and appointed many overseas researchers as committee members to strengthen international partnership between organizations.

Organizational partnership enables an institute to just select a contact person to indirectly approach all other members of the partner organization, without approaching all the members in person, and to form a new network. From my own experience, I had an opportunity to participate in joint research with the National Institute of Japanese Literature soon after I assumed my current position, and since then I have been involved in many international joint research projects in various ways, and begun to often work with professionals who do not belong to the institute. This experience has had major impacts on expanding my networks with other researchers.

In most cases, such projects cover only an academic field, such as literature and history, but the former example includes bibliographical and cultural historical aspects, where putting common questions is rather easy. Adopting an international style of studies might have the benefits of easing the restriction of borders between disciplines and facilitating discoveries of new perspectives. Anyway, such organizational partnership will greatly benefit research institutes in France, and provide opportunities for French researchers to accomplish achievements that deserve international recognition.

Given its nature, Nichibunken may not be able to easily collaborate with other organization in such a way, but I hope that Nichibunken will get involved in initiatives to share its approaches with researchers outside Japanese studies, as mentioned above. Researchers at Nichibunken conduct research activities in the forefront and beyond borders between disciplines, but I believe that they will have to devote further efforts to not only the most advanced research but also actively introduce materials useful for new types of comparative studies in the current academic world.

To sum it up, I believe that Nichibunken should emphasize its own (epistemological) originality as a researching agency, instead of the (cultural) originality of its research subjects. In my opinion, while keeping on introducing the latest research results concerning Japanese culture, Nichibunken has the potential to share its awareness of epistemological questions that would help pave the way to a truly global form of universalism.

# 日本研究の国際化及び学際化にむけて

ファン・ハイ・リン

## はじめに

2017年5月に、国際日本文化研究センター（日文研）は創立30周年記念を迎えたが、同年の4月に日本の歴史科学協議会（歴科協）も創立50周年を記念した。日文研は「日本の文化・歴史を国際的な連携・協力の下で研究するとともに、世界の日本研究者を支援する」ことを目的とした政府の交付金によって運営されている大学共同利用機関である<sup>1</sup>。それに対し歴史科学協議会（歴科協）は「歴史学の創造的発展」を目指した自主的組織の協議体として発足した<sup>2</sup>。前者は研究対象が「日本」であり、研究主体の中心が日本外の研究者で構成され、国際的かつ総合的な研究が求められるインターディシプリンの視野を持っている。後者は研究対象が日本史を含めた歴史で、主な研究主体は日本人の研究者であり、時代ごと、或いは歴代の個別な研究が求められるディシプリンの視野を持っている。そこには、各機関の創立時の世界における日本の位置づけと研究潮流が反映されると言えよう。

グローバル化が進む昨今、ディシプリンとインターディシプリンの境界線があいまいになり、研究の実効性が重視され、国際的な視野及び学際的な方法が求められるようになった。本稿は、近世における日越交流に関わる象貿易と松阪縞織のルーツを事例にして、日本研究における資料源の国際化及び研究方法の学際化の重要性を論じてみたい。

## 1. ベトナムから日本への象貿易に関する研究事例からみた日本研究の国際化

### 1.1 ベトナムから日本への象貿易に関する史料と文献

日本においては、原始・古代の遺跡で象の骨歯が発見されたのは周知のとおりだが、後に絶滅したため、中世以降、象は海外の珍しい生き物であり、海外から運ばれる度に重要な出来事と見なされていた。最も注目されたのは享保13年（1728）にベトナムからやって来た牝象2頭の象であった。牝象が長崎に着いた3ヵ月後、気候や食物が合わず死んでしまったが、牝象はその後14年間も日本で生存した。象が渡来した翌年の享保14年には、象の訪れた各地方で版本や詩集が出された。京都の本願寺塔頭智善院の『象志』や、中村三近子著『象のみつぎ』、奥田士亨編『詠象詩』、白梅園の『霊象貢診記』、『献象来歴』のほか、大坂の油煙齋著『家津登』、江戸の林大学頭榴岡著『馴象編』や、林家塾頭井上蘭台著『馴象俗談』、神田白竜子著『三獣演談』などが有名であり、これ

<sup>1</sup> 日本国際文化研究センター 所長のあいさつ、<http://www.nichibun.ac.jp/ja/about/>

<sup>2</sup> 歴史科学協議会編『歴史学が挑んだ課題』、2017年、3頁。

らは象の研究に重要な史料である。

享保年間におけるベトナム象の日本渡来に関する研究も多く蓄積されている。その中で特筆すべきは、1972年に発表された山下幸子氏の『享保の象行列』である（山下幸子、1972年）。山下氏は尼崎藩の岡本俊二文書をはじめ、享保13年渡来象に関する史料を網羅して、上陸した長崎から江戸到着まで象の行列について細かく検討した。一方、山下恒夫は『石井研堂コレクション・江戸漂流記総集』のなかで享保13年渡来象と同行した安南国人に関する史料の分析も試みた（山下恒夫、1992年）。そして、2000年10月に埼玉県で「象がゆく・将軍吉宗と宮廷〈雅〉」と題した特別展が開催され、その展示で埼玉県立博物館、神戸市立博物館、国立公文書館内閣文庫、関西大学図書館などで所蔵される享保13年渡来象に関する絵図と史料が紹介された（埼玉県立博物館、2000年）。

上記の研究では、検討された資料と研究範囲が日本国内という特徴がある。筆者はベトナム人という立場から、ベトナムや西洋の資料を加え、先行研究でまだ明らかになっていない問題、いわゆる日本のベトナム象への関心や運搬の要請、象の売買価格、運搬船などについて着目し、この10年間研究を行い、数回論文で発表した<sup>3</sup>。本稿においては日本研究の国際化の事例として、象の研究の手掛かりをまとめることにしたい。

## 1.2 資料源の国際的な活用とクロスチェックにより明らかになったこと

まず、ベトナム象への関心と要請を検討するにあたり、ベトナム光興14年（1591）閏3月21日付「安南国副都堂福義侯阮書」に注目したい。2013年にこの史料を紹介した藤田励夫氏は、当時のベトナムと日本との外交的な関係を分析し、ベトナムの阮氏<sup>4</sup>より「日本国王」に宛てた最古の通交文書であると評価した<sup>5</sup>。しかし、筆者はベトナム象に関する次の記述に着目した。「前年見陳梁山就本國謂、國王意好雄象、有象壹隻已付陳梁山將回、國王其體小不能載、有好香貳株・雨油蓋壹柄・象牙壹件・好紵貳匹寄與、明年隆巖又到本國謂、陳梁山并財物未見、茲有雨油蓋壹柄再寄與國王為信」<sup>6</sup>。これで、16世紀末に日本からの牡象運搬の要請が既にベトナムまで伝わったと推測している。そのみならず、17世紀に描かれた「茶屋新六交趾渡航図巻」<sup>7</sup>も、ベトナム象への関心が伝わっている。この絵図を通して、茶屋家の海上・陸上の行程、当時の日本人町などを分析する研究は数多く出されている。しかし、絵図左端の上角に描かれた象使

<sup>3</sup> 象貿易に関する筆者の主な論文は、『アジア文化交渉研究』の「ベトナム資料における象の位相と享保13年到来象について」（2010年、tr. 545-562）、『東アジア文化交渉研究』に掲載された「16世紀～18世紀におけるベトナム中部から日本への象貿易」（2014年、tr. 413-422）、菊池誠一編『朱印船貿易絵図の研究』の「茶屋交趾貿易渡海絵図」に描かれた象について」（2014年、tr. 55-60）である。

<sup>4</sup> 「安南国副都堂福義侯阮」はベトナム中南部の順化（トゥアンホア、現在のフエ）を拠点にした広南王国（1533-1777）の阮氏であるか、ベトナム北中部のゲアン（乂安）省の阮氏であるかはまだ定説がないが、中部の権力者であることが考えられる。

<sup>5</sup> 九州国立博物館編『ベトナム物語—大ベトナム展公式カタログ』、2013年、18頁。

<sup>6</sup> 九州国立博物館編、前掲書、105頁。

<sup>7</sup> この絵図は現在名古屋市の情妙寺に所蔵されている。

いにより調教される3頭の象には殆ど注意が払われていなかった。筆者は茶屋家による幕府への報告書としての価値があるこの絵図において、象が詳細に描写されていることより、江戸時代の人々のベトナム象への関心が高まったと判断している。

次は象の取り引きと価格に関して、ベトナム、フランスと日本の資料をクロスチェックすることにした。18世紀のベトナムの知識人である黎貴悳は、ベトナムとラオスの国境にあるカムロ（甘露）地方の市場<sup>8</sup>で取り引きされた象の価格について「一象價銀二笏」<sup>9</sup>と述べた。「笏」とは約10両に相当する銀である。また、17世紀にベトナムを訪れたフランス人のダニエル・タヴェルニエによると、実は安南で使用された銀は日本銀と同様のものではあったという<sup>10</sup>。そして、『安南紀略藁』には、「安南板銀」と呼ばれたベトナム銀について、「掛目凡百日程」と記されている<sup>11</sup>。ここで判断できることは、もし当時の100目が10両に当たるなら、近藤の描いた「板銀」は10両に相当し、黎貴悳の述べた「笏」と同じものになる。ベトナム国内で売買される象の価格は「二笏」であることから、20両に相当することになる。

象の運搬に関する請求と費用について、嘉永6年（1853）に林復斎等が編集した『通航一覽』には、第38番東京船主の呉子明に関する記述が次のようにある。「蒙問委帶小象、可以帶來否、但此獸出在暹羅地方、唐山各省並無、若蒙諭委帶、遵依帶來進上」<sup>12</sup>。つまり、ベトナムの東京<sup>13</sup>出身の呉子明という船主の幕府に勧めた象はベトナム産の象でなく、暹羅産の象ということである。しかし、2年後、暹羅産でなく、広南（ベトナムのダンジョン）の象が、第15番唐船の船主である中国人の鄭大威により運搬された<sup>14</sup>。同『通航一覽』にも「一象其帶來、小船不堪裝載、徒新定造大船二艘、每艘只裝得一隻、但欲定造大船二艘、要用銀一萬餘兩、又唐山發船到暹羅、往來雜費、該用銀二萬餘兩」とある<sup>15</sup>。つまり、造船費用1万両余と雑費2万両余は2頭の象を暹羅から日本まで運搬する費用である。従って1頭当たりの費用は1万5千両になる。実際、鄭大威が広南産の象を日本に運んだ時、幕府にいくら支給されたかという直接的な記述は見当たらない。もし、暹羅からと同じような費用であれば、ベトナム国内で売買する象の価格である20両より、700倍以上も上回り、商人達は甚大な利益をあげたのであろう。一方、幕府がその高値をもってしても象を注文し、しかも力強い牡象だけでなく、子供を産む目的で飼育

<sup>8</sup> 現在ベトナムのクアンチー（広治）省にある。

<sup>9</sup> グェン・カック・テウアン校訂『黎貴悳選集』三卷『撫辺雜録』第二部、2007年、271頁。

<sup>10</sup> ジャン・バプティスト・タヴェルニエ『トンキン王国へのおもしろい新旅行記』、レ・テウ・ランベトナム語翻訳、2005年、38頁。

<sup>11</sup> 近藤守重『安南紀略藁』、1906年、27頁

<sup>12</sup> 林復斎等編『通航一覽』第四、巻之百七十五、1967年、520頁。

<sup>13</sup> ベトナムは17世紀から18世紀末まで現在のクアンビン（広平）省のザイン河を境線に、ダンゴアイ（クアンビン省以北、鄭氏の支配地、トンキン（東京）と呼ばれる）とダンジョン（クアンビン省からフエン（富安）省までの地域、阮氏の支配地、交趾や広南とも呼ばれる）に分裂されていた。また、ダンジョンは中国から離れた地方との意味で、ナムハー（南河）とも呼ぶ。

<sup>14</sup> 近藤守重、前掲書、22頁。

<sup>15</sup> 林復斎等編、前掲書、521頁。

される牝象とつがいで請求した理由は、象を日本で長く飼育する目的もあったと考えられる。

日本への海上旅に出す象はどの基準で選定されるかという問題も興味深い。前述した『撫辺雑録』には、ベトナムで国王への献上牝象は「高五尺五寸」とある。日本に来た象の中で、牝象は8年前に生まれ、日本到着時は満7歳で、前足の高さが「五尺六寸餘」<sup>16</sup>であった。実は牝象の高さに関する記述は史料によって微妙に違う。『通航一覽』には牝象はベトナム国内で献上された象の高さと同じく「五尺五寸」であったが、享保14年に著された『象志』には、牝象の前足の高さは「五尺七寸」とある<sup>17</sup>。前述の史料から、牝象の身長は五尺五寸から五尺七寸まで、所謂約1.7mになる。つまり、日本に来た牝象はベトナム国内で献上された象とほぼ同じ背丈であったことが分かる。逆に言えば、国内の献上象も貿易用の象も7、8歳ぐらいと考えられる。『安南紀略藁』には「牝象三歳に成り、乳放し致候、而から段々教込熟練いたし候」<sup>18</sup>とあるので、その年齢の象は調教されてから3～4年経過しているため、人の命令を理解することができる。そして、象の1.7mの身長も陸上の引率と海上の運搬に適切であったという判断に至る。

最後に象を載せた船であるが、幕臣である近藤重蔵は「此度廣南より象二疋乗渡り候南京造り之船に長さ十二丈八尺程幅二丈ほど深さ一丈四尺程御座候。先頃象乗渡り申候則壱疋式丈六尺程横一丈一尺程の所へ入申候但上日数三十七日其内土を踏不申候水もあひ申事不罷成候頭と前の方横木を打象留め仕置候其中より鼻を出し罷在候船中象部屋之内にて跡の方へ漸々ふり返り申候事罷成候。」と述べている<sup>19</sup>。「南京造り之船」とはジャンク (Junk) である。そのサイズは、長さが38.8m、幅が6.06m、深さが4.24mである。象用部屋は7.88m×3.3mのスペースである。象はその中で37日間留め置かれたのである。松浦章氏の研究によると、ジャンクは16～19世紀に海上貿易でよく活用され、その平均積載量は2,500トンであるという<sup>20</sup>。明和4年(1767)7月16日に長崎に来た四番安南船についてはベトナムのホイアン(会安)から帰国した姫宮丸の乗員の執筆した『安南国漂流記』には、「安南より長崎まで、丑寅(北東)の方に向ひて、昼夜やすまず日数二十七日にて着仕り候」<sup>21</sup>とあり、安南から長崎までの行程が27日間かかることが分かる。享保13年に象を日本まで運搬した船は普通のジャンクより大きく、行程も10日間長かったことが分かる。

このように、近世におけるベトナムと日本の間で行われた象貿易に関する研究は、『安南紀略藁』、『通航一覽』、「茶屋新六交趾渡航図巻」など、日本国内の史料と絵図を再考

<sup>16</sup> 近藤守重、前掲書、28頁。

<sup>17</sup> 埼玉県立博物館編『特別展・象がゆく一将軍吉宗と宮廷「雅」』、霞会館、2000年、70頁。  
1間は6尺、およそ1.8m。よって、4間は7.2mに相当する。

<sup>18</sup> 近藤守重、前掲書、22頁。

<sup>19</sup> 近藤守重、前掲書、28頁。

<sup>20</sup> 松浦章「16-19世紀中国 Junk によるベトナム・フェとの海上貿易」、『周縁の文化交渉学シリーズ7・フェ地域の歴史と文化』、2012年、515頁。

<sup>21</sup> 松浦章、前掲書、511頁。

すると共に、『撫邊雜録』のようなベトナムの史料や、『トンキン王国へのおもしろい新旅行記』のような西洋の史料とクロスチェックすることが重要であると考えられる。この事例から分かるように、グローバル化における日本研究において、資料源の国際的な活用が大きな役割を果たせるといえる。

## 2. 松阪縞のルーツに関する研究事例からみた日本研究の学際化

### 2.1 松阪縞のルーツに関する史料と文献

角屋家は元々信州松本（現在の長野県松本市）にある八幡宮の神官の出身であったが、15世紀から山田（現在の伊勢市）に移住し、廻船問屋を経営するようになった。移住して6代目の角屋七郎兵衛栄吉（慶長15年〈1610〉–寛文12年〈1672〉）は、22歳の時、初航海で安南（ベトナム）の交趾（中部）にあるホイアンへ渡って来たが、鎖国令が出されたため、ホイアンに41年間永住した。その間、七郎兵衛はホイアンの日本人町の最後の頭領として活躍をしながらも、故郷の松阪にいる家族と交信し、ベトナムの特産を贈り、伊勢神宮や松阪城下の寺社に金銭を寄進していた。角屋がベトナムから贈った特産の中で、木綿織や藍染の伝統のある松阪の人々に縦縞織のヒントを与えた織物があり、それが松阪の特色である松阪木綿（伊勢木綿ともいう）のルーツとなったとの仮説がある。その松阪木綿が18世紀に大量で江戸に送出され、江戸の庶民の新しい流行となったのである。松阪木綿は、昭和56年（1981）には文化庁によって、「無形民俗文化財」に選定されている。

角屋七郎兵衛に関する漢文は、ベトナムのホイアン市付近にある五行山の花巖洞窟の中で1640年に建てられた「普陀山靈中仏」の石碑にある。「日本宮七郎兵衛阮氏慈号紗泰供銭」とあるように、七郎兵衛は阮氏慈というベトナム人の女性と結婚して、観音菩薩像を造るために金銭を寄付したことが分かる。日本においては、伊勢市の神宮徴古館と名古屋大学付属図書館が所蔵する「角屋文書」がある。これは角屋本家伝来の中世末から明治期にかけての110点の史料群であり、家系図、来簡、朱印船関係文書、藍玉問屋関係資料などが含まれるが、「安南交趾角屋栄吉遺書」は角屋やベトナム人の妻、安南在住の谷村四郎兵衛等の書簡や記録が集められた重要な史料である。

七郎兵衛に関する二次資料文献は数多くあるが、一番古い研究は1887年に発行された『日本之光輝』にある関徳編著「角屋七郎兵衛安南に渡航し貿易を為す事」や、『学習院輔仁会雑誌』に1897年に載せられた松阪出身の松本章彦著「角屋七郎兵衛の伝」である。最近の代表的な研究と言えば、中京大学地域社会研究所の菊池理夫氏等の「松阪・ホイアンの交流の過去と現在―角屋七郎兵衛を中心として」というプロジェクトがあげられる。菊池理夫氏の研究グループは角屋に関する史料・文献の目録を作成し、角屋の生涯、松阪とホイアンの交流を分析し、研究ノートとして公表した。

筆者は1993年から1996年までの文化庁と昭和女子大学の共同実施の「ホイアン古い町並み調査」と、2014年から2016年までの昭和女子大学主催「ホイアン伝統的な衣服

調査」に参加した際、角屋七郎兵衛に関する資料文献を調べた。なかでも、一番関心を引かれたのが七郎兵衛自身の生涯を通じての、松阪縞織とベトナムとの関係である。松阪木綿についての研究は角屋七郎兵衛に関する研究より少ないが、特筆すべきは、1988年に発行された田畑美穂著『松阪もめん覚書・糸へん伊勢風土記』と2016年に三重県伝統染色研究会により編集された『松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史』である。前者は地元の研究者である田畑美穂氏により、松阪の木綿栽培、藍染、縞織などを初めて分析した研究である。後者は松阪木綿に関する近世以降の史料・文献を紹介し、木綿生産から販売までの流れを明らかにしたものである。

田畑美穂氏は『松阪もめん覚書・糸へん伊勢風土記』において、遠藤元男著『織物の日本史』を引用し、江戸時代半ばまで「縞」が「嶋」という漢字で書かれた理由が「嶋わたり」との意味であると述べた<sup>22</sup>。そして、元禄8年(1695)刊行の西川如見著『華夷通商考』の中で書かれた安南国交趾の土産である紗(花布)、紬、紗羅の他に「木綿島、柳条布ト云」との記述を典拠にし、交趾から縦縞が伝わったことを唱えた<sup>23</sup>。田畑氏は松阪木綿の模様について、「東南アジア特有の色彩感を藍染め木綿の中に調和させ、粋好みの江戸庶民向けに考え出した松阪商人たちのファッション感覚と、これにこたえた織り手、染め師の高い美意識や技術には、今さらながらさすがといわねばならない」と主張した<sup>24</sup>。しかし、神宮徴古館蔵の「角屋文書」では七郎兵衛が日本へ贈ったのは「白紬」、「黒紬」、「木綿」、「北絹」、「白綾子」との記述しかないことから、田畑氏は「おそらくモノが木綿だけに、ことさら贈りものとしてはとり上げられず、むしろ、託されてきた船頭や水夫たちの衣服や持ち物などに、無造作に用いられているのを、目ざとい松阪商人たちいち早くこれを商品化してみようと持ち前の才覚を働かせたのではなるまいか」と分析した<sup>25</sup>。つまり、氏の仮説のキーポイントは、松阪の縞織のルーツが「安南」から伝わった色彩感のある「縦縞」である。

一方、『松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史』は、松阪木綿は染色が美しいことと、撚糸の細め目で、布の丈夫さよりも「粋」を好んだ江戸商人に人気があったと述べた<sup>26</sup>。松阪木綿のルーツに関しては田畑氏と違った2つの指摘がある。まずは田畑氏が提唱した松阪木綿のルーツは交趾である説に対し、文化4年(1807)成稿の松本守善と角屋有喜共編『安南記』に引用された『華夷通商考』において、「木綿島」が暹羅・莫臥爾・閣婆等の土産でもあることをあげた。それを典拠とする場合、木綿島のルーツは安南のみならず東南アジアの他の国に求める可能性もありえるという。2つ目は角屋七郎兵衛が寛永8年(1631)にホイアンへ渡航したが、松阪や長崎にいる親戚に、安南国の産品を贈ることが可能になったのは寛文6年(1666)頃であった。しかし、それより約20年前、

<sup>22</sup> 田畑美穂『松阪もめん覚書 糸へん伊勢風土記』、1988年、123、126頁。

<sup>23</sup> 田畑美穂、前掲書、123、124頁。

<sup>24</sup> 田畑美穂、前掲書、126頁。

<sup>25</sup> 田畑美穂、前掲書、125、126頁。

<sup>26</sup> 三重県伝統染色研究会編『松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史』、2016年、11頁。

正保2年（1645）に刊行され、松江重頼著『毛吹草』の第4巻にある「名物」には、伊勢国の産物は「木綿」としか書かれないのに対し、武蔵国と豊前国は「木綿嶋」、摂津国には「川崎嶋木綿」と記されているのである。そのため、七郎兵衛が家族と交信する以前も、日本にはすでに縞木綿が存在し、松阪縞のルーツを七郎兵衛に求める説と矛盾が生じると指摘された<sup>27</sup>。

上記の問題に関して、本稿の筆者はこのように解釈したい。正保2年（1645）の『毛吹草』に伊勢国の産物が「木綿」としか書かれないことは、当時の伊勢国、とりわけ松阪において、木綿織はあったが、「縞織」ではなかったということが分かる。その後、松阪縞が織られるようになったのは、他の地方か、海外からの影響を受けた可能性があると考えられる。田畑氏も元和年間（1615-1624）に縞織の木綿があったことを認めたが、それは横縞か格子であり、縦縞が交趾から伝わったと主張した<sup>28</sup>。つまり、筆者は松阪木綿のなかで、ベトナムの要素が反映される可能性があることを判断し、その方向性のもとで研究を模索することにした。

## 2.2 研究方法の学際化により明らかになったこと

歴史研究は史料典拠が重要であるが、松阪縞織のルーツに関しては未だ直接的な歴史の記録が見当たらない。その場合、文化人類学的な研究方法と資料に求めることも考えられる。本来は17世紀後半にベトナムから贈られた衣服や縞帳が残っていれば重要な資料となる。その染色方法や織り方を分析し、松阪木綿の変遷とベトナムの伝統的な布との関連性を明らかにする可能性があると思う。

2016年11月26日に松阪市と松阪木綿協議会が共催した「松阪木綿シンポジウム」において筆者は松阪の御絲織物株式会社と松阪市の松阪もめん手織り伝承グループゆうづる会の代表者と意見交換を行った。松阪縞織のルーツがベトナムの越族かチャム族の布であるという意見が出された。筆者は松阪木綿のキーポイントと言え、木綿、縦縞、藍染という3点があることを強調した。従って、松阪木綿のルーツは越族とチャム族の物である可能性が低いと述べた。つまり、越族は原始・古代時代に藍染した可能性があるが、中代以降、茶染めと黒染めの衣服を一般的に着用したし、縦縞を織らないのである。一方、チャム族は木綿でなく、シルク織が一般的であり、藍染をしないのである。1990年代ホイアンを調査した時、筆者はホイアンの周辺に住んでいる少数民族の行商人から藍染で縦縞のある木綿を買った経験があることから、17世紀に日本に持たれた織物のなかに、ホイアン周辺に居住した少数民族の布が含まれる可能性があると思なしている。特に2014年8月にベトナム国家無形文化財として選定されたコテウ族<sup>29</sup>の木綿織は

<sup>27</sup> 三重県伝統染色研究会編、前掲書、12頁。

<sup>28</sup> 三重県伝統染色研究会編、前掲書、126頁。

<sup>29</sup> コテウ族はベトナムのチョウサン（長山）山地に居住している少数民族であり、2009年の統計によれば約6万人の人口がある。（ベトナム放送局・民族班のウェブサイト <http://vov4.vov.vn/TV/gioithieu/dan-toc-co-tu-cgt2-3230.aspx>）

松阪縞織と比べて、木綿、藍染、縦縞という3点で共通していることを着目した。それで、松阪縞とコテウ族木綿の関連性を調査し始めた。

筆者は2013年10月、2016年11月と2018年11月に角屋の故郷で松阪木綿を調査した。また、2018年11月に三井文庫で資料収集も行った。一方、2016年8月と2017年2月に2回ほどコアンナム（廣南）省ナムザン（南江）郡ザラ村においてコテウ族の木綿を調査した。調査の目的は、上述した古い縞帳を資料として求めること以外、松阪木綿センター、来迎寺、歴史民俗資料館、御絲織物株式会社などを回り、綿栽培から糸の紡ぎ、染色と機織りに関する情報収集もある。松阪では綿栽培を復活させるNPO法人生ゴミリサイクルの亀井静子氏、御絲織物株式会社社長の西口裕也氏と橋本広次氏、松阪もめん手織り伝承グループゆうづる会の森谷尚子氏にインタビューを行った。一方、ザラ村では、現地のコテウ族の女性たちに糸の紡ぎ方や染色方法、腰織方法などに関してインタビューした。各作業を写真とビデオで撮影して記録した。

筆者の古い布に関する調査の結果として、松阪で見つけたのは、松阪木綿振興会の保存する安政4年（1857）の『嶋見本帳』と明治7年（1874）の『御嶋之帳』に貼られた数百枚の小切れである。一方、三井文庫で確認できた一番古いのは文化3年（1806）の『嶋本』、嘉永元年（1848）の『嶋本』、嘉永年間（1848–1855）から明治年間（1868–1912）の『松坂嶋見本』である。それらの嶋本は角屋七郎兵衛の時代より約150年後のものであるため、十分に「日本化」されたのであるが、その色彩豊富な縦縞の模様が驚くほどベトナムの山岳地に住んでいる少数民族の藍染に類似するのである。

そして、現地調査で明らかになったのは、松阪とコテウ族の伝統的な綿栽培、糸紡ぎ、染色、縦縞織の技術と原則が意外に共通していることである。2017年2月にコテウ族の木綿調査に参加した松阪もめん手織伝承グループゆうづる会の代表者もそれを確認している。特に、染色技術の共通性が着目された。両者とも色合いの主調は藍、赤と茶である。赤色と茶色の場合は原則として染料を茹でるのに対し、藍が生きていると認識されるため、藍を茹でないで、「寝かせながら発酵させる」特徴がある。それは藍葉を水に入れて色が出るまでよく混ぜ、石灰か貝殻の粒を加え、中和しながら発酵させる工程で反映される。そして、経糸の整形が縦縞デザインに重要な作業であることも共通している。但し、松阪では松阪もめん手織伝承グループゆうづる会以外、藍染から縞織までの作業が殆ど機械化されたのに対し、コテウ族は昔ながらの染色、腰機の手織りを続けているのである。

このように、文化人類学的な調査を通じ、松阪縞織とコテウ族の木綿の関連性を求めてきたが、まだ、松阪木綿のルーツがコテウ族の織物といえる結論には至っていない。今後の研究課題として、伊勢神宮徴古館、名古屋大学付属図書館において、松阪縞織のルーツに関する記録と文化3年（1806）の『嶋本』より古い木綿縞があるかどうか確認したい。また、ホイアン周辺に居住しているコテウ族以外の少数民族の伝統的な染色方法や機織も研究したい。

一方、松阪とコテウ族の調査は研究以外の成果が得られた。それは、両国の文化遺

産を担う人々の交流と、彼らの製品に活気を加えることである。松阪市や、御絲織物株式会社、松阪もめん手織り伝承グループゆうづる会の代表者はホイアンを訪問し、ザラ村のコテウ族、ホイアン・シルク・ヴィレージで活躍している越族、チャム族の人々と、伝統技術やその保存と活用に関する意見交換を行った。その結果、ベトナムのシルク糸を横糸として織り込んだ作品が織られるようになった。今後も、松阪とコテウ族やホイアン・シルク・ヴィレージとの交流が継続できるようにサポートしたいと考えている。

## 結びに

本稿で取り上げた「象の貿易」と「松阪織のルーツ」は、日越交流史のなかでは些細な研究テーマではあるものの、この研究領域では、日本やベトナムという国境を越えて関連する資料・文献のクロスチェックを行い、歴史学というディシプリンを超えた、学際的な研究方法の必要性を痛感している。このように、グローバル化が進む現在、どんな研究でも学際化と国際化の潮流が生じている。そして研究の実効性がより求められるようになった。日本研究は今まで海外発信指向が重視されたが、日本国内への発信も求められると言えよう。そのためには、日本人と外国人の研究者ネットワーク構築が重要であるが、一般の人々や組織の研究への参加、研究成果への貢献と現在社会における日々の生活への活用も、日本研究に新しい原動力を与えると思われる。

## 参考資料・文献

- 九州国立博物館編『ベトナム物語—大ベトナム展公式カタログ』、TVQ九州放送、西日本新聞社、2013年。
- ゲン・カック・テウアン校訂『黎貴惇選集』三卷『撫辺雜録』第二部、教育出版社、2007年（Nguyễn Khắc Thuần hiệu đính, “Lê Quý Đôn tuyển tập”, “Tập 3: Phủ biên tạp lục”, Phần 2”, NXB Giáo dục, 2007）。
- 近藤守重著『安南紀略藁』、国書刊行会編『近藤正斎全集』雀羅書房、1906年。
- 埼玉県立博物館編『特別展 象がゆく—将軍吉宗と宮廷「雅」』、霞会館、2000年。
- ジャン・バプティスト・タヴェルニエ著『トンキン王国へのおもしろい新旅行記』（1681）、ベトナム語翻訳版レ・テウ・ラン訳、ハノイ世界出版社、2005年（Jean Baptiste Tavernier, “Relation nouvelle et singulière du Royaume de Tunquin”(1681), Lê Tư Lành “Jean Baptiste Tavernier: Tập du ký mới và kỳ thú về vương quốc Đàng Ngoài”, NXB Thế giới, 2005）。
- 田畑美穂著『松阪もめん覚え書 糸へん伊勢風土記』、中日新聞本社、1988年。
- 林復斎等編『通航一覽』第四、卷之百七十五、清文堂、1967年。
- 松浦章著「16—19世紀中国 Junk によるベトナム・フェとの海上貿易」、『周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化』、関西大学、2012年。

三重県伝統染色研究会編『松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史』、三重県伝統染色研究会、2016年。

山下幸子「享保の象行列」、尼崎市史編集室編『地域史研究』第2巻第2号、1972年。

山下恒夫再編『石井研堂コレクション江戸時代漂流記総集第二巻』、日本評論社、1992年。

歴史科学協議会編『歴史学が挑んだ課題—継承と展開の50年』、大月書店、2017年。

# Toward Internationalization and Interdisciplinarity of Japanese Studies

Phan Hai Linh

## Introduction

While in May 2017 the International Research Center for Japanese Studies (Nichibun) marked the 30th anniversary of its founding, in April of the same year the Association of Historical Science in Japan (歴史科学協議会) also celebrated the 50th anniversary of its founding. Nichibun is an inter-university institute funded by the Japanese government to fulfill the mission to “promote and support the study of Japanese culture and history through international collaboration and cooperation and to support the work of scholars in Japanese studies in other countries.”<sup>1</sup> Meanwhile, the Association of Historical Science was founded as an independent organization for discussions with the aim of “creative development of history.”<sup>2</sup> The former focuses on studies on “Japan” mainly by scholars from outside Japan and aims for international and comprehensive studies from an interdisciplinary perspective, while the latter focuses on history, including Japanese history, studied mainly by Japanese scholars and aims for focused studies on particular periods or generations from a disciplinary perspective. It can be said that this difference reflects differences in the position of Japan in the world and the research trends at the time of these organizations’ founding.

Recent progress in globalization has blurred the boundary between disciplines and interdisciplines and has required international perspectives and interdisciplinary approaches to be taken with increasing importance placed on the practical effectiveness of studies. This paper takes elephant trading and the origin of Matsusaka-jima textiles (striped textiles produced in Matsusaka), both of which are subjects related to the early-modern relations between Japan and Vietnam, as examples in order to discuss the importance of the internationalization of research sources and the interdisciplinarity of research approaches in Japanese studies.

## 1. Internationalization of Japanese Studies Seen from Some Examples from Research on the Export of Elephants from Vietnam to Japan

### 1.1 Historical Sources and Literature Concerning the Export of Elephants from Vietnam to Japan

As widely known, elephant bones and teeth were discovered from prehistorical and ancient remains in Japan, but the animal became extinct in a later period. Therefore, the elephant was a rare foreign animal for Japanese people in medieval and later times, and every occasion of elephants being transported from abroad was viewed as an important event. The highest profile were a brace of elephants transported from Vietnam in Kyōhō 13 (1728). Although the female

<sup>1</sup> Greetings from the Director of the International Research Center for Japanese Studies: <http://www.nichibun.ac.jp/pc1/en/about/>

<sup>2</sup> Association of Historical Science 歴史科学協議会 ed. *Rekishigaku ga Idonda Kadai* 歴史学が挑んだ課題, 2017, p. 3.

died three months after they arrived in Nagasaki because the climate and food in Japan did not suit it, the male lived in Japan for 14 years after that. In Kyōhō 14, the year after the elephants' arrival, books and poetry collections were published in various areas that the elephant(s) visited. Among them, famous publications include *Zōshi* 象志 by Chizen'in 智善院, chief priest of Honkoku-ji Temple in Kyoto; *Zō no Mitsugi* 象のみつぎ by Nakamura Sankinshi; *Eizōshi* 詠象詩 by Okuda Shikō 奥田士亨; *Reizōkōshinki* 靈象貢診記 by Hakubaien 白梅園; *Kenzōraireki* 獻象來歴; *Iezuto* 家津登 by Yuensai 油煙斎 in Osaka; *Junzōben* 馴象編 by Hayashi Daigakuno-kami Ryūkō 林大学頭榴岡 in Edo; *Junzōzokudan* 馴象俗談 by Inoue Randai 井上蘭台, head scholar in the Hayashi clan; and *Sanjūendan* 三獸演談 by Kanda Hakuryūshi 神田白竜子. These are important historical sources for studies on elephant trading.

There is also a large accumulation of studies on the introduction of the Vietnamese elephants into Japan in the Kyōhō era. A study that deserves special mention is “Kyōhō no Zōgyōretsū” (享保の象行列; lit. “Procession of Elephants in the Kyōhō Era”) published by Yamashita Sachiko in 1972 (Yamashita Sachiko: 1972). She thoroughly looked into historical sources concerning the elephants that came to Japan in Kyōhō 13, including documents about the Amagasaki domain left by Okamoto Shunji, and examined in detail the procession of the elephant(s) from Nagasaki, where they landed, to Edo, the destination. Meanwhile, in the *Ishii Kendō Collection: Edo Hyōryūki Sōshū* 石井研堂コレクション・江戸漂流記総集, Yamashita Tsuneo analyzes historical sources concerning Annamese people who accompanied the elephant(s) to Japan in Kyōhō 13 (Yamashita Tsuneo 1992). Moreover, a special exhibition titled *Zō ga Yuku: Shōgun Yoshimune to Kyūtei <Miyabi>* 象がゆく・将軍吉宗と宮廷〈雅〉 (lit. “Elephants Travel: Shogun Yoshimune and Imperial Elegance”) was held in Saitama Prefecture in October 2000. The exhibition showcased pictures and historical sources concerning the elephants from the collections of the Saitama Prefectural Museum, the Kobe City Museum, the Cabinet Library of the National Archives of Japan, the Kansai University Library and other organizations (Saitama Prefectural Museum 2000).

All the above-mentioned studies examine only historical sources from Japan and explore only what happened in Japan concerning the elephants that came to Japan in Kyōhō 13. From the perspective of a scholar from Vietnam, I have studied this subject for the past decade, adding historical sources from Vietnam and western countries to those from Japan and focusing on issues that the previous studies have not clarified, including Japanese people's interest in Vietnamese elephants, the request for the transportation of the elephants, the elephants' prices, and the ship used for transportation. I have presented my research findings in some papers.<sup>3</sup>

<sup>3</sup> The author's major papers on elephant trading are as follows: “Vietnam Shiryō ni okeru Zō no Isō to Kyōhō 13-nen Torai Zō ni tsuite” ベトナム資料における象の位相と享保13年到来象について (Elephant's Image through Vietnamese Historical Materials and the Event of Vietnamese Elephants Coming to Japan in 1728), *Asia Bunka Kōryū Kenkyū* アジア文化交流研究 vol. 5 (Kansai University, 2010, pp. 545–562); “16–18-seiki ni okeru Vietnam Chubu kara Nihon eno Zōbōeki” 16–18世紀におけるベトナム中部から日本への象貿易 (Elephant Trade from the Center of Vietnam to Japan in the 16th–18th Centuries), *Higashi Asia Bunka Kōshō Kenkyū* 東アジア文化交渉研究 (Journal of East Asian Cultural Interaction Studies) vol. 7 (Kansai University, 2014, pp. 413–422); and “Chaya Kōshi Bōeki Tokaizu ni Egakareta Zō ni tsuite” 茶屋交趾貿易渡海絵図に描かれた象について, *Shuinsen Bōeki Ezu no Kenkyū* 朱印船貿易絵図の研究 (Shibunkaku, 2014, pp. 55–60).

In this paper, I will give some suggestions for studies on elephant trading as an example of the internationalization of Japanese studies.

## 1.2 What Has Been Revealed by International Use of Historical Sources and Crosschecks

To explore the Japanese side's interest in and request for Vietnamese elephants, I would like to take up a letter from a Vietnamese officer named 安南国副都堂福義侯阮書 dated Quang Hung (光興) 14 (1591). Introducing this historical document in 2013, Fujita Reio analyzed the diplomatic relations between Vietnam and Japan at the time of the document and judged it to be the oldest document of amity from the Nguyễn clan<sup>4</sup> in Vietnam to the "King of Japan."<sup>5</sup> However, I would pay special attention to the following sentence about a Vietnamese elephant: “前年見陳梁山就本國謂、國王意好雄象、有象壹隻已付陳梁山將回、國王其體小不能載、有好香貳株・雨油蓋壹柄・象牙壹件・好紵貳匹寄與、明年隆巖又到本國謂、陳梁山并財物未見、茲有雨油蓋壹柄再寄與國王為信。”<sup>6</sup> From this sentence, I infer that a request from Japan for the transportation of an elephant had already reached Vietnam by the end of the 16th century. In addition, *Chaya Shinroku Kōshi Tokō Zukan* 茶屋新六交趾渡航図巻 (lit. “Picture Scroll of Chaya Shinroku's Journey to Cochinchina”)<sup>7</sup> painted in the 17th century also suggests the Japanese side's interest in Vietnamese elephants. Many studies have analyzed this picture scroll to examine the routes the Chaya clan took by sea and by land and the Japanese quarter at that time, but they have paid little attention to a depiction of three elephants trained by elephant trainers in the upper left corner of the picture scroll. I would surmise that the detailed depiction of elephants in this picture scroll, which can be valued as a report from the Chaya clan to the Tokugawa shogunate, helped increase interest in Vietnamese elephants among Japanese people in the Edo period.

Next, I have tried to crosscheck historical sources from Vietnam, France and Japan concerning the trade and prices of elephants. Lê Quý Đôn 黎貴惇, an 18th-century Vietnamese intellectual, said, “一象價銀二笏”<sup>8</sup> (“An elephant is priced at two “hot”〈笏〉of silver”), mentioning the price of an elephant sold at a market in the Cam Lộ (甘露) district<sup>9</sup> on the border between Vietnam and Laos. One 笏 was roughly equivalent to ten ryō (両) of silver. Meanwhile, Daniel Tavernier, a Frenchman who visited Vietnam in the 17th century, stated that silver used for

<sup>4</sup> No generally accepted answer has yet been given to the question whether “安南国副都堂福義侯阮書” was the Nguyễn lord of the Quảng Nam kingdom (1533–1777) based in Thuận Hóa (順化; present-day Huế) in south central Vietnam or a person from the Nguyễn clan in Nghệ An (乂安) Province in north central Vietnam. However, the person is thought to have been an influential figure in central Vietnam.

<sup>5</sup> Kyushu National Museum 九州国立博物館 ed. *Dai Vietnam Ten Kōshiki Catalog: Vietnam Monogatari* 大ベトナム展・公式カタログ・ベトナム物語 (*The Great Story of Vietnam: Feature Exhibition*), TVQ Kyushu Broadcasting and The Nishinippon Shimbun, 2013, p. 18.

<sup>6</sup> Kyushu National Museum, op. cit., p. 105.

<sup>7</sup> This picture scroll is currently housed in Jomyō-ji Temple, Nagoya City.

<sup>8</sup> Nguyễn Khắc Thuần rev. *Lê Quý Đôn tuyển tập* 黎貴惇選集: Volume 3: Part 2 of “Phủ biên tạp lục” 撫邊雜錄, Giáo dục Publication, 2007, p. 271.

<sup>9</sup> The district is located in present-day Quảng Trị (廣治) Province of Vietnam.

transactions in Annam actually seemed the same as Japanese silver.<sup>10</sup> Furthermore, *Annam Kiryakukō* 安南紀略藁 describes Vietnamese silver called *Annam itagin* (安南板銀; “Annamese silver plates”) as “掛目凡百目程” (“roughly worth 100 *moku* [目]”).<sup>11</sup> This suggests that, if 100 *moku* equaled ten *ryō* at that time, “*itagin*” described by Kondō Morishige was equivalent to ten *ryō*, which equaled one 笏 mentioned by Lê Quý Đôn. This means, within Vietnam, an elephant was traded at two 笏, which was equivalent to 20 *ryō*.

Concerning requests for the transportation of elephants and its cost, *Tsūkō Ichiran* 通航一覽 edited by Hayashi Fukusai and other persons in Kaei 6 (1853) reports on Ngo Tu Minh 吳子明, the owner of Tonkinese ship no. 38, as follows: “蒙問委帶小象、可以帶來否、但此獸出在暹羅地方、唐山各省並無、若蒙諭委帶、遵依帶來進上,”<sup>12</sup> which means that elephants recommended by 吳子明, a shipowner from Tonkin<sup>13</sup> in Vietnam, were produced not in Vietnam but in Siam. Two years later, however, elephants not from Siam but from Quảng Nam (Đàng Trong in Vietnam) were transported to Japan by Zheng Dawei 鄭大威, a Chinese who owned Chinese ship no. 15.<sup>14</sup> *Tsūkō Ichiran* also states: “一象其帶來、小船不堪裝載、徒新定造大船二艘、每艘只裝得一隻、但欲定造大船二艘、要用銀一萬餘兩、又唐山發船到暹羅、往來雜費、該用銀二萬餘兩,”<sup>15</sup> which means that transporting two elephants from Siam to Japan required some 10,000 *ryō* as the cost of building a ship and some 20,000 *ryō* as miscellaneous costs. Therefore, transporting one elephant cost 15,000 *ryō*. No exact record has yet been discovered to show how much the Tokugawa shogunate paid when Zheng Dawei transported the elephants produced in Quảng Nam to Japan. Supposing that it cost the same as transportation from Siam, the cost was over 700 times as high as 20 *ryō*, the price of an elephant traded within Vietnam, probably bringing huge profits to the merchants. Meanwhile, it is thought that, despite such a high cost, the Tokugawa shogunate requested elephants, especially not only a powerful male one but also a female one that was expected to give birth to a child, with the aim of breeding elephants in Japan for a long time.

Another interesting question is what criteria were applied when selecting elephants to travel to Japan by sea. The above-mentioned *Phủ biên tạp lục* 撫邊雜錄 states that a male elephant offered to a Vietnamese king was “高五尺五寸” (five 尺 and five 寸 tall). The male elephant that came to Japan was born eight years before the record and was seven years old when it arrived in Japan, and its forefeet were “五尺六寸餘”<sup>16</sup> (more than five 尺 and six 寸) tall. There are actually

<sup>10</sup> Jean Baptiste Tavernier 1681 *Relation nouvelle et singulière du Royaume de Tunquin*; Lê Tư Lành trans. *Jean Baptiste Tavernier: Tập du ký mới và kỳ thú về vương quốc Đàng Ngoài*, Thế giới Publication, 2005, p. 38.

<sup>11</sup> Kondō Morishige 近藤守重 *Annam Kiryakukō* 安南紀略藁, Kokusho Kankōkai 国書刊行会 ed. *Kondō Seisai Zenshū* 近藤正齋全集, Jakura Shobō, 1906, p. 27.

<sup>12</sup> Hayashi Fukusai 林復齋 et al. eds. *Tsūkō Ichiran* 通航一覽, Part 4, Vol. 175, Seibundō, 1967, p. 520.

<sup>13</sup> From the 17th century to the end of the 18th century, the Gianh River in present-day Quảng Bình (広平) Province divided Vietnam into Đàng Ngoài (the area in and north of Quảng Bình Province under the rule of the Trịnh clan, also known as Tonkin [東京]) and Đàng Trong (the area from Quảng Bình Province to Phú Yên (富安) Province under the rule of the Nguyễn clan, also known as Cochinchina [交趾] or Quảng Nam [広南]). Đàng Trong was also called “Namhe” (南河), which implies the “area far from China.”

<sup>14</sup> *Annam Kiryakukō*, p. 22.

<sup>15</sup> *Tsūkō Ichiran*, Part 4, Vol. 175, p. 521.

<sup>16</sup> *Annam Kiryakukō*, p. 28.

slight differences between historical materials in the description of the height of the male elephant. *Tsūkō Ichiran* says that the male elephant was “五尺五寸” (five 尺 and five 寸) tall, the same as the elephant offered to the king in Vietnam, while *Zōshi* written in Kyōhō 14 mentions that the forefeet of the male elephant were “五尺七寸” (five 尺 and seven 寸) tall<sup>17</sup>. According to these historical sources, the male elephant was about 1.7 meters tall. This means that the male elephant that came to Japan was roughly as tall as the elephant offered to the king in Vietnam. The height suggests that both elephants for offering in Vietnam and for international trade were about seven to eight years old. As *Annam Kiryakukō* mentions, “牡象三歳に成り、乳放し致候、而から段々教込熟練いたし候”<sup>18</sup> an elephant at that age has been trained for three to four years so it can understand people’s instructions. In addition, it can be determined that an elephant with a height of 1.7 meters was suitable for people to escort by land and transport by sea.

Finally, let’s look into the ship that transported the elephants. Kondō Jūzō, a Tokugawa shogunate vassal reported: “此度廣南より象二疋乗渡り候南京造り之船に長さ十二丈八尺程幅二丈ほど深さ一丈四尺程御座候。先頃象乗渡り申候則壱疋式丈六尺程横一丈一尺程の所へ入申候但上日数三十七日其内土を踏不申候水もあひ申事不罷成候頭と前の方横木を打象留め仕置候其中より鼻を出し罷在候船中象部屋之内にて跡の方へ漸々ふり返り申候事罷成候。”<sup>19</sup> The “南京造り之船” (“Southeast Asian-built ship”) denotes a junk. According to this report, the junk was 38.8 meters long, 6.06 meters wide and 4.24 meters deep, and had a chamber for the elephants with an area of 7.88 × 3.3 meters, where the animals were confined for 37 days with bars at the heights of their heads and chests and projected their noses between the bars, ending up gradually returning back. A study by Matsuura Akira shows that junks were often used for maritime trade over the 16th to 19th centuries and their average loading capacity was 2,500 tons<sup>20</sup>. *Annam-koku Hyōryōki* 安南国漂流記 written by a crew member of the *Himemiya-maru* after the ship returned home from Hôi An, Vietnam, says about Annamese ship no. 4, which visited Nagasaki on the 16th of the seventh month of Meiwa 4 (1767), “安南より長崎まで、丑寅〈北東〉の方に向ひて、昼夜やすまず日数二十七日にて着仕り候”<sup>21</sup>, which means that it took 27 days for the Annamese ship to travel from Annam northeastward to Nagasaki without taking any rest day and night. The ship that transported the elephants to Japan in Kyōhō 13 was larger than an ordinary junk and seems to have required 10 days more for travel than an ordinary junk.

As mentioned above, I believe that studying early-modern elephant trade between Vietnam

<sup>17</sup> Saitama Prefectural Museum 埼玉県立博物館 ed. *Tokubetsuten – Zō ga Yuku: Shōgun Yoshimune to Kyūtei “Miyabi”* 特別展・象がゆく・吉宗と宮廷「雅」, Kasumi Kaikan, 2000, p. 70.

One *ken* (間) equals six *shaku* (尺), which is roughly equivalent to 1.8 meters. Therefore, four *ken* are roughly equivalent to 7.2 meters.

<sup>18</sup> *Annam Kiryakukō*, p. 22.

<sup>19</sup> *Annam Kiryakukō*, p. 28.

<sup>20</sup> Matsuura Akira 松浦章 “16–19-seiki Chūgoku Junk niyuru Vietnam Hué tonō Kaijō Bōeki” 16–19 世紀中国 Junk によるベトナム・フェとの海上貿易 (“The Maritime Trade by Chinese Junks between China and Hué, Vietnam in the 16th–19th Centuries”), *Shūen no Bunka Kōshōgaku Series 7: Hué Chiiki no Rekishi to Bunka* 周縁の文化交渉学シリーズ7・フェ地域の歴史と文化 (*History and Culture of Hué: Viewed from the Neighboring Settlements and Outside*), Kansai University, 2012, p. 515.

<sup>21</sup> “16–19-seiki Chūgoku Junk niyuru Vietnam Hué tonō Kaijō Bōeki,” p. 511.

and Japan requires not only reviewing historical sources and paintings from Japan, including *Annam Kiryakukō*, *Tsūkō Ichiran* and *Chaya Shinroku Kōshi Tokō Zukan*, but also crosschecking such Japanese materials with historical sources from Vietnam, such as *Phủ biên tạp lục*, and western materials, including *Relation nouvelle et singulière du Royaume de Tunquin*. As shown by this example, international use of historical materials can play an important role in Japanese studies in an era of globalization.

## 2. Enhancement of the Interdisciplinarity of Japanese Studies Seen from Some Examples from Research on the Origin of Matsusaka-jima Textiles

### 2.1 Historical Sources and Literature Concerning the Origin of Matsusaka-jima Textiles

The Kadoya family was originally a family of Shinto priests of a *hachimangu* shrine located in Matsumoto, Shinano Province (present-day Matsumoto City, Nagano Prefecture), and they moved to Yamada (present-day Ise City) in the 15th century and began to operate as a shipping agent. Kadoya Shichirōbei Eikichi (Keichō 15 [1610]–Kanbun 12 [1672]), the sixth head of the relocated Kadoya family, embarked on his first ocean journey at the age of 22 and arrived in Hôi An, Kochin-central Annam (Vietnam). However, the Edict of Seclusion issued by the Tokugawa shogunate soon after his voyage made him spend the rest of his lifetime in Hôi An (41 years). During the period, while playing an important role as the last head of the Japanese quarter in Hôi An, Shichirōbei kept contact with his family back home in Matsusaka, sending them Vietnamese specialty products and donating money to Ise Jingu Shrine, as well as Buddhist temples and Shinto shrines in the Matsusaka Castle town. Vietnamese specialties given by Shichirōbei included textiles, which some argue inspired people in Matsusaka, who had a tradition of cotton weaving and indigo dyeing, to originate Matsusaka cotton textiles (also known as Ise cotton textiles), one of Matsusaka's specialties. Matsusaka cotton textiles were supplied in a large amount for general consumers in Edo in the 18th century and came into vogue among them. The art of Matsusaka cotton textiles was designated as an Intangible Folk Cultural Property by the Agency for Cultural Affairs of Japan in 1981.

An inscription about Kadoya Shichirōbei Eikichi can be found on a stele Pho Da sơn Linh Trung Phat (普陀山靈中仏) built in 1640 in a cave called Hoa Nghiêm (花巖) in the Marble Mountains (五行山) near Hôi An. The sentence in the engraving “日本宮七郎兵衛阮氏慈号紗泰供銭” indicates that Shichirōbei married a Vietnamese woman named 阮氏慈 and donated money to create a Bodhisattva statue. In Japan, the Jingu Museum in Ise City and the Nagoya University Library have collections of “Kadoya documents,” which comprise 110 historical materials handed down by the Kadoya family from the end of medieval times to the Meiji era, including a genealogy, incoming letters, documents related to red-seal ships and materials related to indigo ball wholesalers. Among them, “Annam Koshi Kadoya Eikichi Isho” 安南交趾角屋榮吉遺書 (lit. “Documents Left by Kadoya Eikichi, Cochin, Annam”) is a set of important historical sources, including letters from Shichirōbei, his Vietnamese wife and Tanimura Shirōbei living in Annam, as well as various records.

While many secondary sources concerning Shichirōbei are available, among the oldest studies on him are “Kadoya Shichirōbei Annam ni Tokō shi Bōeki wo nasu koto” 角屋七郎兵衛

安南に渡航し貿易を為す事 (lit. “Kadoya Shichirōbei’s Voyage to Annam and His Trading Business”) written and edited by Seki Toku in *Kuni no Hikari* 日本之光輝 and published in 1887 and “Kadoya Shichirōbei no Den” 角屋七郎兵衛の伝 (lit. “A Biography of Kadoya Shichirōbei”) by Matsumoto Akihiko from Matsusaka published in *Gakushūin Hojinkai Zasshi* 学習院輔仁会雑誌 in 1897. A recent representative example is a project titled “Matsusaka Hōi An no Kōryū no Kako to Genzai—Kadoya Shichirōbei wo Chūshin tosite” 松阪・ホイアンの交流の過去と現在—角屋七郎兵衛を中心として (“Cultural Exchanges between Matsusaka and Hoian, Vietnam Tracing Kadoya Shichirōbei’s Achievements”) led by Kikuchi Masao at the Institute for Regional Studies, Mie Chukyo University. Kikuchi’s research group created a list of historical sources and written materials concerning Kadoya Shichirōbei, analyzed his life and exchanges between Matsusaka and Hōi An, and presented their research findings as research notes.

I participated in the Survey Project on Old Streets in Hōi An conducted jointly by the Agency for Cultural Affairs of Japan and Showa Women’s University from 1993 to 1996, and the Survey Project on Traditional Clothes in Hōi An organized by Showa Women’s University from 2014 to 2016. While looking into written materials concerning Kadoya Shichirōbei on those occasions, I became most interested in the relationship between Matsusaka-jima textiles (striped textiles produced in Matsusaka) and Vietnam throughout Shichirōbei’s lifetime. Although fewer studies on Matsusaka cotton textiles are available than on Shichirōbei himself, studies that deserve special mention are Tabata Yoshiho’s *Matsusaka Momen Oboegaki: Itohen Ise Fudoki* 松阪もめん覚書・糸へん伊勢風土記 (lit. “Memorandum on Matsusaka Cotton Textiles: Ise Province Fudoki from the Perspective of the Textile Industry”) published in 1988 and *Matsusaka Momen: Shiryo ni Manabu Momen no Rekishi* 松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史 (lit. “Matsusaka Cotton Textiles: History of Cotton Learned from Historical Sources”) edited by Mie-ken Dentō Senshoku Kenkyūkai 三重県伝統染色研究会 (lit. “Mie Prefectural Traditional Dyeing Research Group”) in 2016. The former is the first comprehensive analysis of cotton cultivation, indigo dyeing, the weaving of striped textiles in Matsusaka and other related subjects by Tabata Yoshiho, a local researcher. The latter introduces historical sources and written materials concerning Matsusaka cotton textiles from early-modern and later times and clarifies the entire process, from cotton cultivation to sales.

In his *Matsusaka Momen Oboegaki: Itohen Ise Fudoki*, Tabata Yoshiho argues that the word “*shima* 縞” meaning “stripes” was indicated with the homonymic *kanji* character “鳴” meaning “islands” until the mid-Edo period because Japanese striped textiles had been “introduced from overseas islands,” quoting from Endō Motoo’s *Orimono no Nihon-shi* 織物の日本史 (lit. “Japanese History of Textiles”).<sup>22</sup> He also maintains that textiles with vertical stripes were introduced from Cochin on the basis of the description of gifts brought from Cochin, Annam, including “striped cotton textiles (木綿島) called *ryūjōfu* 柳条布,” as well as chintz, pongee and gauze, in Nishikawa Joken’s *Kai Tsūshō-kō* 華夷通商考 (lit. “On Trading in China and the Surrounding Countries”) published in Genroku 8 (1695).<sup>23</sup> Concerning patterns on Matsusaka cotton textiles,

<sup>22</sup> Tabata Yoshiho 田畑美穂. *Matsusaka Momen Oboegaki: Itohen Ise Fudoki* 松阪もめん覚書 糸へん伊勢風土記, Chunichi Shimbun Honsha, 1988, pp. 123 & 126.

<sup>23</sup> *Matsusaka Momen Oboegaki: Itohen Ise Fudoki*, pp. 123–124.

Tabata argues: “Although it may be too late, I cannot help admiring Matsusaka merchants for their sense of fashion based on which they combined coloring unique to Southeast Asian textiles with indigo-dyed cotton textiles to devise products that would appeal to the people of Edo, who adhered to their own style of sophistication, and weavers and dyers for their keen aesthetic consciousness and great skills enough to meet the merchants’ demanding requirements.”<sup>24</sup> However, the Kadoya documents housed at the Jingu Museum mention only “white pongee,” “black pongee,” “cotton,” “Tonkinese silk” and “figured white satin” as Shichirōbei’s gifts to Japan. Tabata analyzes this fact as follows: “Probably because it was just cotton, striped cotton textiles may not have been especially mentioned as a gift. Instead, I suppose that quick-eyed Matsusaka merchants may have noticed junk masters and sailors using them for their own clothes and belongings casually and gained the inspiration for commercializing them the earliest in Japan by displaying their intrinsic commercial aptitude.”<sup>25</sup> In other words, the key point of his hypothesis is that textiles with colorful “vertical stripes” brought from Annam are the origin of Matsusaka’s striped cotton textiles.

Meanwhile, *Matsusaka Momen: Shiryō ni Manabu Momen no Rekishi* claims that Matsusaka cotton textiles were popular for their beautiful dye and thin threads among merchants in Edo who placed higher importance on “*iki* 粋” (sophistication) than the sturdiness of textiles.<sup>26</sup> Concerning the origin of Matsusaka cotton textiles, the book emphasizes two points that disagree with Tabata’s arguments. Disagreeing with Tabata’s argument that Matsusaka cotton textiles have their origin in Cochin, the first point is that *Kai Tsūshō-kō* quoted in *Annam-ki* 安南記 (lit. “Report on Annam”) jointly edited by Matsumoto Moriyoshi and Kadoya Arinobu and completed in Bunka 4 (1807) mentions that “striped cotton textiles (木綿島)” were also a gift brought from Siam, the Mogul Empire, Java and other places. The book argues that, if this description is taken up as the basis, the origin of striped cotton textiles can be traced not only to Annam but also to other Southeast Asian countries. The second point is that, although Kadoya Shichirōbei arrived in Hōi An in Kansei 8 (1631), it was around Kanbun 6 (1666) that he became able to send Annamese products to his relatives in Matsusaka and Nagasaki. Nevertheless, the section of “Specialties” in volume 4 of *Kefukigusa* 毛吹草 by Matsue Shigeyori published in Shōhō 2 (1645), about 20 years before Shichirōbei’s first gifts from Hōi An, mentions just “cotton” as a specialty of Ise Province, while mentioning “striped cotton textiles” as Musashi and Buzen Provinces’ specialties and “Kawasaki striped cotton textiles” as Settsu Province’s specialty. The book thus claims that the Tabata’s attribution of the origin of Matsusaka striped cotton textiles to Shichirōbei would disagree with the fact that Japan had already striped cotton textiles before Shichirōbei became able to make contact with his family.<sup>27</sup>

My interpretation of this issue is as follows: The fact that *Kefukigusa* in Shōhō 2 (1645) mentioned just “cotton” as a specialty of Ise Province suggests that Ise Province, and especially Matsusaka, at that time had cotton textiles but they were not “striped.” The later origination of

<sup>24</sup> *Matsusaka Momen Oboegaki: Itohen Ise Fudoki*, p. 126.

<sup>25</sup> *Matsusaka Momen Oboegaki: Itohen Ise Fudoki*, pp. 125–126.

<sup>26</sup> Mie-ken Dentō Senshoku Kenkyūkai 三重県伝統染色研究会 ed. *Matsusaka Momen: Shiryō ni Manabu Momen no Rekishi* 松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史, Hikari Shuppan, 2016, p. 11.

<sup>27</sup> *Matsusaka Momen: Shiryō ni Manabu Momen no Rekishi*, p. 12.

Matsusaka-jima (striped) textiles can be thought to have been inspired by products from other domestic or overseas areas. Although Tabata also acknowledges that there were already striped cotton textiles in the Genna era (1615–1624), he maintains that they had horizontal stripes or checkers and that textiles with vertical stripes were introduced from Cochin.<sup>28</sup> Therefore, I determined that Matsusaka cotton textiles might have some elements that show the influence of Vietnam and decided to pursue my studies in this direction.

## 2.2 What Has Been Revealed by Interdisciplinary Approaches

While historical studies should be conducted while referring to historical sources, no historical documents have yet been discovered to exactly prove where the origin of Matsusaka-jima textiles lies. In such a case, a possible way we can follow is relying on anthropological approaches and materials. If clothes or catalogs of striped patterns sent from Vietnam in the late 17th century are available, they will be important historical sources for us. I believe that such materials could allow us to analyze dyeing and weaving techniques used for them to clarify how Matsusaka cotton textiles originated and developed and what relationship they have with traditional Vietnamese textiles.

At the Matsusaka Cotton Symposium jointly hosted by Matsusaka City and Matsusaka Momen Kyōgikai 松阪木綿協議会 (lit. “Matsusaka Cotton Council”) on November 26, 2016, we exchanged views with the representatives of Matsusaka-based Miito Orimono Co., Ltd. and Yūzuru-kai, a group of people who aim to hand down Matsusaka cotton’s handweaving techniques. While some panelists argued that the origin of Matsusaka-jima textiles could lie in the textiles of the Viet or Chams in Vietnam, I emphasized that the three key features of Matsusaka cotton textiles are “cotton”, “vertical stripes” and “indigo dye”, so the origin of Matsusaka cotton textiles is little likely to lie in the textiles of the Viet or Chams. More specifically, the Viet may have used indigo dyeing techniques in prehistoric and ancient times, but they have generally worn brown- and black-dyed clothes since medieval times and do not weave textiles with vertical stripes. Meanwhile, the Chams do not use indigo dyeing techniques. When conducting fieldwork in Hôi An in the 1990s, I bought indigo-dyed textiles with vertical stripes from ethnic minority peddlers who lived near Hôi An. Based on this experience, I infer that textile products brought to Japan in the 17th century could have included textile products made by ethnic minorities who lived near Hôi An. The cotton textiles of the Cờ Tu<sup>29</sup> in particular, whose textile techniques were designated as an Intangible Cultural Property by the Vietnamese government in August 2014, have the three features of cotton, vertical stripes and indigo dye in common with Matsusaka-jima textiles. Paying special attention to these common features, I began exploring the relationship between Matsusaka-jima textiles and the cotton textiles of the Cờ Tu.

I conducted surveys on Matsusaka cotton textiles in Kadoya Shichirōbei’s hometown

<sup>28</sup> *Matsusaka Momen Oboegaki: Itohen Ise Fudoki*, p. 126.

<sup>29</sup> The Cờ Tu is an ethnic minority group living in the Trường Sơn (長山) mountains in Vietnam. According to statistics in 2009, the population of the Cờ Tu was approximately 60,000. (Website of the Minority Affairs Team of the Voice of Vietnam (VOV): <http://vov4.vov.vn/TV/gioi-thieu/dan-toc-co-tu-cgt2-3230.aspx>)

in October 2013, November 2016 and November 2018, while collecting written sources at Mitsui Bunko in November 2018. Meanwhile, I also visited the Cờ Tu in Zo Ra Village, Nam Giang District, Quảng Nam Province twice—in August 2016 and in February 2017—in order to conduct research on their cotton textiles. The aims of these surveys were not only to seek the above-mentioned catalogs of stripe samples but also to visit the Matsusaka Cotton Center, Raigō-ji Temple, the Matsusaka City Museum of History and Folklore, Miito Orimono Co., Ltd. and other parties to collect information about the entire process of making cotton textiles, from cotton cultivation through spinning to dyeing and weaving. In Matsusaka, I also interviewed Ms. Kamei Shizuko, a member of the NGO Namagomi Recycle, which aims to restart cotton cultivation; President Nishiguchi Yūya and Mr. Hashimoto Hirotsugu from Miito Orimono Co., Ltd.; and Ms. Moriya Naoko, a member of Yūzuru-kai. Meanwhile, in Zo Ra Village, I interviewed local Cờ Tu women about their spinning and dyeing techniques, as well as the technique of weaving while using their bodies as part of primitive looms, and also shot photos and videos to record their techniques.

As a result of my survey on old textiles, in Matsusaka I found *Shima honchō* 嶋本帳 (lit. “Catalog of Stripe Samples”) dating back to Ansei 4 (1857), which was stored by Matsusaka Momen Shinkōkai 松阪木綿振興会 (lit. “Association for Promotion of Matsusaka Cotton.”), and hundreds of pieces of cloth pasted on *Oshima-no-chō* 御嶋之帳 (lit. “Stripe Book”) in Meiji 7 (1874). Meanwhile, among the oldest stripe catalogs I found at Mitsui Bunko are *Shimahon* 嶋本 dating back to the Bunka 3 (1806), *Shimahon* 嶋本 in Kaei 1 (1848) and some volumes of *Matsusaka Shima Mihon* 松坂嶋見本 from the Kaei era (1848–1855) to the Meiji era (1868–1912). Since these stripe catalogs were created about 150 years later than the era of Kadoya Shichirōbei, those stripes seem fully “Japanized,” but the colorful vertical stripes surprisingly resemble those found on indigo-dyed textiles produced by ethnic minorities living in the Mekong Delta.

In addition, my fieldwork has revealed that the traditional methods of cotton cultivation, spinning and dyeing, and the technique in and principle for weaving vertical stripes unexpectedly have many features common to the people of Matsusaka and the Cờ Tu. The representatives of Yūzuru-kai, who participated in fieldwork on Cờ Tu cotton textiles in February 2017, also confirmed the similarities and paid special attention to the common characteristics of dyeing techniques. Both Matsusaka and Cờ Tu cotton textiles have indigo, red and brown as the main colors and are unique in that; while red and brown dyes are used after being boiled in principle, indigo is “let to ferment” without being boiled because indigo is believed to live. This characteristic appears in the process of soaking indigo leaves in water, stirring the water with the leaves until it is colored, adding lime or tiny pieces of shells to the water, and letting it ferment while neutralizing it. Moreover, for both Matsusaka and Cờ Tu textile traditions, arranging the warp is an important step to design vertical stripes. However, while almost the entire process from indigo dyeing to stripe weaving in Matsusaka has been automated except in the activities of Yūzuru-kai, the Cờ Tu still cherish traditional techniques in dyeing and handweaving while using their bodies as part of primitive looms.

Although I have thus conducted anthropological fieldwork to explore the relationship between Matsusaka-jima textiles and the textiles of the Cờ Tu, I have not yet become able to conclude that the origin of Matsusaka cotton textiles lies in Cờ Tu textiles. From now on, I will

search the collections of the Jingu Museum and the Nagoya University Library for documents concerning the origin of Matsusaka-jima textiles and older stripe catalogs than *Shimabon* dating back to the Bunka 3 (1806). I also hope to examine the traditional dyeing and weaving techniques of ethnic groups who live near Hôi An other than the Cờ Tu.

Meanwhile, my research among the people of Matsusaka and the Cờ Tu has produced favorable results outside the research: it has facilitated exchanges between people engaged in preserving cultural heritage in both countries and invigorated their products. The representatives of Matsusaka City, Miito Orimono and Yüzuru-kai visited Hôi An and exchanged views on traditional techniques and their preservation and use with Cờ Tu people living in Zo Ra Village, and Viet and Chams people, who played important roles at the Hôi An Silk Village. This encounter has resulted in Vietnamese-produced silk threads being used as the weft for some products of Matsusaka-jima textiles. I hope to continue helping sustain exchanges between the people of Matsusaka on one hand and the Cờ Tu and people working at the Hôi An Silk Village.

## Conclusion

Although “elephant trading” and the “origin of Matsusaka-jima textiles,” which this paper has dealt with, are just minor themes in the history of exchanges between Japan and Vietnam, I now firmly believe that this research field really requires crosschecks of historical sources and written materials beyond national borders or the border between the domestic academic worlds in Japan and Vietnam and interdisciplinary approaches beyond the frontier of history as a discipline. Amid ongoing progress in globalization, every academic discipline has seen emerging trends toward interdisciplinarity and internationalization and escalating demand for the practical effectiveness of studies. It can be said that, while Japanese studies has so far placed importance on sharing its fruits with the rest of the world, it must also share its fruits with people in Japan. What is important for this purpose is building networks between scholars from Japan and abroad, and I believe that participation in studies of general people and organizations, their contribution to research achievements, and use of research achievements for people’s everyday lives in contemporary society can also be new sources of vigor of Japanese studies.

## Bibliography

- Kyushu National Museum 九州国立博物館 ed. *Vietnam Monogatari: Dai Vietnam Ten Kōshiki Catalog* ベトナム物語—大ベトナム展公式カタログ (*The Great Story of Vietnam: Feature Exhibition*), TVQ Kyushu Broadcasting and The Nishinippon Shimbun, 2013.
- Nguyễn Khắc Thuần rev. *Lê Quý Đôn tuyển tập* 黎貴惇選集 : Volume 3: Part 2 of “Phủ biên tạp lục” 撫邊雜錄, Giáo dục Publication, 2007 (Nguyễn Khắc Thuần hiệu đính *Lê Quý Đôn tuyển tập*, “Tập 3: Phủ biên tạp lục,” Phần 2, Giáo dục Publication, 2007).
- Kondō Morishige 近藤守重 *Annam Kiryakukō* 安南紀略彙, Kokusho Kankōkai 国書刊行会 ed. *Kondō Seisai Zenshū* 近藤正齋全集, Jakura Shobō, 1906.
- Saitama Prefectural Museum 埼玉県立博物館 ed. *Tokubetsuten – Zō ga Yuku: Shōgun Yoshimune*

- to *Kyūtei "Miyabi"* 特別展・象がゆく・将軍吉宗と宮廷「雅」, Kasumi Kaikan, 2000.
- Jean Baptiste Tavernier 1681 *Relation nouvelle et singulière du Royaume de Tunquin*; Lê Tư Lành trans. (in Vietnamese) *Jean Baptiste Tavernier: Tập du ký mới và kỳ thú về vương quốc Đàng Ngoài*, Thế giới Publication, 2005.
- Tabata Yoshiho 田畑美穂 *Matsusaka Momen Oboegaki: Itohen Ise Fudoki* 松阪もめん覚え書糸へん伊勢風土記, Chunichi Shimbun Honsha, 1988.
- Hayashi Fukusai 林復斎 et al. eds. *Tsūkō Ichiran* 通航一覧, Part 4, Vol. 175, Seibundō, 1967.
- Matsuura Akira 松浦章 “16–19-seiki Chūgoku Junk niyoru Vietnam Hué tonō Kaijō Bōeki” 16–19 世紀中国 Junk によるベトナム・フエとの海上貿易 (“The Maritime Trade by Chinese Junks between China and Hué, Vietnam in the 16th–19th Centuries”), *Shūen no Bunka Kōshōgaku Series 7: Hué Chiiki no Rekishi to Bunka* 周縁の文化交渉学シリーズ7・フエ地域の歴史と文化 (*History and Culture of Hué: Viewed from the Neighboring Settlements and Outside*), Kansai University, 2012.
- Mie-ken Dentō Senshoku Kenkyūkai 三重県伝統染色研究会 ed. *Matsusaka Momen: Shiriyō ni Manabu Momen no Rekishi* 松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史, Mie-ken Dentō Senshoku Kenkyūkai, 2016.
- Yamashita Sachiko 山下幸子 “Kyōhō no Zōgyōretsu” 享保の象行列, Amagasaki Shishi Henshū-shitsu 尼崎市史編集室 ed. *Chiikishi Kenkyū* 地域史研究 (*Bulletin of the History of Amagasaki*), vol. 2, issue 2, 1972.
- Yamashita Tsuneo 山下恒夫 re-ed. *Ishii Kendō Collection: Edo Hyōryūki Sōshū* 石井研堂コレクション・江戸漂流記総集, vol. 2, Nihon Hyōronsha, 1992.
- Association of Historical Science 歴史科学協議会 ed. *Rekishigaku ga Idonda Kadai* 歴史学が挑んだ課題, Ōtsuki Shoten, 2017.

# 世界の中の日本古典文学—翻訳と研究方法の問題点から

アンドンヴァ・マラル

日本の古典文学を国際的な視野において研究するに際して、どのような問題が生じるのだろうか。一つ目の課題として考えられるのは翻訳の問題であろう。日本語の文体に特有の敬語表現や主体未分化表現などは、他言語へとどのように伝達されるのかということについて考えてみたい。本稿では、古典文学の代表的な作品である『古事記』および『源氏物語』を取り上げ、それらの英語及びロシア語への翻訳事例を確認しながら考察する。

もう一つの重要な課題は、研究方法の問題である。海外において古典文学が享受されるとき、その文化圏において蓄積されてきた研究史および概念と結びつける形で享受される。この視点からみると、日本古典文学研究に対してどのような課題を提示できるのか、ロシア語圏の研究の側から考察する。

## I. 原典の翻訳・伝達における課題—敬語表現

日本の古典文学のテキストの一つの特徴は文章の主語が明確化されていない点である。『古事記』及び『源氏物語』の英語・ロシア語への翻訳事例を取り上げ、考察を試みたい。

### 1. 『古事記』における敬語表現

以下は古事記における葦原中国の「言向け」の段を取り上げてみたい。タケミカヅチは高天原から葦原中国を平定するために派遣され、葦原中国の主であるオホクニヌシに対して、その国を譲ってもらえるかと問う。そこで、オホクニヌシの息子のタケミナカタがやってきて、タケミカヅチに対して力比べをしたいと申し出る。タケミカヅチが自らの手をタケミナカタに握らせて、その手を氷柱、さらに剣の刃に変える。そうすると、タケミナカタが撤退する。以下は古事記の漢字文および読み下し文を確認する。

如此白之間、其建御名方神、千引石撃 a. 手末而來、言、誰來我國而、忍々如此物言。然、欲為力競。1) 故、我、先欲取其 b. 御手。2) 故、令取其 c. 御手者、即取成立氷、亦、取成劍刃、故爾、懼而退居。(如此白す間に、其の建御名方神、千引の石を手末に撃げて来て、言ひしく、「誰ぞ我が国に来て、忍ぶ忍ぶ如此物言ふ。然らば、力競べをせむと欲ふ。故、我、先づ其の御手を取らむと欲ふ」といひき。故、其の御手を取らしむれば、即ち立氷に取り成し、亦、劍の刃に取り成しき。故爾くして、懼りて退き居りき。)(山口佳紀・神野志隆光 校注・訳『新編 日本古典文学全集 1・古事記』、小学館、2017年(初版1997年))

b.c. の用例は「御手」と記され、高天原の使者である天つ神のタケミカヅチの手に対して、敬語表現が用いられている。a. の用例は「手」に対して「手」とあるのみで、国つ神のタケミナカタの手を指す。

1) 「故、我、先欲取其 b. 御手」の主語は我（タケミナカタ）である。タケミナカタがタケミカヅチの手を先に取りたいと言い出す。2) 「故、令取其 c. 御手者、即取成立氷、亦、取成剣刃」。人称代名詞や人名の使用が見られず、主語が明確化されていない。だが、「御手」とあることから、天つ神のタケミカヅチが動作の主体であることがうかがえる。動詞は「令取」の使役形となっており、手を取らせる主体がタケミカヅチであることが理解される。

1) 「故、我、先欲取其 b. 御手」から 2) 「故、令取其 c. 御手者」では主体が変わっている。だが、主語は明示されず、「御手」という敬語表現が用いられることによって、手は誰のものかが明示され、それによって手を握る、握らせる主体が暗示されている。この場面における敬語の使用は主体を明確化させる役割を担っている。<sup>1</sup>

では、この部分は英語およびロシア語にどのように翻訳されているのかみてみたい。

#### 翻訳例 1. 英語 (Philippi 1968)

As he was saying this, this same Take-mi-na-kata-no-kami came bearing a tremendous boulder on his finger-tips, and said: "Who is it who has come to our land and is talking so furtively? Come, let us test our strength; 1) I will first take your arm."

2) When he allowed him to take his arm, he changed it into a column of ice, then again changed it into a sword blade. At this he was afraid and drew back. (Donald L. Philippi, trans. *Kojiki*. University of Tokyo Press, 1968, p.133)

1) 「故、我先欲取其御手。」は 1) "I will first take your arm." と訳され、タケミナカタがタケミカヅチに対して「あなたの手を取ろう」という意味の "take your arm" が用いられ、タケミナカタのタケミカヅチに対して問いかけている文脈であり、動作の主体とその動作が向けられている相手が明確である。だが、その次は 2) "When he allowed him to take his arm, he changed it into a column of ice," となっており、手を取らせた主体は誰であり、その手を氷柱、さらに、剣の刃に変えた主体は誰なのかがはっきりしない。そのために、翻訳者が注を付している。

2) の英文に対して "Take-mi-na-kata grasped the arm of Take-mika-duti, who changed his arm magically into an icicle and sword-blade." というように注の中で主体が明示されている。さらに、"At this he was afraid and drew back." の文に対しても、主体は Take-mi-na-kata であることは注によって説明されている。それに対して、日本語の文では人称代名詞が用いられず、主語が省略されている。さらに、その主体を示すために敬語が用いられている

<sup>1</sup> 鉄野昌弘「『神語』をめぐる」『万葉集研究』第26集、2004年。

のである。

翻訳例 2. 英語 (Heldt 2014)

As he was saying this, the spirit Brave Southward Smelter came by, carting by his fingertips a boulder that it would take a thousand men to pull, and spoke saying: “Who is it who comes to our land and speaks so secretly and slyly? I challenge you to a contest of strength! I will grab your mighty arm first.”

1) He then offered Brave Southward Smelter his mighty arm, but straight-away it changed into an icicle and then into a sword blade. This Brave Southward Smelter, growing fearful, withdrew and sat down. (Gustav Heldt, trans. *The Kojiki: An Account of Ancient Matters*. Columbia University Press, 2014, p.46)

Heldt の訳は Philippi とは異なり、1)“He then offered Brave Southward Smelter his mighty arm” というように、手を差し出された主体はタケミナカタ (Brave Southward Smelter) であるということを明記している。さらに、撤退したのもタケミナカタ (Brave Southward Smelter) であることも明記している。さらに、Philippi と異なる点は「御手」を “mighty arm” と訳しているところである。天つ神と国つ神の関係性がみえてくるが、英語翻訳では、力比べをしたいと挑発している相手に対して、その手をほめたたえている文脈が不自然であるように受け取れる。

翻訳例 3. ロシア語 (ピヌス、1973)

Пока [он] так говорил, тот бог Такэминаката-но kami явился, подняв на кончиках пальцев скалу, что только тысяча человек притащить бы могли, и сказал: “Кто это в нашу страну пришел, и так шепотком-тишком разговаривает? А ну-ка, померяемся силой! Вот, я первый возьму тебя за руку”.

Потому 1) [бог Такэмикадзути] дал [ему] взять себя за руку, и тут же [свою руку] превратил в ледяную сосульку, а еще в лезвие меча ее превратил. И вот, 2)[бог Такэминаката] испугался и отступил. (E.M. ピヌス、『古事記上巻』、モスクワ、1973 年)

ロシア語では人称代名詞が用いられないのだが、文中に鈎括弧の中で、述べられている動作の主体が示されている。1)[бог Такэмикадзути (タケミカヅチの神)]、2)[бог Такэминаката (タケミナカタの神)] の通りである。敬語がみられない。

以上の分析から日本語の原典では人称代名詞、あるいは人名を用いての主語は示されないが、敬語表現を通して主体が暗示されることがうかがえる。それに対して、当該文の英語訳・ロシア語訳では主語が必ず明示されている。Philippi 訳のように人称代名詞で示される場合や文中に人名など挿入し記述する方法も確認できる。どちらの場合においても、元の日本語の文章は直訳されず、文中あるいは注において、動作の主体が明示

され説明が施される。

こうした問題は言語の構造が異なることに起因していると理解される。英語やロシア語に訳すに際して、動作の主体を明確化する必要がある。だが、敬語の使用によって主体を示すという日本語の文体の特徴は英語およびロシア語へは翻訳される対象となっておらず、人称代名詞などの使用によってこの示されている。このような翻訳の仕方は主語を明示することにより、文章の意味を伝達するのだが、敬語の使用の問題は文章の意味解決や言語コードという枠を超え、文化的な現象へと展開する用例もある。このことについて次の用例の分析から考えてみたい。

## 2. 『古事記』における自敬表現

タケミカヅチは高天原から葦原中国へ派遣され、葦原中国の主であるオホクニヌシにその国を譲ってもらえるかと問う。その言葉の中に、アマテラス（タカキの神）の発話が出される。以下は『古事記』の原文を確認する。

是以、此二神、降到出雲国伊那佐之小浜而、拔十掬劍、逆刺立于浪穗、趺坐其劍前、問其大国主神言、1) 天照大御神、高木神之命以、問使之。 2) 汝之宇志波祁流葦原中国者、a. 我御子之所知国、b. 言依賜。 故、汝心奈何。(是を以て、此の二はしらの神、(中略) 其の大国主の神を問ひて言ひしく、「天照大御神・高木の神の命以て、問ひに使はせり。汝がうしはける葦原中国は、我が御子の知らさむ国と言依し賜ひき。故、汝が心は、如何に)」(山口佳紀・神野志隆光 校注・訳『新編 日本古典文学全集 1・古事記』小学館、2017年(初版1997年))

タケミカヅチの発話の中に「a. 我御子之所知国、b. 言依賜。」とあるが、「我御子」とはタケミカヅチの子供ではなく、アマテラスの子供を指している。アマテラスがタケミカヅチの発話の中に表出し、自らの子供に対して「御子」というように敬語を用いている。さらに、「b. 言依+賜」(ご委任なさる)というように「賜」の補助動詞が用いられ、アマテラスは自らの行為に対して自称敬語を用いていることがみえる。2) の文章全体の意味は「お前が領有する葦原中国は我が御子の支配する国であると(我々が)ご委任なされた」となる。

自称敬語は神による自伝を意味し、<sup>2</sup> ここにおいては自称敬語が用いられているのは高天原の主権神、アマテラスが自ら語りかけていることを意味する。「1) 天照大御神、高木神之命以問使之」から「2) 汝之宇志波祁流葦原中国者、a. 我御子之所知国、b. 言依賜。」では、タケミカヅチからアマテラスへと主語が転換している。主語転換、主語未分化な表現は神による憑依現象として捉えられる。<sup>3</sup> ここでは、アマテラスがタケミカヅチに乗

<sup>2</sup> 三浦佑之『古代叙事伝承の研究』勉誠社、1992年。

<sup>3</sup> 藤井貞和『古日本文学発生論』思潮社、1978年。

り移り、その口を借りて、オホクニヌシに直接問いかけていると理解できる。<sup>4</sup> こうした自称敬語の使用や主語が明確化されていない文章は、英語やロシア語にどういうふうに翻訳されているのか。

#### 翻訳例 1. 英語 (Philippi 1968)

(中略) then, sitting cross-legged atop the point of the sword, they inquired of the deity Opo-kuni-nushi-no-kami, saying: 1)“We have been dispatched by the command of Ama-terasu-opo-mi-kami and Taka-ki-no-kami to inquire: 2)‘the Central Land of the Reed Plains, over which you hold sway, is a land entrusted to the rule of my offspring; what is your intention with regard to this?’” (Donald L. Philippi, trans. *Kojiki*. University of Tokyo Press, 1968, p.129–130)

1)“We have been dispatched・・・”とはタケミカヅチの発話であり、2) からはアマテラスとタカキの神の発話になっている。主体はアマテラスであることは日本語と変わらないのだが、日本語原文では直接話法の形をとっていない。

#### 翻訳例 2. 英語 (Heldt 2014)

Unsheathing sword ten hand spans long, they stood them upside down on the crest of the waves, sat cross-legged on their points, and questioned the spirit Great Master, saying: 1)“We have been sent at the mighty command of the great and mighty spirit Heaven Shining and the spirit Lofty Tree to ask you this: 2) “The central realm of reed plains you now rule is a land entrusted to our heir. What will you do?””(Gustav Heldt, trans. *The Kojiki. An Account of Ancient Matters*. Columbia University Press, 2014, p.46)

1)“We have been sent・・・”とはタケミカヅチの発話であり、2) からはアマテラスとタカキの神の発話になっている。主体はアマテラスであることは日本語と変わらないのだが、日本語原文では直接話法の形をとっていない。Philippi と Heldt のどちらもの英訳では、発話の中の発話、タケミカヅチの言葉の中のアマテラスの言葉であることを示すために (:) コロンと括弧が用いられている。さらに Heldt の英訳では、“ask you this” というように this これの説明後が挿入されている。さらに、どちらの英訳でも自称敬語は翻訳されていない。

日本語文ではアマテラスが2) からの言葉の主体であるのみならず、アマテラスがタケミカヅチに乗り移り、そのどちらもの声が記述されるという憑依現象として捉えられるもので、アマテラスがタケミカヅチに憑依することが文体の中から読み取れる。英訳でアマテラスの発話は直接話法の形をとっており、直接話法は単に他者の言葉を伝達し

<sup>4</sup> アンダソヴァ・マラル「古事記と『シャーマニズム』—葦原中国と命名することについて—」『日本文学』64巻5号、2015年5月。

ていることを意味する。だが、日本語の原文から読み取れるような憑依現象を表すのに有効でない。この文ではタケミカツチが神の憑依する依代となり、伝達しており、アマテラスとタケミカツチの音が重なっている。こうした現象をあらわす文体が英語やロシア語に訳されることは、どのようにしたら可能になるのだろうかということを、今後の「古事記」の翻訳に対して1つの課題として提示できるかと思われる。

### 3. 『源氏物語』における敬語表現

髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩のほときよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と a. 見えたり。むべこそ親の世になくは思ふらめと、をかしく b. 見たまふ。(「空蟬」、『日本古典文学全集 12・源氏物語一』、小学館、1971年、p.194)

三谷邦明は『源氏物語』は古代後期の書物であり、その時代の貴族社会では、階級意識が強く、目上の人に対して敬語を用いることは必要であったため、語り手は天皇の行為を表す言葉として敬語を用いなければならないとする。<sup>5</sup> 「b. 見たまふ」とは源氏の行為を言表する語り手の言葉である。それに対して、「a. 見えたり」は、敬語が欠落している。それは一人称の表出であり、源氏自身の内心文である。このように敬語を用いる・用いないことによって、動作の主体、つまり、主人公の動作を客観的に述べる語り手が主体なのか、源氏自身が主体なのか決まる。

さらに、三谷邦明はこうした表現を自由直接言説と呼び、読者に文章を主観的に読ませる働きをすると述べる。「文を読むとき、敬語が不在なため、読者は、それに不意打ちに出会い、あたかもこの言説を、一人称的に読んでしまう」と三谷は解している。物語文学特有の文体・表現であるとする。<sup>6</sup>

英語訳・ロシア語訳『源氏物語』では、こうした言説がどのように訳されているのか。みていきたい。

#### 翻訳例 1. 英語 (Waley, 1960)

Her hair grew very thick, but was cut short so as to hang on a level with her shoulders. It was very fine and smooth. 1)How exciting it must be to have such a girl sor once daughter! Small wonder if Iyo no Kami was proud of her. 2)If she was a little less restles, he thought, she would be quite perfect. (Arthur Waley trans. *The Tale of Genji: a Novel in Six Parts*. New York: Modern Library. 1960, p.48.)

<sup>5</sup> 三谷邦明『源氏物語の言説』、翰林書房、2002年、三谷邦明『源氏物語の方法―「ものまぎれ」の極北』翰林書房、2007年。

<sup>6</sup> 三谷邦明、注5に同じ。

## 英訳の日本語訳

彼女の髪はとても細く生えており、だが、肩あたりまで流れるほど短く切ってあった。それはとても美しく、可愛らしかった。このような子を娘として育て持つことはなんとすばらしいことだろう！ Iyo no Kami が彼女のことを誇りに思わないはずがない。彼女は少しだけ落ち着きがあれば完べきだと彼は考えた。

1) "How exciting it must be to have such a girl sor once daughter! Small wonder if Iyo no Kami was proud of her." では直接話法あるいは間接話法の形式が用いられず、文中にそのまま一人称的な感想が述べられている。感嘆符 (!) は感動を表す記号であり、その場面での表現主体の感動を表し、発話者の一人称の表出を意味する。ここでは見ている者、つまり源氏の主観として理解される。2) "If she was a little less restles, he thought, she would be quite perfect." は "he thought" というように、人称代名詞が用いられ、間接話法の形になっている。1) のところでは、原文に近いような形で、読者に主観的に読ませる試みが読み取れる。

## 翻訳例 2. 英語 (Seidensticker, 1978)

Though not particularly long, the hair was rich and thick, and very beautiful where it fell about the shoulders. 1) He could detect no marked flaws, and saw why her father, the governor of Iyo, so cherished her. (Edward G. Seidensticker trans. *The Tale of Genji*. Tokyo: C.E. Tuttle. 1978, p.50)

## 英訳の日本語訳

特に長くはないが、髪はとてもふさふさで、肩に流れ落ちているところが美しかった。彼は著しい欠点を見つけず、彼女の父親が彼女をそれだけ大事にすることが理解できた。

源氏の内心文は示されず、1) "He could detect . . . and saw why . . ." というように、語り手が源氏の考えていることを客観的に描いている。主観的に読ませる記述ではないことがうかがえる。

## 翻訳例 3. ロシア語 (デリユーシナ、1991-1993)

По плечам живописно рассыпаются не очень длинные, но чрезвычайно густые волосы. На первый взгляд наружность ее 1) кажется безупречной. «Право, не зря ее отец так ею гордится, - 2) думает Гэндзи, с любопытством разглядывая эту прелестную особу. - Боюсь только, что ей недостает скромности». (Сикибу Мурасаки «Повесть о Гэндзи» перевод Т.Л. Соколовой-Делюсиной, Москва, 1991-1993. 紫式部『源氏物語 ロシア語訳』、T.A. ソコロヴァ・デリユーシナ訳、モスクワ、1991-1993年)

## ロシア語訳の日本語訳

肩のあたりには、きれいな感じで、長くはないが、大変ふさふさした髪の毛が流れている。一見すると彼女の容貌は申し分ないように1) 見える。「なるほど、親が彼女を誇りに思っていることは納得がいく」、と源氏は不思議そうに(珍しそうに)この美女を眺めながら2) 考えている。(中略)

ここで注目したいのは「a. 見えたり」と「b. 見たまふ」のロシア語訳である。「a. 見えたり」は1)“кажется (見える)”という人間の感情をあらわす無人称動詞で翻訳されており、無人称動詞は意思に左右されない「自発」の意味を持っている。<sup>7</sup> 無人称動詞の動作主体〈誰に見えているか〉は与格で示されることが多いが、当該文のロシア語訳は“На первый взгляд наружность ее 1) кажется безупречной (一見すると彼女の容貌は申し分ないように見える)”となっており、与格〈誰に見えているのか〉が明示されていない。主体不明の無人称動詞が用いられている。「b. 見たまふ」のロシア語訳だが、2) думает (考えている) という三人称単数動詞<sup>8</sup>で訳されている。動作の主体は源氏である。「a. 見えたり」から「b. 見たまふ」への移行は、無人称動詞から主体が明確な三人称動詞への移行という形で表されているといえる。主観的な叙述から客観的な叙述への移行が示され、読者に対してその場を主観的に享受させる文となっているのである。<sup>9</sup>

『源氏物語』は『古事記』と同じように主語が明確化されない場合が多く、敬語の使用によって主体を暗示させることがみえる。さらに、敬語不使用の場合は「a. 見えたり」のように、登場人物の主観的な描写への転換がみられ、三人称の語りから一人称へと切り替わることによって、文章が読者へと一人称的に伝わり、読者をも物語空間に同化させる、という現象が生じるとされる。英訳、ロシア語訳は感嘆符や無人称動詞の使用によって主観的に文を読ませる記述が試みられているのだが、敬語の使用・不使用という形式がみられない。

『古事記』、『源氏物語』からみえてきているように、主語を明確化させない点、敬語を用いて主体を暗示させる点は日本語の特徴であるといえる。こうした特徴は文法上のみならず、憑依現象という文化的な問題へ展開し、あるいは読者の位置とテキストの理解の問題へと展開する。こうした文体とその文体が背後に有する文脈を英語あるいはロシア語へ訳すにおいてどのような手法が必要なのか、きわめて重要な課題である。

## II. 文学のジャンルと方法の問題—ロシア語圏を中心に

ロシア語圏においては、文学をそれぞれの時代の特徴を表すものとして捉え、発展段

<sup>7</sup> 宇多文雄『ロシア語文法便覧 新版』、東洋書店新社、2016年。

<sup>8</sup> 宇多、前掲書。

<sup>9</sup> アンダソヴァ・マラル「異言語間における言説分析—『源氏物語』ロシア語訳の事例から」『物語研究』18号、2018年3月。

階的に捉える傾向が強い。古代はオーラル文学あるいはフォークロアとして捉えられ、中世は宗教が大きな影響を及ぼす時代、近現代はモダニズムの時代として捉えられる。ヨーロッパにおいて確立していたジャンルはそうした中でそれぞれの位置づけを有している。こうした思考法では、それぞれの時代の文学を研究するのに有効である方法論を他の時代を研究するのに用いることは困難であるとされ、トラディショナル文学（フォークロア、口承文芸）研究方法と近代文学のそれとは異なるものと認識される。<sup>10</sup>

## 1. 『古事記』研究、作品論

1980年代に神野志隆光によって作品論が提示され、それまでに「記紀神話」として捉えられていた『古事記』、『日本書紀』は異なるコスモロジーを持っている作品として位置付けられた。<sup>11</sup> 諸学会へ大きな影響を与えたのだが、神野志隆光は近代文学の方法<sup>12</sup>である作品論を、古代の書物を理解するのに応用した点で批判された。<sup>13</sup> その批判の背景に『古事記』の古代の人々が思考・呪的世界観が現れる書物として捉える認識があるだろう。

こうした認識はロシア語圏における『古事記』の捉え方と共通する。ロシアの研究者は『古事記』を古代の口承文芸の伝統が現れている書物として捉えており、<sup>14</sup> 近代文学において有効な方法はトラディショナル文学と認識される『古事記』を研究するのに不適切であるとする。

## 2. 三谷邦明〈ポリフォニー、多声性〉

三谷邦明はバフチンの多声性という議論を応用している。だが、バフチンはポリフォニー小説と呼び得るものはドストエフスキーの小説のみであるとする。<sup>15</sup> バフチンは〈声〉を価値観、アイデア、個人の内的世界観として捉える。さらに、多声性＝声として価値観の対立は近代以降の文学において生じるとしている。なぜなら、前近代は権威的な価値観が強いためである。例えば、叙事文学の場合は、王や君主、英雄をほめたたえるような叙述が主流である。文の中に異義を唱え合うような異なるいくつかの価値観が存在しない。多くの社会層の対立や個人としての内的精神世界が重要視されるようになる近代社会の文学においてこそ、初めていくつかの異なる価値観が戦う場としてポリフォ

<sup>10</sup> 第16回バフチン国際学会（2017年9月6日-10日、中国上海）のロシア語部門において「バフチンのポリフォニー小説の概要と日本古代文学」と題した発表を行った。そこで、『古事記』を研究する上での近代文学方法の使用の妥当性についてロシア語圏の研究者と議論になった。

<sup>11</sup> 神野志隆光『古事記の世界観』、吉川弘文館、1986年。

<sup>12</sup> 三好行雄『作品論の試み』至文堂、1967年。

<sup>13</sup> 古橋信孝「古代文学研究の〈方法〉—文学史へ」『日本文学』59巻5号、2010年5月。

<sup>14</sup> N.I. コンラッド『日本文学 事例および解説』、レニングラード、1927年、E.M. ピヌス『古事記上巻』、モスクワ、1973年、L.M.Ermakova・A.N.Mesheryakov『古事記中巻・下巻』、サンクトペテルブルク、1994年。

<sup>15</sup> ミハイル・バフチン（桑野隆訳）『ドストエフスキーの創作の問題』平凡社、2013年。

ニー小説が可能となるとする。

だが、三谷邦明はこうした問題を顧みず、バフチンの〈多声性〉の議論を応用しながら、語り手、登場人物と読者の〈同化〉の議論を行っている。<sup>16</sup>

方法論は一つの普遍性がある概念として時代、文化、学問領域を問わず用いられる例は多くある。だが、その方法論がどの時代、思想、文化的文脈において生じ、どのように研究状況に対する発信として有効であったのかを認識することは重要であろう。

こうした問題は日本の文学作品を海外へ紹介するにおいても同様である。日本の古典文学の作品がロシア語圏へ紹介されるに際して、すでにヨーロッパにおいて形成されている文学ジャンルに当てはめられて紹介され、あるいは、すでに形成されている概念で説明される。例えば、「随筆」を「露:Эссе、英:essay、エッセイ」、『源氏物語』は小説「露:роман、英:novel」、和歌や漢詩は「露:поэзия、英:poetry」である。<sup>17</sup> だが、日本の古典文学を海外で紹介し研究するに際して、日本・東アジア独自の文脈やそれぞれの作品が誕生した背景を重要視する必要があると考える。

### 3. 国際性・学際性

日本の学会は細分化されている。隣接している学問分野の視点で行われている研究とは議論を共有できなくなっている。それに対して、ロシア語圏では日本に対する研究は広い視野のもとで行われる。以下、研究書の例を挙げてみる。<sup>18</sup>

A.R. サドコワ 『日本の民族の神話：文学及び口承』、博士学位請求論文、モスクワ、2000年

A.V. コルテイニン 『中国、韓国および日本の神とデーモン』、モスクワ、2013年

日本の学会においても隣接分野の研究者とも議論を共有できるように問題意識を持つことが必要ではないだろうか。日本の学会は広く問題設定をすること、広く研究することが必要であると考ええる。

<sup>16</sup> 三谷邦明、注5に同じ

<sup>17</sup> コンラッド、注14に同じ

<sup>18</sup> ロシア国立図書館、データベース。 <https://search.rsl.ru/ru/#f=18.04.2018&s=fdatedesc>

# Classical Japanese Literature in the Global Context: From the Perspectives of Translation and Approaches

Andassova Maral

What challenges do studies on classical Japanese literature from an international perspective raise? The primary set of challenges may be about translation. This paper examines how expressions unique to Japanese text, including honorific words and undifferentiated subjects, can be communicated in other languages. For this purpose, I will take up *Kojiki* 古事記 and *Genji Monogatari* 源氏物語 (*The Tale of Genji*) as representative works of classical Japanese literature to compare some parts of the original texts with their English and Russian translations.

Another important set of challenges is probably about approaches. When a classical literary work is read overseas, the readers will connect the work to the history of literary studies accumulated in that cultural area and concepts used there. This paper also explores what challenges this perspective can present to research on classical Japanese literature by referring to studies in the Russian-speaking world.

## I. Challenges in the Translation and Communication of the Original: Honorific Expressions

One of the characteristics of classical Japanese literary texts is the unclarified subjects of sentences. Let's consider this characteristic using some examples of English and Russian translations of sentences in *Kojiki* and *Genji Monogatari*.

### 1. Honorific Expressions in *Kojiki*

Here, let's take an example from the chapter of the kotomuke (pacification by persuasion) of Ashihara-no-Nakatsukuni in *Kojiki*. Takemikazuchi is sent from Takamagahara to pacify Ashihara-no-Nakatsukuni and asks Ōkuninushi, the lord of Ashihara-no-Nakatsukuni, if the lord is ready to transfer his land. Then, Takeminakata, a son of Ōkuninushi, appears and challenges Takemikazuchi to a strength contest. When Takemikazuchi has his arm held by Takeminakata, the former changes his arm to a column of ice and then to a sword blade, ending up with Takeminakata retreating. Below is the original passage in Chinese characters from *Kojiki* followed by its Japanese rendering in parentheses.

如此白之間、其建御名方神、千引石擊 a. 手末而來、言、誰來我國而、忍々如此物言。然、欲為力競。1) 故、我、先欲取其 b. 御手。2) 故、令取其 c. 御手者、即取成立氷、亦、取成劍刃、故爾、懼而退居。(如此白す間に、其の建御名方神、千引の石を手末に撃げて来て、言ひしく、「誰ぞ我が国に来て、忍ぶ忍ぶ如此物言ふ。然らば、力競べをせむと欲ふ。故、我、先づ其の御手を取らむと欲ふ」といひき。故、其の御手を取らしむれば、即ち立氷に取り成し、亦、劍の刃に取り成しき。故爾くして、懼りて退き居りき。)

(Yamaguchi Yoshinori 山口佳紀 · Kōnoshi Takamitsu 神野志隆光 eds. and annot. *Shinpen Nihon koten bungaku zenshū 1 · Kojiki* 新編日本古典文学全集 1 · 古事記, Shogakukan, 2017 [first

edition: 1997])

At points (b) and (c) in this passage, the honorific term “御手” is used to indicate an arm of Takemikazuchi, an *amatsukami* (*kami* of heaven) sent as a messenger from Takamagahara. Meanwhile, at point (a), the non-honorific term “手” is used to denote a hand of Takeminakata, who is a *kunitukami* (native *kami*).

The subject of sentence 1) “故、我、先欲取其 b. 御手” is “我” (the first person “I” indicating Takeminakata). Takeminakata says that he wants to hold an arm of Takemikazuchi first. In the next sentence 2) “故、令取其 c. 御手者、即取成立氷、亦、取成劍刃,” no personal pronoun or name is used, so the subject of the sentence is not clarified. However, the honorific term “御手” suggests that the subject of the action is Takemikazuchi. The verb “令取” is the causative form of “hold,” indicating that Takemikazuchi is the subject of the action of having his arm held.

The subjects of sentences 1) “故、我、先欲取其 b. 御手” and 2) “故、令取其 c. 御手者” are different. Nevertheless, the subject of sentence 2) is not clarified, and instead the honorific term for an arm “御手” is used to explicitly indicate whose arm it is and imply who holds the arm and who has his arm held. The use of an honorific expression in this passage plays a role in clarifying the subject.<sup>1</sup>

Next, let’s look at how this passage is translated into English and Russian.

Translation example 1: English (Philippi 1968)

As he was saying this, this same Take-mi-na-kata-no-kami came bearing a tremendous boulder on his finger-tips, and said: “Who is it who has come to our land and is talking so furtively? Come, let us test our strength; 1) I will first take your arm.”

2) When he allowed him to take his arm, he changed it into a column of ice, then again changed it into a sword blade. At this he was afraid and drew back. (Donald L. Philippi, trans. *Kojiki*. University of Tokyo Press, 1968, p. 133)

Sentence 1) “故、我先欲取其御手。” is translated as 1) “I will first take your arm.” Speaking to Takemikazuchi, Takeminakata declares his intention to take Takemikazuchi’s arm using the term “your arm.” In this sentence, the subject and the object of the action are clear. By contrast, in the next sentence 2) “When he allowed him to take his arm, he changed it into a column of ice,” it is unclear who “allowed him to take his arm” and who “changed it into a column of ice.” Therefore, the translator added a note to this sentence.

To clarify the subject, the translator’s note added to sentence 2) says: “Take-mi-na-kata grasped the arm of Take-mika-duti, who changed his arm magically into an icicle and sword-blade.” In addition, the translator also added the note to the sentence “At this he was afraid and drew back” to explain that the subject of the sentence is “Take-mi-na-kata.” The original sentence omits the subject by using no personal pronoun, and instead it uses an honorific expression to imply the omitted subject.

<sup>1</sup> Tetsuno Masahiro 鉄野昌弘. “‘Shingo’ o megutte” 「神語」をめぐって, *Man’yōshu kenkyū* 万葉集研究, vol. 26, 2004.

## Translation example 2: English (Heldt 2014)

As he was saying this, the spirit Brave Southward Smelter came by, carting by his fingertips a boulder that it would take a thousand men to pull, and spoke saying: “Who is it who comes to our land and speaks so secretly and slyly? I challenge you to a contest of strength! I will grab your mighty arm first.”

1) He then offered Brave Southward Smelter his mighty arm, but straight-away it changed into an icicle and then into a sword blade. This Brave Southward Smelter, growing fearful, withdrew and sat down. (Gustav Heldt, trans. *The Kojiki. An account of ancient matters*. Columbia University Press, 2014, p. 46.)

Unlike Philippi’s translation, Heldt’s translation: 1) “He then offered Brave Southward Smelter his mighty arm” clearly indicates that it is Takeminakata (Brave Southward Smelter) that was offered the mighty arm. In addition, Heldt also clarifies that it is also Takeminakata (Brave Southward Smelter) that withdrew. Another difference from Philippi’s translation is Heldt’s use of the term “mighty arm” as a translation of “御手,” which seems to imply the relationship between the *amatsukami* (*kami* of heaven) and the *kunitukami* (native *kami*). In the context of English translation, however, it sounds strange that the challenger to a strength contest praises the opponent’s arm.

## Translation example 3: Russian (Pinus, 1973)

Пока [он] так говорил, тот бог Такэминаката-но kami явился, подняв на кончиках пальцев скалу, что только тысяча человек притащить бы могли, и сказал: “Кто это в нашу страну пришел, и так шепотком-тишком разговаривает? А ну-ка, померяемся силой! Вот, я первый возьму тебя за руку”.

Потому 1) [бог Такэмикадзути] дал [ему] взять себя за руку, и тут же [свою руку] превратил в ледяную сосульку, а еще в лезвие меча ее превратил. И вот, 2) [бог Такэминаката] испугался и отступил. (Е.М. Pinus *Kojiki*, Volume 1, Moscow, 1973)

Since Russian does not use personal pronouns, this translation indicates the subjects of the relevant actions in parentheses in the sentences as 1) [бог Такэмикадзути (deity Takemikazuchi)] and 2) [бог Такэминаката (deity Takeminakata)]. The translation does not use any honorific expressions.

The above analysis suggests that, while the Japanese original implies the subject of the action in question using an honorific expression instead of clearly indicating it using a personal pronoun or name, English and Russian translations of the same sentence always clarify the subject using a personal pronoun, as seen in Philippi’s translation, or inserting a personal name or the like in the sentence. In both cases, the original Japanese sentence is not literally translated, and the subject of the action in question is clarified and explained in the sentence or a note.

It can be understood that a factor behind such issues is the difference between the linguistic structures of the languages. Translating Japanese text in English and Russian requires clarifying the subjects of actions. However, the unique Japanese style of implying the subject using an honorific expression is not translated into English or Russian but replaced with use of a personal

pronoun or the like. While this way of translation clarifies the omitted subject to communicate the meaning of the sentence, some cases of use of honorific expressions are related to cultural phenomena beyond the scope of communication of the meanings of sentences and linguistic codes. Let's consider this issue by analyzing the following examples.

## 2. Self-Honorific Expressions in *Kojiki*

Takemikazuchi is sent from Takamagahara to Ashihara-no-Nakatsukuni and asks Ōkuninushi, the lord of Ashihara-no-Nakatsukuni, if the lord is ready to transfer his land. In Takemikazuchi's statement, a word of Amaterasu (Takaki-no-kami) is included. The original passage in *Kojiki* reads as follows:

是以、此二神、降到出雲国伊那佐之小浜而、拔十掬劍、逆刺立于浪穗、跣坐其劍前、問其大國主神言、1) 天照大御神、高木神之命以、問使之。 2) 汝之宇志波祁流葦原中国者、  
a. 我御子之所知国、 b. 言依賜。 故、汝心奈何。(是を以て、此の二はしらの神、(中略)其の  
 大國主の神を問ひて言ひしく、「天照大御神・高木の神の命以て、問ひに使はせり。汝が  
 うしはける葦原中国は、我が御子の知らさむ国と言依し賜ひき。故、汝が心は、如何に  
 (神野志隆光 Kōnoshi Takamitsu ed. and annot. *Kojiki: shinpen Nihon koten bungaku zenshū* 古事  
 記 新編日本古典文学全集, Shogakukan, 2017 [first edition: 1997])

In the sentence “a. 我御子之所知国、 b. 言依賜” included in Takemikazuchi's statement, the term “我御子” (the honorific term for “my child”) denotes a child of Amaterasu, instead of a child of Takemikazuchi. Amaterasu appears in the statement of Takemikazuchi and uses the honorific term “御子” to denote her own child. Moreover, in “b. 言依 + 賜,” she adds the honorific auxiliary verb “賜” to the verb “言依” (“entrust”), using a self-honorific expression for her own action. Sentence 2) as a whole means “Ashihara-no-Nakatsukuni, which belongs to you, is entrusted [honorific] (by us) to the rule of my child [honorific].”

Since self-honorific expressions are used by deities to talk about themselves,<sup>2</sup> the use of honorific expressions here indicates that Amaterasu, the main deity of Takamagahara, herself talks. In the transition from sentence 1) “天照大御神、高木神之命以問使之” to sentence 2) “汝之宇志波祁流葦原中国者、 a. 我御子之所知国、 b. 言依賜,” the subject shifts from Takemikazuchi to Amaterasu. The transition of subjects and undifferentiated subjects can be recognized as implying divine possession.<sup>3</sup> Here, it can be thought that Amaterasu possesses Takemikazuchi to talk directly to Ōkuninushi through Takemikazuchi's mouth.<sup>4</sup> Let's look at how such sentences including self-honorific expressions and unclarified subjects are translated into English and Russian.

<sup>2</sup> Miura Sukeyuki 三浦佑之. *Kodai jōji denshō no kenkyū* 古代叙事伝承の研究, Bensei Shuppan, 1992.

<sup>3</sup> Fujii Sadakazu 藤井貞和. *Konihon-bungaku hassei ron* 古日本文学発生論, Shichosha, 1978.

<sup>4</sup> Andassova Maral アンダソヴァ・マラル. “Kojiki to ‘Shamanism’: Ashihara-no-Nakatsukuni to meimei suru koto ni tsuite” 古事記と『シャーマニズム』: 葦原中国と命名することについて. *Nihon bungaku* 日本文学, vol. 64: issue 5, May 2015.

Translation example 1: English (Philippi 1968)

[. . .] then, sitting cross-legged atop the point of the sword, they inquired of the deity Opo-kuni-nushi-no-kami, saying: 1) “We have been dispatched by the command of Amaterasu-opo-mi-kami and Taka-ki-no-kami to inquire: 2) ‘the Central Land of the Reed Plains, over which you hold sway, is a land entrusted to the rule of my offspring; what is your intention with regard to this?’” (Donald L. Philippi, trans. *Kojiki*. University of Tokyo Press, 1968, pp. 129–130)

Sentence 1) “We have been dispatched . . .” is Takemikazuchi’s statement, and sentence 2) and subsequent clauses are what Amaterasu and Takaki-no-kami say. The subject in this English translation is Amaterasu just as in the Japanese original sentence, which is not in direct speech, though.

Translation example 2: English (Heldt 2014)

Unsheathing sword ten hand spans long, they stood them upside down on the crest of the waves, sat cross-legged on their points, and questioned the spirit Great Master, saying: 1) “We have been sent at the mighty command of the great and mighty spirit Heaven Shining and the spirit Lofty Tree to ask you this: 2) “The central realm of reed plains you now rule is a land entrusted to our heir. What will you do?” (Gustav Heldt, trans. *The Kojiki. An account of ancient matters*. Columbia University Press, 2014, p. 46)

Sentence 1) “We have been sent . . .” is what Takemikazuchi says, and sentence 2) and the subsequent sentence are what Amaterasu and Takaki-no-kami state. Just as in the Japanese original sentence, the subject is Amaterasu in this English translation too, although the Japanese original is not in direct speech. Both Philippi’s and Heldt’s translations use colons and quotation marks to indicate Amaterasu’s words in Takemikazuchi’s statement. In addition, Heldt’s translation inserts “this” after “ask you” for an explanation purpose. Moreover, both English translations do not translate the self-honorific expressions.

The original Japanese passage suggests not only that Amaterasu is the subject of sentence 2) but also that Amaterasu possesses Takemikazuchi, and the voices of both deities are described. The style of the Japanese original implies that a phenomenon of divine possession occurs here. In the English translations, the statement of Amaterasu is in direct speech, which merely reports other people’s statements as they are. The style of direct speech, therefore, does not work well to describe the phenomenon of divine possession, which can be understood from the original Japanese text. In this sentence, Takemikazuchi serves as a divine medium to convey Amaterasu’s message, and the voices of Amaterasu and Takemikazuchi overlap with each other. Seeking solutions to the question how this style of representing such phenomena can be translated into English or Russian is a challenge I would offer to subsequent attempts to translate *Kojiki*.

### 3. Honorific Expressions in *Genji Monogatari*

髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩のほどきよげに、すべていと  
ねぢけたるところなく、をかしげなる人と a. 見えたり。むべこそ親の世になくは思ふ

らめと、をかしく b. 見たまふ。 (“Utsusemi 空蟬,” *Nihon koten bungaku zenshū 12 · Genji monogatari 1*, Shogakukan, 1971, p. 194.)

Mitani Kuniaki argues that *Genji Monogatari* is a book written in the late ancient period, when nobles were highly class-conscious and had to use honorific expressions for other people ranked higher than them, and that storytellers had to use honorific expressions as terms for the emperor’s actions.<sup>5</sup> The term b. “見たまふ” (the honorific term for “think”) is used by the storyteller to describe Genji’s action. By contrast, the term a. “見えたり” does not include any honorific word. This is because the sentence including this term is a first-person statement of Genji about impressions in his mind. In this way, the existence or absence of an honorific word determines whether the subject is the storyteller who describes the protagonist’s actions objectively or Genji the protagonist himself.

Furthermore, Mitani Kuniaki refers to such expressions as “free direct discourse,” which allows the readers to read subjectively. Mitani explains, “While reading text, the readers are surprised at a sentence without any honorific expressions and read it as if it is a first-person sentence.” He claims that this style of expressions is unique to narrative literature.<sup>6</sup>

Now, let’s look at how this kind of discourse is translated in English and Russian translations of *Genji Monogatari*.

Translation example 1: English (Arthur Waley, 1960)

Her hair grew very thick, but was cut short so as to hang on a level with her shoulders. It was very fine and smooth. 1) How exciting it must be to have such a girl for one’s daughter! Small wonder if Iyo no Kami was proud of her. 2) If she was a little less restless, he thought, she would be quite perfect. (Arthur Waley trans. *The Tale of Genji: a novel in six parts*. New York: Modern Library. 1960, p. 48.)

Sentence 1) “How exciting it must be to have such a girl for one’s daughter! Small wonder if Iyo no Kami was proud of her” uses neither direct nor indirect speech and expresses impressions from the first-person perspective in the sentence. An exclamation mark (!) expresses the strong impression a speaker has in a scene and indicates the first-person expression of impression of the speaker. The exclamation mark here indicates the subjective impression of Genji. Sentence 2) “If she was a little less restless, he thought, she would be quite perfect” is in indirect speech, as seen in the phrase “he thought.” Sentence 1), written in a similar style to the original, seems to attempt to allow the readers to read subjectively.

Translation example 2: English (Edward G. Seidensticker, 1978)

Though not particularly long, the hair was rich and thick, and very beautiful where it fell about the shoulders. 1) He could detect no marked flaws, and saw why her father, the

<sup>5</sup> Mitani Kuniaki 三谷邦明 . *Genji monogatari no gensetsu* 源氏物語の言説, Kanrin Shobo, 2002; Mitani Kuniaki *Genji monogatari no hōhō: ‘mono no magire’ no kyokuhoku* 源氏物語の方法: 「ものまぎれ」の極北, Kanrin Shobo, 2007.

<sup>6</sup> See Mitani 2002 and 2007, the same as 5 above.

governor of Iyo, so cherished her. (Edward G. Seidensticker trans. *The Tale of Genji*. Tokyo: C.E. Tuttle. 1978, p. 50)

Here is no statement of Genji about impressions in his mind, and the storyteller describes what is in his mind subjectively as seen in sentence 1) “He could detect . . . and saw why . . . It can be thought that this translation is not intended to allow the readers to read subjectively.

Translation example 3: Russian (T. A. Sokolova-Delusina, 1991–1993)

По плечам живописно рассыпаются не очень длинные, но чрезвычайно густые волосы. На первый взгляд наружность ее 1) кажется безупречной. «Право, не зря ее отец так ею гордится, - 2) думает Гэндзи, с любопытством разглядывая эту прелестную особу. - Боюсь только, что ей недостает скромности». (Сикибу Мурасаки «Повесть о Гэндзи» перевод Т.Л. Соколовой-Делюсиной, Москва, 1991–1993. Murasaki Shikibu 紫式部, *Genji monogatari* 源氏物語 Russian Translation by T. A. Sokolova-Delusina, 1991–1993)

English translation of the Russian translation

On her shoulders is beautiful, not so long but very thick hanging hair. At a glance, her appearance 1) seems flawless. “I see. I can understand that her parents are proud of her,” Genji 2) is thinking while gazing at this beautiful girl amazedly (curiously). [. . .]

What deserves attention here is how the translator translates a. “見えたり” and b. “見たまふ” into Russian. The term a. “見えたり” is translated as 1) “кажется” (“seems”), which is an impersonal verb that expresses human feelings and indicates “spontaneity” independent from intention.<sup>7</sup> Although the intended subject of the impersonal verb (to whom it seems so) is often expressed in the dative case, the sentence in question is translated in Russian as “На первый взгляд наружность ее 1) кажется безупречной” (“At a glance, her appearance seems flawless”) without clarifying to whom it seems so using the dative case. The impersonal verb is used with no subject indicated. Meanwhile, the term b. “見たまふ” is translated into Russian as 2) “думает” (“is thinking”) using a third-person singular verb.<sup>8</sup> It can be said that the subject of the action is Genji. The transition from a. “見えたり” to b. “見たまふ” is translated as a transition from an impersonal verb to a third-person verb with a clarified subject, that is, a transition from a subjective description to an objective description. The passage is intended to allow the readers to enjoy the scene subjectively.<sup>9</sup>

Just as *Kojiki* does, *Genji Monogatari* has many parts where the subjects of actions are not clarified and honorific words are used to imply the subjects. Moreover, when no honorific expressions are used, subjective descriptions from the perspectives of characters are instead used as seen in a. “見えたり.” It is said that this shift from a third-person narrative to a first-

<sup>7</sup> Uda Fumio 宇多文雄. *Roshiago bupō binran Shinpan* ロシア語文法便覧 新版, Toyo Shoten, 2016.

<sup>8</sup> See Uda 2016, the same as 7 above.

<sup>9</sup> Andassova Maral アンダソヴァ・マラル. “Igengokan ni okeru gensetsu bunseki: *Genji monogatari* Roshigoyaku no jirei kara” 異言語間における言説分析：『源氏物語』ロシア語訳の事例から, *Monogatari kenkyū* 物語研究 issue 18, March 2018.

person description helps communicate the sentence to the readers in a first-person manner and assimilates the readers into narrative space. While the English and Russian translations analyzed here attempt to allow the readers to read the passage subjectively by using an exclamation mark or an impersonal verb, they do not use the style of use or absence of honorific expressions.

As seen in *Kojiki* and *Genji Monogatari*, unclarified subjects and the use of honorific expressions aimed at implying subjects can be viewed as the characteristics of Japanese. These characteristics lead us to consider not only grammatical issues but also the cultural issue of possession or the issue of the readers' position and their understanding of text. What methods are necessary to translate these styles and the context behind them into English and Russian? Answering this question is also a very important challenge.

## II. Issue of Literary Genres and Approaches: Focusing on the Russian-speaking world

In the Russian-speaking world, there is a strong tendency to treat literary works as representing the characteristics of each era from the perspective of developmental stages. The ancient period is seen as the time of oral literature and folklore, and the medieval era is viewed as the time when religion exercised great influence, while the modern and contemporary times are treated as the time of modernism. Each literary genre established in Europe is positioned in one of such developmental stages. In this way of thinking, it is believed to be difficult to apply a methodology effective for studying the literature of an era to the literature of another era. Therefore, the effective approach toward traditional literature (folklore and oral literature) is recognized as different from the effective approach toward modern literature.<sup>10</sup>

### 1. Studies on *Kojiki* and Argument as a Literary Work

In the 1980s, Kōnoshi Takamitsu advocated the position that *Kojiki* and *Nihon Shoki* 日本書紀 should be argued as separate literary works, and he positioned these two books, which had so far been treated collectively as “*kiki*-mythology,” as works containing different cosmologies.<sup>11</sup> Despite the major impacts that his argument had on the relevant academic circles, Kōnoshi Takamitsu was criticized for his application of literary criticism targeting each work as an approach toward modern literature<sup>12</sup> to the purpose of understanding the ancient books.<sup>13</sup> A factor behind the criticisms against Kōnoshi's argument is probably the recognition that *Kojiki* is a book that reveals the thought and magical world view of ancient people.

This recognition is in common with the way *Kojiki* is treated in the Russian-speaking world. Russian scholars recognize *Kojiki* as a book that shows the tradition of ancient oral

<sup>10</sup> In the Russian division of the 16th International Bakhtin Conference (in Shanghai, China, on September 6 to 10, 2017), I gave a presentation titled “Overview of the Bakhtinian Theory of Polyphonic Novels and Ancient Japanese Literature,” where I discussed with scholars from the Russian-speaking world the appropriateness of use of modern literary approaches to study *Kojiki*.

<sup>11</sup> Kōnoshi Takamitsu 神野志隆光. *Kojiki no sekaikan* 古事記の世界観, Yoshikawa Kōbunkan, 1986.

<sup>12</sup> Miyoshi Yukio 三好行雄. *Sakuhinron no kokoromi* 作品論の試み, Shibundo, 1967.

<sup>13</sup> Furuhashi Nobuyoshi 古橋信孝. “Kodai-bungaku kenkyū no <hōhō>: Bungakushi e” 古代文学研究の <方法> : 文学史へ. *Nihon bungaku* 日本文学, vol. 59: issue 5, May 2010.

literature,<sup>14</sup> and they believe that it is inappropriate to use an effective approach toward modern literature to study *Kojiki*, recognized as a work of traditional literature.

## 2. Mitani Kuniaki and <Polyphony>

Although Mitani Kuniaki applies the concept of polyphony, which Mikhail Bakhtin advocated, Bakhtin himself maintained that only Dostoevsky's works could be called polyphonic novels.<sup>15</sup> Bakhtin viewed <voices> as values, ideas and the internal world view of each individual. He also argued that conflict between plural voices, or values, had occurred only in modern and subsequent literature because authoritarian values alone were powerful in premodern times. For example, in epic literature, most descriptions are written to praise the king, lord or hero, and sentences do not include plural different values that challenge each other. Bakhtin argued that only in the literature of modern society, where multiple social classes conflicted with each other and individuals' internal spiritual worlds were valued, polyphonic novels could exist as an arena for multiple diverse values.

Despite such limitations imposed by Bakhtin on the concept, Mitani Kuniaki applies Bakhtin's argument of <polyphony> to discussion on the <identification> between the storyteller, characters and the reader.<sup>16</sup>

Many methodological approaches have been used as universal concepts regardless of the times, culture and the academic discipline. However, it is probably important to correctly recognize in what historical, philosophical and cultural contexts those methodological approaches originated and how effective they were for having the condition of studies widely understood.

These issues are also faced in the attempts to introduce Japanese literary works to readers abroad. When works of classical Japanese literature are introduced to Russian-speaking readers, already established European literary genres are applied to such classical Japanese works, or already established concepts are used to explain such classical Japanese works. For example, *zuihitsu* 随筆 are treated as “Эссе” in Russian and “essays” in English, *Genji Monogatari* is classified as “роман” in Russian and a “novel” in English, while *waka* 和歌 and *kanshi* 漢詩 are dealt with as “поэзия” in Russian and “poetry” in English.<sup>17</sup> I believe, nevertheless, that, when introducing classical Japanese literature to overseas readers and studying it abroad, we have to place importance on the context unique to Japan or East Asia and the background for each work's creation.

<sup>14</sup> N.I. Konrad. *Japanese Literature: Examples and Commentaries*, Leningrad, 1927. E. M. Pinus, trans. *Kojiki*, Volume 1, Moscow, 1973. L.M. Ermakova, A.N. Mesheryakov, trans. *Kojiki*, Volumes 2 and 3, Saint Petersburg, 1994.

<sup>15</sup> Mikhail Bakhtin “Проблемы творчества Достоевского” (Japanese translation by Kuwano Takashi 桑野隆 . *Dostoevsky no sōsaku no mondai* ドストエフスキーの創作の問題 , Heibonsha, 2013.

<sup>16</sup> See Mitani 2002 and 2007, the same as 5 above.

<sup>17</sup> See Konrad 1927, the same as 14 above.

### **3. Internationality and Interdisciplinarity**

The academic world in Japan is fractionalized, so neighboring disciplines cannot share discussions from each other's perspective. By contrast, Japanese studies in the Russian-speaking world are conducted from a boarder perspective. Below are examples of remarkable treatises.<sup>18</sup>

A.R. Sadokova, *Mythology of the Japanese: Literature and Folklore*, doctoral dissertation, Moscow, 2000.

A.V. Koltinin, *Deities and Demons in China, Korea and Japan*, Moscow, 2013.

I believe that Japanese scholars should be aware of the necessity of sharing discussions with neighboring disciplines in the Japanese academic world. I also believe that the Japanese academic world would pose questions and conduct research from broader perspectives.

---

<sup>18</sup> Database of the National Library of Russia: <https://search.rsl.ru/ru/#f=18.04.2018&cs=fdatedesc>

# 韓国における日本研究の現状と課題

—日語研創立 30 周年に寄せて—

李康民

## 一、はじめに

2018 年 5 月、国際日本文化研究センター創立 30 周年記念国際シンポジウムに参加させていただいた。主催側から与えられた課題は、韓国における日本研究の現状を報告し、国際日本文化研究センター（以下、日語研）の活動について批判的な提言を行うということである。ただ、一つ告白しておきたいのは、筆者の日語研体験は、1992–1993 年、留学先の京都大学大学院の院生として共同研究に参加して以来、2017 年に来訪研究員として訪問の機会を得られるまで 24 年間の空白があり、「批判的な提言」を行う資格があるかどうか躊躇せざるを得ない。そこで本稿では、まず、韓国における日本研究の現状を報告し、次に日語研の活動が持つ意味について、韓国の日本研究に関わる中での筆者の所感を後半で述べるに留まっていることをお許しいただきたい。

## 二、研究基盤の現状

韓国の大学教育において初めて日本関連学科が設けられたのは 1961 年のことである。1965 年の韓日国交樹立を見込み、その 4 年前の時点で外国語大学に日本語科が開設された。続いて 1962 年には国際大学の日本語科が、1967 年には祥明女子大学（現祥明大学）の外国語教育科に日本語専攻が開設されているが、草創期の日本関連学科がいずれも「日本語」を標榜していることが注目される。これは、日本経済に接近するための実用的手段として日本研究を位置付けていたことを表しているのではないかと思う。

大学の教育現場に急激な変化が現れたのは 1980 年代に入ってからである。当時の全斗煥政権はポピュリズム政策の一環として大学定員を倍増させたが、それをきっかけに多くの大学で「日語日文学科」が新設され、この時期に日本関連学科を設けた大学は 50 校前後を数える。しかし、このような急激な関連学科の増加は、日本研究市場に大きな歪みを引き起こした。日本研究者への需要と供給のバランスが大きく崩れ、大学教員の資格を持つ日本研究者の不足という事態が現出したのである。1980 年代後半以降の日本留学ブームは、このような雰囲気の後押しされた側面が少なくない。

1980 年代以降、多くの大学で日本関連学科の新設が続き、一時期は 90 以上を数えたが、現在は、全国の 200 を数える大学（四年制）のうち、83 の大学で日本関連学科を運営している。

学部での日本関連学科の増加に伴い、大学院での関連学科の増設も積極的に行われた。博士課程に絞って言えば、1992 年までは三つの大学（韓国外国語大学、中央大学、漢陽大学）で運営されていたが、2000 年以降では、21 の大学にまで拡大した。その殆どは、

1999–2000年の間に増設されたもので、この時期にはまだ大学院需要への希望的観測があったように思われる。しかし、15年が経った現在では、各大学の院生の数は、軒並み最盛期の半分以下に減り、中には院生を持たない大学も稀ではない。大学及び大学院の問題については、後でもう一度触れておきたい。

次に、日本関連学会の現状であるが、1973年2月に韓国最初の日本関連学会として韓国日本学会が結成され、同年8月には学会の学術誌として『日本学報』が創刊された。この『日本学報』は、今年116輯を刊行しているが、韓国で発刊した最初の日本学学術誌としての歴史的な意味を持っている<sup>1</sup>。以後、1990年代に入り、学会の数は急速に増え、今は27の学会が活動を続けている。多くの学会が乱立していることに抵抗を感じる方もあるかも知れないが、多様なテーマの小規模の研究会が活発に行われている点が、韓国的学会活動の特徴として指摘できるのではないかと思う。現在の学会の状況を表にまとめると、次のようになる。

表1 学会の現況（2019年現在）

	学会名	設立年	学術誌	分野
1	韓国日本学会	1973	『日本学報』	総合
2	韓国日語日文学会	1978	『日語日文学研究』	日本語と文学
3	現代日本学会	1978	『日本研究論叢』	政治・経済
4	韓日経商学会	1983	『韓日経商論集』	経済
5	韓国日本語教育学会	1984	『日本語教育』	日本語教育
6	韓国日本教育学会	1985	『韓国日本教育学研究』	教育学
7	東アジア日本学会	1990	『日本文化研究』	総合
8	大韓日語日文学会	1991	『日語日文学』	日本語と文学
9	日本語文学会	1992	『日本語文学』	日本語と文学
10	韓日関係史学会	1992	『韓日関係史研究』	歴史
11	韓国日語教育学会	1993	『日本語教育研究』	日本語教育
12	韓国日本文化学会	1993	『日本文化学報』	日本語と文学
13	日本史学会	1994	『日本歴史研究』	歴史
14	韓国日本語文学会	1995	『日本語文学』	日本語と文学
15	韓国日本思想史学会	1997	『日本思想』	思想
16	韓国日本語学会	1999	『日本語学研究』	日本語学
17	韓国日本近代学会	2000	『日本近代学研究』	総合
18	韓国日本文学会	2000	『日本学報』 共有	文学
19	韓日民族問題学会	2000	『韓日民族問題研究』	在日社会
20	韓国日本言語文化学会	2001	『日本言語文化』	日本語と文学
21	韓国日本歴史文化学会	2001	『日本学報』 共有	歴史・文化
22	韓日軍事文化学会	2001	『韓日軍事文化研究』	軍事・文化
23	韓国日本政経社会学会	2002	『日本学報』 共有	政治・経済
24	韓国日本通翻訳学会	2002	『日本学報』 共有	通訳・翻訳
25	韓日言語学会	2009	『日本学報』 共有	日本語学
26	大韓日本文化学会	2010	『日本文化論叢』	日本語と文学
27	韓国日本仏教文化学会	2014	『日本仏教文化研究』	仏教文化

<sup>1</sup> 韓国日本学会 40周年特別委員会編『日本研究の成果と課題—韓国日本学会 40年史』宝庫社、2013年、pp. 131–132を参照。

学会と共に韓国の日本研究を牽引している組織として、研究所の存在を欠かすことはできない。早くも 1979 年には、二つの大学（中央大学、東国大学）で日本研究所を開設しているが、各大学の研究所の活動が軌道に乗るまでには、二つの変化の段階があったと思われる。まず一つ目は、1990 年代に入り開設された翰林大学日本学研究所の活動である。翰林大学日本学研究所は、元『思想界』の主幹として、長い間日本で韓国の民主化運動を支援してきた池明観先生が 1994 年に帰国し開設したものであるが、岩波書店の協力を得、本格的な文献資料収集に乗り出す一方、日本学叢書（翻訳シリーズ 100 巻）と日本現代文学代表作選（40 巻）を刊行するなど、注目すべき活動を展開した。二つ目は、2000 年代に入って HK（ヒューマニティーズ・コリア、人文韓国）事業と名付けた韓国政府の財政投入による大学附設人文学研究所の育成事業が始まり、日本学の分野でも年間 1 億円前後の政府支援を受ける研究所が現れ、研究環境が大きく改善されたことである。とりわけ、研究所の専任及び契約ポストの拡充、研究所独自の研究プロジェクトの立ち上げは、HK 事業以降に現れた新しい研究局面と言える。このような変化の段階を経て、韓国の日本研究において、研究所が占める寄与度は日増しに高くなっているのが現状であるが、現在、各大学に附設されている日本関連研究所は、次の 14 を数える。

表 2 研究所（大学附設）の現況（2019 年現在）

	大学名	研究所名	設立年	学術誌
1	中央大学	日本研究所	1979	『日本研究』
2	東国大学	日本学研究所	1979	『日本学』
3	韓国外国語大学	日本研究所	1985	『日本研究』
4	ソウル大学	日本研究所	1991	『日本批評』
5	翰林大学	日本学研究所	1994	『翰林日本学』
6	高麗大学	グローバル日本研究院	1997	『日本研究』
7	檀国大学	日本研究所	2002	『日本学研究』
8	国民大学	日本学研究所	2002	『日本空間』
9	全南大学	日本文化研究センター	2004	-
10	東西大学	日本研究センター	2005	『次世代人文社会研究』
11	漢陽大学	日本学国際比較研究所	2008	『比較日本学』
12	仁川大学	日本文化研究所	2008	-
13	釜山大学	日本研究所	2010	-
14	全北大学	日本・東アジア研究所	2016	-

ここまで、学科・学会・研究所を中心とした研究基盤の現況を一瞥してきたが、それでは、韓国ではどれぐらいの人が日本研究に携わっているのでしょうか。研究分野を日本語と日本文学に絞れば、現在、韓国研究財団に登録されている日本語と日本文学研究者の数は、1800 人に上る。その他、歴史、文化、政治、経済などの専門領域になると、日本研究としての境界が曖昧なところがあるが、少なくとも 200 人以上の人が研究活動を続けているとみられる。となると、現在の韓国では、合わせて 2000 人以上の研究者が日本研究に携わっていることになる。

この 2000 人のうち、大学の日本関連学科や研究所の専任ポストで活動している韓国

人研究者は 420 人前後、その他の史学系や政治・経済関連学科の専任ポストを合わせると、約 500 人前後の韓国人研究者が大学の専任教員として日本研究に携わっていることになる。

ここで日本関連学科所属の 420 人の内訳を調べてみると、大きく分けて、日本語学 (180 人)、日本文学 (120 人)、歴史・文化 (民俗を含む)・思想・政治・経済・社会学 (120 人) という分布を示した。また、日本文学は、近現代文学 (65 人) と古典文学 (55 人) に分けられるが、さらに一步踏み込んで、古典文学を時代別に細分してみると、上代 (11 人)、中古 (14 人)、中世 (12 人)、近世 (18 人) のように、近世の方がやや優勢ではあるものの、目立った偏りは見られない。

このような人的構成によって韓国の日本研究は支えられているが、一方において、50 代以上の研究者が専任ポストの 85% を占めており、研究の高齢化が進んでいることを合わせて指摘しておきたい。なお、日本研究者全体の中で、専任職を除く約 1500 人前後の人は、非常勤講師や契約職の研究員として活動している状況であり、次世代研究者のための安定したポストを確保していくことが、今後の韓国の日本研究においては最大の課題になっている。

### 三、展望と課題

韓国の日本研究は、上述したような研究基盤の拡充と共に、量的な成長を続けてきた。それを端的に示しているのは毎年発表される論文の数である。1980 年代までも日本関連論文は年に 50 本前後を数えたが、2000 年代に入るとは、年に 900 本前後の論文が発表され、特別に注意を払わない限り、研究動向を把握するのも難しい状況になっている。しかしながら、1980 年代以降、韓国の日本研究がどのような方向に動いてきたのかを示してくれる事象を、いくつか取り上げることはできるのではないかと思う。

その一つに、学科名の変化の流れがある。上述したように、草創期の日本関連学科は、日本語を標榜した日本語科が主流であった。それが 1980 年代に入ると、多くの大学で日本文学をメインに据えた「日語日文学科」が新設され、これが日本関連学科の一般的な名称になった。しかし、1990 年代に入ると、学科名も多様化していく。まず変化が起こったのは、既存の「日語日文学科」の名称から「文学」の代わりに「文化」を取り入れ、「日本言語文化学科」を標榜する学科が少なからず出現したことである。同時に、地域研究を標榜する「日本学科」もこの時期に登場するようになる。つまり、韓国での日本関連学科名は、概して言えば、「日本語科」→「日語日文学科」→「日本言語文化学科」→「日本学科」のような流れを辿っており、日本文化や地域研究の要素を加味する方向へ動いてきたことが分かる。

研究内容においても、変化の流れを読み取ることは可能である。例えば、日本語研究においては、従来の文法中心の研究から、社会言語学や日本語教育に関わる論文が大幅に増えている。これは、日本語研究のテーマが多様化される過程の中で、伝統的な文法

研究の技法より、テーマへの許容度が広い分野へ研究者の関心が移りつつあることを示しているように思われる。また、コンピューターによる言語処理を利用したコーパス言語学が日本語研究に積極的に取り入れられているのも新しい傾向として注目される。日本文学、とりわけ近現代文学研究においても、従来の作品論に代わって、ポストコロニアル・スタディーズやカルチュラル・スタディーズの視点を取り入れた論考が増えていることを確認できる。そこから在日文学への関心が高まっているのも自然な帰結であろう。古典文学の方にも、映画やアニメ、そして社会史との接点を求める試みは見られるが、まだ研究の流れを変えるような勢いには達していない。ただ、2000年代に入り、古典文学の翻訳作業が急激に増えていることは注目に値する。

韓国における日本古典文学作品の翻訳は、既に1970年代に始まり、1990年代までに十余種の作品が翻訳されているが、最近になって翻訳作品が60種以上に急増し、全体的な翻訳作品数は70以上を数えるに至った<sup>2</sup>。中でも、『源氏物語』と『古事記』は、最も多く回数を重ねて翻訳された作品である。『源氏物語』は1973年、『古事記』は1987年から、それぞれ異なる翻訳者によって10回以上重ねて翻訳されている。この二つの作品の他に、『万葉集』『芭蕉俳句集』『徒然草』なども比較的翻訳回数の多い作品として数えられよう。また、『源氏物語』をはじめ『古事記』や日本の昔話を素材にした子供用の絵本が多く出版され、日本の古典の大衆化が進んでいることも、最近の新しい傾向として特記しておきたい。

韓国における日本語と日本文学の研究動向を大雑把に述べてみたが、今後の韓国の日本研究には残された課題が少なくない。何より、2010年以降、韓国の日本研究は大きな転換期に差し掛かっている。1980年代以降、拡張し続けた研究環境がここに来て大きく揺れているのである。

現時点において、韓国の日本研究が直面している問題を併記してみると、日本語学習者の減少、大学内の日本関連講義の縮小、関連学科の統廃合、専任ポストの減少とそれに伴う研究者の高齢化、次世代研究者の不安定な地位、同語反復的な研究の疲労感などが挙げられる。

このような状況を理解するためには、主に学外と学内における環境の変化を認識しなければならない。ここでいう学外とは、主に日本を取り巻く研究環境を指しているが、まず、中国の台頭によって国際社会における日本のプレゼンスが相対的に弱体化したこと、2011年に発生した3.11東日本大震災によって大学内の日本語学習者がかなり減少したことが想定できる。そして、安倍政権の発足と日本社会の右傾化傾向や過去の歴史をめぐる韓日両政府の政治的葛藤も韓国の日本研究に影響する無視できない要因であろう<sup>3</sup>。

<sup>2</sup> 李市俊「韓国の日本古典文学翻訳現況に関する基礎的調査研究」『日本研究』（韓国）73号、2017年9月、pp.100-106を参照。

<sup>3</sup> 李康民「転換期の日本研究：研究対象としての「日本」と「日本語」」『日本学報』（韓国）100輯、2014年8月、pp.2-4を参照。

一方、学内とは、韓国国内の研究環境を指すが、大学における人文学的教養主義の衰退、そして急激な少子化による学齢人口の減少が問題になる。中でも記録的な少子化による高卒人口の減少は緊急且つ切実な問題として指摘できる。

今の韓国では、2023年には大学入学定員が高卒人口を16万人も上回ることが予想されているが、200を数える四年制大学の中、規模の大きなところの入学定員が3千人前後であることを考えれば、その規模の大きさが想像できる。そこで、各大学では、定員調整と構造改革を本格的に進めており、今後、人文社会系を中心に学科の統廃合が盛んに行われることが予測される。実際に日本関連学科の中でも、最近の3年間で学科単位を専攻トラックに改編したケースや、学科を廃止し教養学部統合する事例が増えている。このような研究環境の変化は、韓国の日本研究を委縮させる重圧になっており、韓国の日本研究者は、このような状況にどう対応していくべきか、厳しい課題を突き付けられているのである。

ここで、韓国の日本研究に関連して、日文研の活動について少し触れておきたい。周知のように、日文研は創立以来、国内外の日本研究者の中心的な研究拠点として大きな役割を果たしてきた。その間、数多くの海外研究者が日文研での研究活動を体験しており、そのうち日文研の支援を受けた韓国人研究者も70人に上り、韓国での日本研究に深く関わってきたことに異論はないだろう。

筆者は、今から27年前、大学院生の身分として日文研の共同研究を見学し、初期の日文研の活動のごく一部分を垣間見ることができた経験を持っているが、当時の日文研は、研究に対する自信と熱情に満ち、大学の文学部では味わえない明るさが漂っていたことを覚えている。何より、既存の研究慣行にとらわれず、縦横無尽に日本を語り合うという、言わば日本研究の前衛隊のような印象を強く受けた。

草創期の日文研の性格についてはいささか論争があったし、日本文化の特殊性についての論議にはある種の政策的判断があったかも知れないが、日文研の第一義的な活動は、「新しい研究領域の開拓」にあったのではないかと筆者は思う。そのような日文研の研究姿勢は、韓国の日本研究者を刺激し、彼らに研究視点の多角化と研究領域の拡大を促した。

筆者は一昨年、24年ぶりに、来訪研究員として再び日文研を体験したが、何より図書館の充実には目を見張るものがあった。今では貴重書になり触れることも難しい本を、下宿に持ち出し自由にコピーを取っていた京都大学での留学時代をふと思い出したほどであった。そして以前より、一層グローバルな日本研究が意識され、国際連携の強化に力を入れている印象を受けた。海外研究者にとって日文研との連携や共同研究は歓迎すべきことであろう。国際連携を通じ、日本研究に対する問題意識を共有すると共に、地域環境によって異なる問題意識を確認することも、日本研究を一層豊かにしてくれるものと思う。なお、グローバルな日本研究を進める上で、日本研究のリングワ・フランカが必要なのかどうか、改めて議題として浮上する可能性があるが、こういう問題に対し

でも日文研は研究者の中心に立って積極的に知恵を絞っていただきたい。

最後に、日本語と日本文化の関連性についても、今までとは違う視座で、より積極的に取り組んでいただきたい。言語を文化から引き離れたところで近代言語学は成立しているが、文化は言語によって規定され、形成されるという言語相對説に立つ言語学者も依然として存在し、最近筆者も言語と文化の相互依存性に強く興味を覚えている。この問題に関連して、韓国や中国には日本研究の中心軸をなしている日本語研究者の大集団があることを鑑み、彼らとの接触面をどのように持つべきかということ、今後の日文研の課題として提案したい。

#### 四、おわりに

韓国の日本研究は、1960–1970年代の草創期、1980–1990年代の拡張期を経て、今世紀に入り大きな転換期に直面している。急な坂道をひたすら上り詰めてきた韓国の日本研究は、今まで経験したことのない局面に差し掛かっていると言っても過言ではないだろう。

そして、与えられた環境の変化は、自ずと「量」から「質」への移行を方向付けている。「量」に代わって「質」を高め、それを持続していくことを要求しているのである。そのためには、従来の教育内容や研究方法を時代の変化と社会の要求に応じ、再構築していかなければならない。

思えば、韓国における日本研究のディシプリンは、日本語を中心軸として展開してきた。そのため、日本研究に対する巨視的視点を持たず、最初から地域研究の洗礼を受けたアメリカの日本研究とは対極的な立場で研究が始まったと言える。最近になって教育内容に地域研究的要素を加味してはいるが、まだ理論中心の欧米の方法論が定着するには限界がある。

さらに、年に900本以上の論文が量産されている中で、その研究結果がどれくらい「外」の世界に伝わっているのかを考えれば、研究のガラパゴス化に対する批判を免れることはできないだろう。しかし、一方においては、英語による日本研究に対しさほど信頼度が高くないという現状と、英語による研究ヒエラルキーに違和感を覚える研究者が少なくないことを考えれば、この問題の短期的な解決は難しいだろう。

固着した日本への認識を克服するためにも、複眼的な広い視座の下で日本を教え語ること、これから韓国の日本研究は、このような問題に悩み、向き合いながら、新しい道を模索していくことになるだろう。そして考えてみれば、今ここで述べてきたことは、創立以来日文研が追求し歩んできた足跡と深く関わっているものと思われる。その意味で、これからも日文研の活動に一層注目し、変わらない期待を寄せたい。



# Current Condition of Japanese Studies in Korea and Challenges: Commemorating the 30th Anniversary of Nichibunken's Foundation

Yi Kang-min

## 1. Introduction

In May 2018, I participated in an international symposium celebrating the 30th anniversary of the foundation of the International Research Center for Japanese Studies (Nichibunken). The symposium organizer assigned me to report the current condition of Japanese studies in Korea and give critical proposals on Nichibunken's activities. I would like to confess here that there was a 24-year gap in my experience with Nichibunken between my participation in a Nichibunken joint research as an international graduate student at Kyoto University from 1992 to 1993 and my return to Nichibunken as a visiting researcher in 2017, and this gap made me hesitate and doubt my qualification to give a "critical proposal." This paper thus reports the current condition of Japanese studies in Korea and then just expresses my impression about the meanings of Nichibunken's activities in relation to Japanese studies in Korea.

## 2. Current Condition of the Foundation for Japanese Studies

It was in 1961 that the first Japanese studies department was established in the history of university education in Korea. In anticipation of the normalization of the diplomatic relations between Korea and Japan in 1965, the Hankuk University of Foreign Studies established a Japanese language department four years before the normalization. After that, Kookjae University (present-day Seokyeng University) established a Japanese language department in 1962, and Sangmyung Women's University (present-day Sangmyung University) established a Japanese language course in its foreign language education department in 1967. A fact deserving attention here is that all the early Japan-related departments aimed to deal with "Japanese language." I suppose that this was because Japanese studies was positioned as a practical means to approach the Japanese economy.

In the 1980s, the field of university education in Korea experienced rapid changes. As part of its populist policy, the Chun Doo-hwan government doubled the overall student capacity of the university education, which served as the starting point for the establishment of Departments of Japanese Language and Literature at many universities. About 50 universities established Japan-related departments in that period. However, the rapid increase in the number of Japanese-related departments caused a serious distortion of the Japanese studies market in Korea. The balance between demand for and supply of researchers specializing in Japanese studies was severely disrupted, and Korea experienced a lack of Japanese studies specialists qualified to teach at universities. The boom in studying abroad in Japan from the late 1980s may have been fueled by such trends.

From the 1980s on, Korea continued to see many universities establish Japan-related departments. Although over 90 universities had Japan-related department at one time, 83 of the

over 200 four-year universities around Korea currently run Japan-related departments.

The increase in the number of Japan-related undergraduate departments entailed active trends toward the establishment of related graduate departments. Limiting the examples to doctoral programs, only three universities (the Hankuk University of Foreign Studies, Chung-Ang University and Hanyang University) offered doctoral programs until 1992, but the number increased to 21 after 2000. Most of those doctoral programs were newly established between 1999 and 2000, when the Korean higher education world seems to have been optimistic about future growth in demand for graduate education. However, 15 years later, the number of graduate students at most of those universities had declined to less than a half of the number at the peak, and now not a few universities do not have graduate students. The issue of undergraduate and graduate education will be dealt with later.

Next, let's look at the current condition of Japanese studies associations in Korea. In February 1973, the Korea Association of Japanology was founded as the first Japan-related academic association in Korea, and the association published its academic journal 『日本学報』 in August the same year. This journal published 116 issues by this year and has historical importance as the first Japanological journal published in Korea.<sup>1</sup> After that, especially after 1990, the number of Japan-related academic associations rapidly increased, and 27 associations currently continue their activities in this field. Some readers may be suspicious about the disorderly coexistence of many academic associations, but I believe that academic association activities in Korea can be viewed as unique in that small study meetings are actively held on a wide variety of themes. The list below shows the current condition of Japan-related academic associations in Korea.

**Table 1: Current academic associations of Japanese studies (as of 2019)**

	Name	Foundation	Academic journal	Fields
1	Korea Association of Japanology (韓国日本学会)	1973	『日本学報』	General
2	The Japanese Language and Literature Association of Korea (韓国日語日文学会)	1978	『日語日文学研究』	Japanese language and literature
3	The Korean Association of Contemporary Japanese Studies (現代日本学会)	1978	『日本研究論叢』	Politics and economics
4	The Korean-Japanese Economic and Management Association (韓日経商学会)	1983	『韓日経商論集』	Economics
5	The Japanese Education Association of Korea (韓国日本語教育学会)	1984	『日本語教育』	Japanese language education
6	The Society of Korea and Japan Education (韓国日本教育学会)	1985	『韓国日本教育学研究』	Education
7	The Association of Japanology in East Asia (東アジア日本学会)	1990	『日本文化研究』	General

<sup>1</sup> See Korea Association of Japanese Studies 40th Anniversary Special Committee 韓国日本学会 40周年特別委員会 ed., *Kankoku Nibongakkai 40 nenshi: Nihonkenkyū no seika to kadai* 韓国日本学会 40年史: 日本研究の成果と課題, Hōkōsha, 2013, pp. 131–132.

	Name	Foundation	Academic journal	Fields
8	The Japanese Language and Literature Society of Korea (大韓日語日文学会)	1991	『日語日文学』	Japanese language and literature
9	The Society of Japanese Language and Literature, Japanology (日本語文学会)	1992	『日本語文学』	Japanese language and literature
10	The Korea-Japan Historical Society (韓日関係史学会)	1992	『韓日関係史研究』	History
11	The Korea Association of Japanese Education (韓国日語教育学会)	1993	『日本語教育研究』	Japanese language education
12	The Japanese Culture Association of Korea (韓国日本文化学会)	1993	『日本文化学報』	Japanese language and literature
13	The Korean Association for Japanese History (日本史学会)	1994	『日本歴史研究』	History
14	The Japanese Language and Literature Association of Korea (韓国日本語文学会)	1995	『日本語文学』	Japanese language and literature
15	Korea Association for Japanese Thought (韓国日本思想史学会)	1997	『日本思想』	Thought
16	The Japanese Language Association of Korea (韓国日本語学会)	1999	『日本語学研究』	Japanese language
17	Korea Association of Modern Japanology (韓国日本近代学会)	2000	『日本近代学研究』	General
18	Korea Association of Japanese Literature (韓国日本文学会)	2000	Using 『日本学報』 jointly	Literature
19	The Association of Korean-Japanese National Studies (韓日民族問題学会)	2000	『韓日民族問題研究』	Korean communities in Japan
20	Japanese Language and Culture Association of Korea (韓国日本言語文化学会)	2001	『日本言語文化』	Japanese language and literature
21	Korea Association of Japanese History and Culture (韓国日本歴史文化学会)	2001	Using 『日本学報』 jointly	History and culture
22	The Military and Culture Association of Korea-Japan (韓日軍事文化学会)	2001	『韓日軍事文化研究』	Military affairs and culture
23	Korea Association of Japanese Politics, Economics and Sociology (韓国日本政経社会学会)	2002	Using 『日本学報』 jointly	Politics and economics
24	Korea Association of Japanese Interpretation and Translation (韓国日本通訳学会)	2002	Using 『日本学報』 jointly	Interpretation and translation
25	Korea-Japan Comparative Linguistics Association of Korea (韓日言語学会)	2009	Using 『日本学報』 jointly	Japanese language
26	Korea Association of Japanese Culture (大韓日本文化学会)	2010	『日本文化論叢』	Japanese language and literature
27	Korea Association of Japanese Buddhist Culture (韓国日本仏教文化学会)	2014	『日本仏教文化研究』	Buddhist culture

Together with academic associations, research institutes are also indispensable leaders of Japanese studies in Korea. As early as in 1979, two universities (Chung-Ang University and Dongguk University) established Japanology institutes, but it is thought that the activities of university-based research institutes went through two different stages before they got on the right track. The first stage is represented by the activities of the Hallym University Institute of Japanese Studies, which was established in the 1990s. The institute was established by Professor Chi Myong-kwan after he returned home in 1994. Professor Chi was the chief editor of *Sasanggye* 思想界 in Korea and was active supporter of the Korean democratization movement while residing in Japan. After establishing the institute, he carried out noteworthy activities, such as beginning to collect written materials on a full scale with cooperation from Iwanami Shoten in Japan and publishing a Japanology series (100 volumes of translations) and a collection of selected contemporary Japanese literary works (40 volumes). The second stage is marked by the Korean government funded project named “Humanities Korea” (HK, or 人文韓国) to develop university-based humanities institutes, which was launched in the 2000s. In the field of Japanology, some institutes began receiving a governmental subsidy of about 100 million yen per year, and the research environment was considerably improved. The Korean academic world after the HK project, in particular, saw the emergence of new developments, such as an increased number of full-time and contract-based jobs at research institutes and original research projects promoted by research institutes. Through these different stages, research institutes have become more and more important in their contribution to Japanese studies in Korea. Currently, Korea has 14 university-based Japan-related research institutes, as listed below.

**Table 2: Current condition of university-based research institutes (as of 2019)**

	University name	Institute name	Foundation	Academic journal
1	Chung-Ang University	Institute of Japanese Studies	1979	『日本研究』
2	Dongguk University	Institute for Japanese Studies	1979	『日本文学』
3	Hankuk University of Foreign Studies	Institute of Japanese Studies	1985	『日本研究』
4	Seoul National University	Institute for Japanese Studies	1991	『日本批評』
5	Hallym University	Institute of Japanese Studies	1994	『翰林日本文学』
6	Korea University	Global Institute for Japanese Studies	1997	『日本研究』
7	Dankook University	Institute of Japanese Studies	2002	『日本文学研究』
8	Kookmin University	Institute of Japanese Studies	2002	『日本空間』
9	Chonnam National University	Research Center for Japanese Culture	2004	-
10	Dongseo University	The Japan Center	2005	『次世代人文社会研究』
11	Hanyang University	Global Center for Japanese Studies	2008	『比較日本文学』
12	Incheon National University	Institute for Japanese Cultural Studies	2008	-
13	Pusan National University	Institute of Japanese Studies	2010	『日本研究』
14	Jeonbuk National University	Institute of Japanese and East Asian Studies	2016	-

The above is an outline of the current condition of the foundation for Japanese studies in Korea, including university departments, academic associations and research institutes. Then, how many people are engaged in Japanese studies in Korea? Let's limit our calculation to the fields of Japanese language and literature. The number of researchers in the fields of Japanese language and literature currently registered with the National Research Foundation for Korea (NRF) amounts to 1,800. Although it is uncertain that Japanese studies can be clearly distinguished from other disciplines, the current number of Japanese studies researchers in the fields of history, culture, politics, economics, etc. can be estimated to be at least 200. This means that a total of over 2,000 people are engaged in Japanese studies in Korea.

Among the 2,000 Korean scholars, about 420 work as full-time researchers in Japan-related university departments or at research institutes. Adding full-time researchers working in other departments, such as politics and economics departments, we can estimate that about 500 Korean scholars are engaged in Japanese studies as full-time university faculty members.

A survey shows that 420 Korean faculty members largely comprise 180 specialists in Japanese language, 120 in Japanese literature, and 120 in other fields, such as history, culture (including folklore), philosophy, politics, economics and sociology. While Japanese literature scholars comprise 65 specialists in modern and contemporary literature and 55 in classical literature, a more detailed look reveals that the classical literature scholars comprise 11 specialists in ancient literature, 14 in early medieval literature (mainly in the Heian period), 12 in medieval literature (mainly in the Kamakura and Muromachi periods), and 18 in early modern literature. Although the number of early modern literature specialists is slightly large, no particular deviation is found in the entire composition.

Japanese studies in Korea is founded on such a composition of scholars. From the perspective of age-based composition, however, scholars in their 50s or above occupy 85% of full-time positions, so I would like to give a particular mention to the aging of the Korean field of Japanese studies. Among all scholars in Japanese studies in Korea, about 1,500 people other than full-time faculty members work as part-time lecturers or contract-based researchers. Therefore, ensuring stable positions for next-generation scholars is the most important challenge for the Korean field of Japanese studies to overcome from now on.

### **3. Outlook and Challenges**

Japanese studies in Korea has grown quantitatively in parallel with the above-mentioned development of the institutional foundation for research. The quantitative growth is directly represented by the number of academic papers published annually. While the annual number of papers on Japanese studies amounted to about 50 even in the 1980s or earlier, the 2000s saw about 900 academic papers published annually in this field. Therefore, grasping overall research trends in this field requires us to pay special attention. Nevertheless, I believe that I can mention some examples that show changes in Japanese studies in Korea after the 1980s.

An example is the trend toward changing department names. As mentioned before, most of the early Japan-related departments were departments of Japanese language focusing on Japanese language. Since the 1980s, many universities established Departments of Japanese Language

and Literature, shifting the focus to Japanese literature, and this name became the general term for Japan-related departments. However, department names began to diversify in the 1990s. The first outstanding change was the emergence of a few Departments of Japanese Language and Culture, replacing the word “literature” in the former mainstream name “Departments of Japanese Language and Literature” with the word “culture.” In addition, Departments of Japanese Studies, focusing on area studies, began to appear at that time. Briefly, the major name of Japan-related university departments has changed from “Department of Japanese Language” to “Department of Japanese Language and Literature,” to “Department of Japanese Language and Culture” and to “Department of Japanese Studies,” which suggests growing orientation toward Japanese studies and area studies.

Changes can be also found in research subjects. For example, in studies on Japanese language, the number of papers in social linguistics and Japanese language education has significantly grown, replacing papers dealing with grammar, which formerly constituted the mainstream. This change seems to indicate a shift of scholars’ interest from grammatical research methods as a traditional research subject to more versatile subjects in the process of diversification of subjects in linguistic studies of Japanese. In addition, active application of corpus linguistics to linguistic studies of Japanese also deserves attention as a new research trend. In the field of Japanese literature, especially studies of modern and contemporary literature, an increasing number of papers have adopted the perspectives of postcolonial studies and cultural studies, instead of focusing on individual works in a conventional manner. The resulting increase in interest in literary works by Korean writers in Japan can be seen as a natural consequence. There are some attempts to connect studies in the field of classical literature to movies, anime and social history, but these attempts have not yet acquired the power to cause changes in research trends. However, a rapid increase in the number of Korean translations of Japanese classical literature from the 2000s deserves attention.

In Korea, works of Japanese classical literature began to be translated in the 1970s, and over 10 Japanese classical works were translated into Korean in the 1990s or earlier. But over 60 translated works have recently been published, resulting in a total of over 70 Korean translations of Japanese classical works.<sup>2</sup> Among those Japanese classical works, *Genji Monogatari* 源氏物語 and the *Kojiki* 古事記 have been translated into Korean most often. *Genji Monogatari* and the *Kojiki* have been translated by different translators more than 10 times since 1973 and since 1987, respectively. In addition to these two works, the *Manyōshū* 万葉集, *Basho Haikushū* 芭蕉俳句集 and *Tsurezuregusa* 徒然草 are probably the most-often translated Japanese classical works. Many picture books for children about old Japanese tales, including *Genji Monogatari* and the *Kojiki*, have been published in Korea. The popularization of Japanese classics has been a recent trend that deserves special mention.

While trends in studies of Japanese language and literature in Korea can be roughly outlined as above, Japanese studies in Korea has many unsolved challenges to tackle from now

<sup>2</sup> See Lee Si-jun 李市俊, “Kankoku no Nihon koten bungaku honyaku genkyō ni kansuru kisoteki chōsa kenkyū 韓国の日本古典文学翻訳現況に関する基礎的調査研究,” *Nihonkenkyū* 日本研究 (Korea), Issue 73, September 2017, pp. 100–106.

on. The most prominent challenge is the fact that Japanese studies in Korea has experienced a major turning point since 2010. After its continuous development from the 1980s, the environment for Japanese studies has been undermined.

The challenges currently faced by Japanese studies in Korea include a decline in the number of Japanese language learners, the reduction of the number of Japan-related classes in universities, the integration or abolition of related departments, a decline in the number of full-time jobs for Japanese studies specialists and the consequent aging of the Korean field of Japanese studies, unstable statuses of next-generation scholars, and the spread of a feeling of fatigue caused by tautological studies.

An accurate understanding of this situation mainly requires a recognition of changes in the environment inside and outside universities. The environment outside universities here denotes the research environment concerning Japan. First of all, we can point out that the increased presence of China has resulted in a relative decline in the presence of Japan in the international community, and that the Great East Japan Earthquake, which occurred on March 11, 2011, has caused a significant decline in the number of university-level Japanese language learners in Korea. In addition, the establishment of the Abe administration and the growth in rightist trends in Japan and political conflict between the Korean and Japanese governments concerning history can be viewed as unignorable factors behind the challenges recently faced by Japanese studies in Korea.<sup>3</sup>

Meanwhile, the environment inside universities here denotes the research environment in Korea, where major challenges include the declined presence of humanist liberal arts at universities and the fall of the student population caused by the rapid decline of the fertility rate. In particular, the fall of the high-school graduate population due to the all-time low fertility rate can be pointed out as an urgent and severe challenge.

It is estimated that in Korea the overall prescribed university enrollment will exceed the high-school graduate population by 160,000 in 2023. Given that, among the over 200 four-year universities, major ones accept up to about 3,000 students, you can imagine how large Korean universities are. Therefore, universities have made full-fledged efforts to adjust their maximum enrollments and reform their organizational structure, and it is expected that many university departments, mainly humanities departments, will be integrated or abolished from now on. For these three years, a growing number of Japan-related departments have been reorganized into course tracks, or abolished and integrated with faculties of liberal arts. These changes in the research environment have put Japanese studies in Korea under increased pressure, dispiriting Korean scholars in this field and forcing them to face the severe challenge of addressing this situation.

Here, I would like to give a brief mention to the activities of Nichibunken related to Japanese studies in Korea. As widely known, since its founding, Nichibunken has played an important role as a research hub for scholars specializing in Japanese studies from both Japan

<sup>3</sup> See Lee Kang-min 李康民, “Tenkanki no Nihon Kenkyū: kenkyūtaishō to shiteno ‘Nihon’ to ‘Nihongo’” 転換期の日本研究：研究対象としての「日本」と「日本語」, *Nihongakuhō* 日本学報 (Korea), Issue 100, August 2014, pp. 2–4.

and abroad. During the early period, many researchers from abroad have experienced research activities at Nichibunken, and about 70 researchers from Korea have received support from Nichibunken. No one could deny Nichibunken's deep involvement in Japanese studies in Korea.

When I was a graduate student 27 years ago, I observed joint researches at Nichibunken and witnessed part of the activities of Nichibunken in its early phase. I remember that Nichibunken at that time was filled with self-confidence and enthusiasm about its research activities and had a bright atmosphere that I could not experience in the Faculty of Letters at the university. I was impressed that Nichibunken was at the vanguard of Japanese studies, with many researchers discussing Japan from a wide variety of perspectives without sticking to conventional research customs.

There was some controversy over the characteristics of the early phase of Nichibunken, and discussions about the uniqueness of Japanese culture may have been based on a certain policy decision. However, I suppose that the primary activity of Nichibunken might be exploration of new research fields. Such attitudes of Nichibunken toward research inspired Korean scholars specializing in Japanese studies to diversify their research perspectives and expand their research fields.

Two years ago, I returned to Nichibunken for the first time in 24 years to work as a visiting researcher and was surprised by the excellent collection of books stored at the library. I remembered my student days at Kyoto University, when I had been able to take away to my room books that would be too precious for us to touch now, or even to photocopy them freely. Returning to Nichibunken, I also had the impression that awareness of global Japanese studies had been heightened and that efforts had been concentrated on enhancing international collaboration. I certainly believe that overseas researchers should welcome collaboration or joint research with Nichibunken, and international collaboration would allow overseas researchers to share questions about Japanese studies and confirm the diversity of questions according to regional environments, probably resulting in the further enrichment of Japanese studies. Efforts to promote global Japanese studies might again arouse the question whether or not Japanese studies needs a lingua franca. I hope that Nichibunken will play a leading role in actively exploring answers to such questions.

Finally, I also hope that Nichibunken will devote further positive efforts to examining the relationship between Japanese language and culture from novel perspectives. Although modern linguistics is founded on the separation of language from culture, some linguists still support the theory of linguistic relativity, which argues that language determines and shapes culture. I also have recently been strongly interested in interdependence between language and culture. With regard to this issue, I would propose that Nichibunken tackle the challenge of collaborating with large groups of Korean and Chinese scholars specializing in Japanese language, taking into consideration the central role they play in Japanese studies.

#### **4. Conclusion**

After going through its early phase in the 1960s and 1970s and its expansion phase in the 1980s and 1990s, Japanese studies in Korea has now reached a major turning point since the beginning

of the 21st century. It may not be an exaggeration that, after continuously climbing up a steep slope, Japanese studies in Korea is now getting into a situation that it has never experienced before.

The changes in the given environment naturally mark a shift from quantity to quality. Those changes require us to enhance the quality of our research, rather than its quantity, and maintain the enhanced quality. To fulfil this requirement, we must improve and reconstruct the conventional content of education and old research methods in response to social changes and needs.

In Korea, the development of Japanese studies as a discipline has been centered around Japanese language. Therefore, it can be said that the discipline originated without a broader perspective on Japanese studies, in sharp contrast with Japanese studies in the U.S., which was under the influence of regional studies from the beginning. Although some elements of regional studies have recently been added to the content of Japanese studies education, there are still limitations on our ability to establish theory-focused Western methodologies in Japanese studies in Korea.

In addition, although more than 900 academic papers are published annually in the Korean field of Japanese studies, how many of the research achievements are known to the “outside world”? Considering this question, we cannot escape criticisms about the isolation of our studies from the wider world. Meanwhile, however, given that Japanese studies in English still remains at an untrustworthy level and that a significant number of scholars are suspicious about the English-dominated hierarchy of studies, this challenge cannot be easily solved in a short time.

To overcome our adherence to the conventional recognition about Japan, we must tackle the challenge of teaching about and discussing Japan from broad and multifaceted perspectives. Japanese studies in Korea will have to explore a new path while deeply considering and confronting this challenge. What I have discussed here is thought to be deeply related to the path that Nichibunken has followed since its founding. In this sense, I would like to pay closer attention to the activities of Nichibunken and maintain my high expectation of it.



# 日本音楽の研究の内と外

時田アリソン

## 日本音楽とは

外からみれば、日本の音楽は前近代に発達した「日本伝統音楽」です。海外の日本音楽研究は民族音楽学に属します。つまり韓国、中国、インドネシア、アフリカ、オーストラリア先住民の音楽など西洋以外の音楽の研究ですが、日本でも「民族音楽学」は日本音楽を含まず、「洋楽」との対比で日本音楽は「邦楽」となり、その研究は大学では洋楽や民族音楽学と同じく「楽理科」で行われます。

日本人にとってふつう「音楽」といえば西洋のクラシック音楽です。「邦楽」は日本人には、ある種困ったもののようで、日本人のアイデンティティの中に入っているとは思われず、日本人が「邦楽」を世界に発信したいと思っているという印象はもちにくい。これは、韓国とはっきり対照的です。

David Hughes と編集した *Ashgate Research Companion to Japanese Music* は、日本音楽を網羅しようと、雅楽、声明、平家、浄瑠璃、箏、尺八などだけでなく、日本の「洋楽」、民謡、前近代と近現代のポピュラー音楽、アイヌと沖縄の音楽を扱いました。そのときはまだ浪花節を入れることはできませんでしたが、複数の観点を求めて、日本人と外国人の研究者の論文が半分ずつという構成になっています (Tokita and Hughes 2008)。

2002 年から文科省により中学校で和楽器を教えるよう指導が始まり、日本音楽の入門書は数多く出版されていますが、国立劇場発行の『日本の音楽』ほど幅広いものはありません。しかし残念ながら、そこにも民謡やアイヌ、沖縄の音楽、ポピュラー音楽は含まれていません。

## 盲点に気づく

日本の音楽を習得し、研究する外国人にはよくあることですが、私は長い間「なぜ、日本人は自分の国の音楽を知らないのか、また知ろうとしないのか」という素朴な問いを持っていました。素晴らしい伝統音楽を無視する日本人はおかしい、いや、ひどいではないかと、独善的に思っていました。そのくせ、30 年間、語り物を中心に日本音楽を熱心に追究した間は日本の「洋楽」との接触を積極的に、徹底的に避けていたのです。

しかし、十数年ほど前から、それは自分で作りだした盲点ではないかと考えるようになりました。韓国ドラマ『冬のソナタ』におけるピアノの役割を考えることがキッカケで、そこから日本の音楽の近代化が視野に入り、なぜ「洋楽」が主流になったのかを考えるようになったのです。特に注目したのが、独奏楽器ピアノの役割、そして自国語の詩に曲を付け、ピアノ伴奏のみで演奏できる芸術歌曲の発展でした。文科省科学研究

費を得て、2015年から2018年まで日本と東アジア、オーストラリアの歌曲について共同研究することができました。

それより前、オーストラリア政府の研究費を得て「戦間期の大阪の音楽と近代」という研究プロジェクトを Hugh de Ferranti と行ない、2008年にはそれをめぐる国際シンポジウムを日文研で開くことができました (De Ferranti and Tokita 2013)。

近代における伝統の役割に注目し、西洋化と近代化の狭間におかれた伝統音楽の変化を明らかにしようとする中で、東アジアとの共通性も意識するようになりました。東アジアのコンテクストの中でみると、西洋との対比だけでは見えてこないことがみえてきます。

近代では、伝統芸能も近代化していました。新しいレパートリーが生まれ、楽器が改良され、新しい楽器編成が行われ、十七弦琴など新しい楽器も作られ、よりくわしく、適切な楽譜が作られました。ラジオやレコードなど近代メディアの影響も無視できません。

新しい「伝統音楽」さえ生まれています。薩摩琵琶、筑前琵琶、浪花節、尺八・箏などの新しい流派。これらの新しい「伝統」の研究はあまりされていません。戦後生まれた演歌の最初の本格的な研究はアメリカの文化人類学者によるものです (Yano 2002)。最近、大阪教育大学の北川純子先生は浪花節の音楽的研究をされています (北川 2016 ほか)。私もこの数年間浪花節の調査研究をしております (時田・岡本 2013)。

## ふたたび日本音楽とは

問題は日本の音楽教育にもあります。ここではふれることができませんが、洋楽とともに邦楽も教えれば、日本人は素晴らしいバイミュージカルな国民になるはずですが。

日本人も自ら盲点をつくっています。西洋を意識しすぎて、意識は近隣国には向けられません。かれらもまた日本と同じく西洋音楽への憧れを共有しています。しかし、中国や韓国では伝統音楽と「洋楽」との生産的な共存に努めています。

外国人は伝統音楽が変わらずにそのまま、西洋音楽の影響を受けないでほしいと望みます。古い日本を見たがる観光客のようです。国も保存を目指していて、無形文化財に指定されると変えることはできなくなります。こうしたことは伝統を「生きた化石」にしてしまう危険をはらんでいます。

## コミュニケーション

日本研究の一部である日本音楽の研究には、日本語の習得が基本条件になります。数多い非西洋音楽の研究に比べ、日本音楽はいろいろな面で文字化され、古代から研究が行われており、特に近代以降はそれをめぐるさまざまな言説がありました。日本音楽の「音」に魅せられても、録音だけでは研究できません。固有の楽譜や歌詞、先行研究を読むためには、古文や漢文を含む日本語を読み、さらにお稽古では日本語で師匠から学

び、学会で研究発表を聞き、日本人学生と同じ授業やゼミに出て、課題をこなさなければならぬ。外から来た人は内の人と並ぶ、いや内の人にならないといけません。外からの視野は通用しないので、内側にあるアプローチを身につけようとしています。結局は民族音楽学のフィールドワークを行うことになるのです。

### 外の人が内の人になれるか

長い年月をかけたうえで、社会言語的ルール、お稽古での礼儀作法など社会文化的な能力もふくめ、日本語能力は身につくのですが、それでもコミュニケーションの問題は続きます。そして待っているのは、学問的な期待の「食い違い」。自分がしようとしている研究をなかなかかわかってもらえないという、「行き詰まり」にたどりつきます。

日本に留学して、国に帰り、学位を取得して、大学のポジションを得るのが望ましい進路です。外国の大学では西洋の研究環境と学問文化に身を据えます。日本に戻れば歓迎されますが、やはりまだマレビトです。研究が「完成」せず、国に帰らない場合、だんだん日本人の研究仲間と肩を並べて内の人になるかもしれません。ただ、どうしても受け入れてもらえない可能性は残ります。

### 研究へのアプローチ

問題は、研究へのアプローチに違いがある、ということです。たとえば「邦楽」研究では音を中心に研究するより、新しい資料の発見、解説、翻刻が重んじられます。長く日本にいる研究者は、日本の研究文化を認識しそれに合わせる必要があります。学問上、コミュニケーションで一番微妙な問題はここにあります。自分の研究目的と考え方を理解してもらうことに苦勞するのです。

私は文部省の奨学金で、1978-1979年に東京藝術大学楽理科に短い留学をすることができました。そこで横道萬里雄先生の指導を受け、能楽の小段構成・積層モデルには、町田嘉章の旋律型の研究などとともに、大きく影響を受けました。その学恩は深いのですが、学界には音楽関係の古い文献の解題や解説を重んじる姿勢があり、当時の私の日本語読解能力で文献を読みこなすのはとても無理だと感じていました。私は音楽の「音」を採譜したり、音楽を習得したりして、現在まで伝承されている音楽を分析したかったのです。

### 自分の研究をどのように日本で認めてもらうか

自分の研究を日本で認めてもらうために大事なことは、日本語で論文を書くことです。しかし、なんとか日本語で論文を書いたとしても、驚いたことに個人的に反応が得られることはまずありません。また、ようやく手にした研究成果は、日本の研究者には通用

しないということになりがちなのです。せいぜいのところ、外からの視野が評価されるぐらいです。もう一つの問題は、一次資料が日本の研究者の書いたもの、つまり二次資料である場合が多いことです。そうしますと、日本の研究者には大して参考になることはないということも起こります。

日本では深く狭く、生涯に一つの音楽ジャンルだけに力を注いで研究するケースが多いのですが、それは少なくとも英語圏の大学では許されません。民族音楽学者は日本だけでなく、その上に一つ、二つのフィールドを持たなければならないとされます。音楽を相対的にみようとすることからです。とって日本学・地域研究に属すれば、日本文化史、現代社会、ポピュラーカルチャーなど現代文化に加えて、日本語も教えなくてはならなくなります。しかも日本の文化といっても、古典音楽を教えられる機会はなかなかないでしょう。

日本における伝統音楽研究者と、ずいぶん事情が異なります。さらに、外部資金や国の研究費を得るためには、いつも同じテーマだと評価されませんし、自分の研究が理解されやすいように、流行りの理論や概念を使うことになり、日本における伝統音楽研究からますます離れていきます。

## より広い視野を

よく言えば、外国人特に英語圏の学者は広い視野を持ちます。私の研究分野である語り物は、多くのジャンルからなり、講式声明、平家語り、幸若舞、色々な種類の浄瑠璃、長唄、近代琵琶、浪花節、そして民俗芸能の座頭琵琶、ゴゼ歌、アイヌのユウカラなどがあります。それぞれのジャンルの研究者が独自のアプローチをとり、独自の用語を使います。私は日本の語り物を、ジャンルをこえて一つの全体としてとらえようとしてきました。そのためにはそれぞれのジャンルの研究の枠組みや、用語の不統一を乗り越えなくてはなりません。そのころ、「セクション」をさす用語はようやく「小段」が一般的になっていましたが、基本概念の「フシ」には「曲節」「曲節型」「旋律型」「大旋律型」などがあり、その意味や定義も研究者によって微妙に違うことがありました。今でもそれは基本的に変わりません。

もう一つの違いは、西洋では理論が重要視されていることです。資料の翻刻、翻訳だけでは、評価されません。音楽を分析しなければなりません。しかも、最近流通している文化理論の枠組みで解釈することが期待されています。指導教官がまじないのよう学生にいうのが「あなたの理論的枠組みは何か」なのです。極端な場合、音楽は理論の事例に過ぎないということになります。私は採譜と分析に加えて、G rard Genette (1930–2018) の構造主義的語り理論や、Milman Parry (1902–1935) と Albert B. Lord (1912–1991) の画期的な口語りの理論の観点から、語り物の研究を試みました。しかし、それらの理論は言語テキストを対象にしたもので、音楽分析にそのまま応用できず、自分で方法を見つけなければなりません。

そこで、清元節について1989年に提出した博士論文では、音楽における常套的な素材と概念を考えました。フレーズのレベルではさまざまな機能をもつ旋律型を析出し、小段のレベルではジャンルや時代をこえて見出されるサブスタイルという概念を出し、それをもとに分析しました(Tokita 1995)。オーストラリアで日本文化や日本語を教えながら、語り物の通ジャンルの研究を始めていたとき、1998年度の日文研共同研究を主宰させていただくことになりました。おかげさまでこの語り物共同研究では、私の詳しくない他の語り物のジャンルの研究者、文化人類学、文学の研究者、いつかお話をうかがえればと願っていた方々と議論できるという、夢のようなことが実際におこなわれました。参加していただいた方々、まわりで支えて下さった日文研の方々のおかげで、語り物研究は大きく進展したと思います。また先にのべた、サブスタイルという概念をこの共同研究で発展させ、それを他のジャンルでも適用できることが確認できました。これで、少なくとも平家・浄瑠璃系の語り物をすべて分析できます。ただ、当時も今もまだあまり受け入れられていないのですが。

また私の研究はグローバルな比較研究になりました。韓国の「パンソリ」、中国の「大鼓」や「弾詞」など日本以外の語り物に眼を配り光を当て、日本の語り物の理解を深めようとしています。世界の語り物について、言語テキストの行を基本とする型、連を基本とする型、フシの部分と歌わない部分が交互に連なる説唱型という三つの構造モデルを提案しました。私の研究の主な対象である日本の平家・浄瑠璃系の語り物は、説唱型に近いのですが基本的な違いもあり、いずれの構造モデルにもあてはまりません。特殊なものと思います。

このようにして、僭越ながら平家・浄瑠璃系語り物の研究をまとめて *Japanese Singers of Tales: Ten Centuries of Performed Narrative* として出版することができました(Tokita 2015)。

3年前に、ジュネーブ高等音楽院の古楽教授フランシス・ビッジ先生から、イタリアの「連を基本とする」語り物オッターヴァ・リーマ(ottava rima)と日本の語り物の比較研究をしませんか、という提案をいただきました。日本の語り物の研究方法が参考になる、とのお考えでした。そこで3回に亘って、ジュネーブやコルシカ島などで集中講義やワークショップを行いました。2018年の2月にはビッジ先生は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの「語り物ウィーク」に参加され、公開講座でオッターヴァ・リーマについて発表されました。私にとっては、オッターヴァ・リーマという「連を基本とする型」の見事な事例に出会うことができた、素晴らしい機会でした。この研究交流により、ヨーロッパのコンテクストのなかで日本の語り物の研究を発信できました。

ところで、ビッジ先生と私の語り物研究を結びつけたのは、ジュネーブ高等音楽院の日本人大学院生で、日本の語り物について日本語の情報を集めるよう頼まれ、インターネットで私の研究を探し出したのです。小さな事例ですが、日本の音楽について英語での情報が十分ではないこと、海外で西洋古楽の演奏を学ぶ日本人が日本の語り物について殆ど知らなかったことなど、日本音楽の現状をよくあらわしていると思います。

## 外国人研究者の役割と価値

日本音楽界は世界への発信にはあまり熱心ではありませんが、外国人研究者は英語なのでできますから、たとえば日本人の研究を紹介できます。日本人の研究の翻訳にも向いています。

逆に、外国人が日本音楽について情報を求めることもあります。日本伝統音楽研究センターにいたころは、英語による問い合わせがたびたび入りました。ビッジ先生もそうです。センターとしては市民向けの連続講座などで、研究成果をわかりやすく伝えますが、英語での発信は積極的にしていませんでした。そこで、2015年から去年まで3回にわたり、箏、尺八、三味線など実技実習つきの Pendulum「英語による日本音楽概論」という夏期集中講座を行いました。ネットなどで海外に英語で広く呼びかけた結果、外国人と日本人が半々ぐらい、多い年は十カ国から35人が参加しました。

## 変化への挑発

外国人の研究が日本音楽の研究に大きな影響を与えた例があります。パラダイムシフトともいえる、ローレンス・ピッケンの雅楽研究と、ケネス・バトラーの平家物語研究の二つです。

イギリスのローレンス・ピッケン(1909-2007)はもともと動物学者で、中国にも深い関心を持ち中国語と中国音楽を独学しました。唐時代の朝廷音楽の楽譜はもう存在しないと考え、平安時代の雅楽は唐の朝廷音楽に近いはずだと思って、エータ・ハーリヒ＝シュナイダー(1897-1986)の雅楽についての論文(Harich-Schneider 1953)を読んだところ、そこに平安時代の楽譜の写真を見出してびっくりしました。それを見ると現在の雅楽演奏とはずいぶん違うもので、琵琶、楽箏、笙はある旋律をたどっており、特に笙のパートは今の演奏にある「あいたけ」(一種の和音)が全然書かれておらず、基音だけが記されていたので、それが唐の時代の旋律に違いないということにすぐ気づいたのです。

現在の雅楽を聴くと、箏と龍笛の旋律が他の楽器に伴奏されているように感じがちですが、もともとは五つの旋律楽器がその物理的限界を生かしながら、別な音域でヘテロフォニー的に同一旋律を弾いていたこと、その演奏は、もっと単純で速度も今より数倍速かったことを、ピッケンは後に発見します。

ピッケンは自分も雅楽の古い楽譜を購入しはじめました。やがて1972年に初めて日本に来て、内閣蔵、宮内庁蔵、陽明文庫蔵の楽譜を実見し、コピーを取ることができました。帰国してからは博士課程の学生を募集して、古い楽譜を共同で解説しはじめました。研究成果はその学生たちの博士論文となり、他に1981年から2000年にわたって7冊の本となりました。この研究は1980年代半ばから、日本でも知られ始めましたが、強い反対に会っています。その理由は、すべての現存資料を検討しないと断言できない、漢字の読み誤りがあり研究内容が信用できない、日本では唐楽を八世紀から忠実に伝承

しているなど、いろいろでした。また、「我々はもうそれを知っていた！」という声もありました。実は、ピッケン以前にも林謙三(1899-1976)や作曲家の増本伎共子(1937生)が、似たような考えを発表したことがあったのです(増本1968)。30年以上たった現在では、ピッケン説は新しい世代の雅楽研究者の通説になってきています。通説を変えたのは外の人の説だったのです(Hughes 2010)。

ケネス・バトラー(1930-2009)も音楽学者ではなく、『平家物語』について1964年にハーバード大学で博士号を取得しました。明らかに彼は1960年にハーバード大学出版局から出たロードの*The Singer of Tales*を意識していました(Lord 2000[1960])。日本に来たバトラーは1966年から1969年にかけて、萌芽的な小論文三つで『平家物語』の口頭性と、その生成における琵琶法師の役割について論じました(Butler 1966a; Butler 1966b; Butler 1969)。

1975年の『平家物語』のシンポジウムでのバトラーの発表で、日本の平家学者は初めてパリー＝ロードの語り理論を知ったようです。山本吉左右はバトラーの研究にふれ、それを語り物のゴゼ歌に応用しました(山本1976a、1976b、1977)。

この語りの理論は平家研究を分裂にみちびきました。口語りが『平家物語』の起源だとする説と、書かれた文章を起源とする説の二つの陣営がありますが、今はその対立は弱くなっており、両方を認める立場がやや主流になったと思われます。山本の1988年の著書は、語り理論の観点からゴゼ歌、幸若、説経節を扱いましたが、もうバトラーにはふれていませんから、パリー＝ロード理論は日本に定着したのでしょう(山本1988)。兵藤裕己らは平家だけでなく、座頭琵琶などの語り物にこの理論を応用し、口頭性の理解に新たな地平を開きました(兵藤1997など)。このように平家物語研究は大きく変わりました。

以上は平家物語研究に与えた影響ですが、平家をはじめとする私の語り物の音楽的研究も、パリー＝ロード理論の常套性という概念を取り入れたことで深まり、語り物全体の把握につながったことはもうお話ししました。

## 参考文献

- 北川純子「初代春日井梅鶯による浪曲の「節」における定型性と変形性—[骨格式]に基づく分析を通して」『大阪教育大学紀要 第I部門 人文社会科学』65(1)、2016年、pp.13-31.
- 時田アリソン・薦田治子編『日本の語り物—口頭性・構造・意義』日文研叢書 = Nichibunken Japanese Studies Series. Vol. 26. 国際日本文化研究センター共同研究報告、国際日本文化研究センター、2002年。
- 時田アリソン・岡本洋一編『浪花節のフィールドワーク・大阪天王寺一心寺門前浪曲寄席および東京浅草の木馬亭を比較して』同志社大学、2013年。
- 兵藤裕己「口承文学総論」『岩波講座日本文学史第16巻 口承文学I』pp.1-50、岩波書店、

- 1997年。
- 増本喜久子『雅楽—伝統音楽への新しいアプローチ』音楽之友社、1968年。
- 山本吉左右「『口語り』の論—上—ゴゼ歌の場合」『文学』44(10)、1976a、pp. 1365–1386。
- 山本吉左右「『口語り』の論—中—ゴゼ歌の場合」『文学』44(11)、1976b、pp. 1470–1478。
- 山本吉左右「『口語り』の論—下—ゴゼ歌の場合」『文学』45(1)、1977、pp. 89–107。
- 山本吉左右『くつわの音がざざめいて—語りの文芸考』平凡社選書 Vol. 122、平凡社、1988年。
- Butler, Kenneth D. "The Textual Evolution of the Heike Monogatari." *Harvard Journal of Asiatic Studies* 26 (1966a), pp. 5–51.
- Butler, Kenneth D. "The Heike Monogatari and Theories of Oral Literature." *Seikei Daigaku: Faculty of Letters Bulletin* 2 (1966b), pp. 37–54.
- Butler, Kenneth D. "The Heike Monogatari and the Japanese Warrior Ethic." *Harvard Journal of Asiatic Studies* 29 (1969), pp. 93–108.
- De Ferranti, Hugh and Alison Tokita (eds). *Music, Modernity and Locality in Prewar Japan: Osaka and Beyond*. Farnham, Surrey. Burlington, VT, USA: Ashgate, 2013.
- Harich-Schneider, Eta. "The Present Condition of Japanese Court Music." *The Musical Quarterly* 39:1 (1953), pp. 49–74.
- Hughes, David W. "The Picken School and East Asia: China, Japan and Korea." *Ethnomusicology Forum* 19:2 (2010), pp. 231–239.
- Lord, Albert Bates. *The Singer of Tales*. Eds. Nagy, Gregory and Stephen Mitchell. 2nd ed. / Stephen Mitchell and Gregory Nagy, editors. ed. Cambridge, Mass. London: Cambridge, Mass. London: Harvard University Press, 2000.
- Picken, Laurence E. R. et al. *Music from the Tang Court*. Vols (fascicles) 1–7. Oxford, UK: Oxford University Press (vol.1) and Cambridge, UK: Cambridge University Press (vols. 2–7) 1981–2000.
- Tokita, Alison. *Kiyomoto-bushi: narrative music of the kabuki theatre*. Studien zur traditionellen Musik Japans 7. Kassel [Germany]: Baerenreiter, 1999.
- Tokita, Alison and David W. Hughes (eds). *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Aldershot, Hants, England; Burlington, VT, USA: Ashgate, 2008.
- Tokita, Alison. *Japanese Singers of Tales: Ten Centuries of Performed Narrative*. Farnham, Surrey, England. Burlington, VT, USA: Ashgate, 2015.
- Yano, Christine Reiko. *Tears of Longing: Nostalgia and the Nation in Japanese Popular Song*. Ed. Harvard University. Asia Center. Cambridge: Cambridge: Harvard University Asia Center: Distributed by Harvard University Press, 2002.

# The Ins and Outs of Japanese Music Research

Alison Tokita

## Defining the Research Discipline

Considered from the outside, Japanese music means pre-modern music, any musical genre which originated in the pre-modern era; it is studied within the discipline of ethnomusicology, alongside other non-Western music, such as the music of Korea, China, Indonesia, Africa, Australian Aborigines. Viewed from inside Japan, however, it is the National Music (*hōgaku*), in contrast to Western music (*yōgaku*). At the Tokyo University of the Arts, Japanese music (*hōgaku*) and ethnomusicology (*minzoku ongaku*) are separate disciplines. *Ongaku*, on the other hand, is Western (usually classical) music. It could be said that *hōgaku* is in fact an embarrassment to the Japanese, a lacuna in Japanese cultural identity. They try not to think about it. One rarely gets the feeling that the Japanese want to disseminate their indigenous music throughout the world, in contrast to the efforts of South Korea in recent years.

Editing the *Ashgate Research Companion to Japanese Music* (2008) with David Hughes, we knew we wanted to be as comprehensive as possible, and to include in the scope of “Japanese Music” all the usual indigenous genres (*gagaku*, *shōmyō*, *heike*, *jōruri*, *koto*, *shakuhachi* etc), as well as Western classical music composed by Japanese, and also folk, contemporary and pre-modern popular music, and the music of ethnic minorities (Ainu and Okinawa). We strove for a balance between Japanese and non-Japanese contributors, to provide multiple perspectives. We neglected to include *naniwa-bushi*, however. Interestingly, there are many new Japanese-language books on the market introducing Japanese music these days, to provide accessible materials to those teaching in middle schools, made mandatory since 2002. One authoritative anthology, *Nihon no ongaku*, issued by the National Theater of Japan in 2008, is reasonably comprehensive, but unfortunately excludes folk music, music of ethnic minorities and popular music.

## Removing My Blinkers

Typical of non-Japanese researchers and performers of Japanese music, for many years I entertained the naïve question: why don't the Japanese know their own music? I blamed Japanese people for neglecting their musical traditions. In my devotion to the study of *katarimono* (musical story-telling or sung narratives) over a period of more than thirty years, I tended to systematically avoid contact with Western music in Japan.

In the past ten years or so, however, I have started to remove my blinkers and have been drawn into the study of piano and Western style art song in the process of Japan's modernization. For the latter I was the recipient of a Japanese Government *kakenhi* grant, 2015–2018.

During a year's sabbatical period spent at Nichibunken in 2008, I was engaged in the Australian Government-funded project “Music and modernity in Osaka in the interwar years (1918–1938)” led by Hugh de Ferranti with Hosokawa Shūhei as collaborator. My contribution included the study of piano as a symbol of modernity. This compelled me to confront what was

a blind spot in my appreciation of Japan's musical culture, as I sought to explore the reasons why Western music became such an important part of Japan's contemporary culture. Subsequently I developed the art song project.

Such research opens up the issue of tradition and its significance in the modern age, and the tension between tradition, Westernization and modernity in the East Asian context. Eventually, I believe, Japanese music research should position Japanese music in an East Asian cultural context, and also a global context, not just a binary comparison with Western music.

Traditional genres also modernized in the age of modernity, developing new repertoire, "improving" the instruments (making them bigger and louder), new ensemble formations, new instruments even, and detailed notation systems. The impact of new media, from print to electronic to digital, has been felt in all traditional genres.

Furthermore, new traditional genres were born in the modern age: *satsuma biwa*, *chikuzen biwa*, and *naniwa-bushi* (*rōkyoku*), and a number of new lineages or schools (*ryūha*). There is very little musicological research on these modern traditional genres. The first major study of *enka* was by American anthropologist (Yano 2002). *Naniwa-bushi* is now being intensively researched by musicologist Kitagawa Junko (Kitagawa 2016 is just one of her many publications), and I have been the co-recipient of a Japanese government *kakenhi* grant for researching *naniwa-bushi* (2012–2014). I also directed student fieldwork on *naniwa-bushi* at Doshisha University in 2013 (Tokita 2013).

The crisis of Japanese music education in Japan is often of great concern to the outsider scholar, who expects the Japanese in general to be knowledgeable about their own music, and is disappointed to find that the Japanese are more steeped in Western music. The discourse of bimusicality is called on to overcome this situation. Cannot both Western and Japanese music be taught in schools so that students acquire knowledge and some competence in both systems?

Japanese vision is blinkered too: it is often limited to Japan and the West. If the field of vision includes the neighbouring countries of East Asia, it becomes clear that those countries are equally focused on achieving world status in Western music, but they are doing more to sustain their traditional music cultures through music education. Regional understanding has the potential for fruitful collaboration.

The outsider tends to want traditional music to remain unchanged, and therefore authentic. It is impressive and laudable that Japan began to set up systems for preservation of traditional genres from the late Meiji period, and from the 1950s a comprehensive system to honour and preserve at local, prefectural and national levels. Japan has also taken advantage of UNESCO initiatives to have several traditional genres listed. The danger with preservation schemes is that traditional music is not allowed to deviate from the way it was when designated; it may fossilize or atrophy due to this restriction and fail to grow and change naturally. This is the dilemma of preservation and change.

### **Communication Problems**

As in any field of Japanese studies, even though music is an auditory art form, it is essential for the musicologist to acquire Japanese language, including reading competence. However, those

who are prepared to commit to study Japanese must wait for years before they can fully utilize the resources of a dedicated research centre such as the Research Centre for Japanese Traditional Music (Kyoto City University of Arts). Even the audiovisual resources are difficult as the catalogue is all in Japanese and even most commercially produced recordings are only in Japanese.

To conduct research in Japanese traditional music there is in addition a clear need to acquire sociocultural competence appropriate to academic situations. Those who persevere with language study may continue to have difficulties when communicating with Japanese researchers in their field because of different patterns of interaction and communication. For the outsider researching Japanese music takes the approach of ethnomusicology, a branch of anthropology. Taking lessons in their chosen genre becomes their “field work”. In the *process* of acquiring knowledge, cultural competence is as important as the end product.

By studying for an extended period in Japan, one becomes more adept at being part of the academic and performance culture, and learns to communicate at a social level as well as a research equal. Most commonly, after an extended period of study in Japan, one returns to one’s country to finish the degree and hopefully to get a position. So one returns to the Western research and academic culture. One returns to Japan occasionally and is welcomed as a special visitor, but the outsider status is not challenged.

If one remains in Japan (because one is “never finished”), one may get closer to the elusive goal of assimilation into the research community but...

### **Different Approaches to Research**

It is necessary to understand the academic framework, concerns, aims of research in Japan. The subtlest problems of communication are due to the differences in academic background, different expectations of research, and hence the difficulty of conveying one’s research aims and one’s ideas.

While studying at the Tokyo University of Fine Arts and Music as a beneficiary of a Japanese Government Research Scholarship in 1978–1979, I was unprepared for the encounter with teachers and researchers who valued highly the study of historical documents and historical musicology. This approach was very challenging for the level of Japanese reading skills I had, and it was also not compatible with my desire to understand the contemporary performance through musical analysis. Of course, I also acquired essential concepts and research tools such as the structural analytical model developed by Yokomichi Mario for *noh*, and the extensive research of *shamisen* music by Machida Kashō. These formed a foundation for my musical study of *katarimono*.

In order to get one’s work recognized in Japan the importance of translation into Japanese is obvious: one should publish in Japanese, since Japanese music researchers are rarely going to read one’s work in English. (Similarly, of course, Japanese researchers should publish in English or other languages.) If it is read in Japanese it may be appreciated as a fresh outsider’s perspective. However, a problem is that often outsiders do not handle *shiryō* (original documents) directly but rely on materials already published by Japanese researchers. It is not uncommon for the primary sources of the outsider to be the secondary sources of the Japanese. Therefore, it may not be of

much interest to the Japanese reader.

Whereas Japanese researchers tend to stick to one genre, this is not acceptable in Western universities. An ethnomusicologist must have fieldwork experience in at least two cultures. A Japanese studies person must have a broad understanding of Japanese society and culture and probably also teach Japanese language. It is necessary to venture into new research topics in order to get grants and hence promotion.

In the field of *katarimono*, which includes many genres, I set a precedent with cross-genre research, trying to overcome the different terminology and research frameworks used by researchers of different genres. The most generic term for melody, *fushi*, was called variously *kyokusetsu*, *kyokusetsukei*, *senritsukei*, *daisenritsukei*. The word for section was *shōdan*, and some other terms.

The use of cultural theory is prized in Western academia. Discovering original *shiryō*, publishing them in modern type, and translating them is less valued than interpreting them in the framework of any cultural theory. “What is your theoretical framework?” is the mantra of supervisors. In extreme cases, it is as though a Japanese musical phenomenon is merely a case study to throw light on a theoretical issue of cross-cultural relevance. In my case, I drew on narrative theory as developed by structuralists such as Gérard Genette (1930–2018), and especially on the oral narrative theory that was formulated by Parry and Lord (see Lord 2000 [1960]), in addition to the then conventional musical transcription and analysis of non-Western musics.

### Area Studies versus Musicology and Ethnomusicology

In my main field of *katarimono*, so many genres in Japan itself need comprehensive comparative research: *heike*, *kōwaka*, several types of *jōruri*, *naniwa-bushi*, *satsuma biwa*, *chikuzen biwa*, *goze uta*, *zatō biwa*, *Ainu yukara* and more. I was privileged to be able to lead a fruitful cross-genre and interdisciplinary team research project in 1998 at Nichibunken. In this project, I was able to develop and confirm my earlier insight that the missing concept in understanding *katarimono* was that of musical substyle, in addition to formulaic section and formulaic phrase. Another insight of mine is that *heike* influenced *kōshiki* rather than the reverse. However, Japanese researchers do not accept this.

Eventually, my research adopted a global comparative perspective, looking at some of the large number of musically-performed narrative / *katarimono* genres around the world: Korean *pansori*, Chinese drum songs and *tanci* (*pingtan*), and others, whose study can throw light on the wide variety of Japanese narrative genres. I developed a model of three types: stichic, strophic / stanzaic, and prosimetric to enable comparison with *katarimono* in other countries. Interestingly, a recent publication in the field of *heike* literary studies, has argued that *The Tale of the Heike* is World Literature (Kusaka 2017).

Three years ago, I was contacted by a researcher from the Geneva Conservatory (Haute École de Musique), Francis Biggi, about comparative research for his interest in Italian sung narratives. This has been most productive. In particular, it gave me the opportunity to investigate the strophic type that his work exemplified. This led to comparative research with

Biggi, and he shared the platform at the Research Centre for Japanese Traditional Music (RCJTM) public lecture-concert on February 11. We held a *katarimono* week for him and his colleagues in February, with a series of presentations on several *katarimono* and related genres. This was a follow-up of a week-long intensive course in Geneva in 2016, a workshop on *noh* in Sarrebourg in 2017, and in March 2017 a workshop on *heike* narrative in Corsica. Such “outreach” (*hasshin*) requires English to function.

### The Role and Value of the Outsider Researcher

It is surely desirable to make Japanese music accessible to the world. Translation of Japanese musicological research and presenting findings in English is a task for which the outsider is often contacted, especially the translation of an abstract for a journal or a conference. In the Research Centre for Japanese Traditional Music, of which I was Director from 2014 to 2018, the documentary research focus is prominent, but performance is also valued, and a large part of the Centre’s output is in the form of community outreach (required to justify the taxpayers of the City of Kyoto), so is made quite accessible, but still conducted only in Japanese. Non-Japanese would often contact the RCJTM, and seek information and deeper knowledge about aspects of Japanese music, but usually they could gain little. The Centre was not equipped to reach an international constituency. I tried to rectify this situation by the intensive three-day course on Japanese music, “Pendulum” that I ran three times, 2015 to 2017.

It is usual for a Japanese researcher to focus almost exclusively on one genre. Hopefully the outsider will have a broader perspective, and will avoid discourses of Japanese uniqueness which crops up all too easily if the focus is always on Japan vis-à-vis the West. The outsider should be able to offer an international perspective to the study of Japan which challenges Japanese perspectives. And within Japan, the outsider would do well to not focus exclusively on one genre as is very common among Japanese researchers, but to develop cross-genre, cross-*ryūha* research, without fearing criticism of shallowness.

The outsider’s research can act as a stimulus for change. As it happens, the catalyst for Francis Biggi to contact the RCJTM was a young Japanese woman who was studying renaissance keyboard at the Geneva Haute École de Musique, when she was asked to provide information about Japanese musical epic; on doing a search in Japanese she found my work and our Centre.

To conclude, I will introduce two cases where the stimulus of the work of outsiders has caused a paradigm shift in Japanese research.

First, Laurence Picken (1909–2007) and *gagaku*. His field was zoology and Chinese music history. Searching for the lost melodies of the Tang court in Japanese *gagaku*, he had the insight on reading Eta Harich-Schneider’s article in 1953 that the notations of the *shō*, *biwa* and *koto* were the original melodies, while *hichiriki* reed instrument and *ryūteki* transverse flute were extended embellishments. Modern *gagaku* performance sounded nothing like the melodies in that score, largely as a result of the tempo having become several times slower over centuries of transmission, giving rise to the elaboration of the reed and flute melodies and the obscuring of the melodic role of the other instruments. In 1972 Picken travelled to Japan and acquired copies

of old manuscripts of the various instrumental parts, and found five talented doctoral students with the necessary language abilities to carry out the analytic work to support his insight. The results, first published in 1981 (Picken et al. 1981–2000), started to become known in Japan in the mid-eighties, and met with stony hostility.

Japan's leading historical musicologists often felt that any conclusions were automatically premature until all known primary and secondary sources had been consulted; various Picken School errors in historical or linguistic detail led some scholars to cast doubt, irrelevantly, on the more musicological claims; and a mistaken nationalistic belief that *tōgaku* was transmitted without break since the eighth century—the world's longest continuous orchestral tradition—made it awkward to accept the major changes claimed by the Picken School. These various reasons, having nothing to do with the validity of the major claims, allowed too many scholars to dismiss the Cambridge team's work. (Hughes 2010: 235)

Thirty years on, the core of his ideas have become the new orthodoxy among new generations of scholars. His insights, though not entirely new, were reached independently from Japanese research. Already such a theory had been foreshadowed in Hayashi Kenzō's work and were included as obvious in Masumoto Kikuko's book on *gagaku*. However, the historical music establishment did not adhere to those positions. Finally it was an outsider perspective that carried the day.

Secondly, Kenneth Butler and *heike* narrative. Not a musicologist but a literary scholar of *Heike monogatari*, he studied in Japan in 1967, having read Lord's path-breaking book on oral narrative, *The Singer of Tales* (Lord 2000). In three seminal papers he applied this model to the *Heike* arguing its oral origins (Butler 1966a, 1966b, 1969). His research was taken up by Yamamoto Kichizō (Yamamoto 1977, 1978, 1988), and split the field of *heike* scholarship into two camps. Even now, there are two camps but not so extremely divided.

I would like to think that, albeit on a smaller scale, my approach to *heike-jōruri* will eventually be accepted and cause a slight paradigm shift, at least in the concept of the substyle, if not of the primacy of *heike* over *kōshiki*.

## REFERENCES

- Butler, Kenneth D. "The Textual Evolution of the Heike Monogatari." *Harvard Journal of Asiatic Studies* 26 (1966a): 5–51.
- Butler, Kenneth D. "The Heike Monogatari and Theories of Oral Literature." *Seikei Daigaku: Faculty of Letters Bulletin* 2 (1966b): 37–54.
- Butler, Kenneth D. "The Heike Monogatari and the Japanese Warrior Ethic." *Harvard Journal of Asiatic Studies* 29 (1969): 93–108.
- De Ferranti, Hugh and Alison Tokita (eds). *Music, Modernity and Locality in Prewar Japan: Osaka and Beyond*. Farnham, Surrey, Burlington, VT, USA: Ashgate, 2013.
- Harich-Schneider, Eta. "The Present Condition of Japanese Court Music." *The Musical*

- Quarterly* 39.1 (1953): 49–74.
- Hughes, David W. "The Picken School and East Asia: China, Japan and Korea." *Ethnomusicology Forum* 19.2 (2010): 231–239.
- Kitagawa, Junko. "Shodai Kasugai Baikō ni yoru rōkyoku no 'fushi' ni okeru teikeisei to henkeisei: 'kokkaku-shiki' ni motozuku bunseki o tōshite" (Stereotypicality and variability in *naniwa-bushi*: from the viewpoint of 'skeletal formula' of the melody fragment). *Memoirs of Osaka Kyoiku University, Series I (Humanities)*: 65 (2016): 13–31.
- Lord, Albert Bates. *The Singer of Tales*. Eds. Nagy, Gregory and Stephen Mitchell. 2nd ed. / Stephen Mitchell and Gregory Nagy, editors. ed. Cambridge, Mass. London: Harvard University Press, 2000.
- Kusaka, Tsutomu. *Heike monogatari to iu sekai bunkaku*. Tokyo: Kasama shoin, 2017.
- Masumoto, Kikuko. *Gagaku: dentō ongaku e no atarashii apurōchi*. Tokyo: Ongaku no tomosha, 1968.
- Picken, Laurence E. R. et al.. *Music from the Tang Court*. Vols (fascicles) 1–7. Oxford, UK: Oxford University Press (vol.1) and Cambridge, UK: Cambridge University Press (vols. 2–7) 1981–2000.
- Tokita, Alison. *Japanese Singers of Tales: Ten Centuries of Performed Narrative*. Farnham, Surrey, England. Burlington, VT, USA: Ashgate, 2015.
- Tokita, Alison, and David W. Hughes. *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Aldershot, Hants, England; Burlington, VT, USA: Ashgate, 2008.
- Tokita, Alison, and Haruko Komoda (eds). *Nihon no katarimono: kōtōsei, kōzō, igi (Japanese Musical Narratives: Orality, Structures, Meanings)*. Kyoto: International Research Centre for Japanese Studies, 2002.
- Tokita, Alison, and Okamoto Yōichi (eds). *Naniwa-bushi no fieldwork: Osaka Tennōji Isshinji Monzen rōkyoku yose oyobi Tokyo Mokubatei o hikaku shite*. Kyoto: Doshisha University, 2013.
- Yamamoto, Kichizō. Three articles "Kuchi-gatari" no ron: goze uta no baai", in *Bungaku*, vol. 44, no. 10 and 11 (1976); vol. 45, no. 1 (1977).
- Yamamoto, Kichizō. *Kutsuwa no oto ga zazameite: katari no bungei-kō*. Heibonsha sensho, 122. Tokyo: Heibonsha, 1988.
- Yano, Christine Reiko. *Tears of Longing : Nostalgia and the Nation in Japanese Popular Song*. Ed. Harvard University. Asia, Center. Cambridge: Cambridge: Harvard University Asia Center: Distributed by Harvard University Press, 2002.



## 共同研究の力点を考える

### 共同研究「日本の舞台芸術における身体—死と生、人形と人工体」

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ

2015年9月1日から2016年8月31日まで1年間、国際日本文化研究センターに滞在し、共同研究『日本の舞台芸術における身体—死と生、人形と人工体』を行うという幸運を得た。私が代表となり、23名の共同研究員（それに2、3名の院生、日文研内外のゲストなど）の参加により大変充実した研究活動ができた。

この体験に基づき、日文研でのこの共同研究で行ったことを振り返ってみたいと思う。

このような大きな研究テーマに取り組むのは到底一人の力ではできないことであるが、多数の各分野の専門家が協力して検討すれば、刺激的な挑戦となり、多大な成果が期待できる。そこに共同研究のメリットがある。共同研究員は日本全国からの研究者を主として、4名の外国の研究員も含む。舞台芸術をめぐる各分野の専門家であるが、能役者として実演にかかわり活躍している研究員、ダンスの演出などに携わる研究員、音楽の専門家、また日本文化だけではなくイタリア、スペイン、フランス、イギリスなど、ヨーロッパの文化と舞台芸術を専門としている研究者たちなど、多彩な参加が得られたことは幸いであった。

おかげで、舞台芸術を中心に日本文化・思想における身体観を演劇史、美学、比較文化、宗教史、ダンス研究など、さまざまな観点から検討した充実した討論の場となった。その成果である報告書は、民俗芸能、俄、能、歌舞伎、人形浄瑠璃、からくり人形、近代演劇、舞踊、ダンス、舞踏、現代演劇などにおける「身体」という課題を扱った各人の論文を集めたものである。

私が提案したテーマはけっして新鮮味のある課題ではない。近年、理科系また人文系の分野において多種多様な研究が「身体」を吟味している。また、日本のみならず、世界の舞台芸術の諸専門家による身体論も夥しい数に上る。

それでは、日文研で日本の舞台芸術の身体のあり方を改めて考えるということはどういう意義があったのか。

まず、舞台芸術は特殊な分野で、身体そのものが最初の基本的な手段であり、身体の動作、身体から発生される声、身体の動きによって発現される音楽によって成り立つものである。日本の舞台芸術の原型は原初から歌舞である。芸能は人間の体、声そのものから生まれ、他の道具（楽器など）を使うことによって発展していく。舞踊と音楽は最古の芸術なのである。

演者・役者／俳優・踊り手・人物の身体、それらの存在によってなりたつのは勿論のことだが、身体言語を媒介とする舞踊、ダンス、舞踏など、また能、狂言、歌舞伎などの伝統演劇から、現代の演劇にいたるまで、豊かな舞台芸術を誇る日本は、どのような身体観に基づいて、どのような変遷をたどってきたのだろうか。そこには独自の身体観

念、独特の流れが認められるのだろうか。

そして、そのなかでも日本の舞台芸術には特別な事情がある。周知のように、日本は今日も息吹く伝統演劇のほかに、近代から変容しながら展開してきた近現代演劇、また多彩な民俗芸能の世界が生み出した舞、踊、日本舞踊のほかに、モダン・ダンス、舞踏、コンテンポラリー・ダンスなどのようなジャンルもあわせもつ特殊な状況の国である。

さらに、人間の身体だけではなく、昔から、人形に対する深い愛着、親しみを基盤に、人形浄瑠璃文楽を頂点とする人形劇なども発達したが、最近の傾向として現代の舞台・パフォーマンスにおいてロボットやアンドロイドのような人工的な身体も登場している。

したがって、「身体」に注目して、日本文化・思想における身体観を考え、伝統芸能と近現代演劇の差異を考察するとともに、役者／俳優・踊り手と観客の葛藤の中で、生身の演者の存在と異なる「人形」、そして最新の技術による「人工体」というものとの違いが、あるとしたら、どこにあるのかという問題なども浮かんでくる。

まずは舞台芸術・芸能の原点にさかのぼることである。どのような文明の中でも舞踊は神から授かったものと信じられてきたようで、神聖なものとしてさまざまな芸術とともに重要な位置を占めていた。

もちろん、遊牧・牧畜民社会と水田稲作農耕民社会の相違も、人間を取り巻く自然環境、生産労働、文化的行為も、舞踊の現実空間と創作空間、その身体表現を大きく変えていくようである。

ヨーロッパ文明の発祥地である古代ギリシアでも、音楽、舞踊の教育は、リズムとハーモニーが魂の奥底にまで響くゆえに、他のいかなる教養よりも強い力を秘めた営みとして認められていた。音楽・舞踊をめぐる古代ギリシアの思想体系（プラトン、サモサータのルキアノスなど）は古代ローマに受け継がれ、イタリアをはじめ、ヨーロッパ諸国の音楽観、舞踊観の基盤となった。舞は音楽とともに、宇宙全体の舞、天体の舞、天球の調和を映すものとされ、身体のたしなみであり、その教育と治療上での徳が讃えられたのである。

宇宙全体に至るまで、すべてに調和した数比関係が存在していたギリシアの思想（ピュタゴラス）も、ヨーロッパの文明に影響をおよぼし、宇宙を調和に満ちた鳴り響く世界ととらえ、芸術のみならず科学思想の芽生えにまで及んだと言える。このような世界観のなかで、人間の身体は大宇宙を映す小宇宙になるものとして、舞踏によって調和を表現するものとなる。体のリズムは昔の宇宙のリズムに戻り、宇宙空間を作り、身体の運動によってロゴス、宇宙の調和、原理念を表現するということになる。

東洋の思想では、たとえば古代中国思想の宇宙的二分法に対応する仕組みが基本になっていると考えられ、陰陽五行に基づく五方、五色、天地人などの原理が一つの世界構造となっており、浄土、仏の賞賛となる舞曲が讃えられるが、平安王朝の雅楽、舞楽のなかでも、陽陰、明暗、左右などの対照性・対称性、交互性によって置かれ配された要素の二元論が宇宙を構成する原理として重んじられている。

舞踏が神聖なものとなされるのは、日本も例外ではない。たとえば、13世紀の伯近真著『教訓抄』（1233年完成）には仏教世界からの起源が主張されている。また、日

本の最古の文献（『古事記』、『日本書紀』、その後世阿弥の能楽論も）は、アメノウズメ（天宇受売命）の天の岩屋戸伝説を挙げる。神話のなかで、アメノウズメは、神との交感を歌舞を通じて行い、人間にその「わざおぎ」を示し教えている模様である。これが神楽の原型とされ、神歌、楽器その他の音楽に伴う舞踊を中心とする儀礼祭祀、芸能のはじまりといえる。また、そこに、人間が身体を媒体として神霊を宿すことにより、神がかりの異常な状態から、憑依現象への展開、託宣などを求める過程をも示しているようである。このようなところに、大陸系のシャーマニズムに反して、日本では「憑依型」、神がかり型の方が強く感じられると言われている。

勿論、エクスタシー型かポゼッション型かによって、体の役割は異なってくる。前者／「脱魂型」には魂／心だけが神との出会いを求め、羽ばたき、旅に彷徨い、体を必要としない、というより体からの離脱が中心になり、心の動きが重要となる。人間の魂が肉体を離れて、あの世・他界といった異次元・異空間に赴く。心と身が分裂することによってエクスタシーが可能となるように思われる。後者／「憑依型」では体が神霊を宿る手段となっており、採り物とともに、必要な道具として神がかりに導く役割を果たすのである。神を身体に憑依させ、顕現させる祭儀のポゼッション技術の中核となる道具である。

人間の身に頼り、舞を通して神がかり、憑依を求めて、神々のエネルギーを振り、魂をふり、魂を降ろし、神や霊の力を引き出し、託宣などの目的に達するのである。神がかり、神託などにいたる前に、踏みならし、激しい旋舞と跳舞、歌と音楽などといった舞踊的な動作が呪的な行為から神楽、芸能などの原型となるであろう。回転を左に右にと交互に繰り返す、舞に狂う身体は、死と復活、衰弱と再生、季節の死と再生、生命力の更新・充実のための魂振り、魂触り・魂鎮めの機能を果たしている。

それから、宇宙、世界や事象の起源を語る神話と始元の神が顕現する場となる祭祀は神楽では神と共同体を対象とする芸能となる。そして、専用の聖なる空間、神殿、舞殿、舞台が発達する前に、舞い手が活躍する祭祀が徐々に複雑になり、「神」を演じる場面となる翁の舞、延年の舞なども出現してくる。時代の暗部、季節、魂などの生命力が衰弱する際、生命力を統御し、噴き出すようにする祈祷は、舞う身体に委ねられている。

歌も、舞踊も神に授けられた言語であるが、歌と舞は神々との一体的な恍惚を求める神との対話、宇宙との対話の手段である。日本の場合、舞と歌の組み合わせは舞台芸術、舞踊界、芸能のなかでもずっと揺るぐことなく継承されている。舞と歌の力には詞、言葉との関連も指摘されているのであるが、舞と同じように、神々との対話に必要な言語としての歌、そして言葉自体に、呪術的な精力が認められている。

日本の場合、歌と舞の深いつながりが古代の芸能、舞台芸術の基本となっており、世阿弥が、「物まね」とともに、「歌舞二曲」を重視している通りである。近代まで、日本の舞踊は詞・詞章との関連を保つ流れとなる。特に近代になってからは音楽や舞踏から離れた詩や文学、詩歌から切り離したいわゆる「純舞踊」も生まれてくる。

また、巫女の場合、神を宿す身体であり、神託を伝える役目となるが、神をまねくために「採り物」が大事な役割を果たし、榊、鈴、扇、剣、御幣などの採り物を持ち、順

廻り、逆回りの旋回運動を中心に、同じ場へ回り返すのである。神楽から上方舞まで、伝統芸能の中でその狭い場所を聖なる空間とし、神を迎える狭い空間こそ、集中して芸能・舞踊を見せる舞台となっている。日本の舞台芸術では、巫女の身体、俳優の身体が媒介なのであって、肉体そのものが重要なのではなく、その美しさ（肉体美）よりも衣装（仮面）の美が中心になっている。

このように、宗教的な祭祀性の世界から、宗教的内容の濃い舞台芸術が生まれるのであるが、芸能の中の身体は、特別な身体である。器としての身体、神々と交感する身体、神と対話する身体、神の媒体の身体から神を顕現する身体、面をかぶって神の乗り移る身体、神を現し、共同体・観客に神を見せる身体となっていく。

また、日本の祭祀と芸能に特別な意味合いを占めている「道具」では、仮面と人形の存在が大きい。それに、おそらく物体、物でも神を宿す信仰がはたらいている。日本の場合、神を宿すモノが人形、人工体、ロボットなどへの愛着、親しみの根源となっているのではないであろうか。

なお、巫女と同じように、演じる側の身体は神、霊などを代弁し、言葉託宣などを伝え、神・霊などの姿を顕現する。神を顕現する身体は神がかりになった身体、または神の姿を現した身体として、仮の身体であり、化身となる。日本土着の神々は、仏教との結びつき、本地垂迹思想などによって「権現」として仏教の仏や菩薩の仮の姿となったりして、二重、三重の構造をとり複雑になっていく。その場合は、姿は仮の姿、化身であり、仏教的な思想から言えば、視覚の対象となる「色」（色彩と形態）、あるいは視覚像、表象、夢幻、ただの幻想になってしまう。

舞踊そのものが変身行為である。祭祀における巫女の神がかりとしての舞踊変身、演劇においても演者／役者にとって舞台が変身の場となり、観賞用の変身として成り立つ。祭儀、儀礼、儀式を司る巫覡と同じように、役者は、役を演じる身体であり、変身する身体になっていく。舞台の上で神霊、精神を身体化するために、身体の神霊化、精神化を求めるが、その準備のために、翁・三番叟等の場合のように役者は精神と身体を清める。役者の身体の代わりに、仮面、人形などの姿を使うこともあり、多種多様な形態の演劇が生まれてくる。

以上のような理由から、民俗芸能の研究は舞台芸術研究、演劇学の基盤をなすものであり、常に基本とされねばならない。身体をめぐる思想、身体と神聖なものとのつながりの信仰、生と死の思想、心身の関わりに対する観念についての考察は、無視できない課題として、村々の民俗芸能、諸神社・社寺の儀礼と祭祀などの流れのなかで探求すべきものと思われる。その源泉にさかのぼることによって、その意義、本意が見出せるのであろう。

有史以来、大陸の文化を吸収しながら、日本の土地で育んだ土着の芸能も芸術的に洗練させ発展させ、その保存と継承により昔ながらの面影を伝えてきたのが、日本の民俗芸能の豊かな世界である。そして、ある意味では、そのような源流が昔のまま、原点の姿に近い形で伝わってきたのは、中央よりも、地方であると思われる。しかし、それと同時に、中央政権は、大陸と地方からの諸芸能、歌舞を集め、強い中央集権を立てよう

とする過程の中で、美化、様式化への傾向を進めながらも、重要な役割を果たした。歌舞、芸能、舞台芸術の豊かな文化活動が人間の生活を守り、楽しませ、育んできた。

さて、共同研究は6回にわたり展開された。

第1回目の研究会では、共同研究員が協議して考案した順番、テーマ、研究課題などにより、各研究会において一人または複数の研究者が発表した。まず、民俗芸能の流れから浮かんでくる「身体」の思想、演者の身体の役割、訓練と準備と即興性、個人と劇団の身体の役割、玄人と素人の身体の差異と意義、言葉と身体で表す「笑い」などを検討し、積極的な質疑応答、オープン・ディスカッションによるテーマの定義、問題点の指摘などを行った。

その後の研究会は、できるかぎり、歴史的な流れに沿って進められたが、各時代、各分野の専門家の参加により、時代区分を重視しながらも、特に境界を設けず自由に対話できるような形をとった。参加者のもつ知識とイメージの焦点とズレを少しずつ動かしながら、先入観、固定観念を和らげ、乗り越えていくのは、学際性がもたらす共同研究の一つの成果と言えるのではないだろうか。

第2回目では、伝統演劇における役者、演者、舞踊家などの「身体」のありかたを検討するにあたって、高度な身体意識を見せる世阿弥の能楽論をはじめ、その後の能楽論・芸論と能・狂言の舞台に表現される役者の身体性を考察した。ものまねと幽玄、役者の身体と人物の身体を中心に、議論は中世的な身体観と現代の能楽における役者の身体表現、実際の演技などにも及んだ。

第3回目は近世演劇が中心になった。風流、念仏踊、かぶき踊、舞台に展開される踊りから物まねの演技まで、さまざまな条件による歌舞伎役者の身体、その表現、その特殊性について吟味するにあたって、まずは芝居絵、役者絵に記録され描きとめられている歌舞伎役者の身体、若衆と女形の身体のあり方の実例、また、歌舞伎の音楽に合わせる身体とその動き、文楽における人形、義太夫狂言とその音楽による人形と俳優との対比を吟味した。なお、劇文学のレベルでは、近松門左衛門の戯曲としての浄瑠璃における身体観、人形の身体にも注目して近世演劇の身体観に迫った。

第4回では、民俗芸能の流れから浮かんでくる「身体」の思想、原典となる民間神楽・祭祀などにおける身体の役割、演者の身体の訓練と構えなどを分析してから、地方による違いのみならず、近代化などによるその変遷にも注目した。また、人形という課題をあらためて取り上げ、近世からの伝統となる「からくり人形」、「手妻人形」などの操法から、現代の映像文化が生み出したヴァーチャルな「人形」の最新のマルチメディア現象にも取り組んだ。

第5回目の研究会は比較演劇の観点からみた身体というテーマに臨んだ。初めての異界（ヨーロッパ）との出会い、「南蛮人」が観た伝統芸能、また茶の湯、その見方から浮かんでくる演劇、音楽、芸道、身体観などの違い、また、近世の歌舞伎における演出と身体との関わりを吟味した。また、近代から現代の演劇にいたるまで、変容してきた日

本の近現代演劇、そして舞踊、新舞踊、モダン・ダンスにおける「身体」に注目して、転換期となる近代の身体観と伝統演劇との差異を考察した。

第6回目の研究会は、戦後の日本における「身体」と「肉体」による叛乱、土方巽や舞踏による新しい身体革命をめぐる問題、演劇人や舞踏家の活躍などを分析した。戦後の日本になると、「肉体」そのものをめぐる問題は舞台の核心的な課題となって、激しくグロテスクなまでの官能的な魅力を潜めながら、古代から民間芸能、農耕が生んできた日本的な身体への回帰を示し、あらためて生と死との関わりに迫っていったと思われる。

議論は現代演劇、コンテンポラリー・ダンスにおける身体／肉体の最新の動向、また、それに匹敵するものとしての人形、人工的な身体／人工体の理念の生成、とくに平田オリザなどの舞台におけるロボットとアンドロイドの役割、ヴァーチャルな世界の人物(初音ミクなど)へまで及び、新しい展開を展望した。

以上のような諸課題をふまえて、あらたに日本の身体性を考える研究活動を進め、伝統演劇の身体観を基盤に、近現代における新たなる肉体、そしてそれに匹敵するものとしての人形と人工体の役割と理念の生成、その展開を考察した。伝統芸能では、身体はあらゆるものに変化する可能性をもち、人物を演じるにあたってそれらに合わせたふさわしい身体を作り、型などの体系を作り上げたところに特色がある。そして、千変万化の変身を表現する舞踊を通して気や呼吸によって観客との同調を目指し、身体言語による舞踊独特な魅力によるコミュニケーションを発揮する流れが見られる。それに反して、主に西洋／欧米の舞台芸術を志向した近代の演劇、新劇には戯曲中心の演劇形体が求められ、俳優が主体となる言葉を通じて戯曲に合わせて人物を演じ、戯曲の設定と交錯しながら劇作家の観念的世界に従う中で、身体は芸と戯曲、設定と人物との関係において従属的な立場にならざるを得ない。また、近代劇においては、人間の内面に注目し、身体は内面を外面に表出するイメージのみになり、全く異なる人間観が伺えるのである。

発表と質疑応答とディスカッションが中心の研究会では、文献的な資料の他に視聴覚資料は取り上げる程度で、テーマ・方法ともに、独創的な共同研究だったとは言えないが、日文研の伝統にふさわしい比較文化論も含む総合的、学際的なアプローチも見られた。少なくとも舞台芸術の本質に迫るテーマであったと思う。

いずれにせよ、諸分野の専門家をも交え、このような形で多方面から、いろいろな角度から、多種多様な方法で取り組み、専門家また一般の読者にこのような課題を紹介するのは初めての試みのようである。

2018年の秋から共同研究員の原稿の編集に取り組んだが、日文研叢書として出版社からの刊行が決まり、めでたく2019年2月に出版された<sup>1</sup>。

触れていない課題、扱われていない問題点が数多く残っているが、これは今後の研究の対象になろう。

<sup>1</sup> ボナヴェントゥーラ・ルベルティ編『日本の舞台芸術における身体—死と生、人形と人工体』、晃洋書房、2019年。

## Considering Focus of Joint Research: Joint Research Project “The Body in the Japanese Performing Arts: Death and Life, Puppets and Artificial Bodies”

Bonaventura Ruperti

From 1 September 2015 to 31 August 2016, I fortunately had an opportunity to participate in a one-year research residency at the International Research Center for Japanese Studies (Nichibunken), participating in the Joint Research Project “The Body in the Japanese Performing Arts—Death and Life, Puppets and Artificial Bodies.” I served as the representative of a project team of 23 members (plus a few graduate students and guests from inside and outside Nichibunken), and was able to conduct very fulfilling research activities in collaboration with them.

Based on my experience, I would like to review what we did in this joint research at Nichibunken.

While such a broad research theme can never be tackled through solitary efforts, collaborative exploration into such a theme with many experts from various fields is an exciting challenge with possible remarkable achievements. The advantage of joint research lies there. With four members from abroad and the rest from around Japan, the joint research team comprised professionals from various performing art genres—including an active Noh actor, a dance professional who had directed some dance works, and a music specialist—, and researchers specializing in the cultures and performing arts of various European countries, such as Italy, Spain, France, and the UK, in addition to Japan.

By the grace of the diversity of members, which acted favorably on the joint research, we were able to have a place for insightful discussions about how the body had been treated in Japanese culture and thought, and especially in Japanese theatrical arts, from a wide range of perspectives, including those of the history of theater, aesthetics, comparative cultural studies, the history of religion, and dance studies. A report on the achievements of the joint research comprises papers written by the members to deal with the subject of the “body” in folk performing arts, *niwaka* farces, Noh, Kabuki, the *jōruri* puppet theater, mechanical dolls, modern drama, dance, *butoh*-style performances, and contemporary drama.

The theme I proposed was never a novel one. There was already a long list of studies on the “body” in a wide variety of fields, including sciences and the humanities. In addition, performance art experts in not only Japan but also the rest of the world had written innumerable treatises on the “body.”

Then, what was the significance of Nichibunken’s attempt to reconsider views of the body found in Japanese performance arts?

First of all, the field of performing arts is unique in that human bodies themselves are the primary, essential means there, and artworks are created with body movements, voices coming from human bodies, and music performed through body movements. The archetype of the Japanese theatrical arts is originally dancing and singing. Works of the performing arts are created from human bodies and voices themselves, and developed through use of other tools (including musical instruments). Dancing and music are the oldest forms of art.

The performing arts would be certainly impossible without the bodies of performers, actors/actresses, dancers, or characters, and the existence of the bodies, but what views of the body have the Japanese performing arts, including traditional, modern, and *butoh*-style dancing using body language as a medium of communication, as well as from traditional drama, such as Noh, Kyōgen, and Kabuki, to contemporary drama, been founded on? How have they changed? Can any original concept of the body and any peculiar process of the series of changes be found there?

Next, despite such universal nature of the performing arts, the Japanese varieties have special conditions. As you may know, Japan is a unique country where most possible genres of the performing arts co-exist at the same time, including still-vigorous traditional drama, modern and contemporary drama that has transformed and developed since the modern age, and various styles of dancing—not only traditional styles, such as *mai* characterized by evolution, *odori* featuring jumps, and *Nihon buyō* (Japanese dance) as an early modern combination of the two above, which have their origins in the diverse world of folk performing arts, but also modern dance, *butoh*, and contemporary dance.

In addition to human bodies, dolls have been subjects of deep attachment and strong affinity, based on which puppet plays have developed, with the *jōruri* puppet theater as the most renowned example. Moreover, artificial bodies, such as robots and androids, have recently appeared in the field of contemporary drama and performance.

Therefore, we now should tackle the challenges of not only considering, while focusing on the “body,” views of the body in Japanese culture and thought, and differences between the traditional and modern/contemporary performing arts, but also examining whether face-to-face encounters between performers and audiences are different from encounters between “dolls” and state-of-the-art “artificial bodies,” instead of human bodies, and, if so, where the differences are.

The first step to take is tracing the origin of theatrical and performing arts. There seems to have been a universal belief that dancing is a divine gift, so dancing occupied an important position along with other forms of art.

Needless to say, it seems that differences between nomadic or pastoral society and agricultural society relying on paddy rice cultivation, as well as the natural environment surrounding humans and their productive and cultural activities, have massive impacts on the real and creative spaces of dance, and its body expressions.

In ancient Greece, which was the cradle of European civilization, music and dance education was recognized as more powerful than education in other fields because of the resonance of rhythms and harmonies deep into human souls. The ancient Greek system of thoughts on music and dance (including thoughts of Plato and Lucian of Samosata) was handed down to ancient Rome, providing the foundation for views of music and dance in various European countries, including Italy. Together with music, dance was thought to represent the universe, planets, and harmony in the celestial sphere, and it was praised as a good physical discipline and consequently as beneficial for education and health.

The Greek (Pythagorean) thought that all things, or even the entire universe, were in harmony that could be expressed in mathematical relationships also influenced European civilization, viewing the universe as a harmonious, resonant world and cradling not only various

forms of art but also scientific thought. This worldview took human bodies as microcosms that represent the vast universe and expressing its harmony through dancing. It was believed that body rhythms could rejoin cosmic rhythms as their old home and create space, and body movements could represent logos, and the harmony and fundamental principles of the universe.

To take an example from Eastern thoughts, it is thought that a system in conformity with ancient Chinese cosmic dichotomy provided a foundation for the belief in a world structure comprising such principles as the five directions and five colors, as well as relationships between heaven, earth and mankind, based on the doctrine of Yin-Yang and Five Elements. In this system, music and dance as praise to the Buddhist Pure Land and Buddha was admired. Heian-Period Japanese court music and dance, called Gagaku and Bugaku, respectively, placed importance on dichotomy based on antithesis, symmetry, or alternation between the negative and the positive, between the dark and the bright, between the left and the right, etc. as the constitutional principle of the universe.

Japan was not an exception in terms of the divine status of dancing. For example, *Kyōkun shō* (completed in 1233) authored by 13th-century Gagaku performer Koma no Chikazane explains that the origin of the divinity of dancing lies in the Buddhist world. In addition, the two oldest Japanese chronicles—*Kojiki* and *Nihon Shoki*—, as well as Zeami's treatises on Noh in a later era, mention the legend of Ame no Uzume, a female deity, and her dancing in front of the Ama no Iwato (Celestial Rock Cave). In the myth, Ame no Uzume dances to have divine communication and to demonstrate to humans her skills in *wazaogi*, that is, dancing to entertain others. This may be viewed as the archetype of Kagura, dance for entertaining deities, and as the origin of rituals, festivals, and performing arts featuring dancing to the accompaniment of divine songs or other musical pieces, including instrumental ones. The myth also seems to represent the process of a human using her body as a divine medium, going into a trance, or an altered state of consciousness, getting possessed by a deity, and seeking the deity's oracles or the like. It is said that, in sharp contrast to shamanism on the Asian Continent, there was a stronger tendency toward divine possession in Japan.

As matter of course, the role of the human body differs according to the type of trance: the ecstasy type or the possession type. In the ecstasy type, only the human soul/spirit escapes confinement and goes on a journey in search of a divine encounter, so there is no need for the body, or rather, escape from the body is the focus there, with high importance placed on a spiritual experience. The human soul escapes the body and visits a different dimension or space called the other world or the next world. It seems that division between the soul and body enables ecstasies. Meanwhile, in the possession type, the body serves as a medium for a divine or spiritual existence, and plays the role of a necessary instrument, together with sacred props, in leading the human medium to a trance. The body is the vital tool for possession skills in inviting a deity to possess the person and appear in a ritual.

Here, the human body serves the purposes of putting a person into a trance through dancing, summoning up divine energies and souls, inviting a deity to possess the dancer, bringing out divine or spiritual power, and obtaining sacred oracles. Dancing movements performed by the medium before she/he is possessed and begins to voice oracles, including stamping, and vehement evolutions and jumps, together with songs and musical pieces, may

have been the archetype of Kagura and other traditional Japanese performing arts. The medium's dancing body, repeatedly evolving to the left and the right alternately, represents death and rebirth, decline and restoration, and the death and revival of a season, and functions to summon up and console divine souls in order to restore and increase vitality on the earth.

Rituals where myths telling the origin of the cosmos, the world, and various phenomena were represented and creator deities appear turned into performing arts in Kagura, where the existence of deities and the community was staged and confirmed. Prior to the development of sacred spaces dedicated to those purposes, such as shrines, performance halls, and stages, rituals where dancers played an important role gradually became more complex, with new elements added, such as the dances of *okina* (old men) or longevity, where the dancers acted as deities. When the vital energies of souls and other spiritual beings flagged in difficult times or during some seasons, the bodies of dancers occupy a crucial role in offering prayers to control such energies and have them radiate.

Songs and dances as divine languages are means to communicate with deities and the cosmos in search of an ecstatic union with deities. In Japan, a combination of songs and dances has been steadily handed down in theatrical arts, dances, and performing arts. While the power of dances and songs is sometimes attributed to their relationships with words and spiritual power inherent in them, songs as necessary language for communication with deities, and words themselves are recognized as embodiments of magical energies, just as dances are.

In Japan, the profound relationship between songs and dances provides the foundation for theatrical arts, as clearly exemplified by Zeami's emphasis on *monomane* (role-playing) and the two arts of dance and singing. Since then, Japanese dances have generally maintained their relationships with verse and prose until modern times. Modern Japan in particular has seen the origination of verse and other literary forms separated from music and dancing, and so-called "pure dance" separated from verse.

In addition, when shrine maidens as divine mediums who communicate oracles summon up deities, their *torimono* (sacred props) play an important role. They continue to turn in one direction and another alternately on the same spots while holding sacred props in their hands, such as branches of *sakaki* (*Cleyera japonica*), bells, folding fans, swords, and *gohei* (sacred wands with white paper strips). In a wide range of performing arts traditions, from Kagura to Kamigatamai-style dance, which originated in western Japan, such narrow spaces in which dancers continue to turn have been viewed as sacred spaces where deities are summoned up, and have served as stages on which dances and other performances are intensively done. In Japanese performing arts, the bodies of shrine maidens and actors/actresses serve as mediums. Their bodies themselves are not important, and focus is placed on the beauty of costumes (masks), rather than the beauty of the performers' bodies.

As seen above, the world of religious rituals originates in performing arts with highly religious content, and human bodies in such performing arts have special significance. They transform from bodies as vessels, bodies that can resonate with deities, bodies that can communicate with deities, or bodies as divine mediums to bodies that can manifest deities, bodies with masks that are possessed by deities, or bodies that represent deities and show them to the community or audience.

Among the “tools” that have special significance in rituals and performing arts in Japan, masks and dolls have particularly high importance. Moreover, the belief that even objects serve as vessels of divinity probably functions. In Japan, people’s affection or affinity for dolls, artificial objects, robots, and the like may owe its origin to people’s belief in objects as divine vessels.

Just as the bodies of shrine maidens do, the bodies of actors/actresses represent deities, spirits, etc., communicate their oracles to other people, and manifest those divine beings. Being in a trance or appearing as deities, bodies that manifest deities become transient bodies or incarnations. Furthermore, indigenous Japanese deities began to be treated as *gongen*, or avatars of buddhas and bodhisattvas, because of their relationships to Buddhism, the belief that indigenous Japanese deities are manifestations of buddhas and bodhisattvas, and other factors, getting more and more complex with a double or triple nested structure. In such cases, the appearances of divine mediums are just those of transient incarnations, and when seen from a Buddhist perspective, their appearances become colors and shapes as objects of sight, visual images, representations, fantasies, or mere illusions.

Dancing is per se an act of transformation. During rituals, shrine maidens are transformed into divine mediums in a trance while dancing. In dramas, stages serve as places where actors/actresses transform themselves into objects of sight. Just as shamans who preside over festivals, rituals, and rites do, the bodies of actors/actresses are means to play roles, and become bodies that can transform themselves. Since embodying divine spirits on stage requires actors/actresses to spiritualize their bodies, they purify their spirits and bodies in preparation for the spiritualization, just as in *okina* and *sanbasō* Noh dances. Masks, dolls, and other objects are sometimes used in place of the bodies of actors/actresses, leading to the origination of various forms of dramas.

For the above-mentioned reasons, folk performing arts studies should be the foundation for theatrical arts studies and theater studies, and should be always treated as the basics of them. I believe that thought about the body, beliefs in the connection between the body and the sacred, thought about life and death, and the concepts of the relationship between the mind and body should be explored as unignorable issues while referring to the history of folk performing arts cherished by villages, rituals and festivals performed at Shinto shrines and Buddhist temples, and other elements. Tracing their origin will probably allow us to find their significance and true meanings.

Throughout history, the fertile world of Japanese folk performing arts has sophisticated and developed indigenous performing arts fostered in Japan while absorbing cultural elements from the Asian Continent, and has preserved and handed down those performing arts so that they can give us suggestions about what those performing arts looked like in olden times. In some senses, I believe, folk performing arts handed down in provincial areas in Japan look more like what they were at their starting point than those in the national centers do. Meanwhile, however, the centralized national governments played an important role in collecting various performing arts, songs and dances from the continent and domestic provincial areas, while trying to beautify and stylize those artistic elements during their process of further centralizing and strengthening themselves. The rich cultural activities of singing, dancing, performing arts, and theatrical arts have helped safeguard, liven up, and foster the lives of people.

Our joint research team held six sessions.

At the first research meeting, we as members of the joint research team discussed and decided on order of presentations, and the themes and subjects of the presentations, and determined that one or more members would present their research findings at each research meeting. The themes that we discussed first of all included thoughts about the “body” found in the history of folk performing arts; the roles of performers’ bodies; the relationship between training, preparation, and improvisation; the role of the bodies of individual performers and company performers; differences between the bodies of amateur performers and professional performers, and the significance of the differences; and “laughter” expressed in words and by bodies. We defined our research themes through active exchanges of questions and answers, and open discussions, while some members pointed out problems with the themes.

While the subsequent research meetings progressed in line with the historical process as long as possible, we avoided fixing particular borders between eras or fields to ensure that participating members as experts in different eras and fields could have open discussions while placing importance on periodizations. I believe that the process of eliminating and overcoming prejudices and stereotypes while gradually shifting the focuses of members’ knowledge and images to bridge the gap between them can be viewed as an achievement of interdisciplinary joint research.

The second meeting was dedicated to discussions on the “bodies” of actors/actresses, performers, dancers, etc. in the traditional theater. For this purpose, we examined Zeami’s theory about Nohgaku, where his heightened awareness of bodies can be found, subsequent theories about Nohgaku and performing arts, and the corporeality of performers expressed in Noh and Kyōgen dramas. Focusing on role-playing and *yūgen*, and the bodies of performers and characters, we discussed medieval thought about bodies, performers’ bodily expressions in contemporary Nohgaku, and even actual performances.

The third meeting focused on the early modern theater. To consider the bodies and expressions of Kabuki actors and their particularity in various settings, from *furyū* (group dances), *nenbutsu* (prayer) dances, early Kabuki dances, and dances performed on stage, to *monomane* (role-playing), we began by examining the bodies of Kabuki actors depicted by *shibai e* and *yakusha e* (woodblock prints depicting theatrical scenes and Kabuki actors), examples of the bodies of actors playing the roles of boys and women, body movements to the accompaniment of Kabuki music, puppets in the Bunraku puppet theater, and a comparison between puppets and actors moving to the accompaniment of *gidayū* storytelling and its music (and their Kabuki adaptation). At the level of written plays, we also explored the view on the human body in the early modern theater, focusing on the view on the human body seen in *jōruri* works by Chikamatsu Monzaemon, and the bodies of puppets.

At the fourth meeting, we analyzed thoughts about “bodies” found in the history of folk performing arts, the roles of bodies in popular Kagura and festivals as the archetypes of folk performing arts, and performers’ physical training and preparedness, and then paid attention to not only regional differences but also historical changes due to modernization and other factors. We also took up the theme of dolls/puppets again, which covered a wide range of topics, from techniques in operating *karakuri ningyō* (mechanical dolls) and *tezuma ningyō* (manually

operated dolls), which are traditions originating in early modern times, to the latest multimedia phenomena with virtual “dolls” created through contemporary visual culture.

The fifth meeting was dedicated to the theme of bodies seen from the perspective of comparative studies of the theater. We examined Japanese people’s first encounter with an outer world (Europe), traditional Japanese performing arts and the art of tea ceremonies seen from the perspectives of *nanbanjin* (Europeans who visited Japan from the late 16th century onward), differences between Japan and Europe in terms of the theater, music, performing arts, views on bodies, etc., which are found in the Europeans’ reaction to those elements in Japan, and the relationship between direction and bodies in early-modern Kabuki. In addition, focusing on “bodies” in the ever-changing modern and contemporary Japanese theater, and dancing styles such as *buyō*, *shin buyō* and modern dance, we discussed differences between the views on bodies in modern times, which marked a turning point, and those in the traditional Japanese theater.

At the sixth meeting, we analyzed artistic rebellion through the “body” and the “flesh” in post-WWII Japan, issues about new body revolution led by Tatsumi Hijikata and other *butoh* performers, and prominent works by theater people and *butoh* performers. In post-WWII Japan, issues about the “flesh” itself were given key importance in the theatrical world. It is thought that leaders in this field went back to the traditional Japanese mode of bodies that had been nurtured in popular performing arts and farming since ancient times, while featuring violent and even grotesque body movements with sensual charms, to shed new light on the relationship between life and death.

The scope of our discussions about a future vision covered the latest trends in the body/flesh in contemporary theater and dances, the creation of philosophies about dolls and artificial bodies equivalent to the body/flesh, the roles that robots and androids play in dramas written and directed by Oriza Hirata in particular, and even characters in the virtual world (such as Hatsune Miku).

Based on the above-mentioned issues, we conducted research activities to shed new light on what the body means to Japanese people, building on the traditional theater’s view on the body to consider a new mode of the flesh unique to modern and contemporary times, and the creation and development of the roles of, and philosophies about, dolls and artificial bodies equivalent to the flesh. Traditional Japanese performing arts have been unique in that bodies had possibilities of transforming themselves into any kinds of things, and performers acting as characters built their own bodies in suitable forms for the characters, and established a structure of styles. It seems that performers aim to resonate with the audience through the flow of energies and breaths while dancing to represent kaleidoscopic transformations, and achieve communication through the unique charms of dances using body language. By contrast, the modern Japanese theater and especially *shingeki*, which have been oriented toward Western theatrical arts, have to adopt a play-focused style of drama, where actors/actresses perform as characters through words, which take a vital part in this theatrical style, in conformity with the play. Trying to remain loyal to the conceptual world created by the playwright while tackling the setting of the play, the bodies of actors/actresses are forced into subordinate positions in relation to the setting and characters. Moreover, in modern dramas, focus is placed on the inner worlds of characters, so their bodies function just as visual representations of those inner worlds,

suggesting a completely different view on human beings from those found in other theatrical styles.

Our research meetings mainly contained presentations, Q & A sessions, and discussions, and dealt only quickly with visual materials, in addition to literary materials. Although our joint research may not be described as very original in terms of both themes and methods, it included comprehensive, interdisciplinary approaches, such as ones based on comparative studies of cultures, which are suitable for the tradition of Nichibunken. I believe that the theme we tackled helped reveal the essence of theatrical arts.

Anyway, I understand that this joint research was the first attempt to tackle various issues in this field from a wide variety of perspectives using a wide range of methods with the participation of experts in diverse fields, and introduce these issues to other experts and general readers.

From fall 2018, I began to edit articles written by members of the joint research team, and a collection of the articles was scheduled to be published as a volume of the Nichibunken Japanese studies series by a publisher. I am very happy that the book was published in February 2019<sup>1</sup>.

We still have many challenges yet to address and many issues yet to discuss, which will be tackled from now on.

---

<sup>1</sup> Bonaventura Ruperti, ed. 2019 *The Body in the Japanese Performing Arts—Death and Life, Puppets and Artificial Bodies* (in Japanese), Kōyō Shobō, Kyoto.

# 新しい「世界文学」を構築する試み

## —堀田善衛の『歯車』を中心に—

王中忱

### 1、始めに

中国の大学における日本文学に関する講義はおもに日文科と中文科に分けられて行っている。後者の場合、殆ど比較文学或いは「世界文学」という授業科目に収められるため、日本文学は当然、「世界文学」の一環として扱われている。この文脈の中で、堀田善衛(1918-1998)の小説『歯車』は取り上げるべき作品だと思われる。というのはこの小説は国共内戦期の中国を題材とするだけでなく、中国現代文学の代表的な作家である茅盾(1896-1981)の長編小説『腐蚀』と深く関わっており、しかも作家本人が新しい「世界文学」の構図を意識しながら書いた実験的な作品だからである。言い換えれば、比較文学の授業においても、世界文学の授業においても、『歯車』は読み応えのあるテキストだと考えられる。

ところが、近年までの『歯車』を巡る論考を調べてみると、多くはこの小説のとらえた「中国題材」及び主題設定と見なされる「政治と人間」という問題に集中しており、『歯車』と『腐蚀』との関連性に関心を寄せなかったようである。先行研究のこのような状況を踏まえて、本稿は『歯車』と『腐蚀』との間テキスト性を確認しながら、「西洋かぶれの文学青年」を自認する堀田善衛が茅盾を始めとする同時代の中国文学に目を開いた意味を分析する。その上で、堀田は単に茅盾の「小説の構想」を自らの作品に取り入れただけでなく、その構想を書き換える作業によって、新たな語りの構造を作り出そうとすることを明らかにする。最後に、『歯車』を『腐蚀』の続編またはパロディとして戦後中国文学の系譜に置いて読み、西欧中心な「世界文学」の構図から脱する新しい「世界文学」を構築する可能性と困難性を検討する。

### 2、茅盾を始めとする同時代中国文学と出会いの意味

堀田善衛の『歯車』は茅盾の『腐蚀』と関わりのあることが知られていないわけではない。この小説は1951年5月に発刊された『文学51』という雑誌の創刊号に掲載され、同年11月、初出に加筆した上で、同作者の『広場の孤独』と合わせて一冊の単行本として中央公論社より出版された。単行本の『広場の孤独』の「あとがき」で、堀田は『歯車』について次のように述べている。

『歯車』は、1946年秋、私がまだ国共内戦のため緊迫して癡癡してゐた上海にゐた頃の生活及びある中国人学生から聞かされた、一種の茅盾論の如きものに端緒を

え、これが47年帰国後もますます胸中で膨れ上がり、息苦しくなって来たので、49年春、瀉血のつもりで書いた。発表は2年後の51年5月の『文学51』。<sup>1</sup>

ここに記される「茅盾論」とは茅盾の論じたものであるか、それとも茅盾を論じたものであるか、定かではないが、堀田が『歯車』の一つの材源として「ある中国人学生から聞かされた……もの」を、わざわざ「茅盾論」に譬えて語るのは、この小説の制作が中国作家の茅盾と何らかの形で関わっていることを、多くの読者に暗示を与えようとしているに違いない。

初めて堀田の『歯車』と茅盾の『腐蝕』との関連性を言及したのは、中国文学研究者の竹内好(1910-1977)である。1952年1月1日付の『日本読書新聞』に掲載された「堀田善衛著『広場の孤独』」という書評で、竹内氏は「この作品(『歯車』一引用者注)と、それにヒントを提供している茅盾の『腐蝕』を比べてみると、いろいろの意味でおもしろい」と述べているが、「題材の関係もあって、今日の読者に、そう切実に訴えないか」と考えているため、議論の深入りを避けた。

竹内好氏に続き、1952年2月25日、「近代文学」、中国文学研究会、「荒地」の三者の共催で開かれた堀田善衛の芥川賞受賞(1951年下半年)の記念祝賀会で竹内好と同じく中国文学研究会の同人である小野忍(1906-1980)は「茅盾の『腐蝕』という小説」が「堀田さんが『歯車』を書く時材料の一つされた」と言っている。<sup>2</sup>さらに、同小野氏は『腐蝕』の翻訳者として、日本語版の初版「解説」(1954年4月13日)で、「この小説が日本人にも強く訴える力を持っている」と説き、その「一つの例証として」、「敗戦後上海でこの小説を読んだ堀田善衛氏がこの小説の構想を氏の「歯車」のなかに取り入れている」<sup>3</sup>と明白に指摘した。

これらの資料を読めば分かるように、『歯車』が発表される際、この小説が茅盾の『腐蝕』と関連していることは既に知られている。しかし、堀田善衛はなぜ、茅盾という中国作家に注目したか、彼と茅盾文学との出会いはいつ頃始まったのか、などのことについて、やはり、10数年後に公表された堀田の回想談を俟たねばならない。1970年、河出書房新社によって出された『現代中国文学』シリーズに収められた茅盾著『子夜』(竹内好訳)の「解説」としての「回想・作家茅盾」で、堀田善衛は次のように語っている。

私ははじめて中国の現代文学に接した、と思ったのは、1941、2年頃に、小田嶽夫氏の訳(抄訳)による『大過渡期』という小説によって、であった。この『大過渡期』は茅盾氏の『蝕』という三部作中の『幻滅』と『動揺』の抄訳であるということである。

<sup>1</sup> 堀田善衛「あとがき」、『広場の孤独』、中央公論社、1951年11月。

<sup>2</sup> 「堀田善衛芥川賞受賞祝賀会の記」を参照、「近代文学」1952年5月号。

<sup>3</sup> 茅盾著、小野忍訳「解説」『腐蝕』、筑摩書房1954年6月、310ページ。

さてこの茅盾作『大過渡期』は、従ってアンドレ・マルロー作『王道』とか、ジャック・シャルドンヌ作『祝婚歌』、あるいはピエール・マコラン作『女たちに蔽われた男』、また『女の学校』を始めとするアンドレ・ジイドの諸作などと並んで、あるいはそれらの西欧の新文学に立ちまじってその頃の読書人たちに供されたものであった。

中国現代文学、あるいは中国古典というものは、いまでも現代日本文学に、世界文学の一環としてのかかわりあるものとして議論され、評価されるまでには至っていないものであるが、当時においてはそれは一層ひどく、いわば何か特殊なものとして差別されていたであろう。

さてところで、茅盾氏のこの『大過渡期』は、西欧の新文学とともに、いわばこみで紹介されたことは、私のような西洋かぶれの文学青年にとっては、一つの仕合せであった。(中略) しかもこの『大過渡期』は、いわば社会小説、あるいは今日のことばで言って全体小説のはしりのようなものであり、社会をトータルに描こうという意思に貫かれたものであった。そこところが、当時、心理に急傾斜をした傾きの多かった西欧新文学とは異なっていて、しかもそれがほかならぬ現代中国に於いて行われているということに、まず、私の注意は引かれたのであった。<sup>4</sup>

引用はあまりに長すぎたが、本稿の主旨に沿って注目に値する三つの要点をまとめて挙げたい。第一、堀田善衛が1941年または1942年頃に茅盾の長編小説『蝕』の日本語抄訳である『大過渡期』を読んだ。これは彼が初めて接した茅盾の作品だけではなく、現代中国文学との最初の出会でもある。第二、茅盾の『大過渡期』が当時、「西欧の新文学に立ちまじって」紹介されたため、「西洋かぶれの文学青年」の堀田善衛は目に留めたが、読んでいるうちに、堀田氏は却ってこの作品に見出す「心理に急傾斜をした傾きの多かった西欧新文学とは異なっている」特徴、即ち「社会をトータルに描こうという意思に貫かれた」小説の書き方に感心させられた。第三、中国現代文学が「世界文学の一環として」見なされていない時代的な雰囲気の中にも、茅盾文学との出会いを通して、堀田善衛の「世界文学」への認識が変わるようになった。

因みに、当時の日本における『大過渡期』及び茅盾文学に対する反響を考察してみる。『大過渡期』の翻訳者は小田嶽夫(1900-1979)であり、出版元は第一書房である。奥付によると、この訳書は3回発行されている。初刷は昭和11(1936)年8月20日、印刷部数は2500部と記される。翌昭和12(1937)年3月1日に同書の改装版を出したが、太田進の調査によると、この「改装」というものは「初刷の装訂と比べて変わりはない

<sup>4</sup> 堀田善衛「回想・作家茅盾」『現代中国文学2 茅盾』、竹内好訳、河出書房新社、1970年10月、381-382ページ。

ようだ」。昭和 14（1939）年 5 月 20 日、同第一書房が「大過渡期」を「悩める支那」に改題して「第二刷一千部」と記したが、太田進が『『第 2 刷』と称するものも、切り貼りによる改題だけで、売れ残りを売ろうとした出版社のたくらみであったという可能性もないわけではない』<sup>5</sup>と指摘している。当時の茅盾文学に対する紹介と評論を見ても寥寥たるものであり、現代中国文学の新鋭研究者を集めた中国文学研究会の中心メンバーである竹内好が「茅盾論」という文章で「茅盾のような作家がもてはやされることは、究竟、文学の貧困を立証する以外に何物もふくまれぬ」と述べ、茅盾の文学全体に辛辣な否定的評価を与え、「もし僕が過褒に陥ったとすれば、それは僕また隣邦の青年と共に好んで糞を食う人種だからである」<sup>6</sup>とまで言っている。このような茅盾に対する日本の受容状況に照らしてみれば、「西洋かぶれの文学青年」と自認している堀田善衛の反応はかなり特異的であると言えよう。

勿論、1970 年代初頭の時点に立った堀田善衛が 1940 年代の堀田善衛を語った回想文を堀田研究の資料として使う時に、ほかの資料、とりわけ 1940 年代に著された一次的な資料を合わせて検証する必要がある。周知のように、堀田は 1940 年慶応義塾大学文学部に在学中、既に詩を書き始めた。1942 年 9 月に学年を繰り上げられて卒業した後、吉田健一（1912-1977）、中村光夫（1911-1988）らの『批評』誌の同人となり、詩を書き続けると同時に、文芸評論の執筆も開始した。1945 年 3 月上海に赴くまで公刊された堀田の文芸評論を調べてみると、『批評』誌に 5 回に亘って連載された「西行論」以外、主に西欧の文学・音楽を論じるものであり、現代中国文学には一言も触れなかった。茅盾と魯迅（1881-1936）の作品から感銘を受けたことがあるとしても、未だ彼の心の奥底に潜んでいるようである。上海で敗戦を迎えて中国国民党中央宣伝部対日文化工作委員会に留用された堀田善衛が執筆活動を怠けず、1946 年 6 月に『改造日報』（上海発行）に発表された「反省と希望」というエッセイの中に、魯迅の言葉を取り入れた。日本へ引き上げた後書かれた小説「被革命者」（『改造文芸』1950 年 1 月号）の結末に、上海にある魯迅の墓に向かう場面を設定し、ある人物の口で「魯迅がいま生きていたら、果たして中共文化人になっているかどうか」という話題を提起している。『齒車』もこの延長線上にある作品であるにほかならない。かくの如き、意識の中に潜在する中国現代文学者及び彼らの作品を甦らして自らの作品の中に取り入れるのは、まさに戦後から再出発した堀田文学の一つの新しい方法となっている。

こうして辿ってみると、1970 年に、堀田が「中国現代文学」を「現代日本文学に、世界文学の一環としてのかかわりあるものとして」議論すべきと提言しようとするのは、

<sup>5</sup> 太田進「『動揺』『追求』の日本語訳について」『茅盾研究会会報』（大阪）第 6 号、1988 年 2 月、10 ページ。

<sup>6</sup> 竹内好「茅盾論」『中国文学月報』第 14 号、1936 年 5 月。ここに付け加えて説明する必要があるのは、竹内好が 1960 年代に茅盾の代表作『子夜』の翻訳に携わり、訳者の「解説」で「当時私の好みは郁達夫など主情的な作家にあったが、茅盾の強烈な散文精神はいつも気にならなかった」と述べ、自らの「茅盾論」を見直している。竹内好「解説」『夜明け前—子夜』（『中国現代文学選集 4 長編小説 1』）、平凡社 1963 年 9 月、399 ページ。

彼の戦後から試みた新しい文学方法に基づいたものであり、彼が目指している新しい「世界文学」の枠組みのなかで自分のこのような文学方法を意味づけようとする考えを現わしたとも言える。

### 3、眼差しと語りとの交錯、そして複線的な構合力

以上の認識を踏まえて『歯車』というテキストを読む際、先ずそれに先行するテキストと見なされる茅盾の『腐蝕』を考察する必要があると思われる。『腐蝕』は日中戦争を背景に、重慶国民党政権下の特務機関の工作を強制される一人の若い女性の日記という形式に託された日記体の長編小説である。日記の書き手である趙慧明は嘗て南京のある大学で学生運動の先頭に立っており、小昭という左翼青年と恋に陥り、同棲生活を送ったが、思想の分岐で二人は別れてしまった。その後、彼女は特務機関に陥れられ、知識人と青年学生を監視・弾圧する側に立たされている。小説は趙慧明の目を通して秘密警察組織の内幕及び国民党支配の暗黒な政治を暴露すると同時に、この「腐蝕」した世界に置かれた趙の内面の苦悩と不安、人格の分裂、そして「腐蝕」の世界から脱出しようとするあがきを描いている。大雑把に言えば、『腐蝕』は社会政治批判的な小説と内面告白の心理小説が混じったところに成り立ったテキストである。

『歯車』は人物の設定においても、物語の展開においても、『腐蝕』と重なるところは多くあるが、堀田善衛は茅盾のテキストを援用しながら独創的な書き換え作業も行っている。これに対して、近年ようやく現れてきた若手研究者陳童君の論文は周到な分析を与えている。陳は堀田が『腐蝕』の第一人称日記体を第三人称の物語に書き換えたところに着目、とりわけ作家堀田の「分身である『留用』日本人の伊能を作品の主人公にしたこと」を高く評価し、「『腐蝕』から『歯車』へ移行する際に新しく入れられた『留用』日本人の視点は、物語の構造に大きな変化を与え、『腐蝕』の主題を深化させた」<sup>7</sup>と説いている。

陳童君の論文のタイトルが示すように、陳の関心は主に「留用」日本人のまなざしに置いてあるが、小説のもう一人の主要な人物、即ち『腐蝕』の趙慧明になぞらえて設定された「秘密警察的な文化機関」の工作に従事する若い女性陳秋瑾も注目に値する存在である。本多秋五（1908–2001）に言及される通り、『歯車』には「陳秋瑾女士が三回長物語をする」ことがあり、単行本のページで数えてみれば、陳女士の話は作品全体の約半分を占めているため、この小説は伊能の視点で貫かれたものではなく、寧ろ、伊能のまなざしと陳秋瑾の語りが交錯することで構成されたのである。陳秋瑾の「長物語」に対して、本多秋五はさらに「国民党の女スパイが、日本人の伊能に、どうしてそんなに心の奥の奥の秘密まで洗いざらい喋るのか。これを日本人同士の関係に置き直してみた

<sup>7</sup> 陳童君「『留用』日本人の〈まなざし〉—堀田善衛『歯車』の生成とその問題意識」『国語と国文学』（東京大学国語国文学研究会）、2013年6月号、60–61ページ。

ら、よほど不可解な現象であろう」<sup>8</sup>と訝しげに語ったが、「日本人同士の関係」を超えて、即ち一国の国語環境を離れたところに、伊能と陳女士との対話関係を成り立たせるのは、堀田善衛の意識的な試みであるに違いない。若し、茅盾が日記体における第一人称の視点に、小説の書き手（作者）の視点を密に加える<sup>9</sup>ことによって、西洋型の内的閉鎖的な心理小説を開放させようとするなら、堀田善衛が茅盾の『腐蝕』を先行テキストとして意識しながら、敢えて日記体を捨てたのは、彼が『腐蝕』のような社会的な心理小説と異なる複雑な人間の絡み合う「関係小説」と「思想小説」を求めているからである。このような意味で、小説『齒車』は一つのユニークな「茅盾論」であると言ってもよかろう。

#### 4、終わりに

『齒車』の冒頭には伊能の視点から、「終戦のあくる年」と記しており、テキスト内の時間はその時点から始まる。それ故、人物設定やストーリーの展開などが『腐蝕』と多く重なっているにも拘らず、執筆の時間においても、物語の時間においても、恰も『腐蝕』の続編に当たる。

偶然ではないと思われるが、戦時下に書かれた『腐蝕』も戦後、とりわけ国共内戦が激化状態となっているうちに、広く読まれるようになった。戦後国民党政府への不満を持つ多くの読者は『腐蝕』から共感を覚えるに違いないが、共産党にとって国民党に攻撃する恰好の材料であるため、蘇中、太岳、華北、東北の各「解放区」が争ってこの小説を大量に刷っている。<sup>10</sup>1950年になって、有名な映画監督の黄佐臨により映画化され、初めは好評を受けたが、間もなく、小説原作も映画も「女特務」に同情し過ぎたと見なされたため、当時の「反革命分子肅清運動」の精神に反していると批判された。

『腐蝕』の続編に当たる『齒車』は、若しこの時期の中国文学の流れのなかに置き直して読まれるなら、どのように評価されるか。歴史上の「若し」に答えることはできないが、その「若し」を考えるのは無意味ではないと思われる。1950年代の後半から、アジア・アフリカ作家会議運動の先頭に立っている堀田善衛は何回か中国を訪れ、茅盾を始めとする中国文学者と親交を結んだが、彼の作品、とりわけ中国を題材とする代表的な作品は一切中国語に訳されていなかったようである。このような意味で、今、『齒車』を含む堀田善衛の中国題材の作品を「世界文学」の枠組みに置いて読む必要性がもっと感じられる。というのはこれらの作品が今なおわれわれに、「どのような世界文学を目指すべきか」ということを、問い続けているからである。

<sup>8</sup> 本多秋五『物語 戦後文学史』（下）、岩波書店1992年5月、18ページ。

<sup>9</sup> 是永駿「『腐蝕』における文体と構造」、初出：『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念 中国語学・文学論集』、1983年12月；氏著『茅盾小説論』、汲古書院2013年1月、87-88ページを参照。

<sup>10</sup> 鐘桂松「『腐蝕』—従小説到電影」『書城』2011年7期、63-64ページを参照。

# Attempt to Construct New “World Literature”: A Study Focused on Hotta Yoshie’s *Haguruma*

Wang Zhongchen

## 1. Introduction

At universities in China, Japanese literature is taught mainly in Japanese literature departments and Chinese literature departments separately. In the latter departments, Japanese literature is mostly included in comparative literature courses or “world literature” courses, so it is naturally dealt with as part of “world literature.” In this context, *Haguruma* (齒車; lit. “Gear Wheel”), a novel by Hotta Yoshie (1918–1998), is thought to deserve discussion because this novel not only describes China during the civil war between the Nationalist Party and the Communist Party but also is closely related to *Fushi* (腐蝕; lit. “Putrefaction”), a Chinese novel by Mao Dun (1896–1981). In addition, *Haguruma* is an experimental novel that the author wrote with keen awareness of the new structure of “world literature.” In other words, *Haguruma* can be viewed as a text that deserves careful reading in world literature classes.

However, a review of recent studies on *Haguruma* shows that most of those studies have focused only on the “Chinese subjects” dealt with by the novel and the issue of “politics and human beings,” which can be seen as the main theme of this novel. It seems that few studies have been interested in the relationship between *Haguruma* and *Fushi*. Taking into account this context of the previous studies, this study analyzes the significance of the interest of Hotta Yoshie, who recognized himself as a “young Western-oriented literary enthusiast,” in contemporary Chinese literary works, including those by Mao Dun, while confirming the intertextuality between *Haguruma* and *Fushi*. After that, this study shows that Hotta not only incorporated Mao Dun’s “concept of the novel” in his work but also tried to create a new structure by reconstructing the concept. Finally, the study interprets *Haguruma* as a sequel to *Fushi* or its parody against the background of the history of postwar Chinese literature and explores possibilities for, and difficulties in, constructing new “world literature” separate from the structure of Eurocentric “world literature.”

## 2. Significance of Hotta’s Encounter with Contemporary Chinese Literature Represented by Mao Dun

The relationship between Hotta Yoshie’s *Haguruma* and Mao Dun’s *Fushi* is known to some extent. *Haguruma* first appeared in the first issue of *Bungaku 51*, published in May 1951, and its revised version with some additions was published in a book together with Hotta’s *Hiroba no Kodoku* (広場の孤独; lit. “Solitude in a Plaza”) by Chuo Koron in November of the same year. In the afterword of the book titled *Hiroba no Kodoku*, Hotta wrote about *Haguruma*:

I got my first inspiration for *Haguruma* from my life in Shanghai, which was amid tensions and convulsions due to the civil war between the Nationalist Party and the

Communist Party in the fall of 1946, and somewhat of a Mao Dun theory that a Chinese student told me about. The inspiration swelled in my mind and began to make me sick even after I returned home in 1947, so in the spring of 1949, I wrote the novel feeling as if I was vomiting blood. Two years later, the novel was first published in *Bungaku 51* in May 1951.<sup>1</sup>

It is uncertain whether the “Mao Dun theory” here indicates a “theory advocated by Mao Dun” or a “theory about Mao Dun,” but it is certain that Hotta dared to compare what “a Chinese student [had] told [him] about” to “a Mao Dun theory” to mention a source of inspiration for *Haguruma* because he intended to give readers suggestions about a certain form of relationship between his writing of this novel and the Chinese novelist.

It is Takeuchi Yoshimi (1910–1977), a scholar in Chinese literature, who first mentioned the relationship between Hotta’s *Haguruma* and Mao Dun’s *Fushi*. In his review titled “Hiroba no Kodoku by Hotta Yoshie” published in the January 1, 1952 issue of the newspaper *Nihon Dokusho Shinbun*, Takeuchi says, “A comparison between this work (*Haguruma* [note by the quoter]) and Mao Dun’s *Fushi*, which is a source of inspiration for the former, would be interesting in various senses.” However, Takeuchi believed “that it might have little appeal for readers today due to their subjects,” so he avoided discussing the comparison in more depth.

Following Takeuchi Yoshimi, Ono Shinobu (1906–1980), a member of the Chinese Literature Research Group of which Takeuchi was also a member, commented about *Haguruma* at the celebration party for Hotta Yoshie’s winning of the Akutagawa Prize (for the second half of 1951), which was held on February 25, 1952, jointly by the literary magazine *Kindai Bungaku*, the Chinese Literature Research Group and the literary magazine *Arechi*. Ono said, “The novel *Fushi* by Mao Dun was used as material for Mr. Hotta to write *Haguruma*.”<sup>2</sup> In addition, in the commentary appended to the first edition (published on April 13, 1954) of *Fushi*’s Japanese translation, Ono as the translator clearly wrote, “This novel has a strong appeal to Japanese people too,” and “For example, Hotta Yoshie, who read this novel in postwar Shanghai, incorporated the novel’s idea in his *Haguruma*.”<sup>3</sup>

These materials suggest that, when *Haguruma* was published, its relationship with Mao Dun’s *Fushi* was already known. However, such questions as why Hotta Yoshie paid attention to Chinese writer Mao Dun and when Hotta first encountered Mao Dun’s literary works had not been answered until Hotta’s memoir was published over 10 years later. Hotta Yoshie wrote in his “Recollection on Novelist Mao Dun” appended as a commentary to Mao Dun’s *Ziye* (子夜, lit: “Midnight,” translated in Japanese by Takeuchi Yoshimi) included in the “Contemporary Chinese Literature” series published by Kawade Shobo Shinsha Publishers in 1970:

<sup>1</sup> Hotta Yoshie 堀田善衛, “Atogaki” あとがき in *Hiroba no Kodoku* 広場の孤独, Chuo Koron, November 1951.

<sup>2</sup> See “Hotta Yoshie, Akutagawa-shō Jushō Shukugakai no Ki” 堀田善衛芥川賞受賞祝賀会の記 in the May 1952 issue of *Kindai Bungaku* 近代文学.

<sup>3</sup> “Kaisetsu 解説” in *Fushoku* 腐蝕 authored by Mao Dun 茅盾 and translated by Ono Shinobu 小野忍, Chikuma Shobo, June 1954, p. 310.

I remember that I first encountered contemporary Chinese literature around 1941 or 1942, when I read a novel titled *Daikatoki* (大過渡期, lit. “Major Transition Period”), an abridged Japanese translation by Oda Takeo of *Huanmie* (幻滅, lit. “Disillusion”) and *Yaodong* (動搖, or *Waverings*) in the trilogy *Shi* 蝕 by Mao Dun.

Mao Dun’s *Daikatoki* was accepted by readers at that time together with or among Western literary works in new styles, such as André Malreaux’s *La Voie royale*, Jacques Chardonne’s *L’Épithalame*, Pierre Mac Orlan’s 女たちに蔽われた男 (lit. “Man Covered with Women”), and André Gide’s works, including *L’école des femmes*.

Contemporary Chinese literature or Chinese classics have not yet been discussed or recognized as related to contemporary Japanese literature and as part of world literature. That was the case in the worse way at that time. Chinese literature was probably disfavored as somewhat idiosyncratic.

However, it was lucky for young Western-oriented literary enthusiasts like me to encounter Mao Dun’s *Daikatoki*, introduced together with the new wave of Western literature. [. . .] Furthermore, *Daikatoki* was somewhat of a social novel, or an early example of the “roman total” in today’s words, filled with consistent intention to represent society in total. This was a distinct feature of the novel, different from the new wave of Western literary works, most of which were strongly oriented toward psychological aspects. My attention was attracted first to this feature of the novel and its contemporary Chinese background.<sup>4</sup>

This overly long quotation can be summarized into the following three points that deserve attention from the perspective of this study. Firstly, Hotta Yoshie read *Daikatoki*, an abridged Japanese translation of Mao Dun’s long novel *Shi* around 1941 or 1942. This was not only the first work by Mao Dun that Hotta had read but also the first contemporary Chinese literary work he had encountered. Secondly, since Mao Dun’s *Daikatoki* was introduced “among works of new-wave Western literature,” the work caught the eye of Hotta as one of the “young Western-oriented literary enthusiasts.” While reading this novel, Hotta was deeply impressed by a feature of this novel “different from the new wave of Western literary works, most of which were strongly oriented toward psychological aspects,” that is, the way the novel was written with “consistent intention to represent society totally.” Thirdly, in the atmosphere of the time when contemporary Chinese literature was not viewed as “part of world literature,” Hotta Yoshie’s encounter with Mao Dun’s works changed the former’s recognition of “world literature.”

For reference, let’s review Japanese readers’ reaction to *Daikatoki* and Mao Dun’s literary works in general. *Daikatoki*, a translation by Oda Takeo (1900–1979), was published by Daiichi

<sup>4</sup> Hotta Yoshie 堀田善衛, “Kaisō: Sakka Mao Dun” 回想・作家茅盾 in *Gendai Chūgoku Bungaku 2: Mao Dun 現代中国文学 2 茅盾*, translated by Takeuchi Yoshimi 竹内好, Kawade Shobo Shinsha, October 1970, pp. 381–382.

Shobo. Its imprint shows that the translation was published three times. A first print of 2,500 copies was published on August 20, 1936. Its rebound version was published on March 1, 1937, but Ota Susumu examined it and commented, “The book design of the rebound version seems the same as the first print.” On May 20, 1939, Daiichi Shobo published a “second print of 1,000 copies” with a new title of *Nayameru Shina* (悩める支那; lit. “China in Distress”). However, Ota Susumu points out, “The publisher may be likely to have published a retitled patchwork under the name of the ‘second print’ with the hidden intention to sell out leftovers.”<sup>5</sup> Mao Dun’s works were seldom introduced or reviewed in Japan at that time. In a writing titled “Argument on Mao Dun,” Takeuchi Yoshimi as a central member of the Chinese Literature Research Group formed by promising scholars in contemporary Chinese literature commented, “The popularity of Mao Dun or similar types of writers only proves the poverty of literature,” expressing his bitter, negative view of Mao Dun’s “roman total.” Takeuchi even added, “If I excessively praised him, that would be because I am a member of a race of people who like to eat shit, together with young people in the neighboring country.”<sup>6</sup> Given such a reaction to Mao Dun in Japan, the response of Hotta Yoshie, who called himself a “young Western-oriented literary enthusiast,” to Mao Dun’s works can be viewed as very unique.

Needless to say, when we use the memoir about the 1940s written by Hotta in the early 1970s as material for studies on Hotta, we have to verify the material by comparing it with other materials, especially primary materials written in the 1940s. As widely known, Hotta began to compose poems in 1940 while studying in the Faculty of Letters, Keio University. After being forced to graduate ahead of his originally scheduled graduation year in September 1942, Hotta became a writer for the magazine *Hihyō* published by Yoshida Ken’ichi (1912–1977) and Nakamura Mitsuo (1911–1988), and he began to write literary criticisms while continuing to write poems. A survey of Hotta’s criticisms published before his departure for Shanghai in March 1945 shows that most of his critical works deal with Western literature and music, except for a serial of five articles on *Saigyō* published in *Hihyō*, and that he never mentioned contemporary Chinese literature. Even if he had been impressed by the works of Mao Dun and Lu Xun (1881–1936), it seems that the impression was still hidden in the depths of his mind. After experiencing the end of WWII in Shanghai, Hotta was assigned to work for the Anti-Japan Operation Committee, Central Publicity Board, Chinese Nationalist Party, but he did not stop composing poems. He quoted words of Lu Xun in his essay titled “Hansei to Kibō” (反省と希望; lit. “Reflection and Hope”) that appeared in the magazine *Kaizō Nippō* published in Shanghai in June 1946. After returning home, he ended his novel “Hikakumeisha” (被革命者; lit. “A Subject of the Revolution”) (January 1950 issue of *Kaizō Bungei*) with a scene where

<sup>5</sup> Ota Susumu 太田進, “Dōyō, Tsuikyū no Nihongo-yaku ni tsuite” 『動揺』『追求』の日本語訳について in *Mao Dun Kenkyūkai Kaibō* 茅盾研究会会報 (Osaka) Issue 6, February 1988, p. 10.

<sup>6</sup> Takeuchi Yoshimi, “Mao Dun Ron” 茅盾論 in *Chūgoku Bungaku Geppō* 中国文学月報, Issue 14, May 1936. I have to add here that Takeuchi Yoshimi worked in the 1960s to translate Mao Dun’s representative work 子夜 *Ziye* and said in the translator’s commentary, “I liked novelists featuring emotional descriptions such as Yu Dafu 郁達夫 and paid no attention to Mao Dun’s enthusiasm for prose,” reviewing his own view on Mao Dun. Takeuchi Yoshimi 竹内好, “Kaisetsu” 解説 in *Yoakemae: Ziye* 夜明け前: 子夜 (*Chūgoku Gendai Bungaku Senshū 4: Chōhen Shōsetsu 1* 中国現代文学選集 4 長編小説 1, Heibonsha, September 1963, p. 399)

a character visits Lu Xun’s grave in Shanghai and states, “If Lu Xun lived now, would he be a cultured member of the Communist Party of China?” It is certain that *Haguruma* is an extension of this line. After restarting his writing career in the postwar era, Hotta thus adopted a new way of bringing back to life contemporary Chinese writers and their works hidden deep in his mind.

Tracing Hotta’s writing career in this way, we now may say that his proposal in 1970 on discussions about contemporary Chinese literature as a relative to contemporary Japanese literature as part of world literature was based on the new way of literary creation that he began to try in the postwar era and represented his intention to attach meaning to this way of literary creation of his within the new framework of world literature that he was aiming for.

### 3. Intertwined Narratives and Perspectives, and Multi-Track Narrative Structure

When we read *Haguruma* with the above recognition in mind, the first thing we should do is probably examine Mao Dun’s *Fushi*, which is viewed as the prior text for *Haguruma*. Set in China during the Sino-Japanese War, *Fushi* is a diary-style novel written in the form of the diary of a young woman who is forced to carry out operations by order of the special service agency under the Nationalist Party administration based in Chongqing. Chiu Waiming, the woman who writes the diary, has the experience of leading a student movement at a university in Nanjing, falling in love with a young leftist called Xiaozhao, living with him, and leaving him due to an ideological disagreement. She is now forced by the special service agency to watch and oppress intellectuals and young students. Written from Chiu Waiming’s viewpoint, the novel not only reveals the inside fact of the secret police and the dark side of the Nationalist Party’s rule but also describes her sufferings, concerns and personality dissociation against a background of this “putrefied” world, and her struggle to escape from the “putrefied” world. Briefly, *Fushi* is a text based on a combination of a novel of social and political criticism and a psychological novel featuring internal confessions.

While *Haguruma* shares many features with *Fushi*, including backgrounds for characters and narrative development, Hotta Yoshie cited and retold Mao Dun’s text in an original way. This attempt by Hotta is thoroughly analyzed by Chen Tongjun, an emergent young scholar. Chen pays attention to Hotta’s adaptation of *Fushi*, which is written in the form of a first-person diary, into a third-person story, and especially values Hotta’s use of “a Japanese man named Inō who is assigned to work for the Chinese government and who is an alter ego [of Hotta]” as the protagonist. Chen argues, “The viewpoint of a Japanese person who is ‘assigned to work for China,’ which is newly adopted in the process of transition from *Fushi* to *Haguruma*, causes major changes in the narrative structure and deepens the theme of *Fushi*.”<sup>7</sup>

As shown by the title of Chen Tongjun’s paper, Chen’s interest lies mainly in the viewpoint of the Japanese person who is ‘assigned to work for China.’ However, there is another major

<sup>7</sup> Chen Tongjun 陳童君, “Ryūyō Nihonjin no Manazashi: Hotta Yoshie *Haguruma* no Seisei to Sono Mondai-ishiiki” 「留用」日本人のまなざし—堀田善衛『歯車』の生成とその問題意識 in *Kokugo to Kokubungaku* 国語と国文学 (University of Tokyo Japanese Language and Literature Research Group, June Issue in 2013, pp. 60–61)

character who deserves our attention: a young Chinese woman named Chen Qiu jin, who is engaged in operations of a “secret-police-like cultural organization,” modeled after Chiu Waiming in *Fushi*. As Honda Shūgo (1908–2001) mentioned, *Haguruma* has “three scenes where Chen Qiu jin tells long stories,” and her dialogue accounts for about a half of all the pages of the book *Haguruma*. Therefore, the novel is structured based on intertwinement between Inō’s viewpoint and Chen Qiu jin’s narrative, rather than being consistently Inō’s perspective. Concerning Chen Qiu jin’s “long stories,” Honda Shūgo says suspiciously, “Why does the female nationalist spy confess all things in the hidden depths of her mind to the Japanese man Inō? If this relationship were retold as a relationship between two Japanese persons, it would be quite an incomprehensible phenomenon.”<sup>8</sup> However, I believe that Hotta Yoshie should have intentionally attempted to enable a dialogue between Inō and Chen Qiu jin separately from a “relationship between two Japanese persons,” that is, from the environment of a national language. If Mao Dun tried to become free from Western-style introversive and exclusive psychological novels by adding the perspective of the author to the first-person perspective of the diary writer,<sup>9</sup> Hotta Yoshie dared to give up the diary style used by Mao Dun in *Fushi* while referring to *Fushi* as a prior text because Hotta wished to combine a “relationship novel” and an “ideological novel” to represent complex human relationships in a different style from that of socially oriented psychological novels such as *Fushi*. In this sense, the novel *Haguruma* can be seen as a unique commentary on Mao Dun.

#### 4. Conclusion

*Haguruma* begins with the phrase “In the year after the end of the war” from Inō’s viewpoint, and time in the text begins at that point. Therefore, despite many features in the backgrounds of characters and narrative development shared with *Fushi*, *Haguruma* is somewhat of a sequel to *Fushi* in terms of both the time it was written and the time of the story.

I do not believe that it is a coincidence that *Fushi*, written during the war, also won a wide range of readers after the war, especially at the peak of the intensified Chinese Civil War. While many readers who were unsatisfied with the postwar nationalist administration naturally felt empathy with *Fushi*, the novel was also an ideal weapon for the Communist Party to attack the Nationalist Party, so the liberated zones of Suzhong, Taiyue, Huabei and Dongbei competed in printing a huge number of copies of this novel.<sup>10</sup> The novel was also adapted into a movie by Huang Zuolin, a famous Chinese moviemaker, in 1950. The movie met with a favorable reaction soon after its release, but both the novel and movie were later criticized on the basis

<sup>8</sup> Honda Shūgo 本多秋五, *Monogatari Sengo Bungakushi* 物語 戦後文学史, Second volume, Iwanami Shoten, May 1992, p. 18.

<sup>9</sup> Korenaga Shun 是永駿, “*Fushoku ni okeru Buntai to Kōzō*” 『腐蝕』における文体と構造, first published in *Ijichi Yoshitsugu, Tsujimoto Haruhiko Ryōkyōju Taikan Kinen Chūgokugogaku Bungaku Ronshū* 伊地智善繼・辻本春彦両教授退官記念 中国語学文学論集, December 1983; See *Mao Dun Shōsetsuron* 茅盾小説論 by the same author, Kyūko Shoin, January 2013, pp. 87–88.

<sup>10</sup> See Zhong Guisong 鐘桂松, “*Fushi: Cong Xiaoshuo dao Dianying*” 『腐蝕』: 從小說到電影, *Shucheng* 書城, Seventh term, 2011, pp. 63–64.

that they were overly empathetic to the “female special agent” and went against the spirit of the then “counterrevolutionary element purge.”

If *Haguruma* as a sequel to *Fushi* had been read in the context of contemporary trends in Chinese literature at that time, what reaction would the Japanese novel have met with? Answering this question based on a supposition against a historical fact would be beyond our ability, but considering the question would not be meaningless. Serving as a leader of the activities of the Afro-Asian Writers’ Association from the late 1950s, Hotta Yoshie visited China many times and built friendships with Chinese writers, including Mao Dun. However, it seems that no representative works by Hotta, including *Haguruma*, had been translated into Chinese. In this sense, I believe that it is more necessary for us today to read Hotta Yoshie’s works dealing with Chinese themes, including *Haguruma*, within the framework of “world literature” because those works still continue asking us what the ideal state of world literature is.



## 世界の中の日本研究 ー批判的提言を求めてー オーストラリアの側面から

バーバラ・ハートリー

この40年、オーストラリアではアジアの国々の言語や文化を勉強しようという若者が年々増加しており、その現象の最も早い段階に始まったのが日本語であり日本研究であるといえよう。現在、ほとんどのオーストラリア人が、親戚が日本で働いた経験があるとか、知人の配偶者が日本人であるなどというように、日本となんらかの関係を持っている。最近では、特に中国語教育が盛んになってきているが、それでも日本語を勉強したい、日本に行きたい、日本で就職したい、という考える若者はまだ相当数存在する。このような傾向は、20世紀の最後の30年のことと思われがちであるが、日本研究自体の歴史は少なくとも一世紀にわたる。本稿では、オーストラリアにおける日本研究と日本語教育の歴史の概要とそこに携わってきた人物の功績について紹介する。

はじめに、オーストラリアでの日本研究の黎明期を支えた人物から、現代に活躍する研究者たちについて説明する。また、彼らが活躍した時代の社会事情を踏まえながら、オーストラリア連邦政府の政策が日本研究にどのような影響を及ぼしてきたかということ考察する。つぎに、オーストラリアで日本を研究している研究者はどのような問題に立ち向かうのか、またその問題にはどのような原因があるのか、どのように解決できるのか、という問いを通して、現在の日本研究の状況について考察する。最後に、オーストラリアからの側面だけではなく、グローバルな視点から見て、日本研究はいかに発展すればいいのか、またいかなる形で国際社会に貢献できるのか、といった点について提言を試みる。

### オーストラリアにおける日本研究の幕開け

オーストラリアにおける日本研究および言語教育の幕開けは、シドニー大学で「東洋研究学科」が創立された1917年に遡る。学科長に任命されたのは、日本で英語教師として、また政府のアドバイザーとしても働いた経験を持つジェームズ・マードックだった。彼の名著 *History of Japan* は、はじめて英語で書かれた日本の総合歴史書として有名である。また、夏目漱石の先生であったことでも知られ、漱石によると、マードックはかなり奔放で自由な雰囲気を持っており、日本人の学生から大変尊敬されていたそうだ。スコットランド人のマードックをシドニー大学の教授として招聘したのは、オーストラリア連邦政府国防省であった。これは、当時のオーストラリアが、1905年に日露戦争に勝利したアジアの小国日本を安全保障上の脅威とみなし、その国を知るための研究の必要性を感じていたからである。しかし、マードックにはそのような考えはなく、1918年のシドニー大学教授就任記念講演では、オーストラリアにおける日本研究は、安全保

障面や物質面だけでなく、文化的な側面にも重点をおく必要がある、と述べている。この政府とマードックの意見の相違は、一世紀も前のこととはいえ、現代の問題に充分に通じるものがある。つまり、学者の研究の目的と学者の研究に対する政府の期待との間には常に大きな溝が存在している、ということである。

当時のオーストラリア政府の日本への視点は、現代のオーストラリア政府のアジア全体への視点にもみることができよう。この視点のもとになっているのは、白人最優先主義である。オーストラリアでは、1890年代から、アジアの国々を「脅威」とみなす偏見が根強く存在する。20世紀前半には帝国日本を敵視し、ベトナム戦争の時には北ベトナムを支えた中国を野蛮とみなし、1970年代から1980年代には軍事政権の支配するインドネシアを警戒し、現在は経済発展の著しい中国を牽制している。

むろん、いつの時代も、アジア人に対する偏見を持たず、白人最優先主義に反対し、政府とは見解を異にするオーストラリア市民は存在している。<sup>1</sup>しかし、オーストラリアでは保守である「自由党」(Liberal Party of Australia)もしくはもう少し左翼的な態度をとる「労働党」(Australian Labor Party)いずれの政権下でも、排他主義的な見解が広く支持されるという傾向があるのは否めない。これには以下のような背景がある。自由党支持者には、かつての「偉大なる帝国」であり「母なる土地」であるイギリスとの伝統的な関係を保守しようとするモナキストが多い。一方、労働党支持者は共和主義を重んじるが、組合運動の中にも、オーストラリア人労働者が、より安い労働力として雇われていたアジアからの移民労働者を排除しようとしていた時代もある。また、1975年に、インドネシア軍人がオーストラリア人記者5名を殺害するという事件が起きた際は、オーストラリア政府のインドネシア政府に対する峻烈な批判に煽られ、強烈な敵意を持って人種差別的な態度をあらわにする市民も少なくなかった。現在ではほとんど聞かれない言葉であるが、「黄禍」(yellow peril)という奇妙な差別表現も、当時は日常的に折りにふれ語られていた。<sup>2</sup>

シドニー大学の東洋研究学科が開設された2年後の1919年、メルボルン大学では正式なアジア研究学科は設立されなかったが、一科目として日本語が導入された。当時は、英国のエリートの教育制度の影響で、古代ギリシャ語とラテン語がオーストラリアにおける第二外国語教育であるという意識があったため、メルボルン大学にアジア言語を導入することは、画期的な異例であると同時に困難をきわめた。1922年、日本語教育導

<sup>1</sup> 白人最優先主義が横行していた時代のオーストラリアは、白人ではない人々に対して様々な排他主義政策が実施されていた。このいわゆる「白豪主義」に従って、1901年の移住制限法から1973年の移民法まで、非アングロ・サクソン系の人々は、移民として受け入れられることがほとんどなかった。アボリジニに対する差別も、むろん白豪主義によって正当化されていた。むろん、白人のオーストラリア市民の中には、このような人種差別に反対し、活動していた人々も多く存在していたことは忘れてはならない。

<sup>2</sup> ロシアの無政府主義者ミハイル・バクーニン(1814-1876)がはじめて説き(Chen 2014, 51)日清戦争後ドイツ皇帝ウィルヘルム二世(1859-1941)によって広められた考え方。黄色人種の勢いが盛んになって、他人種、特に白人人種に及ぼすという災禍のこと。

入から3年後たつてようやく、大学唯一の日本人講師として、稲垣蒙志が選任された。戦時中のオーストラリアにおける日本人被抑留者の事情を研究している永田百合子の論文を読むと、稲垣の人生がいかに苦難に満ちていたかがよくわかる。稲垣は、真珠湾攻撃が起こってから、敵国である日本の人間として抑留されていた。その間、夫の帰りを待っていたオーストラリア人妻のローズは病をえて死んでしまう。戦後、稲垣はひとり日本に引き揚げたが、オーストラリアに戻ってくることはできなかったと思われる。<sup>3</sup>

シドニー大学に話を戻すと、東洋研究学科では、中国語やヘブライ語教育も始める予定があったが、1921年にマードックが逝去したために、その計画は頓挫してしまった。『オーストラリア語学教育の可能性を開く— 鍵となる九つの言語』*Unlocking Australia's Language Potential: Profiles of 9 Key Languages in Australia* (1994年)によると、マードックの後継者としてアーサー・リンゼイ・サドラー教授が学科長になったあとも、教員の数が限られており、研究業績も比較的少ない状況が1960年代まで続いた。

## 戦後から現代へ

戦争中に中断されていた日本研究は、1956年に、貿易大臣のジャック・マキュウアンが「日本とオーストラリアはともにアジアの縁に孤立している二つの国だ (Japan and Australia are two lonely countries on the edge of Asia)」(Patience 2010)と発言したこともあり、両国の貿易関係が1950年代の半ばあたりまでには改善され、それにあわせて、オーストラリアの戦後行政当局が日本研究の必要性を認識するようになった。

1950年代から1960年代にかけて、オーストラリアの日本研究者たちは、文学の専門家が大多数を占めていた。この時代で特に傑出している研究者は、ジョイス・アクロイドであろう。彼女は「強い」女性として知られ、1965年のクイーンズランド大学の日本語・日本文学学科の創立時には、学科長に就任した。当時、オーストラリアに3人しかいない女性教授の一人だった。ニューカッスルの生まれで、ケンブリッジ大学で日文学博士号を受けたアクロイドは、研究分野の幅がひろく、古典のみならず近現代文学も研究した学者として知られている。1979年に『折りたく柴の記』の英訳も出版した。

1990年代になると、ロイヤル・タイラーがオーストラリアの日本研究を牽引した。マードックと同様に英国出身の学者である。オーストラリア国立大学の教授として政府から六年間の研究助成を受けて英訳した『源氏物語』を2002年に出版し、英語による日本研究と学会に大きな影響を与えた。ここで注目すべきは、オーストラリア政府の研究助成金が、『源氏物語』の英訳というプロジェクトに支払われたということである。また、1979年に出版されたアクロイドの『折りたく柴の記』の英訳も、1990年代の政府の研

<sup>3</sup> 遠藤正敬は『近代日本の植民地統治における国籍と戸籍—満洲・朝鮮・台湾』のなかで、帝国時代の日本政府によって、いかに「外地人」が扱われていたかを論じているが、「外地人」の扱われ方とオーストラリアにおける被抑留者（日本人のほか、ドイツ人とイタリア人も含む）の扱われ方との間には多くの共通点がみられる。

究助成に支えられたタイラーの『源氏物語』の英訳も当時の古典文学、英訳に対する公的な研究助成が潤沢であった証拠で、古典文学研究の成果が多く挙げた。ところが、この2、30年のうちに、文学翻訳は政府に研究として認識されなくなり、研究費が支給されることは稀になった。(近年は、人文学研究さえも政府から軽視され、研究費を確保するのが困難な状況にある。)このように翻訳の重要性を軽視する傾向は、グローバルな規模における異文化の理解やその循環の停滞を招き、オーストラリアにおける学術研究の発展の妨げの要因となっている。

世界中の大学にみられるように、オーストラリアの大学でも教員数の縮小が盛んに行なわれている。そのあおりをうけて、日本の古典文学を読む授業を開講する教員の数も減少の一途をたどっている。かつては、初級・中級者対象の古典研究のクラスもあり、学生はより難しいレベルの日本語に触れ、幅広い文学の知識を身につけることができた。このようなすばらしい機会を、いまの若者たちは失ってしまっているのである。古語の知識なしでは、中世の文章も帝国時代の日本の書物も読解することができない。日本に留学するチャンスでもない限り、オーストラリア人学生が古典の勉強をすることは不可能になってしまった。

第二外国語教育の研究者のジョー・ロビアンコによると、1980年代半ばから1990年代半ばまではいわゆる「日本語教育の津波」に覆われる時代であった。当時オーストラリアでは「日本語ができれば、経済が強い国の日本で仕事ができ、お金が儲けられる」といった偏った考えを持っていた人が多かった。日本の不況が続く現代でも、学士過程では、日本語を勉強している学生の人数は増えてはいる。しかし、新自由主義の隆盛とともに、修士および博士課程の学生にたいする公的支援が縮小したことで、日本研究者になるために大学院に進もうという学生は減少の一途をたどっている。大学院生の人数は、大学の研究が成功しているか否かを図るリトマス試験紙である、とはよく言われることだ。現代オーストラリアの日本研究は、停滞とまではいかなくとも、積極的に拡大しているともいえない。大学院生の研究内容は、従来型の日本文学や歴史などのいわゆるハイ・カルチャーだけでなく、音楽、演歌、現代織物産業、建築学にまつわるサブ・カルチャーやポップ・カルチャーについてもみられるようになったことは特筆すべき点である。

女性の大学教員が今よりも少なかったアクロイドの時代以降、1960年代の第二波フェミニズムの影響もあってか、1980年代の後半からは、女性研究者による研究結果が増え始め、学界に意義のあるインパクトを与えるようになった。特に、ジェンダー批評を研究に導入する女性研究者の影響によってオーストラリアの日本研究の幅はより広がったと言える。1990年代の終わりまでには、男性の政治学者のアラン・リックスや文学研究者のヒュー・クラクとともに、フェミニズム評論をよく参照した女性の歴史学者のテッサ・モリス＝スズキとヴェラ・マッキーの研究も衆目されるようになった。また、大学院生の中にもフェミニズム批評の立場から研究する女性大学院生も多くなった。特に、マッキーの著書 *Creating Socialist Women in Japan* (2002年『日本における社会主義の女性

たち』)は、日本における女性解放主義の運動についての詳細な研究として高く評価された。日本の学界でも有名なモリス＝スズキは、少数民族の研究を精力的に促進している。彼女のもとには世界中からマイノリティ研究を目指す大学院生が集まってくる。モリス＝スズキもマッキーも慰安婦問題研究の先駆者でもある。現在、若い世代の研究者が重要な成果を挙げているのも、彼女たちが作った基盤があつてこそ、と言えよう。

## オーストラリアでの日本研究の今

これまで述べてきたように、オーストラリアの日本研究は、将来に向けて超えなければならぬ問題が山積している。しかし、この国には、問題に立ち向かっていけるだけの力を十分に持った研究組織や機関が存在しているのも確かである。例えば、Japanese Studies Association of Australia (JSAA、オーストラリア日本研究学会)は、南半球で最大の日本研究学会であり、研究者の活動的かつ学際的な交流の場として、国際的に周知されている。活動内容も多岐にわたっている。隔年で行なわれる国際学会には、世界中から参加者が集まる。学会誌 *Japanese Studies* は、オーストラリアの日本研究者によって編集される最も「健全」かつ有益な研究成果として、国際的に高い評価を得ている。政府の助成金が減少しているといえ、オーストラリアには日本研究を積極的に支援する公的機関がいくつか存在する。オーストラリア国立図書館の日本研究 grant や国際交流基金の日本研究フェロー制度はその最たるものである。研究助成の対象者のみならず、機関への訪問やメールでの問い合わせをする者に対しても、オーストラリア国立図書館のアジア部や国際交流基金のシドニー事務所のスタッフのサポートは手厚い。彼らの働きもまたオーストラリアでの日本研究の健全さを示しているものである。

前述したように、1970年代まで日本研究は歴史と文学が中心だった。しかし、日本が経済大国として浮上すると、経済学を専攻する学生が日本語や日本社会や文化を学ぶクラスを受講するというケースも多かった。しかし、大学のリストラが進んだ1990年代以降からは、歴史や文学といった伝統的な研究分野が学生の興味をかき立てなくなった。また、日本語初級や中級レベルのクラスの数には変わりがなくても、上級日本語や日本文化の講義を受講する学生は確実に減少している。以前には、10人以下の少人数のクラスも容認されていたが、2000年代に入ってから、クラスの最低開講人数が高く設定されたため、多くの日本語学科が生き残りをかけて、従来の伝統的な分野よりも、漫画やアニメのようなポップ・カルチャー的分野を導入するなど授業内容を変更している。

また、オーストラリアが抱える「距離の専制 (Tyranny of distance)」の問題もある。多民族社会と思われても、オーストラリアは、日本と同様、他国から海で隔たれた「島国」であるといえよう。国を出て異国で長期間暮らすのは経済的に厳しく、日本で十分に費用も時間もかけることのできる研究を行うことは容易ではない。公的助成の減少とともに、大学のサバティカル休暇制度の取得も難しくなっており、研究のための資金も時間

も確保できない研究者が増加している。日本に来るチャンスが少ない研究者は、高い日本語能力を維持することが困難であるという問題もある。<sup>4</sup>

## 将来に向けて

一般的に、日本研究は「地域研究」のひとつであるとみなされることが多い。しかし、地域研究は帝国主義的かつ冷戦主義的な視点を内包しているという批判がある。そこで、モリス＝スズキや酒井直樹らが「トランスナショナル研究」というモデルを推奨しているが、近い将来、日本研究も視点が閉鎖的であるという批判を受けがちな「地域研究」から「日本」という概念を包括的に問題化できる「トランスナショナル研究」に変換する必要があるのではないだろうか。そうしてはじめて、価値ある業績を残していくことが可能になるのではないだろうか。この「トランスナショナル研究」は、もともとモリス＝スズキと酒井が独自に作り出したモデルというわけではなく、スチュアート・ホールがその研究で提示したモデルであった。ジャマイカ出身のホールは、白人に支配されたイギリスの学界の「他者」として、カルチュラル・スタディーズにおける代表的理論家であり、いわばカリスマとして多くの学者に影響を与えた。しかし、トランスナショナル研究のモデルにも、中心と周縁という二項対立にからめとられている部分があるのは確かである。ポストコロニアル研究のガヤトリ・スピヴァクが常々言っているように、二項対立の脱却の不可能性を承知の上で、私たち研究者は、出来る限りの表象の道を模索しなければならない。

その不可能性に挑戦した研究として、*On the Western Edge: Comparisons of Australia and Japan* (2007年、『西洋の果てで—オーストラリアと日本の比較研究』)という小さなエッセー集を紹介したい。Comparisons of Australia and Japan (オーストラリアと日本の比較研究)という題名には、少し古臭い「比較文化」の印象も受けずにいられないが、この本の中には非常に研究的価値がある章が多い。特に、オーストラリア国立大学でアボリジニ研究をしていた保莉実の論文には目を見張るものがある。博士論文の完成の前にガンで死去した保莉の研究には、本人が提唱した *Points of connectivity* という概念がある (Hokari 2007)。アボリジニ研究をしていた保莉は、大学の友人たちに、マイノリティ研究をするなら、日本の少数民族研究の第一人者であるモリス＝スズキに会うようにと、なんども勧められたが、はじめは固く拒否していたという。日本研究とアボリジニ研究の間には何の関連性もないと考えていたのである。しかし、実際にモリス＝スズキに会ってか

<sup>4</sup> 日本語を母国語としない日本研究者には、どの程度の日本語能力が必要なのだろうか。1970年代以前は、日本に留学し、言語能力を上達させるチャンスがあった大学生は少なかった。研究者のなかでも、ヨーロッパ中心主義的な視点が横行し、日本語で書いてある研究資料などをまったく参考にしない者も存在していた。現在では、完璧な日本語ができない者には、日本研究をする資格がないとさえ思う研究者がいる。しかし、この考えは、以前の「外人には日本語ができない」といった日本人論的な考え方と表裏一体といえ、柔軟でないという点において共通しているといえよう。

ら、両者の研究の間に、いわゆる共通点 (common points) ではなく、よりよい包括的で柔軟な関連性 Points of connectivity があったことに気づいたというのである。つまり、全然違う分野でも、同じような包括的目的、問題の原因があり、学者同士の意見交換で、自分の研究分野をより理解できるということに気づいたのである。保莉のように、日本研究者も、日本研究という枠から積極的にはみ出し、様々に異なる分野の研究者と意見を交換したり、共同研究したりすることが、これからは必要なのではないだろうか。このような学際的な実践によってこそ、現代のグローバル社会に有益な研究成果を挙げることができるのではないだろうか。

### 参考文献

- 遠藤正敬『戸籍と国籍の近現代史 民族・血統・日本人』明石書店、2013年。
- 島津拓『オーストラリアの日本語教育と日本の対オーストラリア日本語普及—その「政策」の戦間期における動向』ひつじ書房、2004年。http://www2.gensha.hit-u.ac.jp/theses-archive/theses/3a.pdf
- Chen, An, *The Voice from China: An Chen on International Economic Law*, Heidelberg: Springer, 2013.
- Hokari, Minoru, “Lest We Remember: The Future of the Past in Japan and Australia,” in *On the Western Edge: Comparisons of Japan and Australia* (eds. Masayo Tada and Leigh Dale), Perth: Network Books, 2007, pp. 23–34.
- Lo Bianco, Joseph, “After the Tsunami, Some Dilemmas: Japanese Language Education in Multicultural Australia,” *Australian Language Matters*, January/February/March 2000, p. 1 continued on pp. 10–13.
- Marriot, Helen, *Unlocking Australia’s Language Potential: Profiles of 9 Key Languages in Australia. Volume 7: Japanese*, Canberra: National Languages and Literacy Institute of Australia, 1994.
- Nagata, Yuriko, *Unwanted Aliens: Japanese Internment in Australia*, St Lucia, Qld.: University of Queensland Press, 1996.
- Patience, Allen, “Two Lonely Countries on the Edge of Asia: Australia and Japan,” in *On the Western Edge: Comparisons of Japan and Australia* (eds. Masayo Tada and Leigh Dale), Perth: Network Books, 2007, pp. 85–102.
- Tada, Masayo and Leigh Dale (eds), *On the Western Edge: Comparisons of Japan and Australia*, Perth: Network Books, 2007.



# **Japanese Studies in the World: Towards a Critical Renewal From an Australian Perspective**

**Barbara Hartley**

Over the past four decades, there has been a steady increase in the numbers of young people in Australia wishing to learn about the languages and cultures of Asia. Initially, this trend manifested as the so-called Japanese language education “tsunami” (Coulmas; 1989; Lo Bianco 2000), which, in conjunction with the expansion of Japan’s bubble economy, saw students pursue Japanese language and Japanese Studies learning as a pathway to personal economic gain. Initial human capital motivation, however, was often superseded by a sincere and, in many cases, life-long interest in Japan. As a result, there are many Australians today who have a deep and abiding personal relationship with Japan. It is not unusual for young Australians who undertake in-country studies in Japan eventually to acquire permanent work with a Japanese enterprise or to have a life-partner from Japan. While the recent decade has seen a steep rise in the growth of Chinese language studies, considerable numbers of young people in Australia still wish to learn Japanese and to engage with Japan. The current trend to some extent continues the late twentieth-century’s Japanese language education “tsunami.” Interest in Japanese language and in knowing more about Japan, however, has a history of a century or more in Australia. This paper provides an overview of the emergence and development of Japanese Studies and Japanese language education in Australia, in addition to highlighting several key elements and key identities involved.

The discussion begins with an account of the contribution over the past hundred years of selected Japanese Studies identities in Australia while also referencing the socio-historic background against which these scholars and researchers worked. Attention is then given to the impact of Australian Federal Government policies on Japanese Studies, including language learning and teaching. Constitutionally, education in Australia is a state responsibility. Nevertheless, funding principally derives from Federal — that is, Australian Commonwealth Government — sources. Policies at this level therefore have a major impact on critical matters such as staffing levels and the availability of research funds. Consideration will also be given to the current circumstances of Japanese Studies in Australia, both to the problems faced by scholars and researchers and to networks and systems that support their endeavors. Finally, suggestions will be made on how Japanese Studies might develop into the future not merely in the Australian context but also in terms of the activities of the international community. Of necessity, the discussion that follows can be an overview only and proceeds from the author’s perspective.

## **The Emergence of Japanese Studies in Australia**

Systematic Japanese Studies and Japanese language education in Australia began in 1917 with the creation of a Department of Oriental Studies at the University of Sydney. James Murdoch, a Scot who had worked in Japan as an English teacher and an advisor to the Japanese government and who had come to Australia to teach Japanese, was appointed as the inaugural Department

Chair. Murdoch's three-volume study, *A History of Japan*, is acknowledged as the first English language work providing a comprehensive overview of Japanese history. Murdoch is also famous as a teacher of the great man of modern Japanese letters, Natsume Sōseki (1867–1916), who noted in 1911 that his relationship with the Scot was much more than that of student and teacher of language and history (Sōseki 1986).<sup>1</sup> The creation of a Department of Oriental Studies and the appointment of Murdoch was largely due to initiatives by the Australian Department of Defense. Although Japan had an alliance with Great Britain, this emerging Pacific “great power” had been the victor in the 1904–1905 Russo-Japanese War. The Australian authorities therefore viewed Japan as a threat to national security and were eager to collect information about the new force in the region. Adrian Vickers has noted how Murdoch authored offensive magazine articles relating to Chinese (cited in *The Oriental Society of Australia* 2019). Nevertheless, and in spite of the fact that he provided information to the military, Murdoch appears to have had some ambivalence about the notion of Japan as a “threat.” In fact, in his inaugural lecture at the University of Sydney in 1918, the newly appointed Department Chair stated that Japanese Studies in Australia should focus on cultural learning in addition to contributing to fields such as “trade and diplomacy” (Jacobs 1953). Although a full century has elapsed since Murdoch mounted this argument, current Japanese Studies scholars can face similar tensions arising from a mismatch between government research expectations and researcher interest.

The then Australian government's attitude towards Japan set a template for a century of often problematic engagement with the Asian region. Underpinning this engagement has been, and arguably continues to be, an official discourse that often valorizes Europe and accordingly devalues — or even demonizes — Asia. At least since the 1890s and even before, prejudice against the “threat” presented by Asia has had deep roots in some corners of the collective Australian psyche. While officialdom saw imperial Japan as a potential adversary in the early 20th century, similar attitudes marked later relations with other parts of Asia. During the Vietnam War, China's support for North Vietnam led to the construction of the People's Republic of China in highly negative terms (of course, the Australian alliance with the United States was a factor in this respect). For various reasons, relations with Indonesia, Australia's nearest Asian neighbor, have wildly fluctuated since the postwar formation of the Republic of Indonesia. Throughout much of the twentieth century, Australia's attitude towards Asia could be summed up in the general use of the highly offensive term, “yellow peril,” which racially stereotyped people from Asia as some sort of collective “other” to be feared.<sup>2</sup>

Certainly, many Australians embrace the notion of a closer relationship with sites in Asia and strongly oppose policies based on what are ultimately Europhile assumptions that marginalize people and places in Asia.<sup>3</sup> Nevertheless, during the century of Australia's

<sup>1</sup> I thank Professor Ushimura Kei of Nichibunken for bringing this article to my attention.

<sup>2</sup> The term “yellow peril” was circulated by the Russian anarchist Mikhail Bakunin (1814–1876) (Chen 2014: 51) and popularised by German Emperor Wilhelm II (1859–1941) following the First Sino-Japanese War. The concept relates to the fantasized “peril” that white races putatively face from powerful people in Asia.

<sup>3</sup> Australia, of course, was home to the notorious White Australia Police, the popular name given to the Immigration Restriction Act of 1901. This law worked to exclude migrants of non-European background (that is, “non-whites”) from entering Australia. The law was not amended until 1973. Discrimination against →

engagement with Japan, exclusionist positions have emerged from administrations of various political persuasions. On the one hand, the conservative Liberal Party of Australia is home to monarchists who wish to maintain what they regard as Australia's traditional relationship with the former "great empire," the United Kingdom, which they regard as the putative source of Australia's cultural roots. On the other, although leftist-leaning Labor Party supporters generally dismiss the importance of ties with the United Kingdom, there has at various times been a vexed relationship between Asian immigrant workers and the Australian trade union movement. From colonial times, trade unions tended to fear immigrant workers as cheap labor and therefore a threat to Australian workers' jobs. This resulted in campaigns built on premises that must ultimately be condemned as racist. Specific incidents could further inflame tensions of this nature. The murder in Timor Leste of five Australian journalists by the Indonesian military in 1975 saw a rupture in Australian-Indonesian relations that arguably prevailed for at least two decades.

In 1919, two years after the creation of the Department of Oriental Studies at the University of Sydney, the University of Melbourne first offered Japanese language as a subject, although no formal Department of Asian or Oriental Studies was established at that time. This was an era during which the influence of an elitist British education system saw ancient Greek and Latin as the de rigueur choices of students interested in "foreign" language education. In other words, the 1919 introduction of an Asian language into the curriculum of the University of Melbourne was an epochal event that presented considerable challenge. Three years later, in 1922, the university appointed its first and, for some time, only Japanese lecturer, Inagaki Senkichi (known familiarly as Moshi). Unfortunately, as Yuriko Nagata (1996) explains in her monograph on the plight of Japanese people detained during the war in Australia, Inagaki became a victim of Australia's aggressive policies towards residents who had come from Japan. Following the Pearl Harbour attack by the Japanese Imperial Navy, Inagaki was interned as a person from an enemy country. During his internment, his Australian wife, Rose, became ill and passed away. At the end of the war, Inagaki was repatriated back to his homeland with other former internees and seems to have never returned to Australia.<sup>4</sup>

Upon Murdoch's appointment as Chair of Oriental Studies at the University of Sydney, there were plans to introduce Chinese and Hebrew languages and studies. In 1921, however, Murdoch passed away and, unfortunately, this proposal was never implemented. Notwithstanding the scholarly achievements of Arthur Lindsay Sadler, who succeeded Murdoch as Department Chair, Helen Marriot (1994: 17) notes that 'until the 1960s [the Department's] size remained limited.'

↪ first-nation Aboriginal Australians was also justified under this policy. Many white Australian citizens nonetheless opposed the policy and were involved in protest movements against it.

<sup>4</sup> In his book *Kindai Nihon no Shokuminchi Tōchi ni okeru Kokuseki to Koseki: Manshū, Chōsen, Taiwan* 近代日本の植民地統治における国籍と戸籍 満洲・朝鮮・台湾 (lit. "Nationality and Family Registers in Modern Japanese Colonial Rule: Manchuria, Korea and Taiwan"), Masataka Endō 遠藤正敬 examines the treatment of *gaichijin* (people of the empire not of mainland Japan) by the imperial authorities. There are interesting — and disturbing — similarities between imperial era policies towards *gaichijin* and the treatment of wartime detainees (including Germans and Italians in addition to Japanese) by Australian authorities.

## From the Post-War to the Present

As with the teaching of English in Japan, Japanese language education in Australia was largely suspended for the period of the war. Nevertheless, when trade relations with Japan formally recommenced in 1956, the then Australian Minister for Trade, John “Black Jack” McEwan, observed that “Japan and Australia are two lonely countries on the edge of Asia” (Patience and Jacques 2007). It was logical that a resurgence in the study of Japan would soon follow.

In the two or three decades that followed the end of the war, the study of literature was one focus of Japanese Studies in Australia. Professor Joyce Ackroyd made a major contribution in this respect. Appointed in 1965 as the foundation Chair of the newly established Department of Japanese Language and Literature at the University of Queensland, Ackroyd was a woman of remarkable strength of character and tenacity. At the time, she was only one of a handful of women professors in Australia. (In Australia, the term “professor” is used in the sense of the English university system and is the highest of several faculty ranks.) Born in Newcastle, to the north of Sydney in Australia, Ackroyd took her doctorate in Japanese literature at Cambridge University. She went on to establish an international reputation as a scholar of both classical and modern texts. In 1979, she published an English translation of *Oritaku Shiba no Ki* 折りたく柴の記 (*Told Round a Brushwood Fire*). She also broke new ground by acknowledging the importance of the woman’s perspective with her 1959 work entitled *Women in Feudal Japan*. This work is occasionally cited by scholars even today.

A key figure in fin de siècle Japanese Studies in Australia was Royall Tyler who, like Murdoch, originally came from the United Kingdom. As a professor at the Australian National University (ANU), Tyler received a six-year research grant from the Australian government to produce a contemporary translation of *Genji Monogatari* 源氏物語 (*The Tale of Genji*). Published in 2002, Tyler’s translation was widely recognized both for its eruditeness and its readability and made a significant impact in English language Japanese Studies and translation studies circles. As noted, Tyler’s translation project was generously funded by the Australian government. In other words, the Australian authorities of the time willingly acknowledged the importance of translation as a means of facilitating cross-cultural, border-crossing communication that assists monolingual people to enter a world that they cannot otherwise access. Furthermore, support for the project indicated support for both literature and the classics. During the past two to three decades, however, translation, particularly literary translation, has fallen into disfavor, and it is difficult to imagine Tyler’s project being funded today. (In fact, there has been a recent devaluing of the humanities as a whole, which — as Julianne Lamond (2019) has noted with respect even to scholarship concerning Australian literature — has made it increasingly difficult for academics working in those fields to access public research funds.) This official dismissal of the value of translation by Australian funding authorities suggests a lack of understanding of the necessity to circulate knowledges from other sites and other cultures in order to maintain a vibrant and responsive local research community.

As has been the case in higher education globally, restructure and corporatization have been recent features of the Australian tertiary system. There has accordingly been a progressive reduction in the level of per capita public funding (accompanied by the questionable policy

expectation that compensatory monies be generated through a growth in international student numbers). One consequence has been a reduction in the number of faculty available to undertake teaching and research duties. Staff casualization is now widespread, a development that has increased pressure on faculty who remain in full-time paid work. This has impacted on Japanese language and Japanese Studies, particularly on the provision of courses dedicated to classical Japanese. Classical Japanese has been a tenuous entity in the Australian context, with not all institutions offering contemporary programs that included this element. Currently, there are no formal university offerings of classical Japanese in Australia, depriving students there of a valuable learning experience. This has largely been the result of the minimum student numbers “caps” that have accompanied university restructuring in Australia. Two or three decades ago, small numbers in specialist classes were accepted as necessary on scholarly grounds. The growth of neo-liberal decision-making based purely on profits generated, however, has largely seen the axing of offerings that do not reach what are often unreasonably high designated minimum numbers of students enrolled. Classical Japanese has been one casualty of this development. In addition to being unable to read medieval texts, students with no background in premodern language forms have difficulty accessing the materials produced by officialdom during the imperial era. It is of concern that the only Australian students who are able to engage in the study of the Japanese classics are those who choose to do so while on exchange in Japan.

Reference has previously been made to the Japanese language education “tsunami,” a phenomenon that occurred in Australia from the mid-1980s to the mid- to late 1990s. At that time, there was a misguided belief that Japanese language proficiency and knowledge about Japan would automatically lead to lucrative work associated with what was then the country with the second most powerful economy in the world. The “lost decades” that followed the bubble collapse, however, led to changes in student motivation. Many young people in Australia now come to Japanese Studies through manga and anime, ensuring that undergraduate numbers remain healthy. Nevertheless, encouraging students to progress to masters or doctoral higher degree studies remains a challenge. Furthermore, the reduction in full-time staff numbers that has accompanied the incremental withdrawal of government funds has seen a diminishing pool of faculty members who are able to undertake the supervision of young (and older) people interested in graduate research.

From a more positive perspective, a feature of current post-graduate activity in Australia is the diversity of topics researched. In addition to the traditional “high” culture fields such as history and literature, there is strong graduate interest in pop cultures, subcultures and in fields not generally associated with “Japanese Studies.” Accordingly, recent thesis topics in Australia have covered themes such as contemporary architecture, *enka* music and the relationship between the traditional and the modern in the Kyoto textile industry. There have also been a number of incisive close readings of manga and anime texts. This has arguably broadened understandings of Japanese Studies and will assist in ensuring the future survival of the field in Australia.

As noted above, the first University of Queensland Departmental Chair, Professor Joyce Ackroyd, was one of the few women professors of her era. From the 1970s, however, second wave feminism saw a steep rise in the numbers of women entering academia. This led to the

emergence of women scholars who achieved eminence at both the local and international levels. It also led to research projects that proceeded on the assumption of a strong gender critique. By the end of the 1990s, women scholars such as Vera Mackie and Tessa Morris-Suzuki had taken their places beside men such as political scientist Alan Rix, literary studies scholar Hugh Clarke, and linguist, J.V. Neustupny, in the pantheon of internationally significant Japanese Studies scholars from Australia. Vera Mackie's *Socialist Women in Japan* (1997), for example, was seen as a pioneering work in the global English-speaking Japanese Studies community. With the emergence of prominent women faculty, increasing numbers of graduate students adopted a feminist perspective in their research or, at the least, chose topics that profiled women's lives and experiences. More recently, this trend has been supplemented by a growing interest in queer theory and an acknowledgement of the problems associated with heteronormative assumptions in research. Morris-Suzuki, who achieved prominence also in the Japanese academic world, broke new ground with her studies of ethnic minorities and attracted graduate students wishing to research in this field from around the world. Both Morris-Suzuki and Mackie have conducted pioneering research into the issue of "comfort women" (Japanese Imperial Army sex slaves). It is no exaggeration to say that the current generation of young Japanese Studies scholars in Australia are building on the research achievements of women such as Vera Mackie and Terra Morris-Suzuki, as well as the work of the men referred to above.

### **Japanese Studies in Australia Today**

In addition to the difficulties previously outlined, Japanese Studies in Australia is arguably impacted upon by "the tyranny of distance," a coin popularized by Australian historian, Geoffrey Blainey, to explain how distance and a concomitant sense of isolation have influenced the formation of an Australian identity (Blainey 1966). Like Japan, Australia is an "island country" separated from other sites by the sea. Leaving Australia to study or research overseas presents a range of challenges, not the least of which can be the financial burden incurred. Declines in available research funds at both the national and institutional level add to the difficulties faced by Australian scholars who wish to engage in meaningful in-Japan research. This has been exacerbated by a reduction also in sabbatical entitlements. Researchers with little opportunity to visit Japan can struggle to stay abreast of current social topics and to maintain a high-level of Japanese language proficiency.

In spite of the challenges faced by Japanese Studies researchers in Australia, there are various entities that provide very positive support for the endeavors of scholars in this field. These include the National Library of Australia (NLA) and the Sydney office of the Japan Foundation. For the past decade or more, the NLA has offered competitive annual research grants that permit early career and more experienced researchers to spend time working on the Library's extremely comprehensive Japanese Studies collection. Although these funds have recently been opened to other Asian Studies scholars, Japan scholars remain eligible to apply. For researchers who are required to leave Australia to undertake archival or similar work in Japan, the Japan Foundation offers a range of awards that, once again, can be competitively accessed by beginning and senior researchers. There are not a few researchers in Australia whose most significant outcomes have

been made possible by Japan Foundation support. In addition to assisting with formal matters, such as the provision of grant application and acquittal information, staff at both the NLA and Foundation office are tireless in the provision of informal back-up for the Japanese Studies community. All members of that community in Australia owe these devoted staff a deep debt of gratitude.

Also significant in this respect is the professional organization, the Japanese Studies Association of Australia (JSAA). The JSAA is the largest Japanese Studies association in the southern hemisphere with activities ranging over a wide variety of fields. Its biennial international conference, which attracts participants globally, is renowned as a gathering that encourages respectful but robust interdisciplinary exchange. The JSAA's publication flagship, *The Japanese Studies Journal*, has a strong international reputation with editorial board membership and readership that extends far outside Australia.

### **Toward the Future**

Japanese Studies is generally viewed as a sub-set of “area studies.” Area studies, of course, has been the subject of strong criticism for the promotion of imperialist and Cold War-oriented perspectives that confine the field within exclusionist parameters (Miyoshi and Harootunian 2002). As a result, a number of scholars, including Sakai Naoki (2010), have argued for a model of “transnational studies,” that is, for a need to extend research foci well beyond the borders of any particular nation state. The “transnational studies” model derives from various sources and owes much the work of influential British scholar, Stuart Hall. Born in Jamaica and experiencing life as “the other” in the white-dominated British academic world, Hall became a representative theorist in cultural studies. He was a charismatic figure whose ideas inspired other scholars.

There is no doubt that Japanese Studies needs to discard its outdated “area studies” mantle and to be revitalized through the adoption of a new approach. This, as an aside, will involve a comprehensive interrogation of the meaning of the term “Japan.” Embracing the underlying assumptions of transnational studies will certainly contribute to the liberation of Japanese Studies from the suffocating environment of the area studies enclosure, plagued as it is by the centre/periphery or universal/particular dichotomy. It can only be of benefit to the field to have this dichotomy thoroughly disrupted and ultimately dismantled.

I would here like to introduce as a supplement to a transnational studies approach ideas from an anthology of essays entitled *On the Western Edge: Comparisons of Australia and Japan* (2007). While the main title recalls “Black Jack” McEwan’s “two countries on the edge of the Pacific” aphorism, the use of the term “comparisons” can create a rather passé “comparative cultures” impression. Nevertheless, the collection contains much of value to emerging and established researchers alike. Of particular interest is an essay by Hokari Minoru, a young Japanese man who undertook doctoral research into Australian Aboriginal Studies while enrolled at the Australian National University. Research by Hokari, who very regrettably passed away before completing his doctoral dissertation, was informed by the notion of “connective studies” (Hokari 2007). In his essay included in the *On the Western Edge* collection, Hokari explains how, upon his arrival at ANU, it was suggested that as a researcher in Aboriginal Studies — that is,

a minority group in Australia — he should contact Tessa Morris-Suzuki as a leading scholar of Japanese minority studies. The young Japanese man, however, was stubbornly opposed to this idea, believing that, since there was no direct connection between Aboriginal and Japanese Studies, such a dialogue could provide little of worth to his project. Eventually, however, Hokari had a diametric change of opinion and realized that he “needed to know Tessa’s work” (Hokari 2007: 16). While there were few actual common points between his own and the prominent Japanese researcher’s field of endeavor, Hokari found that there was significant cross-over in the work that each did. In other words, he noticed that completely different fields could have a flexible connection in that they shared generally similar objectives. He also noticed — especially in terms of the fact that “our standpoint in the era of globalisation [sic] is inevitably in terms of our connections between difference places of belonging” (Hokari 2007: 17) — similarities in the social context in which problems under consideration arose. Exchange between scholars in different but indirectly related fields, he therefore concluded, could deepen the understanding each had of her or his research. Hokari was largely referencing connections between Australia and Japan. I nevertheless argue that, just as Hokari did with Aboriginal Studies, scholars of Japan should actively break the frame of Japanese Studies to seek out the points of “connection” that will permit an exchange of views and the conduct of joint research with scholars in different fields. Transformative practices of this nature will allow scholars of Japan to accomplish research achievements that reach beyond a small group of specialists and that have true significance in the contemporary global world.

## REFERENCES

- Blainey, Geoffrey, *The Tyranny of Distance: How Distance Shaped Australia’s History*, Melbourne: Sun Books, 1966.
- Chen, An, *The Voice from China: CHEN An on International Law*, Berlin/Heidelberg: Springer, 2013.
- Coulmas, Florian, “The Surge of Japanese,” *International Journal of the Sociology of Languages*, Issue. 80, pp. 115–131.
- Endō, Masataka, *Kindai Nihon no Shokuminchi Tōchi ni okeru Kokuseki to Koseki: Manshū, Chōsen, Taiwan*, Tokyo: Akashi shoten, 2010.
- Hokari, Minoru, ‘Lest We Remember: The Future of the Past in Japan and Australia,’ in *On the Western Edge: Comparisons of Japan and Australia* (eds. Masayo Tada and Leigh Dale), Perth: Network Books, 2007, pp. 23–34.
- Jacobs, Marjorie, “Oriental Studies In the University of Sydney”, *The Australian Quarterly*, Vol.25, No.2, June 1953, pp. 82–90.
- Lamond, Julieanne, “Australian Literature in Universities is under Threat, but Cultural Cringe Isn’t the Reason Why,” *The Guardian online* (Australia Edition), Thursday 31 October 2019. Available at: <https://www.theguardian.com/books/2019/oct/31/australian-literature-in-universities-is-under-threat-but-cultural-tinge-isnt-the-reason-why>
- Lo Bianco, Joseph, “After the Tsunami, Some Dilemmas: Japanese Language Education in Multicultural Australia,” *Australian Language Matters*, January/February/March 2000, p. 1

continued on pp. 10–13.

- Marriot, Helen, *Unlocking Australia's Language Potential: Profiles of 9 Key Languages in Australia. Volume 7: Japanese*, Canberra: National Languages and Literacy Institute of Australia, 1994.
- Miyoshi, Masao and Harry D. Harootunian (eds.), *Learning Places: The Afterlife of Area Studies*, Durham: Duke University Press, 2002.
- Nagata, Yuriko, *Unwanted Aliens: Japanese Internment in Australia*, St Lucia, Qld.: University of Queensland Press, 1996.
- Patience, Allen and Michael Jacques, "Two Lonely Countries on the Edge of Asia: Australia and Japan," in *On the Western Edge: Comparisons of Japan and Australia* (eds. Masayo Tada and Leigh Dale), Perth: Network Books, 2007, pp. 85–102.
- Sakai, Naoki, 'From Area Studies toward Transnational Studies,' *Inter-Asia Cultural Studies*, Vol. 11, No. 2, 2011, pp. 265–274.
- Sōseki, Natsume, 'Hakase mondai to Mādokku Sensei to yo,' *Sōseki bunkei ronshō* (ed. Miyoshi Yukio), Tokyo: Iwanami Shoten, 1986, pp. 216–233.
- Tada, Masayo and Leigh Dale (eds), *On the Western Edge: Comparisons of Japan and Australia*, Perth: Network Books, 2007.
- The Oriental Society of Australia, On-line Advertisement for The 2019 A.R. Davies Memorial Lecture. Available at: <https://slc-events.sydney.edu.au/calendar/the-oriental-society-of-australia-2019-ar-davis-memorial-lecture/>



# 日文研と私

## 一「日本人論」から「日本から見た世界」の研究へー

フレデリック・ディキンソン

### 序

日文研と私との関わりは、2011年の夏、戸部良一教授主宰の共同研究「近代日本における指導者像と指導者論」に参加したときに遡る。1年間外国人研究員として日文研に滞在したのちも本共同研究は続き、研究成果は『近代日本のリーダーシップ：岐路に立つ指導者たち』（千倉書房、2014年）として刊行された。私は戦間期に首相を務めた浜口雄幸を論じる一文を寄稿した。日文研との関わりはまだ日が浅いものの、みずからの研究史を顧みるともっと長期にわたっての関わりがあるように思われてならない。日文研が京都の地に設立を見たのは1987年5月のこと。そのちょうど10か月前、私は日本の歴史と政治学専攻の大学院生として研究者の日々を京都大学で歩み始めた。つまり、日文研も私も、1980年代の産物なのである。

### エキサイティングな1980年代

1980年代の日本は、高度成長期の真っ最中で、日文研も私もやる気満々だった。当時の日本はそれまで主流だったマルクス主義的分析から保守本流の優位へと移り変わり、日本論が盛んに唱えられた時期でもあったので、従前の西洋の歴史に依拠するような日本研究ではなく、自分たち自身で自信のある歴史を作ろうという流れが強かった。この傾向は日文研の設立時の根本的な発想にもうかがうことができる。1990年に日文研から出された公式文書の中には「われわれは日本の文化を深く研究して、その優れた特色を外国人に知らせなければならない」という趣旨の、大胆と形容してよいような文言が見られる。こういう姿勢は、日文研の主要な研究活動である共同研究の諸テーマにも見てとることが可能だ。すなわち、設立間もないころの共同研究から捨うならば、「日本文化の基本構造とその自然的背景」あるいは「日本人の自然観」、「日本の想像力」という大変興味深いものがいくつも見られる。

同時代の太平洋の彼方、すなわちアメリカへと目を転じてみれば、日本研究の二つの流れを見て取ることができよう。一つ目は、隆盛になりつつあった地域研究（area studies）だった。地域研究は第2次大戦後にアメリカがグローバルに世界各国に関わる中で、非西洋諸国の研究を政府が後押しする形で開始を見た研究手法だった。私の研究者としての第一歩も、この地域研究の手法で始まったと言ってよい。ノートルダム大学に学ぶ2年生だったとき、上智大学での1年間の交換留学プログラムに参加し、日本の言語、文化、歴史、政治等々を集中して学んだ。このプログラムの特徴は、比較の視点

にさほど立つことはなく、当時日本を席卷していた日本人論が強調していた日本のユニークさに力点が置かれていたということにあった。

もう一点、研究者としての私が出来上がる過程で影響を受けたのは、1950年代にアメリカの社会科学で隆盛だった近代化論というアプローチであり、1960年代にはアメリカの日本専門家たち (Japan specialists) が用いることになった。近代化論者としてはイエール大学のホール (John W. Hall) やプリンストン大学のジャンセン (Marius B. Jansen) たちがよく知られており、ジャンセン編の *Changing Japanese Attitudes toward Modernization* (Princeton University Press, 1965) 以下数冊が成果として刊行されている。近代化論は、京都大学の大学院で高坂正堯教授のもとで学び修士論文を書くにあたり、私自身も参考にした手法だった。近代化論には、のちに日文研で基本的な目標とされた、日本の優れた諸特徴の研究と相重なる点があったが、左翼が示した暗い物語をもっと積極的な近代日本で置き換えよう、ということである。私はといえば、修士論文で日米関係史を扱ったが、日米安保体制を正当化する前提で、マルクス主義的な悲観論よりもっと楽観的な日本像となった点には近代化論に似たところがある。

## 変わりゆく日本像—1990年代

1990年代は、日本及び日本研究双方に大きな変化をもたらした。保守本流の楽観論から悲観的な分析へと移り変わることであった。その傾向は日文研の共同研究に現れた、以前とは異なる傾向にも見て取ることができる。すなわち、従前の人文科学的テーマからより社会科学的なものへと移行したのである。「近代日本の女たち：その表象と自己表現」、「転換期における法と社会」、「大正期総合雑誌の学際的研究」などに、変化をうかがい知ることが可能だろう。

同時代のアメリカでの日本研究の傾向は、ポスト近代化論と呼べるものだった。アンドルー・ゴードン (Andrew Gordon) やシェルドン・ギャロン (Sheldon Garon) の諸研究が典型的な例であろう。ゴードンの *Labor and Imperial Democracy in Prewar Japan* (University of California Press, 1991) や、ギャロンの *Molding Japanese Minds: The State in Everyday Life* (Princeton University Press, 1997) という著作は、そのタイトルからして日本に対してゆがんだとは言わないまでもかなり悲観的な態度あるいは分析を予感させる。ゴードンの著作に関して言うならば、20世紀の日本は imperial democracy であるという。Imperial とは英語話者にとってはよい響きとは無縁の語であるため、imperial democracy には本物の democracy ではない、という暗示がある。また、ギャロン著については、タイトルの molding の語がすべてを暗示している。つまり、日本人の思考が政府により型にはめて作り上げられてきた、ということであり、日本社会は本当の自由より遠く離れている、というメッセージが伝わってくる。もちろん書籍のタイトルは出版社の編集サイドがつけた案かもしれず、一概に著者の意向とは言い切れないものの、明らかに以前とは違う日本への眼差しを感じさせるタイトルに仕上がっていた。

京都大学大学院を修了後、私はイェール大学へと進み、1993年に博士論文を完成した。この学位論文をもとにした最初の単行著作が *War and National Reinvention: Japan in the Great War, 1914-1919* (Harvard University Asia Center, 1999) である。この書は、戦前日本社会の「矛盾」(ゴードン) や戦争期への円満な移行(ギャロン) を主題とするような内容ではもとよりない。しかし、第一次世界大戦時の日本の政治の激動期に焦点を当てたことにより、修士論文の比較的明るい見通しとはかなり異なった論考となった。

## 21世紀の日本

いわゆるバブル経済が1990年代初めに崩壊し、その後長引く不景気が日本を襲うこととなる。こうして生じた「失われた世代」が日本研究の場でも大きな変化を生むに至った。この世相を背景にして悲観論から多様性への流れが生まれ出たのである。ここでまた日文研の共同研究に目を向けてみるならば、地域研究や比較の視点に立つ研究が増したことは明らかである。たとえば「文明交流圏としての海洋アジア」、「アジアにおける家族とジェンダーの変容」、「日中学術概念史の比較的研究」があり、21世紀になってからの日文研の共同研究の典型を表している。

他方、アメリカにおける日本研究はグローバルな視点を持つようになる。「グローバル」というと、「世界から見た日本」という視点を直ちに想起するだろうが、「日本から見た世界」という視点もある。双方の視点を合わせれば越境的な(transnational)視点と形容できるだろう。そういう越境的な視点を持つ代表的な日本研究をいくつか挙げてみたい。ミリアム・キングズバーグ(Miriam Kingsberg)の *Moral Nation: Modern Japan and Narcotics in Global History* (University of California Press, 2013) は、20世紀の覚醒剤問題を扱っている。日本が、世界の覚醒剤中毒の基準設定に大きな貢献を果たしてきたという主張だが、グローバルな観点を持つ日本研究の典型例ではないかと私は考えている。

マーク・メッツラー(Mark Metzler)の *Capital as Will and Imagination: Schumpeter's Guide to the Postwar Japanese Miracle* (Cornell University Press, 2013) は戦後日本の経済を扱う。メッツラーは、日本の経済は好景気の折も不景気の折もじつは世界経済の今後の流れを予測している、と強調する。アメリカもフランスもイギリスもいずれ日本のように好景気から不景気への運命をたどる、というのが著者の見解である。

また、ラン・ツヴィゲンバーグ(Ran Zwigenberg)は *Hiroshima and the Rise of Global Memory Culture* (Cambridge University Press, 2014) において、広島への原爆投下を取り上げている。被爆により日本は惨害を被ったに止まらず、全世界が戦争の被害者を追悼する基準の設定にも大きく貢献してきた、という視点を掲げている。ヒロシマの話は日本国内の話だけではなく、世界にとっても注目に値する大きな事件ということとなる。これこそ、越境的なグローバルな視点に立つ日本研究と言えるであろう。

## 日本と第1次大戦をグローバルな視点で捉えるために

日本専門家としての私自身の研究上の主たる関心は、第1次世界大戦にある。従来の研究には、第2次世界大戦の原点として第1次世界大戦を見る、という視点をとるものが主流だった。その代表とも言えるのは、今や古典となっているフリッツ・フィッシャー (Fritz Fischer) の *Germany's Aims in the First World War* (W. W. Norton, 1967 独語版は 1961) であろう。日本の学界においても最近第1次世界大戦の研究が盛んだが、第2次世界大戦を知るためには 1914 年～1918 年間の流れを知ることが必要不可欠、というスタンスをとる傾向が今なお強い。フィッシャー以来の学風がまだ残っていると言えよう。

しかし、欧米の学会においてはより広い見取り図のなかで第1次世界大戦は 20 世紀の原点でもある、という主張もされてきた。チャールズ・メイヤー (Charles Maier) の *Recasting Bourgeois Europe: Stabilization in France, Germany, and Italy in the Decade after World War I* (Princeton University Press, 1975) がその代表であろう。

日本研究者としての私は、第1次大戦のより広い見方は他にもあると考える。それは、「世界を動かした第1次世界大戦の日本」とまとめてよいだろう。第1次大戦の歴史をみれば当時の日本の世界的な位置、あるいは日本の世界のなかにおけるパワーの大きさが分かる、という視点である。

これについては、すでに数年前に上梓した *World War I and the Triumph of a New Japan, 1919–1930* (Cambridge University Press, 2013) で詳しく論じた。周知のように、第1次大戦ののち日本は産業国家として繁栄し、さらに世界の大国ともなった。大国と認められるに至った理由についてはあまり知られてはいないが、大戦中、日本はイギリス、フランス、アメリカ等、同盟国のために大きな貢献を果たしたためだった。具体的には、日本海軍は、地中海でドイツの潜水艦と戦い、太平洋ではドイツ海軍を追い払い、またロシアに向けては多くの武器を送っていたのである。こういう背景があったからこそ、大戦後に日本は五大国の一員となったのだった。

これが契機となり大戦直後から 1920 年代の日本も、大戦前よりもずっと大きな役割を世界の舞台で果たすこととなった。パリ講和会議での五大国の一員としての活躍、国際連盟での加盟国になったこと等々である。アメリカがまだ国際連盟に加わることが出来ない中で、日本は加盟国になるに止まらず常任理事国にも名を連ねた、というのは大変意義深いことである。続くワシントン会議でも、ロンドン会議でも、世界の大国として日本は重きをなした。第1次世界大戦を日本との関係で見直してみるならば、その新たな意義が浮かび上がってくるであろう。第1次大戦を第2次大戦の原点ととらえるだけでは決して見えてこない世界史の真実である。

## 結びにかえて

前述のように日文研発足時は、日本人論が隆盛の時代でもあった。その世相は日文

研の推進した共同研究のテーマにも如実に現れていた。1980年代は、日本を語るとき、学問の世界においても日本の uniqueness を語る傾向が強かったのである。しかし、30年を経た今日、日本の uniqueness を語るだけでは世界では通じない。世界に向けては、今の世界を知るためには日本の歴史を知る必要がある、というスタンスをとることが必要なのである。

20世紀は西洋の上昇の物語、とされる。しかし、先に見たように第1次大戦時とその後の1920年代の日本の活躍があったからこそ、第1次大戦後の世界のシステムが構築されたことが分かる。近代日本の歴史に目を向けることで、これまでの西洋の上昇という物語がもっとグローバルな物語へと展開していくのである。また21世紀はアジアの時代であると言われる。そこには大国としての中国の上昇の物語があるが、20世紀からの連続を視野に入れるとき、近代日本の果たした役割が大きいこともまた看過できないことは言うまでもない。



# Nichibunken and Me: From “Nihonjinron” to Visions of the World Through a Japanese Prism

Frederick R. Dickinson

My connection to the International Research Center for Japanese Studies dates to the summer of 2011, when I had the honor of joining Professor Tobe Ryōichi’s research group on *Leadership in Modern Japan*. Following a year of residence at Nichibunken, the group continued for two years and, in 2014, published *Kindai Nihon no rīdāshippu: kiro ni tatsu shidōshatachi*.<sup>1</sup> My own research focused on interwar prime minister, Hamaguchi Osachi.<sup>2</sup>

Although my direct ties with Nichibunken are relatively new, I share a longer personal history with the institution: we are both a product of the 1980s. Just ten months before the center was founded in Kyoto in May 1987, I began my graduate studies in Japanese history and politics at Kyoto University.

## The Exciting 1980s

The 1980s was an exciting time for Japan, and for US-Japan relations, which was the subject of my MA thesis at Kyoto University.<sup>3</sup> High economic growth was in its third decade. And the close rapport between Japanese Prime Minister Nakasone Yasuhiro and American President Ronald Reagan (the so-called “Ron-Yasu relationship”) hinted to a new international stature for postwar Japan. Throughout the 1980s, the robust Japanese economy attracted significant international attention. And within Japan, it was a time of great confidence, an era when the reproachful scholarship of the Japanese Left, which had defined the academic mainstream through the 1970s, yielded to a more positive vision of modern Japan promoted by increasingly self-assured Japanese conservatives.

It was at this time that the Nakasone administration proposed an academic foundation for Japan’s new economic, political, and geopolitical prowess. According to a 1990 Nichibunken committee report, “We must thoroughly investigate Japanese culture and publicize Japan’s superior characteristics abroad.”<sup>4</sup> The promotion of Japan’s unique strengths was clearly reflected in the team research projects sponsored by Nichibunken in its first years, including investigations of the “Basic Structure of Japanese Culture,” the “Japanese View of Nature,” and

<sup>1</sup> Tobe, Ryōichi, ed., *Kindai Nihon no rīdāshippu: kiro ni tatsu shidōshatachi* (Tokyo: Chikura Shobō, 2014).

<sup>2</sup> Frederick Dickinson, “Senkanki no sekai ni okeru seiji shidō no kadai: Hamaguchi Osachi o chūshin ni,” in Tobe, ed., *Kindai Nihon no rīdāshippu*.

<sup>3</sup> Frederick Dickinson, “Nichi-Bei anpo taisei no hen’yō: MSA kyōtei ni okeru saigunbi ni kansuru ryōkai” (Transformation of the U.S.-Japan Security Relationship: The 1954 Mutual Defense Assistance Agreement and Japanese Rearmament), I, II. *Hōgaku ronsō* vol. 121 no. 4 (7/1987), pp. 60–82; vol. 122 no. 3 (12/1987), pp. 103–131.

<sup>4</sup> Committee, “The Founding of the International Research Center for Japanese Studies” (1990). Quoted in Inoki Takenori, et al., eds., *Shin-nihongaku tanjō: Kokusai nihon bunka kenkyū sentā no 25nen* (Tokyo: Kadokawa gakugei, 2012), p. 26.

“Japanese Imagination.” These themes resonated well with increasingly frequent discussions in the popular media of distinct (and, presumably, superior) features of Japanese culture and society, discussions known as *Nihonjinron*.<sup>5</sup>

At the same time, across the Pacific, two important scholarly trends continued to inspire studies of Japanese history and culture. The first was an outgrowth of the enormous new scale of American global involvement since the Second World War. “Area Studies” was a systematic effort by the US government to encourage the study of non-Western societies. Begun with the establishment of the Foreign Area Fellowship Program (FAFP) in 1950, the initiative funneled millions of dollars to American universities for the focused study of language, culture, and history.<sup>6</sup>

My own first scholarly engagement of Japan followed this model. As a sophomore at the University of Notre Dame in 1980, I participated in a year-long exchange program at Sophia University in Tokyo, where every class focused on Japan: language, culture, history, politics, etc. Without much comparative context, the ultimate effect was similar to the vision of Japanese uniqueness accentuated by the *Nihonjinron* sweeping Japan at the time.

A separate but complimentary influence on my formation as a scholar of Japan was a trend that gripped American social sciences in the 1950s. As applied by Japan specialists in the 1960s, “modernization theory” shared the basic goal of Nichibunken’s later promotion of “superior” Japanese characteristics: to replace the dark tale championed by the Japanese Left with a more positive vision of modern Japan.<sup>7</sup> Although my 1986 master’s thesis at Kyoto University did not consciously engage “progressive” Japanese scholarship, by defining the Mutual Defense Assistant Agreement of 1954 as a step forward in U.S.-Japan relations, it echoed both the upbeat tone of American modernization scholarship and the rising authority of conservative Japanese visions of modern Japan.

### **Changing Visions of Japan in the 1990s**

The 1990s brought dramatic changes to both Japan and scholarly examinations of the country. The bursting of the Japanese economic bubble immediately soured the rosy picture promoted by Japanese conservatives in the 1980s and eroded any remnants of modernization scholarship in the U.S. At the International Research Center for Japanese Studies, the strong initial focus on the humanities yielded to a more critical social science approach. Team projects that had initially exalted specific aspects of Japanese culture now turned to more scientific examinations of Japanese society, including coverage of “Women in Japan,” “Law and Society in Transition,” and “General Interest Magazines in Taishō.”

In the U.S., after over a decade of popular press criticism of Japanese economic strength

---

<sup>5</sup> See Peter N. Dale, *The Myth of Japanese Uniqueness* (London and Sydney: Croom Helm, 1986).

<sup>6</sup> See Masao Miyoshi and Harry D. Harootunian, *Learning Places: The Afterlives of Area Studies* (Durham, NC: Duke University Press, 2002).

<sup>7</sup> See John W. Dower, “Introduction,” in John W. Dower, ed., *Origins of the Modern Japanese State: Selected Writings of E. H. Norman* (New York: Pantheon Books, 1975).

(the so-called “Japan bashing” literature),<sup>8</sup> scholarly analysis took a significantly critical turn, questioning key assumptions of modernization scholarship. According to Sheldon Garon, it was time to view “modernization” less as a tale of inevitable “progress” than as change with a wide range of possible political and economic outcomes.<sup>9</sup> Among the most high-profile champions of this sober vision were Harvard University professor Andrew Gordon and Princeton professor, Garon, himself.

Gordon’s 1991 *Labor and Imperial Democracy in Imperial Japan* recognized a significant labor movement in modern Japan. But, for Gordon, the weight of emperor and empire represented serious “contradictions” that checked the advent of true democracy in the early twentieth century.<sup>10</sup> Likewise, according to Sheldon Garon, close ties between civilian reformers and reform bureaucrats ensured a relatively seamless shift from liberal democratic to fascist Japan in the 1930s.<sup>11</sup>

My own first major publication, the product of a 1993 PhD Yale dissertation, also appeared in the 1990s and reflected the growing uncertainties of the era. *War and National Reinvention* did not stress either “contradictions” or implacable civil-bureaucratic ties. But by highlighting the turbulence of Japanese politics during the First World War, it departed significantly from the relatively upbeat vision of US-Japan relations of my master’s thesis.<sup>12</sup>

## Twenty-First Century Japan

The prolonged era of distress following the bursting of the Japanese economic bubble naturally produced another significant change in scholarship on Japan. One might describe the early twenty-first century as a shift from pessimism to diversity in studies of modern Japan. At the International Research Center for Japanese Studies, team research projects increasingly assumed an explicitly regional and comparative dimension, focusing on issues such as “Maritime Asia,” “Family and Gender in Asia,” and “History of Academic Concepts in China and Japan.”

Prolonged Japanese economic distress notwithstanding, the twenty-first century is increasingly heralded for its dramatic new level of global integration. And American historians have scrambled to expand the parameters of their analyses accordingly. Mirroring these general trends, historians of modern Japan increasingly aim for what they describe as a “transnational” vision of modern Japan.<sup>13</sup>

Among the best of this scholarship are studies that depart significantly from the familiar

<sup>8</sup> See Bill Emmott, *Japanophobia: The Myth of the Invincible Japanese* (NY: Times Books, 1993).

<sup>9</sup> Sheldon Garon, “Rethinking Modernization and Modernity in Japanese History: A Focus on State-Society Relations,” *The Journal of Asian Studies*, 53, no. 2 (May 1994), pp. 346–366.

<sup>10</sup> Andrew Gordon, *Labor and Imperial Democracy in Prewar Japan* (Berkeley: University of California Press, 1991).

<sup>11</sup> Sheldon Garon, *Molding Japanese Minds: The State in Everyday Life* (Princeton University Press, 1997).

<sup>12</sup> Frederick R. Dickinson, *War and National Reinvention: Japan in the Great War, 1914–1919* (Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 1999).

<sup>13</sup> For an articulation of what constitutes “transnational” scholarship, see Sheldon Garon, “Transnational History and Japan’s ‘Comparative Advantage,’” *The Journal of Japanese Studies*, Volume 43, Number 1, Winter 2017, pp. 65–92.

tale of a Japanese “response” to Western convention to highlight ways that Japan actually helped shape the modern world. Miriam Kingsberg, for example, argues that Japan took the lead in defining drug control as a vital responsibility for civilized states in the early twentieth century.<sup>14</sup> Mark Metzler sees Japan as a pioneer in sustained double-digit economic growth after 1945 and as an indispensable node in the growth of an international banking system from the latter nineteenth-century.<sup>15</sup> Ran Zwigenberg gives Japanese commemorations of the bombing of Hiroshima prominence of place in the rise of a global memory culture after 1945.<sup>16</sup>

### **Evolving Study of World War I**

My own scholarship continues to mirror both these general developments and related trends in my specific field of the history of World War I. Serious study of the First World War began with the publication of diplomatic archives from multiple belligerents soon after 1918.

Understandably, the principal aim of this scholarship was to locate culpability for the calamity.<sup>17</sup> But after 1945, World War I scholars had a powerful new incentive to examine the 1914–1918 years: to locate the cause of the even larger upheaval that was the Second World War.<sup>18</sup>

In suggesting that the politics of the First World War in Japan operated again in Tokyo in the 1930s, my own 1999 investigation of Japan and World War I strongly echoed this immediate post-1945 scholarship on World War I.<sup>19</sup> But as early as the 1970s, historians of Europe began turning away from the simple story of the twentieth as a century of war to recognize World War I as the departure point for new models of political organization and economic integration that guaranteed long-term stability after 1945.<sup>20</sup> According to Zara Steiner, “the 1920s must be seen within the context of the aftermath of the Great War and not

---

<sup>14</sup> Miriam Kingsberg, *Moral Nation: Modern Japan and Narcotics in Global History* (University of California Press, 2014).

<sup>15</sup> See Mark Metzler, *Capital as Will and Imagination: Schumpeter's Guide to the Postwar Japanese Miracle* (Cornell University Press, 2013) and Simon James Bytheway and Mark Metzler, *Central Banks and Gold: How Tokyo, London, and New York Shaped the Modern World* (Cornell University Press, 2016), respectively.

<sup>16</sup> Ran Zwigenberg, *Hiroshima and the Rise of Global Memory Culture* (Cambridge University Press, 2014).

<sup>17</sup> For a convenient overview of this literature, see P. M. H. Bell, *The Origins of the Second World War in Europe* (NY: Longman, 1986), Chp. 1.

<sup>18</sup> Well representative of this scholarship was the 1961 study by Fritz Fischer, which suggested that German territorial aims in 1939 closely mirrored those in 1914. Fritz Fischer, *Griff nach der Weltmacht* (Dusseldorf: Droste Verlag, 1961). Published in English as *Germany's Aims in the First World War* (NY: W. W. Norton, 1967).

<sup>19</sup> Dickinson, *War and National Reinvention*, Conclusion.

<sup>20</sup> See, for example, Charles S. Maier, *Recasting Bourgeois Europe: Stabilization in France, Germany, and Italy in the Decade after World War I* (Princeton: Princeton University Press, 1975), Walter A. McDougall, *France's Rhineland diplomacy, 1914–1924: The Last Bid for a Balance of Power in Europe* (Princeton: Princeton University Press, 1978) and Marc Trachtenberg, *Reparation in World Politics: France and European Economic Diplomacy, 1916–1923* (NY: Columbia University Press, 1980). For a convenient overview of this literature, see Jacobson, “Is There a New International History of the 1920s,” *American Historical Review* 88, no. 3 (June 1983), pp. 617–645.

as the prologue to the 1930s and the outbreak of a new European conflict.”<sup>21</sup>

Trends in the study of World War I offer a useful vantage point from which to envision a constructive future for the study of modern Japan. The centennial commemoration of the war inspired a wave of new Japanese-language scholarship on Japan in World War I. But much of the new work adheres to the familiar formula of the First World War as prelude to the Second. Naraoka Sochi describes the Twenty-one Demands thrust upon Beijing by the Ōkuma cabinet in 1915 as a prologue to Japan’s subsequent conquest of China.<sup>22</sup> Yamamuro Shin’ichi accentuates the First World War as the foundation for Japanese total war planning in World War II.<sup>23</sup> In so doing, these authors strongly echo Fritz Fischer’s classic study of World War I era Germany, which set the stage for a generation of scholarship highlighting a so-called German “Sonderweg” (special path).<sup>24</sup>

### **Toward a Global Perspective of Japan and the First World War**

As earlier noted, the idea of a distinct Japanese path enjoyed its heyday in the 1980s (albeit in a more positive sense) and was a reasonable reflection of new confidence in a robust Japanese economy and augmented Japanese international stature. In a global era, however, there is little use for such a *Nihonjinron*-style vision of modern Japan. Like the most astute World War I scholarship since the 1970s and the more recent “transnational” analyses of Japan, the study of Japan and the First World War can benefit from a conceptual retooling that significantly expands both the chronological and geographic scope of analysis.

My own recent work on Japan and the First World War asks not what Japanese belligerence tells us about a distinct Japanese path to war in the 1930s. Rather, it highlights the 1914–1919 years as the foundation for a critical Japanese contribution to the history of the twentieth century. One could, of course, identify many ways in which Japan impacted the world before 1914. But the First World War brought two conspicuous changes to Japan that dramatically expanded its global footprint. Between 1914 and 1918, Japan became both an industrial state and world power.

In the latter nineteenth century, Japan had, of course, already attracted global attention for becoming the first Asian state to modernize. And in 1905, Japan’s surprising military victory over Russia catapulted it to the position of strongest regional power in Asia. But between 1914 and 1919, Japanese exports expanded almost fourfold.<sup>25</sup> And by 1920/1924, manufactured goods accounted for more than 90 percent of those exports.<sup>26</sup> At the 1919 Paris Peace

<sup>21</sup> Zara Steiner, *The Lights That Failed: European International History, 1919–1933* (Oxford, 2005), p. 602.

<sup>22</sup> Naraoka, Sōchi, *Tai-nijū ikkajō yōkyū to wa nan datta no ka: dai-ichiji sekai taisen to Nitchū tairitsu no genten* (Nagoya: Nagoya Daigaku Shuppankai, 2015).

<sup>23</sup> Yamamuro, Shin’ichi, *Fukugō sensō to sōryokusen no danzō: Nihon ni totte no dai’ichiji sekai taisen* (Kyōto: Jinbun Shoin, 2011).

<sup>24</sup> Fischer, *Griff nach der Weltmacht*.

<sup>25</sup> Ōkawa, Kazushi and Miyohai Shinohara, eds., *Patterns of Japanese Economic Development: A Quantitative Appraisal* (New Haven: Yale University Press, 1979), p. 334.

<sup>26</sup> W. G. Beasley, *Japanese Imperialism, 1894–1945* (NY: Oxford University Press, 1987), p. 126, table 2.

Conference, Japanese delegates participated, for the first time, in an international conference as equals of delegates from the four other most powerful states on earth—the US, Britain, France, and Italy.

Narrowly focused on the subsequent history of continental expansion, orthodox histories accentuate the challenges, rather than opportunities, posed by the peace conference for Japan.<sup>27</sup> But viewed from the perspective of contemporaries, Japan's presence at Paris was an extraordinary reflection of Japan's pivotal role in the allied victory. By November 1914, the Japanese Navy and Army had conquered German Micronesia (South Pacific) and the German fortress at Qingdao (China), marking the end of German power in Asia.<sup>28</sup> Between 1914 and 1918, Japan's Third Fleet escorted British imperial troops from Australia and New Zealand to the Arabian Sea. From February 1917, three Japanese destroyer divisions and one cruiser joined the battle against German submarines in the Mediterranean. Several Japanese Red Cross nursing corps were active in Europe during the war.<sup>29</sup> Between 1914 and 1918, 200,000 tons of Japanese cargo ships traveled between Japan and Europe. Japan supplied the allies with copper and currency, including over 366 million dollars in loans. Japan transferred three Japanese cruisers and 600,000 rifles to Russia and built twelve destroyers for France.

This extraordinary activity became the foundation for a remarkable new Japanese presence on the international stage. Japanese support for the new international infrastructure for peace after World War I was as important to its success as aid from Tokyo to the allies between 1914 and 1919.<sup>30</sup> America's failure to ratify the Versailles Treaty or to join the League of Nations threatened to destroy the new infrastructure for peace from the start. But Japanese ratification in October 1919 launched the peace treaty into effect. And Japan's membership in the League of Nations ensured its vitality, at least until Japan's withdrawal in 1933. Japan was not only a founding member of the League. It was one of four permanent members of the executive body, the League Council, and the fourth largest financial contributor.<sup>31</sup>

By 1918, Japan possessed the third most powerful navy in the world, and its agreement to participate in the Washington (1921-1922), Geneva (1927), and London (1930) naval conferences ensured the viability of a robust new international disarmament regime after the First World

<sup>27</sup> Historians emphasize the relative silence of Japanese delegates at Paris, Woodrow Wilson's fight with Tokyo over Japan's new possession of Shandong Province, China, and the rejection of Japan's proposal for a "racial equality" clause in the covenant of the new League of Nations. See Thomas W. Burkman, "'Sairento pātonā' hatsugen su," *Kokusai seiji*, 56 (1976), pp. 102–116; Russell H. Fifield, *Woodrow Wilson and the Far East: The Diplomacy of the Shantung Question* (Hamden, CT: Archon Books, 1965); Naoko Shimazu, *Japan, Race and Equality: The Racial Equality Proposal of 1919* (London: Routledge, 1998), respectively.

<sup>28</sup> For a brief overview of Japan's contribution to the Allied cause during World War I, see Frederick R. Dickinson, "More than a 'Moment': Woodrow Wilson and the Foundations of Twentieth-Century Japan," *Japanese Journal of Political Science*, Vol. 19 (2018), pp. 590-591.

<sup>29</sup> Eiko Araki, *Naichingēru no matsueitachi: 'kango' kara yominaosu daiichiji sekai raisen* (Tokyo: Iwanami Shoten, 2014).

<sup>30</sup> For a full articulation of this argument, see Frederick R. Dickinson, *World War I and the Triumph of a New Japan* (Cambridge: Cambridge University Press).

<sup>31</sup> Thomas W. Burkman, *Japan, the League of Nations: Empire and World Order, 1914–1938* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2008), p. 141.

War. The Five-Power Treaty at Washington collectively eliminated 66 ships from the American, British, and Japanese arsenals, including plans for ten new capital ships for the Imperial Japanese Navy.<sup>32</sup> France and Italy refused to sign the London Naval Treaty. But American, British, and Japanese agreement in 1930 extended limits to submarines, heavy cruisers, light cruisers and destroyers.

With the September 1931 Manchurian Incident, Japan embarked upon an aggressive trajectory that would ultimately plunge the Asia/Pacific region into fifteen years of war and destruction. But it is worth remembering that Japan was the only victor of the First World War that pursued imperial retraction after 1918. Like Britain and France, the Japanese empire initially expanded through acquisition of territory from Imperial Germany; Japan remained in German Micronesia in the South Pacific and Shandong Province, China. Unlike the British or French empires, however, Japanese troops actually withdrew from Shandong by 1922, thereby giving concrete substance to Woodrow Wilson's new ideal of "self-determination." Japan's signature on the 1928 Kellogg-Briand Pact condemning war, moreover, was viewed by contemporaries as another critical pillar of interwar peace.<sup>33</sup> This interwar infrastructure for peace would ultimately lay the foundations for the impressive new level of global integration of the twenty-first century.

## Conclusion

Scholarship on Japan has change dramatically over the last forty years. In the 1980s, both Nichibunken and I began intellectual explorations that, reflecting the new economic power and geopolitical status of Japan, highlighted Japanese uniqueness and power. The bursting of the economic bubble in the 1990s, prolonged Japanese economic distress, and rapid global integration of the twenty-first century, however, has made such a vision obsolete. Nichibunken's team projects have clearly responded to these changes. Team projects in the 1980s championing Japanese uniqueness (*Nihonjinron*) yielded to more social science analyses in the 1990s and to more regional and comparative examinations in the twenty-first century.

Historians of Japan, however, have much more work to do to fashion a vision of Japan appropriate for the twenty-first century. Compared to the boom days of the 1980s, the relevance of Japan and Japanese history is no longer evident, especially outside of Asia. What is the utility of Japanese history in a twenty-first century world? It is no longer enough to simply champion the beauty and complexity of Japanese cultural capital: sushi, ukiyoe, anime, etc.

A look at Japan in the First World War offers a glimpse of a possible new future for the study of modern Japan. Orthodox treatments of Japan during the war serve simply to confirm a standard Eurocentric vision of modern world history. That history sees Britain, France, and the United States as more than just pillars of a specific Western European cultural tradition.

<sup>32</sup> David C. Evans and Mark R. Peattie, *Kaigun: Strategy, Tactics, and Technology in the Imperial Japanese Navy, 1887–1941* (Annapolis, MD: Naval Institute Press, 1997), p. 197.

<sup>33</sup> See Oona A. Hathaway and Scott J. Shapiro, *The Internationalists: How a Radical Plan to Outlaw War Remade the World* (New York: Simon & Schuster 2017) for a recent positive reassessment of this otherwise controversial pact.

They are considered actual models of modern civilization. Standard analyses of both the First and Second World Wars aim to accentuate the heroic activities of these three states to fashion a modern, Western, liberal international world.

The history of Japan in the First World War, however, raises serious questions about this familiar tale of the “Rise of the West.” Mainstream analyses relegate Japan to the margins between 1914 and 1919 and explain the road to ruin between 1931 and 1945 as a consequence of that marginal status. But the record shows that Japan played a key role not only in the allied victory in 1918 but also in building in the 1920s what would ultimately become a critical foundation for the global integration of the twenty-first century.

In the twenty-first century, the most important aim of scholarship on modern Japan, in other words, is to clarify ways in which Japan has participated in and shaped the emergence of a modern global (not Western) world. Only by directly challenging prevailing Eurocentric visions of history can we build a constructive intellectual foundation for our global world.

# 日本研究グローバル化の試み

## 一日中戦争史の共同研究を中心に

黄自進

### はじめに

2014年6月から2015年5月にかけて、国際日本文化研究センター（日文研）に外国人研究員として招聘された際、筆者は「日本の軍事戦略と東アジア社会一日中戦争期を中心として」と題する研究会を開催した。

同研究会は、東アジア全域に及んだ日本の対外戦争が与えた、日本及び東アジア各地に対する政治・経済・社会・思想・文化上の影響の中でも、特に中国社会に与えた衝撃について解明することを目的としていた。

筆者が京都を去ってから、同共同研究は、台湾の蔣経国基金会の後援のもと台湾・台北の中央研究院近代史研究所（以下、近史所と略す）に拠点を移し、「和解への道一日中戦争の再検討」と改題して、2015年9月から2017年9月まで3年間に亘る研究プロジェクトとして再展開された。さらに、同共同研究の趣旨を学界に広く知らしめるため、2015年12月に、14の国及び地域の学者を集め、近史所で「日中戦争のアジアに対する衝撃」と題する国際シンポジウムを開催した。

このような国際的な視野の下、日中戦争史の研究を推進してきた効果は、いかほどのものであっただろうか。とりわけこのような枠組みでの共同研究に、いかなる意義を見出せるだろうか。以上の観点より、本論文は、京都・日文研での共同研究及び台北での継続事業の経過を具体的事例として検証する。

### 一、「歴史認識」問題

今日、日本と中国との間で歴史認識をめぐる諸問題が繰り返し発生している。この状況を打開するには、先ずお互いが抱える争点に焦点を絞り、問題の原点から検討すべきであろう。日中戦争を巡る認識の相違は、日中両国間に止まらず、日本国内、さらには台湾海峡を隔てた中国・台湾間にも存在する。こうした複雑な現状を物語るのが、歴史教科書に反映された争点である。

#### (1) 日本国内の論争

日本国内の論争に関する典型的な例は、『新しい歴史教科書』（扶桑社版、現在の自由社版、育鵬社版）の主張である。2002年採用の同書は独自の主張を展開し、従来の歴史教育に挑戦している。例えば同書は、戦争期に日本軍部が唱えた「反共」「ソ連脅威論」を額面通りに解釈し、日本の戦争の本質を「侵略戦争ではなく、アジア解放の戦争」と

位置づける。また、「東京裁判」とは「勝者の裁き」であると指摘して日本の被害者としての側面を強調し、中国侵略や台湾・朝鮮植民地化等の加害者としての側面にさほど紙面を割かない。

## (2) 中国と台湾の論争

このように、同じ歴史的事実をめぐる解釈上の論争は、台湾海峡を隔てた中台兩岸の教科書にも散見される。

例えば、満州事変時に関東軍が中国東北地域を一挙に占拠する原因となった、蒋介石の「不抵抗政策」に関する評価は中台で見解が分かれるところである。共産党率いる中国の教科書では、当時国民党を率いた蒋介石が、東北当局の最高責任者・張学良に不抵抗を「命令」したためであると国民党の失策を強調する。一方、後に国民党の本拠地となった台湾の教科書では、軍事力を含め総合的観点から日本側優位の戦況を見極めた上で、中国単体で軍事的対決をするよりも、むしろ国際連盟の助力を得るほうが得策だと判断したためであると主張する。

満洲事変以後に蒋介石が唱えた「安内攘外」政策（外敵を防ぐには国内の安定が先決）の是非も中台で異なる。中国側の教科書によれば、同政策の真意は、対日妥協及び紅軍への包圍攻撃といった「反動方針」を継続実行することにあるとする。一方、台湾の教科書によれば、同政策の真意は、日本との戦争を一時的に回避することで内政改革を進め、国力を増大させることにあるとする。

最終的には中国が勝利した抗日戦争の主導権の所在についても見解は一様ではない。中国の教科書は毛沢東率いる中国共産党の「持久戦論」の成果であると唱えるが、台湾の教科書は蒋介石率いる国民政府とその指導のもと奮起した全人民、及び連合国との共同作戦による成果だと強調する。<sup>1</sup>

## 二、従来の研究動向

さて、上述の教科書問題に端を発した日中両国間の歴史認識の対立を解消するため、2006年12月より両国政府レベルでの日中歴史共同研究が始まった。北岡伸一・歩平両氏を座長として研究が進められ、その成果として古代・中近世史と近現代史の部分に分けて、2014年に報告書が出版された。<sup>2</sup>

この共同研究の参加者である東京大学の川島真氏曰く、日中の見解の相違は、歴史研究に対するアプローチの違いによるものである。中国側は結果重視の本質論、つまり、何らかの意図があり最終的に日中戦争に至ったというアプローチで認識しようとし、個別的事象の説明はあくまで意図ない大義に付随すると捉える。それに対して日本側は、

<sup>1</sup> 菊池一隆『東アジア歴史教科書問題の構図—日本・中国・台湾・韓国、および在日朝鮮人学校』法律文化社、2013年。

<sup>2</sup> 北岡伸一・歩平編『日中歴史共同研究』報告書』第二巻近現代史篇、勉誠出版、2014年。

結果のほうが個別的事象に付随すると考える。結果より過程重視、つまり、様々な条件下でなされた個々の決断が歴史という一つの結果を作ったという観点に立つ。<sup>3</sup>

中国側の姿勢を象徴的に示すのが、第二次日中戦争という命名である。中国側は、1894年の日清戦争と1937年の日中戦争とは、日本の歴代政権が国是とした「大陸拡張」政策により直線的に繋がるものと認識する。日本側がこの政策を是とする限り、日清戦争後に日本の要求に従って中国が朝鮮半島から撤退しようとも両国に平和をもたらすことはできない。第二次日中戦争は、日本の大陸拡張政策の対象が朝鮮半島に止まらず中国本土にまで及んでいたからこそ発生した不可避の衝突であり、必然の結果である。日清戦争から日中戦争まで43年という長い歳月を要したことは、大陸拡張政策の消失を意味しないと中国側は考えるのである。

こうした中国側の本質論と対立するのが、日本側のケーススタディーである。日本側の研究者は、問題発生とそのプロセスを探求しない限り、歴史の真相はつかめないと主張する。

日本側の歴史観から見れば、確かに相互不信や敵対意識は両国間で長期にわたり存在したものの、盧溝橋事件を契機として始まった日中全面戦争は、日本政府の意図によって展開・拡大したものではなかった。日本側は、政府レベルでは最後まで中国に宣戦布告せず、戦争期においても無数の平和工作を試みた。日本政府は、両国の衝突状態の早期収拾を期待していたのである。戦争がその後無限に拡大していったのは、事変の偶発に次ぐ偶発という悪循環の産物であった。したがって日本側は、悪循環の末に全面戦争にまで事態が発展したプロセスを解明することが肝要であると主張する。

### 三、新しい研究の視座

このように、日中両国間では、歴史認識のみならず、研究に対するアプローチも異なっているため、日中戦争を巡る両国の解釈には、常に一種の溝が存在してきた。特に中国側は自国が戦場であったため、日本側が戦争責任を明らかにしない限り、いかなる研究作業も和解には繋がらないと主張した。

そこで、両民族の和解を目指す筆者は、まず戦争拡大の過程に焦点を絞り、各事変の担当者の責任について検討する。つまり、従来の日本側の研究成果をもとにさらに発展させ、同戦争が長期的に計画・運営された結果であるという認識ではなく、偶発的事変からまた次の事変へという悪循環の中で生まれた結果であるという認識に基づき、かかる不幸な事変が連続発生した原因を再検証したいと考えている。さらに、戦争責任を考察するだけでなく、満洲開発をも研究の軸として、戦争期における満洲国の位置づけを再検討することが、筆者のもう一つの狙いである。

<sup>3</sup> 川島真『『日中歴史共同研究』の三つの位相』（笠原十九司編『戦争を知らない国民のための日中歴史認識』勉誠出版、2011年所収）、86-87頁。

今日まで、満洲国に関する中国側の研究は、負の側面を追究することが主流であった。つまり、どれだけ大勢の中国人が使役され殺害されたか、どれほど大量の物資が略奪されたかという研究テーマが中国学術界の研究の主流であった。上記はいずれも事実である。しかしながら、満洲を中国本土と同様の基準で論じるのは歴史の全貌を掴み損ねる恐れがある。なぜならば、満洲は戦場ではなかったからである。日本の朝野が1936年までに満洲に投資した金額は、累積で30億円に及んだ<sup>4</sup>。同年の日本の国家予算22億7千万を7億円以上も上回る巨額の投資を満洲に行ったのは何のためであろうか。筆者は日本の満洲支配の原点に遡り、満洲国の位置づけを再検討することにした。

すなわち、「貨幣統一事業」をはじめ、「日満経済ブロック」のスローガンの下で、「総力戦体制」に照応する第一期満洲経済建設が1932年満洲国の樹立とともに実施されることになった。さらに第二期計画として、「満洲国産業開発五ヵ年計画」が立案・実施された。1937年当時、国家予算が28億円しかなかった日本は、本計画を遂行するため、1937年以降の5年間で26億円の資金を満洲国に投入した。斯様に雄大な計画を実施した狙いは、満洲の一大鉄鋼地域化であった。<sup>5</sup>

工業化された満洲には、製鉄業などの一部先端技術が日本本土とほぼ同じ水準で導入された。後にこの地域が中華人民共和国の最重要工業地域として発展したことを考えれば、満洲国時代の工業化の実績についてさらに深く考察すべきではないだろうか。また、通産省を中心とする官僚が主導し、政財官三位一体で経済成長を推進する「日本的経営システム」の原型が満洲国で作られた点<sup>6</sup>を考慮すれば、日本側にとっても、満洲経験は再検討する価値があろう。「十五年戦争」とともに成長した満洲国には、日中双方がそれぞれ遺産として改めて評価すべきものが残っているのではないだろうか。したがって、この遺産を両国がどのように用いてきたかを明らかにすることも、筆者の研究目的のひとつになった。

#### 四、日本における新たな共同研究（第一段階）

こうした新しい視座を念頭に、筆者は、日中戦争のあらゆる事実とその関連性についての理解を再構築するため、日本と台湾の二段階に分けて共同研究を進めた。第一段階は、日文研で行った一年間の共同研究である。その成果報告が、2017年9月に京都のミネルヴァ書房から出版された『〈日中戦争〉とは何だったのか—複眼的視点』と題した論文集である。<sup>7</sup> 日本出身の学者7名をはじめ、中国出身の学者5名、台湾出身の学者1名が結集した同論文集は、「戦前」「戦争期」「終戦から戦後へ」の三部構成となり、各論文は時系列に沿って配置されている。

<sup>4</sup> 満史會編『満洲開發四十年史』上冊、満洲開發四十年史刊行會、1964年、120頁。

<sup>5</sup> 小林英夫『満鉄が生んだ日本型経済システム』教育評論社、2012年、89頁。

<sup>6</sup> 小林英夫『満洲と自民党』新潮新書、2005年、180頁。

<sup>7</sup> 黄自進・劉建輝他編『〈日中戦争〉とは何だったのか—複眼的視点』ミネルヴァ書房、2017年。

第一部では、「反共提携」を軸として、日中関係が友好関係から敵対関係へと変遷した過程をたどった。特に、日本政府が「防共」を国策としたにもかかわらず、同じく「防共」を掲げ中国共産党と戦っていた蒋介石を仲間として扱わなかった理由について、日中両国の学者が各々の視点から再検討した。

第二部では、盧溝橋事件を契機として全面戦争へと事態が拡大した経過について、戦争責任、国際関係、戦史記録の三つの視点から検証した。戦争責任については、外務省、海軍、世論の責任を、国際関係については、戦争期における日中両国の外交のあり方を検討・解明し、戦史記録については、日中両国の相違を手掛かりとして事実と記憶とのずれに注目し、「個人行為」と「国家行為」とを区別するという新たな方法論を提案した。

第三部では、「玉音放送」により終戦を迎えた日本政府が、戦後、いかにして平和に対する決意を固めたかを論証するとともに、「戦争」により養われたアジアに対する知見が、戦後、日本の財界人の実業活動をいかに助けたかを描き出した。中国側の研究としては、講和をめぐる国民政府の構想とその挫折及び戦後処理に対する中国民衆の不満に光を当て、日中間における対立の原点に立ち戻った。また、「白団」成立の経緯に着目し、国共内戦に敗北し台湾へ移転した蒋介石が、軍再建にあたり旧敵日本の助力を得た経緯についても検討した。

戦争史をめぐる「日本と台湾と中国」の三者間で認識に相違がある中、今回のような形で共同研究の成果を出版できたことは、同共同研究を通して、三者の認識に一定の調和が見られるようになってきたことを示すものと言えよう。

## 五、台湾での継承（第二段階）

共同研究の第二段階は、「和解への道—日中戦争の再検討」と改名して、台北を拠点として2015年9月から2017年9月まで3年間に亘る研究プロジェクトとして再展開された。

当研究プロジェクト進行中の2015年12月19日から20日にかけて、近史所は「日中戦争のアジアに対する衝撃」という国際シンポジウムも開催した。59通の論文が提示され、日本、中国、欧米諸国（米国、英国）などの学者に加え、ミャンマー、ベトナム、インド、マレーシア、韓国、台湾といったアジア諸国の代表者も参加した。彼らの参加によって、戦争の本質について再検討の余地があることが明らかになった。つまり、日中戦争と太平洋戦争とを直線で繋げる考え方に対して異論が出るようになったのである。例えば、インド・デリー大学のランジャンムコパディヤ氏は、インドの政界においては、日中戦争に対する評価は人によって異なるが、太平洋戦争に対しては日本支持一色であると述べた。インドの独立は太平洋戦争によって可能になったという歴史認識が、今日のインドでは主流なのである。

太平洋戦争とはアジア解放戦争の一環であるとの論調に共鳴したのは、ミャンマー・ミッチーナ大学のカヤ・スエ・ニュント氏であった。彼によれば、太平洋戦争初期、

アウン・サン将軍率いるビルマ独立義勇軍は、英国支配からの独立を求めて日本軍に加担して英国軍隊と戦ったことがあるという。

英国支配を悪だと認識するならば、植民地支配を温存させんとする活動の一切は、ビルマ独立義勇軍にとって敵対行為である。1942年3月、英国の要請に応じる形でビルマ防衛戦に参戦した中国軍がビルマ独立義勇軍から敵軍として扱われたのは、このためである。従来の中国国民の歴史認識では、太平洋戦争とは日本から自国の領土を守るという意味での「既存の国際秩序を守る」戦いであった。中国軍によるビルマ作戦参戦もこの認識の延長で行われ、その意図するところは反ファシズム統一戦線の共闘であり、既存の植民地体制を守ろうという意図は全く含まれていなかった。中国のビルマ作戦が、当時のビルマ国民から既存の植民地体制を守るための参戦であると理解されていたことは、中国国民には想像も及ばないことであった。

このような経緯から、日中戦争史の検討は、両国間関係に限定した場合と、限定しない場合とでは、視野にかなりのずれがあることをこのシンポジウムを通じて痛感することとなった。同論文集は、28篇の論文を「戦時の社会経済体制及びその変遷」、「戦時に現れた政党、軍事、政治の多面性」、「戦争と国際交渉」、「戦後の国内外情勢をめぐる構想とその実践」、「戦争とアジア」の五部編成にしたうえで中国語に翻訳し、2018年7月に『日中戦争と東アジア変局（中日戦争與東亞變局）』と題して、新北市の稻郷出版社から出版された。<sup>8</sup>

同シンポジウムを通して得られた経験に基づき、我々の研究グループは、2015年9月の第1回目の研究会では44本、2016年12月の第2回目の研究会では24本、2017年9月の第3回目の研究会では41本の論文を発表してきた。この中から22本の論文を選出し、『和解への道—日中戦争の再検討（邁向和解之路—中日戦争的再検討）』と題する論文集を出版することとなった。

同論文集は、「歴史の叙述と記憶」、「盧溝橋事件と日中戦争のエスカレーション」、「戦争と中国国内政局の変動」、「戦争と対外関係」、「戦争と中国共産党の興起」、「戦時経済体制の構築と変容」の六部編成であり、中国語に翻訳後、2019年6月に新北市の稻郷出版社から出版される予定である。<sup>9</sup>

研究グループの参加者である成城大学の田嶋信雄氏は、共同研究の成果として以下二点を指摘した。

第一の成果は、盧溝橋事件の発生からその後の衝突激化の過程を3段階（①盧溝橋事件へといたる政治過程、②盧溝橋事件から7月末に戦争が拡大するまでの3週間の過程、③8月13日の上海事変勃発によりさらに戦争が拡大する過程）に分け、各段階の詳細な分析を行ったという成果である。その過程には、当時の日本政府が採用した戦争拡大・全面侵略以外にも、複数の政治的選択肢が存在していたことが明らかとなった。日本が盧溝橋

<sup>8</sup> 黄自進・潘光哲他編『中日戦争與東亞變局』稻郷出版社、2018年。

<sup>9</sup> 黄自進編『邁向和解之路：中日戦争的再検討』稻郷出版社、2019年。

事件を契機に中国への侵略戦争を拡大したという大筋は変わらないが、こうした研究によって歴史の襞が明らかになり、日中戦争の拡大過程を見るイメージが豊かになった。

第二の成果は、蒋介石、宋哲元、広田弘毅などを事例として指導者層と国民との関係性を分析した成果である。政治家・官僚・軍人らが世論のナショナリズムに拘束される側面と、逆に政治家・官僚・軍人らが国民の戦争熱を煽るという二つの側面が注目された。<sup>10</sup>

ところで、日中戦争の過程を通観すると、当初の目論見と最終的な成果との間にかなりのはずれがあるように思われる。つまり、筆者の歴史認識としては、満洲国の工業化の進展は、日中両国にとって重視すべき遺産であったと捉えている。満洲開発の再検討はこの共同研究の焦点の一つであったが、このテーマに関する論文の提出は中国側からは2本のみ、日本側からはなしという結果に終わったことは残念である。

また、日中戦争が偶発的事件から悪循環の末に拡大した理由を明らかにするべく、盧溝橋事件をはじめ、上海作戦、南京占領、徐州会戦、漢口作戦、広東作戦などの各事変を再検討したうえで各段階における担当者の責任を追及し、相互の戦争責任を明らかにするという論点も当初期待した成果の一つであった。しかしながら、結果としては、盧溝橋事件から上海作戦への発展の経過については3本の論文で論じられたが、それ以降の軍事行動の発展については全く検討されず、この点は今後の研究に大いに期待する点である。

一方で、戸部良一氏による「日中戦争初期における近衛内閣の対応」という優れた論文を得ることができたことは、本研究の得難い成果であった。とりわけ、同論文において「閣議における近衛首相の発言がほとんど聞こえてこないことに注目すべきである。そのことが、この時期の国家意思決定機関としての閣議の存在をやや希薄なものにしている。近衛は、沈黙しながら閣僚たちの発言を聞き、その大勢に乗ろうとしたのかもしれない。そして、このような強硬論を安易に反映する近衛の政治指導スタイルこそが、日中戦争を拡大させた重要な要因の一つとなったのである」という結論を得たことによって、我々の戦争責任に関する研究は、ようやく第一歩を踏み出すことができたものといえよう。

## 今後の展望：結論にかえて

日文研にて構築した研究基盤を、海外で深化するという運営の仕組みは、東アジア域内の国際的研究交流の新しい形である。この研究計画のみで両民族の和解が成るとは考えないが、本共同研究が、和解への第一歩として抛擲引玉（擲《レンガ》を抛げて玉を引く）の役割を果せれば幸いである。

<sup>10</sup> 田嶋信雄「国際シンポジウム「和解への道—日中戦争の再検討」参加記」『近現代東北アジア地域史研究会』第27号、2015年、38頁。

また、この共同研究を通して、和解への意思を持つ多くの同志を得られたことは大変な意義があると思う。こうした流れから、例えば早稲田大学では「和解学の創成：正義ある和解を求めて」という研究計画が、平成 29 年度「新学術領域研究（研究領域提案型）」で新規採択された。<sup>11</sup> 共通の歴史認識と人脈を基に、同プロジェクトとの協力関係を築きながら、我々の日中戦争史共同研究をさらに進展させたいと考えている。

---

<sup>11</sup> 「早稲田大学・和解学の創成」ウェブサイト、<http://www.prj-wakai.com/>.

# Attempt to Globalize Japanese Studies: Focusing on Joint Research on the History of the Japanese-Chinese War

Huang Tzuchin

## Introduction

During my term as an invited international research fellow at the International Research Center for Japanese Studies (Nichibunken) from June 2014 to May 2015, I organized a research meeting titled “Japanese Military Strategy and East Asian Society: Focusing on the Period of the Japanese-Chinese War.”

This research meeting aimed to clarify the political, economic, social, intellectual and cultural impacts made by Japan’s war, which involved all of East Asia, on Japan itself and East Asian countries, especially Chinese society.

After I left Kyoto, this joint research relocated its base to the Institute of Modern History (IMH), Academia Sinica, in Taipei, Taiwan, with the support of the Chiang Ching-kuo Foundation for International Scholarly Exchange and resumed as a three-year research project from September 2015 to September 2017 under the changed title of “Steps Towards Reconciliation: The Introspection of the Second Sino-Japanese War.” In addition, to inform the wider academic world of the objectives of this joint research, IMH hosted an international symposium titled “Impacts that the Japanese-Chinese War had on Asia” in December 2015 with the attendance of scholars from 14 countries/regions.

We have thus made efforts to promote research on the history of the Japanese-Chinese War from such an international perspective. What effects have these efforts of ours produced? What meanings can we find in joint research with such a framework? From the perspectives of these questions, this paper reviews the process of the joint research at Nichibunken, Kyoto, and the subsequent project in Taipei as an example.

## 1. Issues of “Historical Recognition”

Recently, various issues concerning historical recognition have repeatedly occurred between Japan and China. I believe that a breakthrough in this situation will require both countries to focus only on the main points in dispute and begin by discussing the origin of the issues. Difference in the recognition of the Japanese-Chinese War exists not only between Japan and China but also within Japan and between China and Taiwan across the Taiwan Strait. This complex situation is reflected in the point in dispute over history textbooks.

### (1) Dispute within Japan

A typical argument of one side in the dispute within Japan is that made in *Atarashī Rekishi Kyōkasho* 新しい歴史教科書 (“New History Textbooks”) (the Fusōsha version, the current Jiyūsha version and the Ikuhōsha version). The textbooks officially approved in 2002 advance a peculiar argument, which challenges conventional history education. For example, the text-books

interpret the “anticommunist policy” and the “argument that the Soviet Union would be a threat to Japan” advocated by the Japanese military during wartime at face value and view the essence of Japan’s war as a “war for liberating Asia, instead of a war of aggression.” The textbooks also point out that the “Tokyo Trial” was “judgement by the winners” and emphasize the aspect of Japan as a victim, allowing little space for Japan as the perpetrator in the invasion of China and the colonization of Taiwan and Korea.

## (2) Dispute between China and Taiwan

Such dispute over interpretations of the same historical fact can be also found in textbooks on both sides of the Taiwan Strait.

For example, China and Taiwan have different views on Chiang Kai-shek’s policy of non-resistance, which allowed the Kwantung Army to occupy Northeast China at once during the Mukden Incident. Textbooks in communist China emphasize that the Japanese occupation of Northeast China was the fault of the Nationalist Party, whose leader, Chiang Kai-shek, “ordered” Zhang Xueliang, who had the highest authority over Northeast China, not to resist the Japanese army. Meanwhile, textbooks in Taiwan, where the Nationalist Party was based after the war, maintain that the party at the time of the Mukden Incident judged the Japanese side to be militarily and generally superior to themselves and determined that it would be better to obtain support from the League of Nations than to bring China alone into armed conflict with Japan.

The “*annei rangwai*” 安内攘外 policy (placing higher priority on internal stability to deter the external enemy) advocated by Chiang Kai-shek after the Mukden Incident is also differently evaluated in China and Taiwan. Chinese textbooks point out that the policy was really intended to continue implementing a “reactionary policy,” including a compromise with Japan and a siege on the Red Army. Meanwhile, Taiwanese textbooks argue that the true intention of the policy was to promote internal political reforms by temporarily avoiding armed conflict with Japan and to increase national strength.

China and Taiwan also disagree with each other over who took the leadership in the Anti-Japanese War, which ended in the victory of China. While Chinese textbooks maintain that the victory resulted from the “protracted war” policy pursued by the Mao Zedong-led Communist Party, Taiwanese textbooks emphasize that the victory was the fruit of joint operations between the Chiang Kai-shek-led Nationalist Party, the Chinese people who stirred themselves under the guidance of the Nationalist Party, and the Allied Powers.<sup>1</sup>

## 2. Past Research Trends

To solve the dispute between Japan and China over historical recognition triggered by the above-mentioned textbook issue, a government-level joint research project was launched in December 2006. The research project was implemented under the co-chairmanship of Kitaoka

---

<sup>1</sup> Kikuchi Kazutaka 菊池一隆 *Higashi Asia Rekishi Kyōkasho Mondai no Kōzu: Nihon, Chūgoku, Taiwan, Kankoku, oyobi Zainichi Chōsenjin Gakkō* 東アジア歴史教科書問題の構図：日本・中国・台湾・韓国、および在日朝鮮人学校, Hōritsu Bunkasha, 2013.

Shin'ichi and Bu Ping, and its achievements were published in 2014 in a two-volume report, one of which was dedicated to ancient, medieval and early-modern history, while the other was dedicated to modern and contemporary history.<sup>2</sup>

Professor Kawashima Shin, The University of Tokyo, who was a member of this joint research project, states that disagreement between Japan and China has arisen due to the difference in approaches both sides take for historical research. According to Professor Kawashima, the Chinese side takes a result-oriented approach and tries to explain that certain intentions eventually led to the Japanese-Chinese War, so they believe that explanations of individual specific events are just incidental to the intentions or cause. Meanwhile, the Japanese side believes that results are incidental to individual specific events. They place higher importance on the process than on the results, that is, they believe that individual decisions made under various conditions produce historical results.<sup>3</sup>

The attitude of the Chinese side is symbolized by the naming of the “second Sino-Japanese War.” They recognize that the first Sino-Japanese War in 1894 was connected directly to the second Sino-Japanese War in 1937 with the national policy of “expansion to the continent” pursued by successive Japanese governments. As long as the Japanese government advocated this national policy, even the withdrawal of the Chinese army from Korea in response to Japan’s request after the first Sino-Japanese War could have not bring peace between China and Japan. The second Sino-Japanese War was an inevitable military conflict caused by the expansion of the scope of Japan’s “expansion to the continent” policy from the Korean peninsula to mainland China, so the war was the natural consequence of the Japanese policy. The Chinese side does not believe that a period of 43 years between the first and second Sino-Japanese Wars meant Japan’s giving up on the policy of expanding to the continent.

This Chinese attitude toward seeking the essence shows a sharp contrast with the Japanese attitude toward placing importance on case studies. Japanese historians argue that historical facts cannot be revealed without exploring how problems occurred and what progress they made.

From the historical perspective of the Japanese side, there were certainly mutual distrust and hostility between Japan and China for a long time, but a full-scale war between the two countries triggered by the Marco Polo Bridge Incident was neither developed nor expanded by the Japanese government’s intention. The Japanese government itself never did declare war against China and tried implementing various measures for peace even during the war. According to Japanese historians, the Japanese government hoped that armed conflict with China would be resolved early. The subsequent indefinite expansion of the war resulted from a vicious circle of successive accidental conflicts. The Japanese side, therefore, maintains that it is important to reveal the process where the vicious circle of conflicts developed into a full-scale war.

<sup>2</sup> Kitaoka Shin'ichi & Bu Ping eds. 北岡伸一・歩平 ‘*Nicchū Rekishi Kyōdō Kenkyū*’ *Hōkokusho* 『日中歴史共同研究』報告書 Vol. 2 *Kingendaishi-hen* 近現代史篇, Bensei Shuppan, 2014.

<sup>3</sup> Kawashima Shin 川島真 “‘*Nicchū Rekishi Kyōdō Kenkyū*’ no Mitsuru no Isō” 『日中歴史共同研究』の三つの位相 (Kasahara Tokushi 笠原十九司 ed. *Sensō wo Shiranai Kokumin no tameno Nichchū Rekishi Ninsbiki: ‘Nicchū Rekishi Kyōdō Kenkyū <Kingendaishi>’ o yomu* 戦争を知らない国民のための日中歴史認識: 『日中歴史共同研究〈近現代史〉』を読む, Bensei Shuppan, 2011), pp. 86–87.

### 3. New Research Perspectives

As seen above, Japan and China differ not only in historical recognition but also in approaches to historical research, resulting in an unbridgeable gap in their interpretations of the Japanese-Chinese War. In particular, the Chinese side, whose national land was the battlefield, claimed that any research efforts could not lead to reconciliation unless the Japanese side reveals where responsibility for the war lies.

Aiming for reconciliation between the two nations, I will first focus only on the process of the expansion of the war to explore the responsibility of those involved in each incident. In other words, I hope to reexamine what caused the occurrence of successive unfortunate incidents by further developing the Japanese side's research achievements, based on the recognition that the Japanese-Chinese War resulted from a vicious circle of successive incidents, rather than a long-term plan and operation. Furthermore, I also aim not only to explore where responsibility for the war lies but also to reexamine the positioning of Manchukuo in wartime by defining the development of Manchuria as another research focus.

Chinese historians have so far tended to explore the negative aspects of Manchukuo. More specifically, major research themes in the Chinese academic world of history have been how many Chinese people were forced to work or killed and how many resources were plundered. These are all facts. However, discussing Manchuria by the same standards as mainland China may make us fail to grasp the overall picture of history because Manchuria was not a battlefield. By 1936, the public and private sectors of Japan invested a total of three billion yen in Manchuria.<sup>4</sup> Why did the Japanese invest such a huge amount of money, which exceeded the national budget of Japan in the same year—2.27 billion yen—by 0.7 billion yen? I decided to trace the origin of the Japanese rule of Manchuria and reexamine the positioning of Manchukuo.

At the same time as the founding of Manchukuo in 1932, the first-term plan for Manchuria economic construction began to be implemented in line with the total-war regime under the slogans of the “currency integration project” and the “Japan-Manchuria economic bloc.” Subsequently, the five-year plan for the industrial development of Manchukuo was formulated as the second-term plan. Despite its own national budget of only 2.8 billion yen in 1937, Japan invested 2.6 billion yen in Manchukuo in the period of five years after 1937 to implement this plan. The gigantic plan was aimed at developing Manchuria into a steel production center.<sup>5</sup>

Some then state-of-the-art industries, including the iron industry, were introduced into industrialized Manchuria at almost the same level as in Japan. Given that this area later developed as the most important industrial area in the People's Republic of China, more detailed consideration should be given to achievements of the industrialization of Manchukuo. In addition, taking into account the fact that the industrialization of Manchukuo provided a

<sup>4</sup> Manshikai 滿史會 ed. *Manshū Kaihatsu Yonjūnenshi* 滿州開發四十年史, Vol. 1, Manshū Kaihatsu Yonjūnenshi Kankōkai, 1964, p. 120.

<sup>5</sup> Kobayashi Hideo 小林英夫 *Mantetsu ga Unda Nihongata Keizai System* 滿鉄が生んだ日本型経済システム, Kyōiku Hyōronsha, 2012, p. 89.

prototype for the postwar “Japanese-style management system,” where economic growth was promoted in collaboration between government, industry and bureaucracy under the leadership of bureaucrats at the Ministry of International Trade and Industry and other ministries,<sup>6</sup> the Japanese side also should reexamine the country’s experience in Manchuria. I suppose that the former area of Manchukuo, which developed in parallel with the “Fifteen Years War,” has something that both Japan and China should reevaluate as a legacy. Therefore, revealing how both countries have used this legacy has been added to my research objectives.

#### 4. New Joint Research in Japan (First Stage)

Keeping in mind these perspectives, I conducted joint research divided into two stages—the first in Japan and the second in Taiwan—to reestablish my understanding of all facts concerning the Japanese-Chinese War and relationships between these facts. The first stage was one-year joint research at Nichibunken, whose results were published in a collection of papers titled <*Nicchū-sensō*> *towa Nandattanoka: Fukugan-teki Shiten* <日中戦争>とは何だったのか：複眼的視点 (lit. “What Was the Japanese-Chinese War?: From Multiple Perspectives”) by Minerva Shobo, Kyoto, in September 2017.<sup>7</sup> This collection of papers written by seven scholars from Japan, five from China, and one from Taiwan comprises three parts— “Before the War,” “During the War” and “From the End of the War to the Postwar Era”—and the papers are arranged in chronological order.

Focusing on “anticommunist alliance,” Part One traces the process of changes in the relationship between Japan and China from friendly relations to hostile ones. In particular, Japanese and Chinese authors reexamine from their own perspectives why the Japanese government did not treat Chiang Kai-shek, who was fighting against the Communist Party from his “anticommunist” position, as its ally despite its anticommunist policy.

Part Two examines the process of the expansion of conflict into a full-scale war triggered by the Marco Polo Bridge Incident from the three perspectives of responsibility for the war, international relations and records of war history. From the perspective of responsibility for the war, the responsibility of the Ministry of Foreign Affairs, the Navy and public opinion is examined and clarified, while from the perspective of international relations the authors examine and explore what diplomatic policies both the Japanese and Chinese governments pursued during the war. From the perspective of records of war history, using the difference in historical recognition between Japan and China, the research focus is placed on the gap between facts and memories, and the authors propose a new method of dividing “the actions of individuals” from “the actions of a state.”

Part Three argues how the Japanese government became determined to maintain peace after the broadcast of the Emperor’s announcement of Japan’s surrender and the consequent end of the war, and it describes how knowledge about Asia developed through the “war” helped

<sup>6</sup> Kobayashi Hideo 小林英夫 *Manshū to Jimintō* 満州と自民党, Shinchō Shinsho, 2005, p. 180.

<sup>7</sup> Huang Tzuchin, Liu Jianhui 黄自進・劉建輝 et al. eds. <*Nicchū-sensō*> *towa Nandattanoka: Fukugan-teki Shiten* <日中戦争>とは何だったのか：複眼的視点, Minerva Shobō, 2017.

Japanese businesspersons conduct business activities in the postwar era. Placing the research focus on the Chinese side, the authors shed new light on the Nationalist Party's plan for peace talks and its failure and Chinese people's complaints against postwar settlement to trace the origin of the postwar dispute between Japan and China. Furthermore, the authors also focus on the establishment process of "Paidan 白團" and examine how Chiang Kai-shek received support from Japanese people as his former enemy to reconstruct the military forces after being defeated in the Chinese Civil War and moving to Taiwan.

It can be said that, despite differences in the recognition of the war history between Japan, Taiwan and China, success in this joint research and the publication of its results may prove that this joint research has helped build a certain consensus between the three parties.

### **5. Continuation of Research in Taiwan (Second Stage)**

The second stage of the joint research was implemented as a three-year research project based in Taiwan from September 2015 to September 2017, under the changed title of "Steps Towards Reconciliation: The Introspection of the Second Sino-Japanese War."

On December 19 and 20, 2015, during this research project, IMH hosted an international symposium titled "Impacts that the Japanese-Chinese War had on Asia." With 59 papers presented, the symposium was attended by scholars from Japan, China, the U.S. and the UK, as well as representatives of Asian countries, such as Myanmar, Vietnam, India, Malaysia, Korea and Taiwan. Their participation helped reveal that there is still room for reexamination of the nature of war. More specifically, some attendees voiced their opposition to the position that the Japanese-Chinese War led directly to the Pacific War. For example, Ranjana Mukho-padhyaya, India, stated that, although people in the Indian political world differ in views on the Japanese-Chinese War, all of them support the position of Japan concerning the Pacific War. The historical recognition that the Pacific War enabled India to become independent is accepted as a mainstream opinion in India.

Kyaw Swe Nyunt agreed with the recognition that the Pacific War was part of the war for liberating Asia. According to him, the Burma Independence Army led by Major General Aung San fought against the British army to support the Japanese military in order to become independent from British rule.

If British rule was recognized as evil, all activities that could help sustain British colonial rule were hostile activities from the perspective of the Burma Independence Army. That is why, when Chinese troops participated in a battle for defending Burma in response to the request of the UK in March 1942, they were treated as enemies by the Burma Independence Army. The conventional historical recognition of the Chinese general public has been that the Pacific War was a war for "protecting existing international order" in the sense of protecting national land from the Japanese. The Chinese troops participated in the operations in Burma based on an extension of such recognition with the aim of cooperating in the anti-fascist united front, never dreaming that they were protecting the existing colonialist regime. The Chinese people never imagined that Chinese troops' participation in operations in Burma was seen by the Burmese people at that time as aimed at protecting the existing colonialist regime.

These exchanges of different views during the symposium made us realize that there would be a wide gap between the history of the Japanese-Chinese War examined from the limited perspective of the relations between the two countries and that examined from the wider perspective of international relations between a larger number of countries. The results of the symposium were published in a collection of 28 papers divided into the five parts of “Wartime social and economic regimes and their changes,” “Multifaceted characteristics of political parties, the military and politics in wartime,” “War and international negotiation,” “Postwar plans for domestic and international conditions and their implementation,” and “War and Asia.” With all papers translated into Chinese, the book was published under the title *Zhongri Zhanzheng yu Dongya Bianju* 中日戰爭與東亞變局 (*The Sino-Japanese War and the Changes in East Asia*) in July 2018 by Daw Shiang Publishing 稻鄉出版社, New Taipei City.<sup>8</sup>

Based on our experience through the symposium, our research group presented 44 papers at our first research meeting in September 2015, 24 papers in our second research meeting in December 2016, and 41 papers at our third research meeting in September 2017. Among these papers, we selected 22 papers to publish a collection of papers titled *Maixiang Hejie zhi Lu: Zhongri Zhanzheng de Zaijiantao* 邁向和解之路：中日戰爭的再檢討 (lit. “Steps Towards Reconciliation: The Introspection of the Second Sino-Japanese War”).

This book comprises the six parts of “Historical Descriptions and Memories,” “Marco Polo Bridge Incident and its Escalation to the Japanese-Chinese War,” “War and Changes in Chinese Domestic Politics,” “War and External Relations,” “War and the Uprising of the Communist Party of China,” and “Construction of the Wartime Economic Regime and its Changes.” After being translated into Chinese, the book will be published in June 2019 by Daw Shiang Publishing, New Taipei City.<sup>9</sup>

Professor Tajima Nobuo, Seijo University, a member of the research group, points out the following two achievements of the joint research.

The first achievement is that the entire process, from the occurrence of the Marco Polo Bridge Incident to subsequent increasing conflicts, was divided into three stages (① the political process leading to the Marco Polo Bridge Incident, ② the three-week process from the Marco Polo Bridge Incident to the expansion of the war at the end of July, and ③ the process of further expansion of the war triggered by the Battle of Shanghai on August 13), each of which was analyzed in detail. The joint research has revealed that, in the entire process, the Japanese government had multiple political choices other than the expansion of the war and total invasion the government actually took. While such research has made no changes to the widely accepted argument that the Marco Polo Bridge Incident triggered the expansion of the Japanese invasion of China, the research has revealed the historical details and enriched our imagination about the process of expansion of the Japanese-Chinese War.

The second achievement is the analyses of relationships between the nation and their leaders, including Chiang Kai-shek, Song Zheyuan and Hirota Kōki. Special attention was

<sup>8</sup> Huang Tzuchin 黃自進, Pan Kuang-che 潘光哲 et al. eds. *Zhongri Zhanzheng yu Dongya Bianju* 中日戰爭與東亞變局, Daw Shiang Publishing, 2018.

<sup>9</sup> Huang Tzuchin 黃自進 ed. *Maixiang Hejie zhi Lu: Zhongri Zhanzheng de Zaijiantao* 邁向和解之路：中日戰爭的再檢討, Daw Shiang Publishing, 2019.

paid to two aspects of such relations: the aspect of the activities of politicians, bureaucrats and militaries restricted by nationalistic public opinion and the aspect of politicians, bureaucrats and militaries firing the nation's enthusiasm for war.<sup>10</sup>

It is worth noting that looking through the process of the Japanese-Chinese War has made us notice a considerable gap between our initial aims and final results. Specifically, there should be historical recognition that the industrialization of Manchukuo has been a legacy that deserves to be valued by both Japan and China. Although reexamination of Manchuria development was originally a key focus of this joint research, this theme was dealt with only by two papers submitted by Chinese scholars, with no papers on this theme submitted by Japanese participants. This is quite regrettable.

In addition, we initially expected that this joint research would reexamine each of the incidents, including the Marco Polo Bridge Incident, the Shanghai Operation, the occupation of Nanjing, the Battle of Xuzhou, the Battle of Wuhan, and the Canton Operation, explore the responsibility of those involved in each incident, and clarify responsibility for the war on both sides in order to reveal why a vicious circle of accidental incidents expanded into the Japanese-Chinese War. However, three papers dealt with the developmental process, from the Marco Polo Bridge Incident to the Battle of Shanghai, but no papers examined the process of other military operations. I hope that these incidents will be examined later.

Meanwhile, a precious fruit of this joint research is Professor Tobe Ryoichi's excellent paper titled "Nicchū-sensō Shoki ni okeru Kono'e Naikaku no Taiō" 日中戦争初期における近衛内閣の対応 (lit. "Response of the Kono'e Cabinet in the Early Stage of the Japanese-Chinese War"). The paper concludes: "Special attention should be paid to the fact that Prime Minister Kono'e's words at Cabinet meetings were almost unable to be heard, which seems to have decreased the significance of the Cabinet as a decision-making organization for the nation at that time. Kono'e may have listened to other Cabinet members in silence and tried to follow the mainstream trend. Kono'e's style of politics easily enabled the positions of hardliners to prevail and provided a major cause of the expansion of the Japanese-Chinese War." It can be said that his conclusion marks the first step toward our research on responsibility for the war.

### **Path Forward: In Place of a Conclusion**

The research management style of deepening abroad the foundation for research built at Nichibunken is a new form of international research exchange in East Asia. Although I do not believe that this research project alone can contribute to reconciliation between the two nations, I hope that this joint research project can play a role in "paozhuan yinyu" 抛甄引玉 ("tossing out a brick to get a jade gem"), that is, inspiring many more valuable ideas and studies, as the first step toward reconciliation.

I also believe that it has been very significant for me to encounter many fellow scholars

<sup>10</sup> Tajima Nobuo 田嶋信雄 "Kokusai Symposium 'Wakai eno Michi: Nicchū-sensō no Saikentō' Sankaki" 国際シンポジウム「和解への道：日中戦争の再検討」参加記, *Kingendai Tōhoku Asia Chiikishi Kenkyūkai* 近現代東北アジア地域史研究会 (*Association for the Modern and Contemporary History of Northeast Asia*), vol. 27, 2015, p. 38.

who share with me aspirations for reconciliation through this joint research project. This trend, for example, has resulted in the project “Towards the Creation of Reconciliation Studies” 和解学の創成：正義ある和解を求めて proposed by Waseda University being selected for AY2017 Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas (research in a proposed research area).<sup>11</sup> Based on shared historical recognition and human networks, I hope to further develop our joint research on the history of the Japanese-Chinese War in collaboration with Waseda University’s project.

---

<sup>11</sup> Website of Waseda University’s project “Towards the Creation of Reconciliation Studies”: <http://www.prj-wakai.com/>



# 朱舜水の「拜官不就」と「明徴君」の称号

韓東育

## 一、ふかく「大明」を愛すと「拜官不就」との間

朱舜水（1600-1682）、浙江余姚の人、名は之瑜、魯嶼と字し、舜水と号す。明滅亡後、明室の恢復を職責とし、長年海外で事に従事した。かつて繰り返し日本に赴いて「援軍を求め」、最後には1659年に日本に定住した。史料の記載を根拠にすれば、「明清鼎革」後、朱舜水は主に舟山を中心として、日本と安南との間を出入りし、15年が経過した。その間日本には7回、安南には6回渡った。その目的をすべて理解する術はないが、大体は、(1) 朝廷の徴辟を避ける [12回以上]、(2) 外国で事に従事し、明朝恢復の勢力を提供する、(3) 日本に赴いて王翊のために明朝恢復の兵を借りる。(4) 海に身を投じて節義を全うする志を遂げる、である。これに対し、石原道博は専門的な人々のために一枚の朱舜水「海外経営」路線図を描き出した。<sup>1</sup>

朱氏の海外漂流の目的のなかで、「朝廷の徴辟を避ける」の項目は、人々の関心を引く。『碑傳集補』に説明するように、朱舜水は「崇禎十七年、特に召し出されたが赴任しなかった。弘光一年、もう一度召し出されたが赴任しなかった。江西按察使司副使及び兵部職方清吏司郎中を授かり、方國安軍を監督したが、また受けなかった。」<sup>2</sup>によって、結果は「臺省〔尚書省〕は弾劾書を交付した。要旨は臣が『傲りたかぶって朝命を受けないのは、臣下の礼がない』というものである。臣はただちに海辺に夜逃げした」のであった。<sup>3</sup> 朱舜水個人の統計によると、官に封ぜられて拝命しなかったのは、全部で12回である。<sup>4</sup> 道理上、明滅亡後に「中華を回復する」ために駆け回って訴え、死に至るまで少しも怠らなかった朱舜水は、最も「大明」を愛し、最も「祖国」のために貢献した人とするべきである。そのうえ、彼と親密に交際した多くの人の記録は、彼の行動に関連する記述も相当具体的である。安東守約の『舜水先生行実』は、「先生はここに仮住まいしているが、いつも故郷に向かって慟哭し、時に北を背にし、ただ邦の仇敵がいまだに恥を雪がないのを憾みとするだけで、闔室が破れたことを悲しみとするのではない。頼みとする者は旧邦の二三の忠臣、仰ぐ者は明室代々の積徳だけである」<sup>5</sup> という。日本に定住した後、舜水もふたたび自らの状況を再現していった、「慟哭すること十七年、悲しみのあまり瘦せおとろえ、十年血を吐き、容貌は悲しみのあまりやせ衰え、顔は枯れ

<sup>1</sup> 石原道博『明末清初日本乞師の研究』、東京：富山房 1945年版、第195頁を参照。

<sup>2</sup> 閔爾昌『碑傳集補』卷三十五「朱之瑜」（『朱舜水集』下冊、北京：中華書局 1981年、第641頁所収）を参照。

<sup>3</sup> 『安南供役紀事』（『朱舜水集』上冊、北京：中華書局 1981年、第31頁所収）を参照。

<sup>4</sup> 「答源光國問先世緣由履歷」（『朱舜水集』上冊、第352頁所収）を参照。

<sup>5</sup> 今井弘濟・安積覺『舜水先生行實』（『朱舜水集』下冊、第617頁所収）を参照。

葉色である。」と。ついには、ことあるごとに自身を責めていった、「<sup>わたくし</sup>瑜は厚かましく生きながらえた。恥としないことがあるか。」と。<sup>6</sup>このような心境にあって、彼は生きている間に清朝の滅亡を見届けることを想像し、もしできない場合は、たとえ死後であってもよいと考えた。そこで彼はあらかじめ容易には朽ち果てぬ棺桶を用意し、「中国恢復」の時には故郷に埋葬されることを図った。この行為は、かつて梁啓超の感慨と思索とを引き起こした。「わたくしは『朱舜水年譜』を作る際、彼の死後の出来事についても若干加えたが、これらはもちろん絶対に欠いてはいけないものである。彼は明朝の遺臣であり、ひたすら満清を駆逐することを考え、後半生は日本に身を寄せ、日本で亡くなった。彼はかつて言った、満人が出境しなければ、私の亡骸が中国に帰ることは望まないと。彼は自ら容易には壊れない靈柩を作り、将来中国に移送できるよう備えた。はたしてその靈柩の生命が満清に比べて長いために、現在でも日本に安置されているのだ。もしわれわれが彼の亡骸が帰還することを要求すれば、彼の願望も叶うのである。わたくしはこの点を考えた上で、『年譜』の後に太平天国の起滅、加えて辛亥革命や清室の遜位、満清が滅亡するに至ったことを記し、朱舜水の願望はわずかに叶ったと見なしたのである。」<sup>7</sup>以下のように言えるかもしれない。朱舜水は日本定住以前に当然明代の政治建設に対して相当の努力を費やし、またその担ったことは正しく、その上、類似の努力や担当は、当然正常な人生の選択であったと考えていたようである。この論理に従って、われわれは朱舜水が南明政権からの徵辟を拒絶しなかったと思われる記録を発見した。これこそ彼の遺作の一つである『上監国魯王謝恩奏疏』である。

『上監国魯王謝恩奏疏』は『監国魯王勅諭』に対する舜水の返信である。<sup>8</sup>考証によれば、『監国魯王勅諭』は魯監国9年（清順治11年、甲午の歳、西暦1654年）に書かれ、南明政権監国魯王の朱以海が朱舜水を招致して共に明朝恢復の大業を助けるために作られた。舜水の風采が一向に上がらなかったことによって、ただ「身に徵辟の榮を蒙る」の語および「親友門人」がないだけでなく、生前にも魯王の勅諭を他人に示したことはなかった。そのために、朱舜水が病没した頃になって『勅諭』ははじめて弟子達によって発見され<sup>9</sup>、1715年に徳川光圀によって『舜水先生文集』に収録された。<sup>10</sup>「予は夢でも賢者を求め、首を長くして待ちわびている。ここに特に<sup>みじかいみことのり</sup>崙<sup>なんじ</sup>勅をして尔を召す。命令通りに事をすすめ、予を補佐せよ。明朝恢復の事業は、当然、尔の節義や文章に資するであろう。」といった『勅諭』の文字をみれば、魯王の、明室恢復のために賢者を慕う切実な心情は、極致に到達していたことを表わしていた。遙か遠い日本の土地と朱舜

<sup>6</sup> 『中原陽九述略』（『朱舜水集』上册、第13頁）を参照。

<sup>7</sup> 梁啓超『朱舜水先生年譜』附録（『朱舜水集』下册、第729頁）を参照。

<sup>8</sup> 『安南供役紀事』（『朱舜水集』上册、第31-33頁）を参照。

<sup>9</sup> 今井弘濟・安積覺『舜水先生行實』（『朱舜水集』下册、第624頁）を参照。

<sup>10</sup> 『勅諭』原物は、1912年に東京第一高等學校（一説には東京大學図書館）で展示された。2013年9月2日現地時間午後3時、筆者は「水戸徳川家旧藏朱舜水関係史料調査団」一同とともに、熟睡していた百年の文物を探し出した。詳しくは、「朱舜水宛て勅書発見—徳川ミュージアム所蔵資料報告会『一級品の文物』」（『茨城新聞』2013年9月7日付）を参照。

水には定まった場所が無かったことによって、『勅諭』は3年後（清順治14年、丁酉の歳、西暦1657年）の正月、多くの曲折を経てやっと舜水的手中に至った。当時、朱氏は安南で軟禁されており、生死の狭間をさまよっていた。ゆえに『勅諭』をみたあとの厳粛にして感動した朱舜水の心情は想像できる。「本年正月十四日に至って、日本船が来り、主上、監国魯九年三月、黄綾敕諭一道をたまわりもつ。特に臣を召して還らせようとした。<sup>わたくし</sup>臣は平服であえて拜命しなかった。星夜、はじめて処士の巾衣をつくり、謹んで十六という吉日を択び、さらにあえて公所で礼を行なわなかった。自宅に恭しく香炉机を設けて読み、頭を叩きつけて謝恩し、これを遵守せんことを誓う。」<sup>11</sup>「欽此欽遵」とは旧時朝臣が皇帝に向かって奏上する時に使った言葉であり、聖上の旨意はここにあり、<sup>かしまりました</sup>領旨とは命令を遵守して実行することを指す。これが意味するのは、この時の朱舜水はただ魯王の徴辟を受けただけでなく、慇懃にして恐れかしくみ奉っているような態度である。

先に記したように、日本に定住した後、朱舜水は徳川光圀に対して官府の「徴召」を求められた経歴を語っていた。「徴召、薦辟、除擬を通計すると、元院の疏薦を除けば、全部で十二回であり、すべて受けませんでした。この時、天下は大いに乱れ、憲紀は勝手気ままであり、前後ともに聞知せず、内外ともに通達しない有様でした。さらに<sup>わたくし</sup>瑜はひたすら隠し、家人や子弟に厳禁し、一字の露出も許さず、ただ生員と称していました。後に監國魯王が舟山に一時とどまったことにより、時々朝見にあずかり、その際、<sup>かきつけ</sup>朝單を作成するのが筋ですが、恐らく君を欺くに至れば、罪として釈放できませんから、事情を斟酌して、とりあえず貢生と称し、依然として初意を隠していました。ゆえに次々と官を授けられ、それが京であれ外であれ、たちまち高くなったりたちまち卑くなったりしても、まったく秩序はなかったのです。」<sup>12</sup>しかし、字面からして、朱舜水のいわゆる「壹拾貳次」拜命しなかったのは、十一回を示すようである。梁啓超もおおよそ次のように推計している。(1) 崇禎十六年癸未十月、幕府から監紀同知を命ぜられたが、受けず。(2) 崇禎十七年、南都が建設され、江南総兵方国安が先生を推薦して、奉詔特徴するが、就かず。(3) 弘光元年正月、ふたたび奉詔特徴するが、受けず。(4) 四月、江西提刑按察司副使、兼兵部職方司郎中、鎮東伯、方国安軍を監督することを命ぜられるも、拜命せず。(5) 監国二年□月、舟山の守将黄斌卿が先生に昌国県知県を授けたが、受けず。(6) 十月、監察御史管理屯田事務を命ぜられたが、就かず。(7) さらに軍前賛画に請われたが、就かず。(8) 監国五年正月、安洋軍門劉世勛が監紀推官にすすめたが、受けなかった。(9) 吏部左侍郎朱永祐が兵科給事中、さらに吏科給事中にすすめたが、いずれも受けなかった。(10) 礼部尚書呉鍾巒が翰林院の官をさずけようとしたが、受けなかった。(11) 三月、巡按直浙監察御史王翊が孝廉にあげようとしたが、すぐ魯王に疏を奉って辞退した。<sup>13</sup>「十二次」めの辞退について、梁啓超は慌ただしさにあって発見できなかった

<sup>11</sup> 『安南供役紀事』『上監國魯王謝恩奏疏』（『朱舜水集』上册、第31-32頁）を参照。

<sup>12</sup> 『答源光國問先世縁由履歴』（『朱舜水集』上册、第352頁）を参照。

<sup>13</sup> 梁啓超『朱舜水先生年譜』（『朱舜水集』下册、第652、654、656、659頁）を参照。

たようである。それでは、朱舜水のいわゆる「十二次」めの「不拜」または「不受」は、結局どの一回を指すのだろうか。

『監国魯王勅諭』にみられる君臣の話柄から、答えの追求に関するいくつかの参考にするべき手がかりを提示できるかもしれない。これは魯王の真情実意が込められた賢者を求める「特敕」である。「監国」として、魯王がこのような低姿勢と臣下に心の底を打ち明けることができたのは、歴代の「詔勅」のなかでは稀なものに属する。「聖賢の大道を明らかにするものは、当然、強力に退勢を挽回し衡命の志をつくすべきである。もし平然と遠くに去るのであれば、天下のことは誰に任せればよいのか。」「予は夢にも賢者を求め、首を長くして待ちわびている。ここに特にみじかいみことのり 勅なんじをして尔を召す。命令通りに事をすすめ、予を補佐せよ。明朝復興の事業は、当然、尔の節義や文章に資するであろう。幸免に安んじて他邦にとどまってはいけない。欽しめや。」<sup>14</sup> 朱舜水は返書である『上監国魯王謝恩奏疏』の中で、自分は間違いなく魯王のために尽力して、明室を匡扶したいという忠誠心を示した。「臣には節義や文章の重厚さはありませんが、主上が夢にみた賢者を待ち望むお気持ちにそうことができます。犬や馬が主人を慕う誠や、回天衡命の志となれば、いまだかつて一刻も遅れをとったことはございません。」その上、「臣はすでに急ぎ旅支度を調べ、廿一日暹羅に行き、また転々として志を遂げる計画です。暹羅はるか西南にあるため、心底恐れますのは、主上が臣の苦心をこまかに調べず、私利をはかって聖旨に背くと疑うことです。ですから敕書を捧げ持って恐懼しているのは、ただちに行わないだけなのです。」などの表現をみて、朱舜水にとってはあいかかわらず急ぎ魯王の誠意に身を投じるには不足であったようである。しかし、それは転じて「静かに夏間を待つて船でまず日本にゆき、ふたたび日本から思明（厦門）に到達した」のちに「その道に迂回する」という考え方は、普通理解し難いものである。これも「庸人の臣を見ること此くの如し。竟に狂惑と譏る」といった考えに由来するのであろう。このような世論に対して、彼は「臣の苦衷、明言するに便ならず」以外、いかなる具体的説明も提供していない。またこの時、朱舜水は「安南供役」に遭遇し、ただちに安南人に対して強引に「差官」という厄介事をさせた。彼ははっきりと「安南王」に就かせようとししない行動が大明の尊厳であり節に殉じて死に赴くこととなると理解していた。転じて『謝恩奏疏』はついに主上と決別する遺言となった。「一旦、意外な事をして死ぬのでしたら、太祖高皇帝及び主上に報告することができません。臣は死んでも責任があります。」<sup>15</sup> 想像するには、もし魯王が返書を受け取った時、舜水のその他の情報を聞いていなければ、舜水を烈士としたことは知るよしもないだろう。しかし、舜水が3ヶ月後に魯王に寄せた別の手紙——『上監国魯王上奏文』の表明は、朱氏は「義に就か」ぬものであり、その上、文中にみえるいわゆる「もし主上が必ず臣を外に捨てるに忍びなければ勅書を藩臣に求め、身柄をこちらに渡すように明言すれば相手はきっと

<sup>14</sup> 『監国魯王勅諭』（『朱舜水集』上册、第34頁）を参照。

<sup>15</sup> 『安南供役紀事』『上監国魯王謝恩奏疏』（『朱舜水集』上册、第32頁）を参照。

もう一度拘留する勇氣はないでしょう」といった朱舜水の助けを求める信号が、もし本当に魯王が安南王に交付した「詔書」に変化したならば、監国の意向には舜水の困苦を解放する重大な権威を構成し得る力量があった。国勢が衰退し、社稷が傾き崩れるといった難局の中では、君臣が互いに守り、道理上当然であることは、とりわけ双方ともに予測不可能な時は、このようなものである。しかし、朱舜水が『謝恩奏疏』の冒頭で大量に羅列した「官を拝して受けず」の旧例は、まるで上述の互保の願望が出現するであろう、ある種の結末を暗示していた。われわれが注意したのは、『謝恩奏疏』中で言及した一回の「受けず」という経歴はちょうど詮臣（朱永祐）、按臣（王翊）と輔臣（張肯堂）とが魯王名義で「孝廉」に挙げた時、つまり彼の「草表懇辭」事件の頃であるという点である。<sup>16</sup> その上、朱舜水はその時伏して魯王の「収回成命」を祈った理由は、つまり「三年喪に服してもまだ葬わず、いつも老い先短い老母を思い悩みます。婚約して七年になりますが娶らず、とばりにゆく妻があるのではと疑います」<sup>17</sup> といった家庭の往事や、道理の無理であって、少しみただけですぐわかる。われわれがさらに注意したのは、朱舜水が安南の厄介事を抜け出した後に到着した第一の駅は、やはり日本であって思明ではなかったという点である。道理上、安南を離れた後、彼がまず到着すべき場所は思明ですらなく、魯王がいる舟山であった。これは彼がはっきり「敕書は舟山より下される」という事実を知っていたためである。<sup>18</sup> 朱舜水はなぜこのように考えたのか。その理由については弟子が代弁している。「先生は故郷に帰ろうとし、ひそかに中興の勢力を調査していたが、何度も窮地に陥り、資本装備は欠乏してしまった。そこで魯王に上奏し現況を陳述したのである。次の年の戊戌夏、さらに日本に到着した。魯王の召によって、日本から思明に到達したいと考えたのは、みずから情実に拠って去就を決定すると考えたからであろう。この時、天下は分裂し、戦争が起こり、安南から直接赴こうとすれば、道路は通行困難である。よって海路を取ろうとしたが、既に舟山は陥落し、先生の師友で兵を率い忠を懐く者、例えば朱永祐、呉鍾巒などは、全て節操を守って死んでいた。先生はこれを耳にして、その進退は窮地に追い込まれた。しかし詳しく時勢を監察し、内密に成敗を推量したかったので、沿海に停留したが、危険に見舞われ、生存の見込みは髪ほどの細さであった。そこで、権勢は攻撃できず、国土は回復できず、敗将は奮い立てぬことを十分に知った。もし内陸にあれば、どうしても清朝の習俗に従わねばならず、冕を壊して裳を裂き、頭を剃って抵抗しないのであれば、海に身を投じる節を全うする志を果たす。明年の乙亥に、また日本に至る」云々。<sup>19</sup> これはもしかすると恩師になり替わって書き出した「臣の苦衷、明言するに便ならず」の謎であるかもしれない。しかし、思明に到達した目的は「みずから情実に拠って去就を決定する」など「見てから考える」という態度に過ぎないが、舜水は監国への「勤王」の意志を表明し、そ

<sup>16</sup> 『安南供役紀事』『上監國魯王奏疏』（『朱舜水集』上册、第31頁）を参照。

<sup>17</sup> 『上監國魯王辞孝廉奏疏』（『朱舜水集』上册、第36-37頁）を参照。

<sup>18</sup> 今井弘濟・安積覺『舜水先生行實』（『朱舜水集』下册、第615頁）を参照。

<sup>19</sup> 今井弘濟・安積覺『舜水先生行實』（『朱舜水集』下册、第616-617頁）を参照。

れは決して『謝恩奏疏』の中で期待したような確固たるものではなかった。更に真実なる情報を加えるならば、朱氏が日本に定住した後、弟子との率直で誠意のこもった以下のせりふを反映すべきである。「魯の国主は私の三詔特徴の事を知らない。私はまた学識をひけらかさず慎重にして、ただ恩貢生を称しただけである。もし当時詳細を知っておれば、敕書は当然にも更に丁重に扱って、このような仕儀に止まらぬであろう。しかし当時詳細を知っておれば、我は必ず舟山にあって死に、日本に来て今日という事があるとはならなかった。してみると万事には全て禍福が互いの因果関係となるということがわかる。詔書特徴は古今の重典であり、命ぜられた進士は、極めて厳粛である。天のおおうかぎりでは、聞知しないことはないが、ただかの時の大乱によって、道はふさがってしまった。だから知らないのだ。」<sup>20</sup>「倚伏」の二字は、老子の「禍は福の倚る所、福は禍の伏する所」の一句より取っている。言わんとするところは、幸い当時の魯王は舜水のことをあまり知らなかった。そうでなければ、彼もこれら殉国者と一緒に「舟山ともに死」し、簡単には免れなかったであろう。このような身分を隠してひそかに喜ばしく思う語気からは、朱舜水が本当に『監国魯王勅諭』の「特勅」を受けたと信用するのは難しい。舜水が決して明確に話題にしなかった「十二回の不拝」は、恐らく彼のこの心情は魯王に対する「陽に受けて陰に拒む」を敷衍した結果であろう。これに対し、朱舜水ははっきりとは言っていないが、十一回の「受けず」の後で言った話によれば、実はすでに婉曲に解答を提供していた。つまり「監国魯九年三月、欽しんで崑敕特召を奉り、謹しんで騰黄奉覧す」<sup>21</sup>である。言外の意味は、魯王が下した『勅諭』に対しても、ただ謹んで仰ぎ見ることしかできなかった。しかし、少し注意する必要がある。つまり朱舜水が微辟しなかったのは、決して彼が『勅諭』に対する意義をも軽視していることを意味しない。それは後の事実が表わしている。「三詔特徴」(『監国魯王勅諭』を加えれば、「四詔特徴」とすべき)を決める「明の徴君」という身分は、かえって朱氏に大いに活用された。安積澹泊が刊行した『明故徴君文恭先生碑陰』にはいう。「徴君は……ふだんからみだりに談笑せず、ただ邦仇が止まっていることを遺憾とし、齒ざしりして涙を流し、老いても衰えなかった。明室の衣冠は、始終変わらない。魯王の敕書は、奉って携行していた。」<sup>22</sup>

それでは、一体いかなる原因がふかく「明朝」を愛しながら「官を拝して就かず」、口では「明室代々の積徳を仰ぐ」と称え、明朝官府の中ではあえていかなる体制的参与をしないという言行をもたらしたのか。これら矛盾する言行はもしかすると朱舜水の明朝に対する「忍恋」を意味しているのであって、おそらく常識で解釈できるような単純なものではない。

<sup>20</sup> 「答安東守約問八條」(『朱舜水集』上册、第370頁)を参照。

<sup>21</sup> 「答源光國問先世縁由履歴」(『朱舜水集』上册、第352頁)を参照。

<sup>22</sup> 安積覺『明故徴君文恭先生碑陰』(『朱舜水集』下册『附録一』、第631頁)を参照。

## 二、「官を拜して就かず」の原因について分析する

朱舜水は日本学生安東省庵に答えた時に言った。もし当時彼が朝廷の「徴辟」を受けただならば、「私も功名の士である。新たに仕官してただちに四品道官となり、京職を兼ね、監軍四十八万、国父大將軍をあずかり、次々と賓主となった。どうして名声が高くないだろうか。どうして全力でこれらを辞退したのか。」しかし、朱舜水の最終決定は結局のところ官吏となる道にかかわっていない。「拜せず」ではなく、「受けず」である。彼が提示した理由は簡単で、つまり「私は天下の事ができないと判断し、その上で辞しているのであって、この態度は洗牛飲牛、羊裘釣魚といった者の比ではなく、また漢季の諸儒が門を閉じ高きを養って名誉に向うのではないことを理解すべきである。」<sup>23</sup>しかし、もし朱氏の「官を拜命せず」の原因を詳細に調べれば、私は三点あるべきと考える。1、自らを保つ需要と衰えた勢いを盛り返す力がないという現実による。2、晩明政治に対して賛同しない。3、明朝の官学に対してすでに信用を失った。ある時には、この三大原因はこもごも入り交じって、互いに絡み合い、互いに影響を持つ。今大体箇条で述べれば次の通りである。

第一の原因は少し表面的に渉るが、朱舜水が向き合った如何ともし難い現実を反映している。史書には、朱舜水の気性は正直率直であり、流俗に同化しないと載せるが、見たところこの非常に優れた品性は、明朝の官界の中ではかえって少し手を動かしただけでも禁に触れ、ややもすれば罪を得る。重要なのは、いったん言行と時の政府の政治とに食い違いが発生した時、本人に重大な過失がもたらされるばかりか、妻子小子や姻戚にも累が及び、それらを簡単には守れないことである。彼はかつてひとたび自らが官に就くことが引き起こすかもしれない不幸を推測していた。「初めて南京松江府の儒学学生となった。いわゆる秀才である。少き時は経世済民の志を抱き、行動はたちまち礼に適った。宗族及び郷の先生は、多く三公と四輔〔天子の補佐役〕を期待していた。弱冠のころ、世道が日増しに壊れ、国是が日増しに非となるを見て、慨然と進仕の願望を絶ち、高踏的な所作をした。いつも妻子に対して云った、『我がもし第一の進士であれば、一県令となり、初年には必ず関係者を捕まえ、次年、三年には、百姓は徳を暗唱し、上官は称賛され、かならず科の道を得る。この建言によれば、我は必ず大罪を得て、一身一家は守れない。とはいえ浅はかな衷心と激烈な心をしまいこみ、じっとこらえて弘済の志を隠し持つことはできない。だから昇進する志を絶ったのだ』と。」<sup>24</sup>その上、一步譲って言ったとしても、たとえ政治に参与して官を受け、敗色濃厚な明の朝廷に対して建言したからといって、まるで「一本の木は支え難し」のようで役に立たない。だから、徳川光圀が官を辞職した理由を聞くに及んで、舜水は決して自らの無力感の告白を回避しなかったのである。「之瑜は少壯の時に家を齊え身を修め、もともと功名鐘鼎〔富貴〕

<sup>23</sup> 「答安東守約問八條」（『朱舜水集』上册、第371頁）を参照。

<sup>24</sup> 今井弘濟・安積覺『舜水先生行實』（『朱舜水集』下册、第613頁）を参照。

に志していましたが、儉壬〔小人〕の禍にあうことに激怒し、立ちどころに社稷の傾き崩れるのを見ました。幸運にも二度の特徴にあい、百年の鉅典とはいえ、特徴ははるかに科目貢挙に勝る榮譽です。しかしひっくり返った建物は一本の木が支えるものではありません。大川はどうして一人で救う場所でしょうか。火から救おうとする時は、事前に煙突を曲げるといった対策を計るべきですが、支柱は必ず棟が壊れた後に補うことはありません。情を忍んで辞遜しなければならないのは、もともと名を求めて高きを養おうとするものでないからなのです。」<sup>25</sup> 小宅生順に対しても類似の表出があった。「僕はもともと人民と万物を本懐とし、安んじ静めたいとの思いは切実である。あえて石隠を高しとして、自ら名誉をほこるのではない。ただ一木の微意は、人が傾かせた建物を支えることである。近くであれば他人の過ちに責任を持つこととなり、遠くであれば後の君子に執筆させてあざ笑うという無為をする。だから死の苦しみに耐え、しないのである。」<sup>26</sup> 彼は明らかに公事のために私人の危険を冒すとは思わず、更には人に代わって過ちを受けるとは思わず、永遠にすすぐことのできない無実の罪を蒙ったのである。

第二の原因は言うまでもなく上述と関係がある。しかし実際には朱舜水の忌避と当塗の人どもがぐるになって悪事を働く性格とによってより激烈切実な考えとなり、それは彼の晩明政治に対する深刻な否定的態度として表れた。そこで、ちょうど安東省庵が「先生は徴辟されても就かれませんでした。その義はどうなのでしょう」と問うた時、朱舜水は答えていった。「私を徴した時、国政をつかさどる者は馬士英であり、彼は奸相である。その時馬士英はその私人である周某を派遣し、私の親類である何士波〔進士、名は東平、河南の解元、つまり小女の舅〕とともに、寓居に来て再三にわたって説得し、とても懇懇な態度で接した。もし私がひとたびその官を受けたならば、必ず特別の待遇を受ける。特別の待遇を受けた以上、当然聖恩に感謝して報いようとすべきである。もし馬士英とともに首尾すれば、奸臣の仲間である。もし直ちに無私にことを行えば、義に背き恩を忘れ、君を挙げて自身で伐つのである。皆君子の議を免れず、天下の万世の罪である。だから一家の命運をも顧みず力めて辞退したのである。」<sup>27</sup> 注意深い者は発見することができるだろう。第一の原因の中では、朱舜水はまだ「一身一家を守れない」といった個人利害の段階で辞官の問題を考慮していた。しかし、もしやむを得ず「官を受け」れば万世の悪評を引き起こし、その上もし万辞を尽くてもそれは承諾の語ではないのだから、彼は「一身一家の命」に連なることすらも放置して問題にせず、惜しむようなことはなかった。しかし、朱舜水の「むしろ君子の鞭撻に遭って、小人の恩を受けず」といった正直な人格の背後には、また彼の明廷の頑迷な症状に対する核心をつく省察が潜伏している。彼からすると、清軍の南下は、もちろん中原が恥ずかしめを蒙り、結局は夷狄が夏〔中国〕を滅亡させるに至る。しかし、もしも腐心の木でなければ、清人はまた強大であり、断じて一撃のもとに打ち砕くような功労はない——彼は明らかに

<sup>25</sup> 「答源光國問先世緣由履歷」（『朱舜水集』上册、第352–353頁）を参照。

<sup>26</sup> 「答小宅生順書」（『朱舜水集』上册、第311頁）を参照。

<sup>27</sup> 「答安東守約問八條」（『朱舜水集』上册、第371頁）を参照。

すでに明が亡びる原因を明朝自身に向け、「物は必ず自然に壊れ、その後、人がこれを壊す」という無法逆転の論理は必然であり、そしてこれこそ本当の「致虜之由」であると考えた。「中国に逆虜の難があり、恥を万世に残すのは、本当に逆虜の負恩であって、中国の士大夫が自ら取ったものでもある。語に言う「木は必ず朽ちてしかる後蛀が生じる」と。まだ不朽の木がなくとも、蛀は生じることができる。楊鎬は寇を養って国を売った。この前事についてくどくどと言う暇はない。たとえば崇禎末年、搢紳の罪悪が満ちて、庶民には痛く骨髓まで染み、みな『時の日曷ぞ喪びん、汝と皆に亡びん』の心であった。だから流賊が入って内外応え、逆虜が入って刃を迎えて竹を破り、その邪説流言に惑わされ、意外にも前途の裏切る勢いがあった。いったん瓦解すれば、收拾がつかないだけである。さもなくば、河北の二十四郡にはどうして堅牢な城がなく、どうして一人として義士もおらず、最後には戈を覆い隠して矢に従うことを命令し、人のない国境を越えてこの地に来られようか。要するに、この上ない罪は、すべて士大夫にある。細民は知恵がなく、むだに一朝の怒をもらし、まだ得ていない利を獲得しようとし、一生および代々の災いを顧みない。これを責めることはできない。」<sup>28</sup> これらの意味上から言って、清朝はこのように素早く明に取って代わることができ、より多くの明朝政府の腐敗とこれに起因して発生した人心の離反とを利用した。「彼らがわが中国を盗むことができたのは、もとは我が民心の離叛に乗じて、それによってその威力を張り、だから至る所風に望んで散り散りに敗走し、戦わずして天下を盗み取ったのである。」<sup>29</sup> ちょうど小宅生順が「中国はどうしてあわただしく捕虜に沈んだのでしょうか」と問うた時、朱舜水の回答も同様に「その人民を失う」であった。その「ひとたび異変があれば、すぐ瓦解に至る」は、完全にふだんの「官職にある者は理を治めることを知らず、ただ重税を課して搾取する」状態がもたらしたことである。このような状況では、たとえ大明の軍事が装備して、また多くの「鳥、銃、高手〔文化人〕」と「鉄砲」があったとしても、いったん「人心が背理してしまった」以上、「強い兵力は、十分に盗賊の資本となり得る」<sup>30</sup>のであった。

しかし、続いて討論すべき第三点は、もしかすると朱舜水の「官を拜命せず」の最も深層なる原因を促すかもしれない。彼は早くから明朝の学術問題に関心を持ち始め、明朝の疾患の原因は、全く政治と分離しようがなく、かつ極めて大きく政治の運行を左右された政府の官学にあると考えた。「官吏は利益をむさぼり、国家代々の福運を衰えさせている。どうして学問心術が破壊するものでなかりうか。だから『四書』『五経』の講説するところは、目新しいものでなければ俗を驚かすことができず、割裂したものでなければ時節に投わせることができない。これらはひとしく聖人の正義ではない。彼らはもともと修身、齐家、治国、平天下に意はない。注釈の解となると、別紙に示した。嘉隆、万暦年間では、学徒を集めて講学し、各書院を創建し、門を分け戸を別つて、それ

<sup>28</sup> 『中原陽九述略』「致虜之由」(『朱舜水集』上册、第1頁)を参照。

<sup>29</sup> 『中原陽九述略』「滅虜之策」(『朱舜水集』上册、第11-12頁)を参照。

<sup>30</sup> 『答小宅生順書十九首』之三(『朱舜水集』上册、第314頁)を参照。

それが師であった。聖賢精一の主旨は闡明せず、玄黄水火の戦いに日々煩わされている。高き者は徳性の良知に勝ろうとし、下き者はむだに高い冠に広い袖を重ね着し、優孟〔のような似て非なる者〕が手のひらを打って、世の笑いとなる。<sup>31</sup> 当然、このような弊害を知って、日本人も知るようになった時、朱舜水は感慨ひとしおであった。「一日翁が余に語って言った、『中国の逆乱は、既に天啓（明の熹宗をさす、1621-1627）に始まる。』と。当時、国政を預るものに理学の党があり、文章の党があつて、日々互いに悪口を言つて、権力を争つてやまなかつた。その後連年の凶荒で、泥棒は逆となり、鞭撻は位を奪つた。これら全てを狡い逆臣が禍根とした。」<sup>32</sup> 彼からすると、ただ「周孔の道」があり、これこそ「聖人の道」であり、これこそ學術の真経である。しかし明朝の學術がひどく中華學術の実務精神と周孔の学の体用の本質に背いたことによって、そのため、実学をあげめ尊ぶ朱舜水はこのような學術の雰囲気の中では抱負を実現し知恵に貢献するには、困難であると信じた。ただ以下のように、日本に定住した後、彼はやつと周孔の学を推進する「素地」が見つかったと自認する。「日本は、国は小さいが法が確立し、気は満たされて軽々しく生じ、繩を結んで理むべく、地を画いて囲むべき状態である。これより以前に、孔子の教があつたとは聞いていない。だから礼儀を好んでもまだ礼儀の本を知らず、廉恥を重んじて廉恥の初めに沿っていない。いったん人があり、孔子の道を教えれば、行すら人民全て堯舜となつて、のきなみ爵位を授けることができる。むしろ八条の教は朝鮮に限つたものではない。」<sup>33</sup> 彼はそこで素朴な周孔精神を満たしている徳川光圀に対し、無限な望みを託した。「貴国〔日本〕は書を読み礼を好むことに主眼を置いています。聖人の学を盛んにしたいとの思し召しは、間違いなく非常な見識であり、また今日外野で推測するものではありません」、「今貴国〔日本〕が聖人の学を好むことができないのを憂慮するだけです。もし聖人の学を好むことができ、しかも堯となり舜となることができれば、どうして文章が中国に及ばないことを憂慮しましょうか。数年行えば効き目があらわれ、十年すれば成功することができます。どうしてこれを試さないのでしょうか。むだに淵に臨んで魚を羨むような嘆きをするのでしょうか。この語は釋氏の、風を捕えて影を捕まえるようなものではありません」、<sup>34</sup> 「周公が没してから聖人の道は行われぬのは、聖人がいないのではなくありません。聖王が現れなければ、聖人の道は行くことができません。……わたくしは幼少の頃、周官、周礼を喜び、慨然としてみずからこれらに会いたいと思ひました。不幸にも大故に遭つて、小さな筏に乗つて東しましたが、ここ〔日本〕で周公の威容儀表を拝することになりました。……近きは、日本国が詩、書を重視し、礼、楽、詩、書を説くのは、周公の道です。もしこれを修めて明らかにすることができれば、その治政はどうして限度がありましょうか。」<sup>35</sup> これも

<sup>31</sup> 『答安東守約書三十首』之三（『朱舜水集』上册、第174頁）を参照。

<sup>32</sup> 人見竹洞『舜水墨談』（『朱舜水集補遺』、台北學生書局1992年版、第249頁）を参照。

<sup>33</sup> 「聖像贊五首」（『朱舜水集』下冊、第560頁）を参照。

<sup>34</sup> 「答小宅生順問六十一條」（『朱舜水集』上册、第411-412頁）を参照。

<sup>35</sup> 「周公像贊」（『朱舜水集』下冊、第557頁）を参照。

恐らく舜水のいわゆる「僕が深く貴国〔日本〕に望あり」の一語の深い意味のあるところなのである。<sup>36</sup>

### 三、「明徴君」の称号の活用と利用に対して

前で述べたように、朱舜水は「十二回官を拜するも就かな」かったが、「明の徴君」あるいは「明の徴士」の称号については異常に重視し、死ぬまで軽んずることを許さなかった。「徴君」とはあたかも高貴と権威という壁によって作られた光星の環と記号のようであった。朱舜水の人生それぞれの段階、特に海外で事に従事した全体の過程にあって、これらの称号は皆その他の要素に取って代わることができない効果を発揮した。その理由をこまかに調べてみると、以下のようないくつかの現れあるいは隠れる方面があって、研究者が特に関心を持つに値すると考える。

まず、前近代の「華夷秩序圏」に就いて言えば、「徴君」はある程度国境を超えることができる高貴と威厳を体現していた。たとえ明の朝廷が衰微し、社稷が危ない時でも、千百年以来中華世界の権力と権威を形成し、周辺国家の中ではまだ十分に余力があった。この方面は華人の身上に自覚なき気高い意識を表していると同時に、周辺の各国はこれに対して気高い接受と尊敬を表した。これも朱舜水が安南の時に困窮してまた魯王『敕諭』を求めた理由である。時には、たとえ現地の国主が頑迷であっても、もし道理がはっきりしていたら、心から承服させる効果をも受け取ることができる。朱舜水の安南に対する提醒は教訓としても、この点を説明している。「最近、中国の喪乱によって、天は崩れ落ち地は裂け、逆虜は道理にたてつき、国土全体が穢れている。外国人は義に死ぬべきではないが、隠れようとしてもその場所がない。これを聞き丘文莊公(丘浚)は云う、「安南、朝鮮は、礼を知る国」と。だからここに遁走してきたのだ。太公や伯夷がかつて東海や北海に居て天下を待ったが、これは作り話ではない。今貴国が外国人に喜ばしい恵みを与えることができなければ、それまでである。貴賤の諸君がここに来て、あるいは相に問う者があり、その質問が宜しきものでないのは、結局、〔舜水を〕褻客とした意図を知らないためなのか。……以降どうかふたたびないように願う。」<sup>37</sup>そこで、当(安南)の差官が「茹主(華言では大王を指す)が諸儒を徴した際、どのように議論するか」という問題を提出した時、朱舜水の回答は権威と標準を示していた。「天子が徴を言っ  
てこそはじめて大王はただちにすべて東京トシケンの地を保有するが、中国はすべてその位号を回復しても、天子の感化も及ばぬ異民族の地の一諸侯王に過ぎない。これをどうして徴と言おうか。」差官はうなずいて、『派! 派! 派!』(平声、ちょうど華言の是是是である。)と続けて八九回言った。<sup>38</sup>

その次に、「徴君」の権威と価値がひとたび列国の知るところとなれば、さらに称号

<sup>36</sup> 『答小宅生順問六十一條』(『朱舜水集』上册、第411頁)を参照。

<sup>37</sup> 『安南供役紀事』(『朱舜水集』上册、第26-27頁)を参照。

<sup>38</sup> 『安南供役紀事』(『朱舜水集』上册、第16頁)を参照。

を所有する者に大きな便宜をもたらすだけでなく起死回生の効果をも手にすることができる。上述の朱舜水の差官問題に対する回答は、その実態はみずからの経験を例に採った道理であった。安南人が唯々諾々としてできたのは、彼らが朱氏の身分に対してすでにある程度聞いていたためである。しかし、安南人が本当に理解したのは朱舜水の素性を理解する前であって、命令に抵抗して遵わない彼の態度に触れ、実は殺したかったのである。命がけの肝心な時に、舜水は自らの特殊な身分を思い付いた。彼はすでに頭を切り落とす準備をしていたけれども、かつ彼自身の事を根拠として後に思い出している。当時はまだ恐れられて「堂々たる男子」と呼ばれていたが、次の話柄は、恐らく以後の事を頼む以外を除いては、これに比べて更に重要な何とか生き延びようとする暗示が加えられている——舜水はひそかに「黎の医官に対して云った、『我は大明の徴士である。これは国家百八十年来挙行されていない典礼・儀式である。公は徴士がいかなる名なのか分からぬのは当然であるが、わたくしは崇禎十七年、弘光元年に、前後して二回徴せられたが、就かなかった。……我は外国に来て十三年……一人として我を知る者はない。今日死ぬのならば、どうしても一言しなければならぬ。私の死後、……なんじらは我が骨を拾おうとはしないだろうが、もし拾えるのであれば、題して『明徴君朱某之墓』としていただきたい。』<sup>39</sup>しかし、舜水は死を目前にして尋常な沈着さ淡泊さを超えていたが、そのことがかえって安南人にこの仕儀の不正常さを容易に窺わせた。このような異常な行動は、また彼に公然と自らの特殊な身分を闡明する絶好の機会を提供させたのである。「本日、李姓、耀浦と字する者が来た。この艘を迎えて言った、『世間ではこのような狂人（朱舜水を指す）がいることを信じない』と。李は云った、『まだその人を知らない。ひとたび見ればわかるのだが、狂人と言われるには必ず理由がある』と。……この艘はもう一度瑜わたくしを呼んで問うた、『徴士とは何であるか』と。しかも云った、『言葉が分からないので、紙と筆とを授けて書かせよ。』と。瑜わたくしはただちに書いた、『崇禎十七年、徴せられたが就かなかった。弘光元年にまた徴せられたが、就かなかった……今大王は不拝が礼であることを察せず、突然激怒している。瑜はさらに何の言葉があろう。殺すも可、監禁するも可、拘留するも可、ただ拜命してはいけないと願うだけだ。本年正月監国魯王の勅書を欽奉し、ほかに膳黄がある。再び贅言せず。』<sup>40</sup>細かいところは、朱舜水の起死回生の謎を解くことについては、あるいは助けとなる。明朝の属邦となった安南の中原においては、筆談はできたが言葉は通じなかった。しかし朱氏の日記は語っているように、かつて答えたのは当然朱舜水の後事を処理した黎の医官であり、彼は同時に「通事」（翻訳）も兼任した。これは安南に向かう朱氏の身分を実証するにあたって、働きとして非常に重要であった。そこで、「十五歳以降、各官で会いに来る者は、礼貌隆重、国王および尊官の礼を示すようにしているから、ただ不拝に止まっているのである」<sup>41</sup>の効果が、「国王がこれを聞いて、黎の医官に云った、『こ

<sup>39</sup>『安南供役紀事』（『朱舜水集』上册、第19頁）を参照。

<sup>40</sup>『安南供役紀事』（『朱舜水集』上册、第19–20頁）を参照。

<sup>41</sup>『安南供役紀事』（『朱舜水集』上册、第22頁）を参照。

れは大人である。大なる才能と学問と大なる学問を、あの者はどのように理解したのか』<sup>42</sup>などがあったことで、朱舜水に対する態度が百八十度大転曲したのである。この奇跡の発生は、意外にも朱氏に魯王への返信の時にも特に提起させた。「臣は平日行き来していた諸人とは、すでに死別している。初八日、国王（安南王）の駐屯する所に来て、……国王に会い、臣は『欽奉敕書特召恩貢生頓首拜』の名刺を備えた。臣は何度も詔勅され、国家では徴士となり、普通の官吏とは違う。どうして外国の廷に膝を屈し、国典を辱めようか。だから深々と拜命しないのは礼なのである。」<sup>43</sup>これは事後の上奏報告であるため、言葉の間には自らの明室に対する忠誠心が誇張され、この場を利用して自己の社会的地位の気高さを明示している。「官を拜命して就かない」という往事に至っては、おわびの気持ちはなく、かえって少しひそかな喜びがあったのである。

第三に、「徴君」の名号に隠された価値は朱舜水にとって流亡国の土地行政を考慮するのに都合がよかった。周知のように、舜水は復明の大業に対する望みがなくなった後、1659年に日本で定住し、23年後に江戸で病死した。朱氏の在日居留は、「唐人を禁留することすでに四十年」<sup>44</sup>の幕府の言い方に対して、はっきりとした例外とすることができる。しかし、朱舜水の海外経歴の価値について言えば、安南は称号を重視し、また学識を重視したようである。しかも日本は、さらに称号と学識を重視したのであり、また「不拜」と「邦仇」をも重視したのである。その中で、「不拜」とは舜水の晩明の政治に対する否定的態度であり、「邦仇」とは舜水の満清の文明に対する蔑視である。朱舜水が日本に居留する前に書いた『上長崎鎮巡掲』は、故意にかかわらずか日本のこの二つの偏重に対応しているようである。「辛卯の歳の十月日、朱之瑜謹んでかけ示す。わが国の国運は末世にあたり、悪人が貪り国政は乱れ、その結果小民の恨みを招き、天下は逆虜に失われました。瑜に面を覆わせ理性を失わせ、官吏を採用することはゴミを拾うかのようです。しかし私が科挙に応じないのは、瑜の祖父、父、兄は代々科挙をお受けし、代々朝廷による名号辞令の下賜をお受けしました。（が、この世の中にあって）どうして平気で辮髮髻首し、狐や豕のすがたをして、臣として仇の捕虜となりましょうか。しかし私が死なないのは、瑜は明経孝廉に挙げられ、三度の徴辟を蒙るという経験をしておりますが、天下が大いに乱れ、君子の道が消滅したのを見るにつけ、固く辞退して就かず、君禄を受けなかったのです。」<sup>45</sup>これが意味しているのは、晩明に対して、彼には政治的親近感がなく、しかも清朝に対しては、文化的親近感がなかったということである。政治的親近感がなければ、「徴辟不就」は情理にかなっており、しかも文化的親近感がなければ、「以臣仇虜」も全くできない。これは決して日本人による「中朝事実」の夢想と「華夷変態」の誇張に苦心して迎合したのではないが、朱舜水の明清の間の両側に関わりない境遇は、強い説得力を備えている「今瑜の帰路は絶たれた」という独貧

<sup>42</sup> 『安南供役紀事』（『朱舜水集』上册、第28頁）を参照。

<sup>43</sup> 『安南供役紀事』「上監國魯王謝恩奏疏」（『朱舜水集』上册、第16頁）を参照。

<sup>44</sup> 『與孫男毓仁書』（『朱舜水集』上册、第48頁）を参照。

<sup>45</sup> 『上長崎鎮巡掲』（『朱舜水集』上册、第37頁）を参照。

の事実を証明するだけでなく、さらに政治上と文化上にあつては、日本の「他人」を引き取る際の憂慮あるいは警戒心を解除したのである。彼は仇清の問題では誇張された表現と各種の機会を捉えて繰り返し「徴すと雖も拜せず」の経歴を宣伝したのは、決してこの方面への考慮がなかったのではない。日本の一面的な反復深問は、恐らく決して大衆一般が理解できるような単純なものではない。求められている質問とは、もし「明清鼎革」の発生がなかったら、朱舜水は海外逃亡期間にあつて、あのような「大明の衣冠」を固守できたかであろうか。また、もし徳川光圀が「義は周粟を食わず」の伯夷、叔斉に対する無比の尊敬並びにこのような尊敬でもって舜水の身上に敬意を払わなければ、朱氏は日本にある間、自らの「明征君」という称号をあのように強調することはできたか。答えがどうであるかは重要でなく、重要なのは朱舜水と水戸藩の人々との段取りがすでに日本と中国とあつて陽に陰に発酵したのかどうかである。まずは「(舜水) 天和二年四月十七日、江戸駒籠の邸宅にて死去した。享年八十有三。常陸久慈郡大田郷瑞龍山の麓に埋葬される。梅里公は文恭先生と諡してその徳を顕彰し、みずからその墓に題して『明徴君』としてその志をあらわした。」<sup>46</sup>、その次は「むかし孔子は言った、「大道が行われていた古代は、三代それぞれの最適な時期……」と。瑜はいつもこの書を読んで、感慨深いため息をついて言った、『吾はどうやって親しくまみえようか』と。しかしできないのである。今幸運にも好友の高潔さにめぐりあうのは、個人的には近世の中国では実行できなかったが、日本では容易である。日本では他人とはできないが、上公とは容易である。」<sup>47</sup>、第三は「大明の遺臣舜水朱徴君」は、「日本に身を寄せ、包み隠して時機待っていた。存亡ではその志を改めなかった。」<sup>48</sup>である。これら三点はそれぞれ意味を持っている。1、「明征君」の称号に対する堅守は、朱舜水を中日両国の間に永久不変の人格と国家の尊厳を勝ち取らせた。2、「明の徴君」に対する内外の反応と権威の鑑定とを通じて、「周孔の道」が示す「聖人」の政治を証明し、それは日本でのみ実現することができた。3、「存亡ではその志を改めなかった」「朱徴君」の、「中国の恢復でなければ、帰らないと誓う」<sup>49</sup>という仇清の志は、また後の東アジアの構造における大きな変化となり、ひとすじの深い伏線に埋めた。この点は、特に軽視してはいけないであろう。

周作人『陽九述略』によれば、清末にある人が『朱舜水全集』から『中原陽九述略』と『安南供役紀事』の二文を書き写したことがあり、それらを一冊に印刷して単行本とし、大型封筒上には楕円の朱文の印があつて、革命を宣伝する教材とした。<sup>50</sup> 梁啓超はまた言いう、「彼(朱舜水)の満州に抵抗する精神は、老年に至つても衰えなかった。彼の

<sup>46</sup> 安積覺『明故徴君文恭先生碑陰』(『朱舜水集』下冊、第 631 頁)を参照。

<sup>47</sup> 『元旦賀光源國書八首』(『朱舜水集』上冊、第 113 頁)を参照。

<sup>48</sup> 大學頭藤原信篤『舜水先生画像賛』(『朱舜水集』下冊、第 744 頁)を参照。

<sup>49</sup> 今井弘濟・安積覺『舜水先生行實』(『朱舜水集』下冊、第 619 頁)を参照。

<sup>50</sup> 林俊宏『朱舜水在日本的活動及其貢獻研究』(台北：秀威資訊科技股份有限公司 2004 年、第 42 頁)を参照。

著述に『陽九述略』一篇があって、内訳は「致虜之由」、「虜禍」、「滅虜之策」などの条に分かれ、巻末には「明孤臣朱之瑜泣血稽顙謹述」と題している。この他、『文集』の中にはこの種に関する話柄が多い。この種の話柄は清朝末期の青年の眼中に入れば、電気に触れるようなのが普通で、震動してすぐ跳び、ここ20年の政治変動に対する影響はきわめて大きい。<sup>51</sup>これに対して、「甲午戦争」前後の日本人は、眼で見て、心で喜んだ。日本側の高級諜報人員である宗方小太郎は指摘している。「予は明治十七年初冬に中国に行き、以後反旗を挙げる者は多いが、しかし今日の盛んさには及ばない。以前の武装反乱者はほとんど名義なしに謀叛したが、今の武装反乱者はすべて明の祭祀を恢復することを名義としている。その理由はどこにあるのか。曰く、「恢復明朝」の一語は最も人心を扇動しやすく、また人心の向かう所になるからである。」<sup>52</sup>彼はこの騒動を利用し、はては甲午戦争中に日本を代表して中国の民衆に向かって言語激烈な「討清檄文」を發布したのである。「清朝氏はもともと長城の外の一蛮族であり、命令を受ける徳ではない以上、また中国に功なく、朱明の衰運に乗じて、暴力強奪し、偽って一時と定めて、臨機応変の才は続出し、巧みに天下を操った。当時の豪傑は武力で抵抗できず、恨みを飲み憤を抱いて今日に至る。思うにいわゆる人衆は天に勝つ者である。今日は天が人に勝つ時を定めてまさにここに至った。……そもそも貴国の民族とわが日本民族とは種を同じくし、文を同じくし、倫理を同じくして、ともに栄えるという交誼があり、仇に屈服する気持ちはない。あなたがたに切望する、わが徒の誠意を諒とし、猜疑の念を絶ち、天人の賛成、反対を察し、天下の大勢に従って、義を中原にとえ、堅強な弟子を糾合して、革命軍は、清朝氏を境界線の外に追い払い、本当の豪傑を草むらから起たせて大事業を託し、その後稗政を革めて、人民の害を除き、虚文を去って孔孟政教の旨に従って、必ず三代帝王の治に復帰することを。わが徒はこのように希望して久しい。幸いに卿らの一唱を得たので、わが徒は宮に義〔士〕を聚めるべきである。だから船には食糧、兵器を載せ、期日を決めて助けに参りましょう。時は失ってはいけない、機会はふたたび来ないのである。古人が言っているではないか。天が不取に与せば、反対にその罪を受ける。卿らは速やかに起たれよ。明祖の笑うところとはなりますまい。」<sup>53</sup>「檄文」にみえる「復明」の呼びかけは、「明清鼎革」後に朱舜水が日本へ行って「師を請うた」時の言葉と、大体同じである。孫中山の「驅逐韃虜、恢復中華」の「排滿革命」宣言とはわずかな差違があろう。後藤新平の見解に至っては、いっそう人に熟慮させる。彼は言う。「明季徴君朱之瑜は、隣邦〔明〕に推挙された至琛であり至宝である。道義ならば心肝を貫き、學術ならば王業を主としたが、それらを実行できずに母国に思いを馳せ、却って衣鉢を我が国に伝えたのである。朱明のためには泣くべきであるが、之瑜のためにはむしろ慶賀すべきである。……之瑜は義として秦を帝とせず、魯連の志をしつ

<sup>51</sup> 梁啓超『中國近三百年學術史』（北京：東方出版社1996年版、第96頁）を参照。

<sup>52</sup> 『宗方小太郎日記』〔附：中國大勢之傾向〕（戚其章主編『中國近代史資料叢刊續編』、『中日戦争』（6）、北京：中華書局1993年、第129頁）を参照。

<sup>53</sup> 宗方小太郎「開誠忠告十八省豪傑」（漢文）（『日清戦争実記』、東京：博文館1894.8-1896.1）を参照。

かりと守り、遂には東海を越え、義公の知遇を得て、湊川〔神社にある楠木正成〕の碑とともに不朽千古の人となった。その純粹で忠実な尊王精神に比べて、一つに交じり合っているにもかかわらず押さえられ、沈黙しながらも覚醒、醸成されて、二百年ばかり経過した。遂に志士の勤王の提案となり、一転して王政復古し、維新の大業を助けて成就させるに至り、その結果国運は今日の隆盛を極めていいる。われわれが之瑜から得たものは本当に大きい。……われわれが彼を撰取した理由が賞賛されたのは知っているが、彼がわれわれに託した理由も明確であったとすることができるのである。水に映った月、鏡に映った花〔のように実際には手に取ることができないもの〕を双方手に入れるとき、それはすぐれた招致となる。之瑜がわが国に赴いたのは、本当にこの道理を得ている。わたくしは之瑜に頼り、更に日本人の〔之瑜に〕欺かぬことが我が国史を一貫する方法なのだとして理解することを切望する。……もし泉下の之瑜に、われわれが今日の盛運を思いのままにしていることを知らせたならば、当然、非常に喜んで下駄の歯が折れるのも分からぬ程であろう。」当然、彼はある種の推測したような「おわびの気持ち」も表している。「もし更に禹域〔中国〕の戦乱後の危険な局面を知らせたならば、あるいは悲しんで長くため息をついて嘆くだらうか」<sup>54</sup> この意味から言って、20世紀初めという時に「明の徴君」はすでに「帰化人」に変化していたのかどうかに関する中日学界の論争は、明らかに別の意味合いがあったのである。<sup>55</sup>

<sup>54</sup> 後藤新平『朱舜水全集序』（『朱舜水集』下冊、第796-797頁）を参照。

<sup>55</sup> 李大钊『筑声剑影楼紀丛』「東瀛人士关于舜水事迹之争讼」（原載1913年5月1日、『言治』月刊第1年第2期。『李大钊全集』第一卷、北京：人民出版社2006年、第24-27頁）を参照。また拙稿『关于朱舜水“日本归化”問題的再思考』（徐興慶編『朱舜水與近世日本儒學的發展』、台北：台大出版中心2012年版）を参照。

# Zhu Shunshui's Refusal of Imperial Appointment and His Title of a *Zhengjun* of Ming

Han Dongyu

## 1. Between His Deep Love for Ming and His Refusal of Imperial Appointment

Zhu Shunshui (1600–1682) was born as Zhiyu (and later given the courtesy name Luyu) in Yuyao, Zhejiang. Shunshui was his pseudonym. After the Ming Dynasty collapsed, he assumed the duty of restoring the Ming court and worked abroad for a long time. He visited Japan repeatedly to “ask for support” and finally settled in Japan in 1659. According to a historical document, after the “shift of ruling power from Ming to Qing,” Zhu Shunshui was based mainly in Zhousan, and he spent 15 years moving between Zhousan, Japan and Annam. During that period, he visited Japan seven times and Annam six times. Although we have no means to know all the purposes of his repeated overseas visits, it is supposed that he did so mainly to (1) avoid responding to appointment to an official position by the court (12 times or more), (2) work abroad to give the Ming dynasty the strength to restore itself, (3) visit Japan to request military support for Wanyi to restore the Ming dynasty, and (4) throw himself into the sea to demonstrate his loyalty to the dynasty. By contrast, Ishihara Michihiro drew a route map of Zhu Shunshui's “overseas business” for scholastic readers.<sup>1</sup>

Among the purposes of Zhu's overseas trips, “avoiding responding to appointment to an official position by the court” in particular may attract public attention. As explained in *Beizhuanjibu* (碑傳集補), Zhu Shunshui was specially appointed to an official position in Chongzhen 17 (1644) but refused to assume the position. He was again appointed in Hongguang 1 (1645) but did not accept the appointment again. He received an offer of the statuses of *jiangxi tixing anchasi fushi* (江西提刑按察司副使, or Assistant Provincial Surveillance Commissioner for Jiangxi) and *bingbu zhifang qinglisi langzhong* (兵部職方司郎中, or the Director for the Bureau of Operation of the Ministry of War) concurrently, and he was also assigned to supervise troops led by Fang Guoan. However, he again refused that offer.<sup>2</sup> As a result, the Department of State Affairs issued a notice of denunciation, which mainly maintained that Zhu was “too arrogant to follow the court order and was not sufficiently polite to serve as a vassal.”<sup>3</sup> Zhu commented, “I escaped to a coastal area at night immediately after receiving the notice.”<sup>3</sup> Zhu Shunshui himself estimated that he refused position offers from the court 12 times.<sup>4</sup> It is reasonable to view Zhu, who continued all-out efforts to seek support for “restoration of a

<sup>1</sup> Ishihara Michihiro 石原道博, *Minmatsu Shinsho Nihon-kisshi no Kenkyū* 明末清初日本乞師の研究, Tokyo: Fuzanbō, 1945. See p. 195.

<sup>2</sup> See Volume 35 “Zhu Zhiyu 朱之瑜,” Min Erchang 閔爾昌, *Beizhuanjibu* 碑傳集補 (p. 641, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集, Beijing: Zhonghua Book Company, 1981).

<sup>3</sup> See “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (p. 31, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集, Beijing: Zhonghua Book Company, 1981).

<sup>4</sup> See “Da Yuan Guangguo Wen Xianshi Yuanyou Luli” 答源光國問先世緣由履歷 (p. 352, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

Chinese empire” after the collapse of the Ming dynasty until his death, as the person who loved the Great Ming most and contributed most immensely to his homeland. In addition, many people who personally knew Zhu recorded his activities in detail. Ando Morinari wrote in “Shunsui Sensei Gyōjitsu” (舜水先生行実; lit. “Record on Master Shunshui’s Acts and Words”): “Mr. Zhu lives here temporarily, but he is always crying seriously while facing his homeland, and he just regrets that no one has revenged his enemies back home, rather than feeling sad to separate from his family. He can rely only on two or three loyal vassals back home and revere only the virtue that the Ming dynasty has accumulated generation by generation.”<sup>5</sup> After settling in Japan, Zhu also wrote again about the situation he was placed in: “Seriously crying for 17 years has made me so sad and extremely weak. A period of 10 years of vomiting blood has made me much weaker from sadness and changed the color of my face to that of dead leaves.” He finally took every opportunity to blame himself, saying: “I have lived too long impudently. How shameful is it for me?”<sup>6</sup> While feeling like this, he envisioned that he could witness the collapse of the Qing dynasty during his lifetime, and he thought, even if it would be impossible, he would be happy if the dynasty would collapse even after his death. He then prepared a coffin that could not easily decay so that he himself would be buried back home if Chinese rule was restored. This action left a deep impression on Liang Qichao and invited him into profound thought. Liang wrote: “When compiling ‘Zhu Shunshui Nianpu’ (朱舜水年譜; lit. ‘Chronicle of Zhu Shunshui’), I added some events that occurred after his death, which I believe are indispensable for the chronicle. He was a former loyal vassal of Ming and continued to consider how to expel the Qing rulers. He spent the second half of his lifetime in Japan, where he passed away. He formerly said, ‘I don’t hope that my corpse will be returned to China unless the Qing rulers leave China.’ He built a coffin that could not easily be broken to prepare for his corpse to be transported to China in the future. As a result, the coffin has survived Qing China and is still resting in peace in Japan. If we ask for his corpse to be returned back home, our hope would be fulfilled. In consideration of these matters, I added at the end of the chronicle the emergence and disappearance of the Taiping Heavenly Kingdom (Heavenly Kingdom of Great Peace), the Xinhai Revolution, the abdication of the Qing emperor, and the collapse of the Qing dynasty, believing that the desire of Zhu Shunshui was slightly satisfied.”<sup>7</sup> We may now say that Zhu Shunshui had made considerable efforts to establish the politics of the Ming dynasty before he settled in Japan, and that he seemed to believe that his efforts were righteous while his similar efforts and work could be the result of a normal choice in life. In line with this logic, we found a document showing that he did not refuse a position offer from the Ming administration. That document is “Shang Jianguo Luwang Xieen Zoushu” (上監國魯王謝恩奏疏; lit. “the Memorial to His Highness the Regent Prince of Lu with Gratitude”) among his last writings.

The document was Shunshui’s reply to “Jianguo Luwang Chiyu” (監國魯王勅諭; lit. “the

<sup>5</sup> See Imai Kōsai 今井弘濟 and Asaka Kaku 安積覺 “Shunshui Sensei Gyōjitsu” 舜水先生行實 (p. 617, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>6</sup> See “Zhongyuan Yangjiu Shulue” 中原陽九述略 (p. 13, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>7</sup> See the Appendix of Lian Qichao 梁啓超 “Zhu Shunshui Xiansheng Nianpu” 朱舜水先生年譜 (p. 729, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

Imperial Instruction from the Regent Prince of Lu”).<sup>8</sup> A historical survey has revealed that the Imperial Instruction was written in the year of Jianguo 9 (the 11th year of Qing rule; 1654) in order for Zhu Yihai (Prince of Lu, who served as the regent of Southern Ming) to summon Zhu to collaborate in carrying out the great duties of restoring the Ming dynasty. Because Shunshui did not look bright, no one imagined that he had received such a letter of imperial appointment. He also did not mention that he was honored to be appointed by the Prince of Lu, and he had few close friends or pupils, so he did not show the imperial letter to anyone during his lifetime. Therefore, the Imperial Instruction was not discovered until he died from illness.<sup>9</sup> In 1715, Tokugawa Mitsukuni ensured that the Imperial Instruction was contained in *Shunsui Sensei Bunshū* (舜水先生文集; lit. “Works of Master Shunshui”).<sup>10</sup> The Imperial Instruction says: “I am seeking a sage even in my dreams and eagerly waiting for you. I here especially issue an order to appoint you to an official position. Carry out your duties in compliance with my directions, and support me. The project of Ming restoration will naturally benefit your loyalty and writing career.” These words embody the Prince of Lu’s ultimate desire to have Zhu help him to restore the Ming dynasty. Because Zhu was in Japan far from his homeland and had no permanent address, the Imperial Instruction reached him after three years of many troubles in the beginning of 1657 (the 14th year of Qing rule). At that time, Zhu was detained in Annam and hovering between life and death. Therefore, it is imaginable how honored and impressed he was when he read the Imperial Instruction. He wrote: “On the 14th day of the first month this year, a Japanese ship returned with an imperial letter written in the third month of Jianguo 9 about the imperial regent’s desire to appoint me to an official position and have me return. However, wearing ordinary clothes, I avoided stating my intention to follow the imperial order. On a starry night, I first prepared an officer’s costume, and I carefully chose the auspicious day of the 16th to pay respect to the Imperial Instruction while avoiding doing so in public. I placed a desk in my house and read the Imperial Instruction there, and I expressed my gratitude by hitting my head against the desk and vowed to observe his order.”<sup>11</sup> The term “*qinci qinzun*” 欽此欽遵 found in this Memorial to the Regent was used by vassals when they reported to the emperor, which is the main gist of the Memorial. The term “*zhiling*” 領旨 denotes observance and fulfillment of orders. Zhu not only accepted the Prince of Lu’s offer but also took a polite, reverential attitude toward the regent.

As mentioned before, after settling in Japan, in response to Tokugawa Mitsukuni’s question, Zhu Shunshui talked about the official position offers he had received. “The total number of

<sup>8</sup> See “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (pp. 31–33, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>9</sup> See Imai Kōsai 今井弘濟 and Asaka Kaku 安積覺 “Shunsui Sensei Gyōjitsu” 舜水先生行實 (p. 624, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>10</sup> The original copy of the Imperial Instruction was displayed at the First Higher School, Japan (or a library of Tokyo Imperial University according to another argument) in 1912. At 3 pm on September 2, 2013 (Japan Time), I discovered the original copy that had been left forgotten for 100 years, in collaboration with other members of the Commission for Investigating Historical Sources Concerning Shu Shunshui Once Owned by the Mito Tokugawa Family. For details, see the newspaper article “Imperial Letter to Zhu Shunshui Discovered: Described as a “First-class Material” at the Tokugawa Museum Collection Report Meeting” (in *the Ibaraki Shimibun* on September 7, 2013).

<sup>11</sup> See “Shang Jianguo Luwang Xieen Zoushu” 上監國魯王謝恩奏疏 quoted in “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (pp. 31–32, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

position offers and nominations I have so far received is 12, excluding a recommendation by Qi Wei, and I refused all the offers. In those times, society was in a chaotic situation, and law and order were ignored. People neither knew each other nor communicated with each other. In addition, I tried hard to hide everything and prohibited my family members and pupils from having even one character in my writings known by outside people. I just called myself a *shengyuan* (生員, or imperial examination candidate). Because the Regent Prince of Lu stayed in Zhusan temporarily later, I had some opportunities to see him. On such occasions, you have to keep records as a general rule, but if I had betrayed the Prince of Lu, he couldn't have freed me as a criminal. Therefore, taking into consideration such circumstances, I called myself a *gongsheng* (貢生, or imperial examination candidate) for the time being, still hiding my original intention. That's why I have been appointed to one position after another, some very high-ranked and others lower-ranked, in a messy manner."<sup>12</sup> Nevertheless, written materials prove that he refused position offers 11 times. Liang Qichao chronicled Zhu Shunshui's refusals of position offers as follows: (1) Zhu was ordered by the administration to serve as *jiangji-tongzhi* (監紀同知, or Vice Magistrate), in the 10th month of Chongzhen 16 (1643) and refused to follow the order. (2) In Chongzhen 17 (1644), when the capital of Southern Ming was established, Fang Guoan, the military commander of the Jiangnan area, nominated Zhu for a special appointment by an imperial edict, but Zhu refused the appointment. (3) In the first month of Hongguang 1 (1645), Zhu received an imperial appointment again but refused it. (4) In the fourth month of the same year, Zhu was ordered to assume the positions of *jiangxi tixing anchasi fushi* (江西提刑按察司副使, or Assistant Provincial Surveillance Commissioner for Jiangxi) and *bingbu zhifang qinglisi langzhong* (兵部職方司郎中, or the Director for the Bureau of Operation of the Ministry of War) concurrently and to supervise Zhendongbo (鎮東伯, or the Duke of Defending the East) and troops led by Fang Guoan, but Zhu refused to follow the order. (5) In the \_\_\_ month of Jianguo 2 (1647), Huang Binqing, the defense commander for Zhousan, appointed Zhu as the District Magistrate of Changguo County, but Zhu refused the appointment. (6) In the tenth month of the same year, Zhu was ordered to serve as an investigating censor responsible for managing state farms but refused to follow the order. (7) At the same time, Zhu was requested to serve as *junqian zanhua* (軍前贊畫, or Military Front Consultant) but refused the request. (8) In the first month of Jianguo 5 (1650), Liu Shixun, the military commander for the Annamese Sea, nominated Zhu to the position of *jianji tuiguan* (監紀推官, or Assistant Surveillance Commissioner), but Zhu refused to assume the position, (9) Soon after that, Zhu Yongyou, Deputy Minister of Personnel, nominated Zhu Shunshui to the positions of *bingke jishizhong* (兵科給事中, or Supervising Secretary of the Office of Scrutiny of War) and *like jishizhong* (吏科給事中, or Supervising Secretary of the Office of Scrutiny for Personnel), but Zhu Shunshui refused to assume the positions. (10) Soon after that, Wu Zhongluan, Minister of Rites, tried to appoint Zhu Shunshui to a certain position at the Hanlin Academy, but Zhu refused the position offer. (11) In the third month of the same year, Wang Yi, a district investigating censor, attempted to ensure that Zhu would earn the title of *xiaolian* (孝廉, or Filial and Incorrupt), but

<sup>12</sup> See "Da Yuan Guangguo Wen Xianshi Yuanyou Luli" 答源光國問先世緣由履歷 (p. 352, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

Zhu immediately wrote a letter of refusal to the Prince of Lu.<sup>13</sup> It seems that Liang Qichao was unable to identify Zhu's missing 12th refusal of a position offer because of his own busyness. Then, what does so-called Zhu Shunshui's 12th refusal of a position offer indicate?

The dialogue found in the Imperial Instruction from the Regent Prince of Lu may give us some suggestions about the answer to the above question. The regent gave the instruction as a special appointment with the serious intention to request the sage to work with him. There are few other examples of imperial instructions that honestly and politely declared the intention of the Prince of Lu as the regent. "Those who show the principles for saints and sages naturally must devote themselves to restoring the declined dynasty and fulfill their mission. If they leave the declined dynasty without hesitation, who could be responsible for the country?" The imperial regent added: "I am seeking a sage even in my dreams and eagerly waiting for you. I here especially issue an order to appoint you to an official position. Carry out your duties in compliance with my directions, and support me. The project of Ming restoration will naturally benefit your fidelity to your own principles and writing career. You should not stay abroad without worry. You should avoid doing so."<sup>14</sup> In the Memorial to the Regent Prince of Lu with Gratitude, the reply to the Imperial Instruction, Zhu Shunshui demonstrated his loyalty to the Prince of Lu and his desire to devote himself for the sake of the imperial regent and restore the Ming dynasty. "I have no fidelity and no ability to write dignified text, but I can fulfill your dream of being helped by a sage. I have never been behind any other people in doglike or horse-like honesty and loyalty to the master and the aspiration to fulfill the mission for restoration." Zhu added: "I am planning to prepare to embark on a journey in a hurry and visit Siam on the 21st to fulfill my aspiration while moving around. Since Siam is far southwest, I really fear that Your Highness may believe I would be acting only for my own interests against the imperial intention, without examining my all-out efforts in detail. Therefore, I am just not ready to act immediately while feeling respect for you, with your letter in my hands." These words suggest that Zhu Shunshui was still not contented about immediately devoting himself to repaying the regent's sincerity. However, if Zhu "calmly waited for the arrival of summer, visited Japan first, and then left Japan for Xiamen again," the concept of "making a detour along this route" is beyond our understanding. This may derive from his thought that "I may seem to the general public to be mad." He gave no specific explanations about such public opinion but "My pain is difficult to articulate." In addition, at that time Zhu was suffering *Annan gongyi* (安南供役, or imprisonment in Annam), where he forced Annamese people to carry out troublesome duties of addressing his refusal to be subject to the local king. Zhu clearly understood that his refusal to be subject to the Annamese king would protect the dignity of the Ming dynasty and lead to his death for a cause. Meanwhile, the reply to the Imperial Instruction expressed Zhu's last wish to leave the Prince of Lu. "If I die from an unexpected act, I cannot report to the Hongwu Emperor and Your Highness. I will be responsible even after my own death."<sup>15</sup> We can imagine

<sup>13</sup> See Lian Qichao 梁啓超 "Zhu Shunshui Xiansheng Nianpu" 朱舜水先生年譜 (pp. 652, 654, 656 and 659, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>14</sup> See "Jianguo Luwan Chiyu" 監國魯王勅諭 (p. 34, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>15</sup> See "Shang Jianguo Luwang Xieen Zoushu" 上監國魯王謝恩奏疏 quoted in "Annan Gongyi Jishi" 安南供役紀事 (p. 32, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

that, if the Prince of Lu had received the reply while having no information about Zhu, the imperial regent would not have known that Zhu deserved to be called a patriot. However, another letter sent by Zhu to the Prince of Lu three months after the last letter—“Shang Jianguo Luwang Shangzouwen” (上監國魯王上奏文; lit. “Report to His Highness the Regent Prince of Lu”)—says that Zhu “would not be loyal,” and “If Your Highness does not want to throw me away abroad, please order the vassal bringing the imperial instruction to request the Annamese to hand me over, so they will not be brave to detain me again.” If this signal for aid from Zhu had inspired the Prince of Lu to send an imperial letter to the Annamese king, the regent would have been still so powerful that his intention would have the authority to save Zhu from sufferings. It is reasonable that, in a fierce situation where a state is losing its vigor and collapsing, a lord and a vassal protect each other especially when the situation is unpredictable for both sides. However, the long list of Zhu’s refusals of official position offers, inserted at the beginning of the reply to the Imperial Instruction, gave a sign of a certain end where the desires of both sides to protect each other would be achieved. We paid attention to the fact that one refusal of a position offer mentioned in the reply to the Imperial Instruction corresponded with the incident of his *caobiaokenci* (草表懇辭), where Shu Yongyou, Wang Yi, and Zhang Kentang nominated Zhu Shunshui as a candidate for the title of *xiaolian* (孝廉, or Filial and Incorrupt) under the name of the Prince of Lu.<sup>16</sup> Moreover, Zhu Shunshui prostrated himself and prayed for the Prince of Lu’s withdrawal of the order because of his avoidance of unreasonableness and family problems, as clearly represented by his writing: “I have mourned for three years but have not yet held a funeral, and I’m always concerned about my aged mother. Seven years have passed since I promised to marry a woman, but I have not yet married her and doubt that she will go into the curtain.”<sup>17</sup> We paid further attention to the fact that Zhu Shunshui escaped from the trouble in Annam and arrived first in Japan, instead of Xiamen. It would have been more reasonable for him to arrive in Zhousan, where the Prince of Lu stayed, rather than Xiamen, after leaving Annam. This is because Zhu clearly knew that imperial instructions would be issued from Zhousan.<sup>18</sup> What made him believe so? A pupil of Zhu mentioned the answer on his behalf: “The master intended to return home and was secretly examining the power of forces who aimed to restore the Ming dynasty. However, he faced severe difficulties many times and exhausted funds and tools. Then, the master sent a letter to the Prince of Lu to report his current condition. In the summer of the following year, he arrived in Japan. He wished to reach Xiamen from Japan by order of the Prince of Lu probably because he intended to decide what to do by himself according to the situation. At that time, his homeland was divided, and a war had occurred. Even if he wished to go directly from Annam, the roads were difficult to go through. Therefore, he tried to travel by sea, though Zhousan had already fallen, and the master’s friends who led troops with loyalty in mind, including Shu Yongyou and Wu

<sup>16</sup> See “Shang Jianguo Luwang Xieen Zoushu” 上監國魯王謝恩奏疏 quoted in “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (p. 31, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>17</sup> See “Shang Jianguo Luwang Ci Xiaolian Zoushu” 上監國魯王辭孝廉奏疏 (pp. 36–37, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>18</sup> See Imai Kōsai 今井弘濟 and Asaka Kaku 安積覺 “Shunsui Sensei Gyōjitsu” 舜水先生行實 (p. 615, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

Zhongluan, had already died in conformity with their loyalty to the dynasty. Hearing about it, the master was forced into difficulty in deciding on the next destination. However, he hoped to observe the situation in detail and thoroughly forecast the progress of things, so he stayed in the coastal area, where he experienced danger again and was little likely to survive. He thus fully realized that the current rulers could not be attacked, that national land could not be recovered, and that defeated military officers could not regain their vigor. If he was in an inland area, he would be forced to follow the customs of the Qing dynasty. If he did not resist the Qing dynasty by breaking his crown, tearing his costume, and shaving his hair, all he could do is fulfill his aspiration by throwing himself into the sea. In the next year, he arrived in Japan again.”<sup>19</sup> This may be possibly an answer to the puzzle of “My pain is difficult to articulate.” However, he reached Xiamen just to “decide what to do by himself according to the situation”—a purpose determined from a “Seeing is believing” perspective—, but Zhu expressed his loyalty to the Prince of Lu, though the loyalty was not so strong as expected from his reply to the Imperial Instruction. A more accurate account can be found in the honest and sincere words Zhu gave to one of his pupils after he settled in Japan: “The Prince of Lu doesn't know about my three-time refusals of official position offers. I just acted carefully and called myself an *engongsheng* (恩貢生, or imperial examination candidate) without showing off my academic knowledge. If the imperial regent had known more details, the Imperial Instructions would have treated me more politely, not in the current way. However, if the imperial regent had known more details, I would have surely died in Zhousan, instead of reaching Japan and spending days in the current way. If so, good luck and bad luck are all in a relationship of cause and effect with each other. Imperial letters of special appointment are historically important documents, and the appointed *jinsshi* (進士, or successful imperial examination applicants) should act in an extremely sincere way. If society were in a normal situation, the imperial regent would know everything. However, the serious disturbance has placed a barrier in front of him. That's why he knows nothing.”<sup>20</sup> The two characters of “倚伏” (*yi fu*) were quoted from Confucius' words “Bad luck exists in good luck, while good luck is hidden in bad luck.” By quoting this phrase, Zhu Shunshui meant that fortunately the Prince of Lu knew little about Zhu at that time, and that, if not so, Zhu also “died together with Zhousan” and those martyrs for the Ming dynasty, which he could not have escaped from easily. This word of Zhu, representing his hidden joy of hiding his status, prevents us from trusting him and concluding that he really received the special appointment of the Prince of Lu. His feeling about his own 12 refusals of official position offers, which he never talked about clearly, probably resulted from an extension of his apparent acceptance and implicit refusal of offers from the Prince of Lu. Although Zhu Shunshui himself did not clearly explain, his remarks given after the 11th refusal suggest that he actually had already given an implicit answer to the imperial regent: “In the third month of Jianguo 9 (1654), I respectfully received the Imperial Instruction and looked up to it.”<sup>21</sup> This sentence implies that Zhu was able to just

<sup>19</sup> See Imai Kōsai 今井弘濟 and Asaka Kaku 安積覺 “Shunsui Sensei Gyōjitsu” 舜水先生行實 (pp. 616–617, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>20</sup> See “Da Andong Shouyue Wen Batiao” 答安東守約問八條 (p. 370, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>21</sup> See “Da Yuan Guangguo Wen Xianshi Yuanyou Luli” 答源光國問先世緣由履歷 (p. 352, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

respectfully looked up to the Imperial Instruction given by the Prince of Lu. However, careful attention is required here. Zhu Shunshui's ignorance of the significance of the Imperial Instruction was never a reason for his refusal of the position offer. This is proved by the subsequent facts. Zhu rather took advantage of his status as a *zhengjun* (徵君) of Ming, which he acquired based on the three special appointments he had received (or more precisely the four special appointments, including the Imperial Instruction from the Regent Prince of Lu). The inscription on the back of the Monument to Mr. Zhu Shunshui, a *Zhengjun* of Ming, written by Asaka Tanpaku, says: "*Zhengjun* . . . did not chat with other people in vain, and regretted that national enemies still remained in his homeland, crying and gnashing his teeth. He did not lose his vigor even in his advanced age. He was always wearing a Ming-style outfit and crown and carrying the Prince of Lu's instruction."<sup>22</sup>

Then, what made him "respectfully receive appointments to official positions but refuse them" while deeply loving the Ming dynasty and avoid participating in the administrative system of Ming while saying "I respect virtue accumulated by the Ming court generation by generation"? Zhu Shunshui's contradictory acts and words may possibly imply his persistent love for the Ming court, and they are beyond common-sense interpretation.

## 2. Analysis on the Reasons for His Refusal of Imperial Appointment

Answering a question from Japanese scholar Ando Seian, Zhu Shunshui said that if he accepted the Ming court's appointment to an official position: "As a person aiming for fame, I would have immediately assumed the position of a fourth-grade officer, concurrently served as an administrative officer, been entrusted with a troop of 480,000 soldiers, been appointed as a commander in chief or the Father of the Nation, and hosted one guest after another. I would have enjoyed great fame. Why did I make all-out efforts to refuse them?" Zhu Shunshui eventually decided not to choose a path toward administrative career development. He "refused" those appointments, instead of "avoiding respectfully receiving the appointment letters." He gave a simple answer: "I judged that I couldn't carry out administrative duties, so I refused the appointments. You should understand that my attitude can be neither compared with those of people who isolate themselves from society nor viewed as the same as those of Hang Confucianists, who closed the door to the wider society and aimed for fame just by enhancing their knowledge."<sup>23</sup> I believe that, however, a more detailed examination of why Zhu "did not assume official positions" would find three reasons: 1) he in reality had neither motivation to preserve his own vigor nor ability to restore his own declined power, 2) he disagreed with the politics of the late Ming dynasty, and 3) he no longer had trust in the academic school advocated by the Ming dynasty. These three reasons sometimes mixed and intertwined with each other and had impacts on each other. Let's examine the three reasons in more detail.

The first reason sounds slightly superficial, but it reflects the uncontrollable realities he

<sup>22</sup> See Asaka Kaku 安積覺 "Ming Gu Zhengjun Wengong Xiansheng Beiyin" 明故徵君文恭先生碑陰 (p. 631, Appendix 1, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>23</sup> See "Da Andong Shouyue Wen Batiao" 答安東守約問八條 (p. 371, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

confronted. While historical documents describe Zhu Shunshui as honest by nature and reluctant to assimilate into general trends, this seemingly very excellent character might have led him to violate prohibitions and be punished just by slightly moving his hands in the administrative world of the Ming dynasty. Importantly, once his acts and words had not complied with the politics of that time, he would have been blamed for serious mistakes, which would have affected his wife, children and relatives so adversely that he could not have protected them. He foresaw that he might suffer misfortune once assuming an official position. "I first became a Confucianist student in Songjiang-fu, Nanjing. I was a so-called *xiucai* (秀才; a person of distinguished talent). During my younger days, I aspired to rule the people in an enlightened manner and save them from their hardships, and my deeds conformed directly to good manners. Many of my relatives and seniors back home expected me to become an assistant to the emperor. When I was still young, I experienced a gradual decline in public morals and the national policy, so I decisively threw away my desire to pursue an administrative career and acted to look transcendental. I always said to my wife and children: 'If I am the most excellent among the *jinshi*, I will become a prefectural governor and arrest those involved in my first year in office. In my second and third years, peasants will begin reciting the words of virtue, and my superior will be praised, surely leading me to take the blame. According to this view, I will be surely blamed for a great crime, so I will be unable to protect myself and my family. Nevertheless, I cannot hide my true feelings, passionate enthusiasm, and aspiration to save the people. That's why I threw away my desire for promotion.'" <sup>24</sup> Moreover, he believed that, modestly speaking, he would be useless like a "single tree that is useless for supporting a building" even if he participated in politics, assumed an official position, and gave proposals to the almost defeated Ming court. Therefore, when Tokugawa Mitsukuni asked him why he had left his official position, he did not hide his feeling of powerlessness. "I established a household and mastered morals during my younger days, aiming for fame and prosperity. But I saw people of inferior character get angry about the misfortune they suffered and the nation decline and collapse in an instant. I have fortunately received two special position offers. Even if they were just intended to mark the centenary, the special offers were a source of much greater honor than success in the imperial examinations. However, a single tree cannot support a building falling down. A single person cannot save a large river. If you wish to protect your house from fire, you may take a preventive measure, such as bending a chimney. However, you cannot add a pillar to an already collapsed house. I should refuse official position offers despite my feeling of loyalty because I did not originally aim to enhance my knowledge in search of fame." <sup>25</sup> Zhu Shunshui also expressed his view to Oyake Seijun in a similar way: "I have a real aspiration to save the people and the universe, and seriously desire to bring peace to them. I will not dare to demonstrate my honor. I just hope to serve as a single tree that supports a building almost collapsed by someone. If I am near the country, I should be responsible for other people's mistakes, while, if I am far from the

<sup>24</sup> See Imai Kōsai 今井弘濟 and Asaka Kaku 安積覺 "Shunsui Sensei Gyōjitsu" 舜水先生行實 (p. 613, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>25</sup> See "Da Yuan Guangguo Wen Xianshi Yuanyou Luli" 答源光國問先世緣由履歷 (pp. 352–353, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

country, I shall let men of virtue write, while mocking them in vain. Therefore, I will never do it even if I have to go through hell.”<sup>26</sup> It is clear that he did not want either to endanger his private life for the sake of his official duties or to be blamed in place of other people, even though he should face a false charge that could not be cleared forever.

Needless to say, the second reason is related to the above. However, the conspiracy of people in Dangtu to commit injustices led Zhu Shunshui to go beyond his avoidance, so that he eventually adopted a radical view and took a severe negative attitude toward the politics of late Ming. Ando Seian asked Zhu the following question: “When you were appointed to official positions, you did not assume them. What meaning did your action have to justice?” Zhu answered: “When the Ming court appointed me to official positions, politics was under the control of Ma Shiyong, who was a vicious statesman. At that time, he sent a certain Zhou, one of his followers, to visit my house again and again together with He Shibo [*jinshi* who achieved the top score in the provincial examination in Henan, whose name was Dongping, and who was the father-in-law of Zhu’s daughter], a relative of mine, to convince me in a very polite manner. If I had assumed the position, I would have surely received special treatment. If I had received special treatment, I naturally should have felt gratitude for the favor and repay the court for it. If I worked with Ma Shiyong, I also would have become a vicious statesman. If I had acted selflessly, I would have been blamed for obstructing justice while forgetting the favor I was granted and defeating the lord by myself. All matters should have been recognized by men of virtue as universal crimes. Therefore, I refused offers despite concern about the fortune of my family.”<sup>27</sup> Careful persons may find that, although in the context of the first reason, Zhu was still considering the problem of refusing official position offers from the perspective of private interests, as expressed in the phrase “unable to protect myself and my family”; in the context of the second reason, he understood that, if he unavoidably assumed the position offer, it would build up his negative public reputation, and he would use all his powers of persuasion without hesitation because his words were not words of acceptance while even ignoring concern about protecting himself and his family. However, behind his honest character described as “Following the guidance of men of virtue, instead of enjoying the favor of vicious persons,” is his revealing insight about the persistent symptom the court was suffering. He supposed that the southward movement of the Qing forces would cause the Zhongyuan area to be devastated, resulting in the Chinese dynasty being defeated by the aliens. However, if the “cores of trees” were not spoiled, Qing people were too strong for the Ming vassals to defeat them at one stroke at any cost. He found the reasons for the collapse of Ming in the dynasty itself, saying, “All things collapse naturally, and then people destroy them.” He believed that this logic was the truth and the real “reason for barbarians’ conquer of China.” “China is facing difficulty in blocking attacks by enemies. If a national shame is left to future generations, it will be really the favor granted by the enemies and what Chinese *shi dafu* (士大夫; scholar-officials) obtained by themselves. The proverb says, ‘All trees rot, leaving wood borers behind.’ Wood borers can grow even without never-rotting trees. Yang Hao favored the enemies and betrayed his country. We have no time to

<sup>26</sup> See “Da Xiaozhai Shengshun Shu” 答小宅生順書 (p. 311, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>27</sup> See “Da Andong Shouyue Wen Batiao” 答安東守約問八條 (p. 371, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

give a lengthy explanation about the past event. For example, in the final year of the Chongzhen era, crimes committed by higher-ranked officials forced the general public into sufferings, so all people hope that the dynasty would collapse together with themselves on that day. Therefore, people inside and outside the country addressed incoming rebels and fought against enemies while being misled by the rumors and evil creeds they spread and demonstrating an unexpected level of vigor. It was supposed that, once the country collapsed, the situation would get just out of control. Otherwise, how could people reach this place going beyond the unpopulated national border while obeying the order to hide halberds and follow arrows, with no solid fortresses and no loyal vassals in 24 counties in the Hebei area? Briefly, the largest fault lies with *shi dafu*. The general public have no wisdom and express their anger in vain, and they try to earn profits that they have not yet earned without considering their lifelong misfortune or misfortune for generations. We cannot blame them for that.”<sup>28</sup> These things mean that the Qing court was able to replace the Ming court quickly and to take advantage of the corruption of the Ming administration and its resulting estrangement from the general public. “They succeeded in stealing China as our homeland because they took advantage of the estrangement between the Ming court and the general public to expand the scope of their power. Therefore, Ming officials escaped here and there, and the Qing court succeeded in stealing the country without fighting.”<sup>29</sup> When Oyake Seijun asked Zhu Shunshui why China had been defeated rapidly, Zhu also answered that it was because the country had lost its people. “Once an abnormality occurs, the country collapses immediately” entirely because “public officers do not know what enlightened rule is and exploit the people by imposing heavy taxes on them.” In such a situation, even if the Great Ming was fully armed and had many “birds, guns and people of culture,” as well as “firearms,” the strong military power could be capitalized on by the thieves, once the “general public were estranged from the court.”<sup>30</sup>

However, the third reason, which we will discuss here, may be the most profound reason for Zhu's refusals of official position offers. He early became interested in academic problems in the Ming court, and he believed that the cause of the symptoms the Ming dynasty was suffering lay in the administration-advocated academic school, which could not be separated from politics at all, and had had very important impacts on how the politics would progress. “Public officials were eager for private interests, declining the fortune of the long-established country. Why cannot we believe that academic mentality has destructive effects? Therefore, only novel lessons from the Four Books and Five Classics can amaze the general public, and only distorted lessons can suit the current trends. These things are not justice for sages. People are originally disinterested in controlling themselves, managing the household, ruling the country, and bringing peace to society. They gave annotations only on appended sheets of paper. During the Jiajing, Longqing and Wanli eras, the administration gathered students to offer them classes and established libraries and

<sup>28</sup> See “Yilu Zhi You” 致虜之由, *Zhongyuan Yangjiu Shulue* 中原陽九述略 (p. 1, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>29</sup> See “Mielu Zhi Ce” 滅虜之策, *Zhongyuan Yangjiu Shulue* 中原陽九述略 (pp. 11–12, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>30</sup> See Chapter 3 of “Da Xiaozhai Shengshun Shu Shujiushou” 答小宅生順書十九首 (p. 314, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

formed various separate schools, which taught each other. The principle of sacredness and wisdom being embodied in one person is not realized, and people are busy with battles between earth and heaven and between water and fire. Higher-ranked people tried to have their virtue eclipse their intuition, while lower-ranked people were wearing uselessly high crowns and multiple shirts with broad sleeves. People who are similar to but different from You Meng became subjects for laughter by clapping their hands.”<sup>31</sup> When he came to know such negative impacts and to know Japanese people, Zhu Shunshui became deeply impressed. “One day, Mr. Zhu told me, ‘The chaos of China dates back to the era of the Tianqi Emperor (1621–1627).’ At that time, a party of scientists and a party of literary scholars competed for ruling power, speaking ill of each other. During the subsequent years of panic, thieves became rebels and northern barbarians obtained high-ranked positions. Vicious statesmen raised this entire situation into the source of complete chaos.”<sup>32</sup> Zhu believed just in Confucianist principles, which seemed to him to be the principles of sages and the true sutra for all academic endeavors. However, since the Ming court-led academic school was not compliant with the practical spirit of Chinese academic disciplines and the practical essence of Confucianism, Zhu Shunshui as an admirer of practical studies believed that it would be difficult for him to fulfill his aspiration and contribute to new knowledge in such an academic atmosphere. As seen below, after settling in Japan, he recognized that he himself finally found the foundation for promoting the Confucianist academic principles. “Despite its small area, Japan has an established set of laws, people with spirit, and a land bordered with coastal lines. I have not heard that Japanese people had introduced Confucius’ lessons before. Therefore, Japanese people respect civility but do not yet know the essence of civility, and they respect honor but do not yet comply with the basics of honor. Once someone teaches them the Confucianist principles, all the people will become an Emperor Yao or Shun and deserve to be granted with a higher rank. Korea is not the only overseas country that can introduce the lessons of ‘Eight Prohibitions.’”<sup>33</sup> Zhu Shunshui had unlimited expectations for Tokugawa Mitsukuni, who embodied the Confucianist principles in a naïve way. “The people of your country pay due attention to reading books and respecting civility. Your desire to promote the academic principles of sages is surely very insightful and is beyond the expectation of outside parties,” Zhu continued: “I’m just concerned about your nation’s inability to love the academic principles of sages. If they can love the academic principles of sages and become an Emperor Yao or Shun, why should I feel concerned about the inferiority of their literary works to those in China? Several-year efforts to instill the Confucianist principles into Japanese people would produce good effects, and the continuation of such efforts for 10 years would reach remarkable success. Why don’t you try to make such efforts? Why are you envious of people across the sea in vain like a person enviously looking at fish in deep water? This story is never a fantasy like Buddhist ones.”<sup>34</sup> Zhu also added: “The principles of sages have been

<sup>31</sup> See Chapter 3 of “Da Andong Shouyue Shu Sanshishou” 答安東守約書三十首 (p. 174, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>32</sup> See Hitomi Chikudō 人見竹洞, “Shunsui Bokudan” 舜水墨談 (p. 249, *Zhu Shunshui Ji Buyi* 朱舜水集補遺, Taipei Xuesheng Shuju, 1992).

<sup>33</sup> See “Shengxian Zan Wushou” 聖像贊五首 (p. 560, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>34</sup> See “Da Xiaozhai Shengshun Wen Liushiyitiao” 答小宅生順問六十一條 (pp. 411–412, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

neglected since the death of the Duke of Zhou not because there are no sages but because there are no sage-like emperors. No principles of sages would be pursued without sage-like emperors. . . . During my childhood, I enjoyed reading the Rites of Zhou and was eager to meet the people of those times. Unfortunately, a serious accident forced me to travel east on board a small raft, ending up worshipping an image of the Duke of Zhou here in Japan. . . . Placing importance on poetry and calligraphy and loving discussing civility, music, poetry, and calligraphy, the people of Japan are pursuing the principles of the Duke of Zhou. If they can master and clarify the principles, why does the politics of Japan have limitations?"<sup>35</sup> This is an example of Zhu Shunshui's expression of the deepest meaning of his "profound expectation for your country (Japan)."<sup>36</sup>

### 3. On His Use of the "Zhengjun of Ming" Title

As mentioned above, Zhu Shunshui was "appointed to official positions 12 times but refused to assume those positions," but he immensely valued his title of a *zhengjun* or *zhengshi* of Ming, which indicated that he had been appointed by the court to official positions, and he never allowed anyone to neglect that title until his death. For him, the title of a *zhengjun* was a kind of symbol of excellence protected by the barriers of nobleness and authority. In each stage of Zhu Shunshui's life, especially during the entire period of his work abroad, these titles demonstrated unrivaled and unreplaceable effects. My thorough examination has found the following explicit and implicit reasons for the effects, which I believe deserve the attention of scholars, in particular.

First of all, in the pre-modern sphere of Hua-Yi distinction, the title of *zhengjun* embodied nobleness and authority that could go beyond national borders to some extent. Even if the power of the Ming court declined and the country faced danger, the power and authority of the Chinese world still had a considerable influence on nearby countries based on its 1,100-year history. While this aspect represented the unintended, noble attitudes of Chinese people, the surrounding countries expressed their noble acceptance and respect for the power and authority. This was also the reason why Zhu Shunshui sought the Prince of Lu's imperial instructions amid his hardship in Annam. Even if the local king was stubborn, the clear, reasonable principles could help him to persuade the king to agree with him. Zhu Shunshui's telling writings on Annam explain this point. "The collapse of China has recently caused a chaotic situation on the earth, the rebellion of enemies, and the destruction of national land. Although foreign people do not have to die for a national cause, they cannot find a refuge. Hearing of it, Duke Wen said, 'Annam and Korea are countries that know civility.' Therefore, I escaped to this place. While Jiang Ziya and Boyi waited for the opportunity to regain ruling power while near the eastern sea and the northern sea respectively, this is not a fantasy. If your country can offer favorable benefits to a foreign national, that would be the end. People with various backgrounds visit me

<sup>35</sup> See "Zhougong Xian Zan" 周公像贊 (p. 557, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>36</sup> See "Da Xiaozhai Shengshun Wen Liushiyitiao" 答小宅生順問六十一條 (p. 411, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

here, but not all of them have asked me good questions possibly because they do not know with what intention I am prisoned here. . . I hope that such things will not occur again.”<sup>37</sup> When an Annamese official asked him what he would argue when the Annamese king appointed Confucianist sages to official positions, Zhu Shunshui gave an answer that demonstrated authority and standards. “The Annamese king can own Tonkin as a whole only if the imperial regent appoints the king to do so. Even if China restored all its titles, the king is merely a local duke in an alien country that is not under the imperial court’s influence. Why can you view an appointment by the king equivalent to an imperial appointment?” While nodding, the Annamese official said “Yes” eight or nine times consecutively.<sup>38</sup>

Next, once alien people understood the authority and value embodied by the title of *zhengjun*, it would not only benefit the holder of the title but also allow him to return from the brink of death. Zhu’s answer to the Annamese official’s question was actually based on his own experience. Annamese people were easily persuaded by his reasoning because they had a certain level of knowledge about Zhu’s status. However, Annamese people really understood him before they came to know his status, and they actually wanted to kill him in response to his resistance to their orders. In such a crucial moment, he thought of taking advantage of his special status. Although he was already prepared to be decapitated, he was later reminded of this fact based on his own experience. While he was still revered as a “man of dignity” at that time, the following story sheds light on his request to the local people for support after his death and shows his more important desire to survive. Zhu secretly said to a doctor based in Li: “I am a *zhengjun* of the Ming dynasty. This is a ritual or ceremony that has not been performed for 180 years after the dynasty’s founding. It is natural that you do not know what the title of *zhengjun* means. However, although I was appointed by the court to official positions twice in the years of Chongzhen 17 and Hongguang 1, I did not assume those positions. . . For 13 years since I left my homeland, [ . . . ] no one has known me personally. If I have to die today, I have some words to say here. After my death, [ . . . ] I know you will not respect my corpse. But, if you are willing to bury my corpse, I hope that my grave will have the inscription of ‘Grave of a Mr. Zhu, a *zhengjun* of Ming.’”<sup>39</sup> While Zhu was unable to be as self-possessed and calm as usual when he was almost being decapitated, that made Annamese people easily notice the abnormality of the situation where he was placed. His abnormal action helped him obtain the ideal opportunity to demonstrate his special status in public. “Today, a man named Li Yaopu visited me, and I said to him, ‘No one could believe in the existence of such a mad man (indicating Zhu himself).’ Li stated: ‘I have not yet known that man. Once I see him, I will recognize him. There are surely reasons why he is called a mad man.’ . . . This man called me again and asked, ‘What is *zhengjun*?’ and added ‘I don’t know your language, so seek paper and a brush and write the term.’ I immediately wrote the term, and said: ‘In the year of Chongzhen 17, I was appointed by the court to an official position, but refused the offer. In the year of Hongguang 1, I was again appointed by the court to an official position but did not assume the position. . .

<sup>37</sup> See “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (pp. 26–27, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>38</sup> See “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (p. 16, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>39</sup> See “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (p. 19, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

The local king is suddenly getting angry without understanding that my refusal to demonstrate respect is an action of civility. What words could I add further? I will accept to be killed or detained, but I just hope to refuse an offer of a position. I received a letter from the Prince of Lu in the first month of this year, and I also received another imperial edict. I won't give no more redundant words.”<sup>40</sup> The details of this description may help us spell out why Zhu could escape from the danger of being decapitated. In the Annamese Zhongyuan, which was included in the territory of Ming, Zhu and the local people were able to communicate by writing, but they were unable to understand each other by speech. However, as mentioned in Zhu's diary, he was answered by the doctor based in Li, who dealt with the situation after Zhu left the area and also served as his interpreter. The existence of this doctor-cum-interpreter played a very important role in verifying the status of Zhu, who was reaching Annam. Zhu said, “Because visitors aged 15 or above from the administrative world have always strictly observed the rules of etiquette and expressed their respect to the local king and high-ranked officials, my action was limited to refusal to kneel to the king.”<sup>41</sup> When the king heard about this fact, he said to the Li doctor: “This is a man of excellence. How has he obtained such an outstanding talent and such vast academic knowledge?”<sup>42</sup> The dialogue made the king completely change his attitude toward Zhu. This miracle was also highlighted in an unexpected way in Zhu's reply to the Prince of Lu. “I have already lost those who I knew personally. On the eight day of the first month, I visited the place where the Annamese king stayed, [ . . . ] and met him. I gave him a name card stating ‘*Qinfeng chishu tezhao engongsheng dunshou bai*’ ( 欽奉敕書特召恩貢生頓首拜; lit. ‘An *engongsheng* who has been specially appointed by the imperial court’). I explained that I had been specially appointed by the imperial court to official positions many times and had become a *zhengjun* in my country. ‘Therefore,’ I said: ‘I'm different from ordinary officials, so why could I kneel to a foreign king, disgracing my country? That's why my refusal to make an obeisance to the king is my expression of civility.’”<sup>43</sup> Because this is a post-factum report, his loyalty to the Ming court may be exaggerated, and his own noble social status is highlighted by taking advantage of the opportunity. He did not feel sorry for his past refusal of the imperial appointment, and seems to have felt a hidden delight about it.

Thirdly, the hidden value of the *zhengjun* title helped Zhu Shunshui consider the local administration of the countries he visited as an exile. As widely known, after he lost his hope of restoring the Ming dynasty, he settled in Japan in 1659 and died from illness in Edo 23 years later. His settlement in Japan can be seen as an exception from the Tokugawa shogunate's official history up to that time, expressed as “Forty years have already passed since the shogunate began to prohibit Chinese people from freely staying in the country.”<sup>44</sup> However, concerning the value of Zhu's overseas experience, he seems to have placed importance on his title and academic knowledge while in Annam. In Japan, he placed higher importance on his title and academic

<sup>40</sup> See “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (pp. 19–20, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>41</sup> See “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (p. 22, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>42</sup> See “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (p. 28, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>43</sup> See “Shang Jianguo Luwang Xieen Zoushu” 上監國魯王謝恩奏疏 quoted in “Annan Gongyi Jishi” 安南供役紀事 (p. 16, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>44</sup> See “Yu Sunnan Yuren Shu” 與孫男毓仁書 (p. 48, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

knowledge than in Annam, as well as his refusal of imperial appointments and expelling national enemies. Among these factors, his “refusal of imperial appointments” represented his negative attitude toward the politics of late Ming, while his desire to “expel national enemies” expressed his contempt for the Qing civilization. “Shang Changqi Zhenxun Jie” (上長崎鎮巡揭; lit. “Memorial to the Magistrate of Nagasaki”), which Zhu Shunshui wrote before settling in Japan, seems to correspond, intentionally or not, with his overly higher priority on the two factors in Japan. “In the tenth month of the year of *xinmao* (辛卯), Zhu respectfully reports that our country is seeing a degenerate society where people with malicious intent earn profits and the national administration is spoiled, resulting in hostility growing among the general public and the country being conquered by barbarians. This situation has made me bury my face in my hands and lose reason, and appointment of administrative officers looks like the collection of wastes. My grandfather, father and elder brother took imperial examinations and were appointed by the court to official positions through generations. However, I will not assume an official position because I do not want to look like a fox or pig wearing a pigtail or to work as a prisoner of my enemy. But I won’t kill myself. While I have been counted among excellent talents in Ming and appointed to official positions three times, I have rejected those offers because I do not want to receive a salary from the court in a severely destroyed society where the desirable principles of men of virtue have disappeared.”<sup>45</sup> This text means that he did not feel politically close to the late Ming court and did not feel culturally close to the Qing court. If he did not feel politically close to the late Ming dynasty, his act of rejecting imperial appointments can be viewed as reasonable. If he did not feel culturally close to the Qing court, it is natural that he was unable to serve his enemy. Meanwhile, while he did not painstakingly accommodate himself to Japanese people who exaggerated their dream of Japan as the center of East Asia, and their recognition of China’s transformation to a barbarian state, his position separated from both Ming and Qing not only confirmed his convincing assertion that he had no way to return but also helped clear up Japanese people’s political and cultural concern about and wariness of accepting an alien into Japan. With regard to the issue of national enemy, he took every available opportunity to exaggerate his experience of rejecting imperial appointments, but that was not because he did not take into consideration this issue. The profound questions Japanese people asked him repeatedly and uniformly were vastly beyond the understanding of the general public. Those questions were intended to ask him whether he could have continued to protect his loyalty to the “Ming-style costume and crown” during the period of his exile if the ruling power of China had not been transferred from Ming to Qing. Those questions were also aimed at asking him whether Zhu could have exaggerated his title while in Japan if Tokugawa Mitsukuni had not expressed his deep respect for Boyi and Shuqi, who are believed to have said, “We will not eat millet from Zhou,” and treated Zhu himself with similar respect. What was important was not the answers to those questions themselves but whether or not explicit or implicit arrangements between Zhu Shunshui and Mito clan vassals had been already established. A report says: “On the 17th day of the fourth month of Tenna 2, Zhu Shunshui passed away at his residence in Komagome, Edo. He was 83. He was buried at the foot of Mt.

<sup>45</sup> See “Shang Changqi Zhenxun Jie” 上長崎鎮巡揭 (p. 37, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

Zuiryū, Ōta-gō, Kuji County, Hitachi Province. Lord Tokugawa Mitsukuni commended the Chinese scholar for his achievements and virtue and expressed his commendation by giving him a posthumous name of Bunkyō (文恭) and engraving “A *zhengjun* of Ming” on the Chinese man's grave.”<sup>46</sup> Zhu himself stated: “Confucius formerly said that great principles were practiced in the optimal period in each of the three ancient eras. I used to give a deep sigh every time I read this writing, and I said, ‘How can I interact friendly with other people?’ But I cannot do so by any means. I was not so fortunate that I could encounter noble friends in early-modern China, but I can do so easily in Japan. Although I cannot interact in a friendly manner with ordinary people in Japan, I can do so easily with the lord here.”<sup>47</sup> The third quotation is from a eulogy for Zhu: “*Zhengjun* Zhu Shunshui, a loyal vassal of the Ming dynasty, settled in Japan, secretly waiting for a desirable opportunity. He never changed his aspiration to restore Ming.”<sup>48</sup> These three quotations have their own meanings. The first one means that Zhu's insistence on his title enabled him to acquire an immortal personality between China and Japan and restore the dignity of his homeland. The second one indicates that the reaction to his title of people inside and outside Ming and the assessment of the authority represented by his title helped prove the value of the Confucianist principles of politics by sages, and it put those principles into practice only in Japan. The third one signifies that, while Zhu “did never change his aspiration to restore Ming,” his intention to expel the Qing court and “not to return home unless China is restored”<sup>49</sup> caused major changes in the structure of East Asia later and served as a foreshadow of the subsequent events. The last one deserves special attention.

An essay titled “Yangjiu Shulue” (陽九述略; lit. “A Brief Account of Calamity” by Zhou Zuoren mentions that a person of the late Qing period got handwritten copies of “Zhongyuan Yangjiu Shulue” (中原陽九述略; lit. “A Brief Account of the Central Plain's Calamity”) and “Annan Gongyi Jishi” (安南供役紀事; lit. “Chronological Records of Imprisonment in Annam”) from the *Works of Zhu Shunshui* and printed and bound the copies in one volume in a large envelope affixed with an oval vermilion seal. This book was used to propagate the cause of revolution.<sup>50</sup> Liang Qichao also stated: “His (Zhu's) resistance to Manchuria did not decline even in his advanced age. His writing titled “A Brief Account of the Central Plain's Calamity” comprises such chapters as ‘Reasons for barbarians’ conquer of China,’ ‘Sufferings brought by the barbarians,’ and ‘Strategy for defeating the barbarians,’ and it has a writing of ‘*Ming guchen Zhu Zhiyuqixue qisang jinsbu*’ (明孤臣朱之瑜泣血稽顙謹述; lit. “Ming vassal Zhu Zhiyu in solitude wrote this work while shedding tears of blood and touching his forehead to the floor”) at its end. In addition,

<sup>46</sup> See Asaka Kaku 安積覺 “Ming Gu Zhengjun Wengong Xiansheng Beiyin” 明故徵君文恭先生碑陰 (p. 631, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>47</sup> See “Yuandan He Yuan Guangguo Shu Bashou” 元旦賀源光國書八首 (p. 113, Volume 1 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>48</sup> See Daigakunokami Fujiwara Nobuatsu 大學頭藤原信篤 “Shunsui Sensei Gazōsan” 舜水先生画像贊 (p. 744, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>49</sup> See Imai Kōsai 今井弘濟 and Asaka Kaku 安積覺 “Shunsui Sensei Gyōjitsu” 舜水先生行實 (p. 619, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>50</sup> See p. 42 of Lin Junhong 林俊宏, *Zhu Shunshui zai Riben de Huodong ji Qi Gongxian Yanliu* 朱舜水在日本的活動及其貢獻研究 (Taipei: Showwe Information Co., Ltd., 2004).

his Works include many writings about his resistance to Qing, which strongly inspired young people in the late Qing period and have had massive impacts on political changes for these 20 years.”<sup>51</sup> Meanwhile, Japanese people just before the Donghak Peasant Revolution felt happy when they witnessed the impacts of Zhu’s writings. Munakata Kotarō, a Japanese senior intelligence agent, pointed out: “I arrived in China in the early winter of Meiji 17 (1884) and found many resistance people. But resistance has now reached its peak. Formerly, most armed rebels conducted their activities without cause, but all armed rebels today fight for the cause of restoring the rituals of Ming. According to their explanation about why they fight for that cause, the slogan of ‘restoration of the Ming dynasty’ is the most powerful to agitate and attract people.”<sup>52</sup> Munakata took advantage of this rebellion and even issued a written declaration to loudly encourage Chinese people to defeat the Qing dynasty representing Japan during the Donghak Peasant Revolution. “The Qing court is originally a barbarian clan outside the Great Wall, so they are not so virtuous that you have to follow their orders. In addition, they have not accomplished any achievements in China, and they just took advantage of the decline of the Ming dynasty to violently rob people of their property. They pretended to limit the period for their rule and tricked the general public, in order to conquer the country. Warlords at that time were unable to fight against them, ending up just with resentment and anger against them. I believe that the people can defeat Heaven, but the current situation has resulted from heaven’s determination to defeat the people at its intended time. . . The people of your country and our nation originally belonged to the same race, share culture and morals, and have a friendship of mutual prosperity. Both peoples won’t surrender to the enemy. I fervently hope that you will accept our sincerity, dispel suspicion, and confirm that people and Heaven agree with you, and promote your cause in the Zhongyuan area while following social trends and uniting with strong pupils, and that the revolutionary army will expel the Qing court off the national border and encourage true men of excellence to initiate major businesses. I also hope that you will make necessary political improvements, save the people from their sufferings, and restore your past excellent dynasty by throwing away useless laws and following the political teachings of Confucius and Mencius. The Japanese people have long hoped so. Fortunately, you have agreed with us, so we will collect supporters for your cause at home. Therefore, we will provide you with food and weapons on ships and go to help you at our intended time. You should not miss this opportunity. You will not have such a favorable opportunity again. As ancient people said, if you do not receive a divine blessing, the vengeance of Heaven will come down on you. You should take action as soon as possible. The founder of the Ming dynasty would not mock you.”<sup>53</sup> This encouragement to restore the Ming dynasty has many elements shared with Zhu Shunshui’s statement seeking supporters in Japan after the power transfer from Ming to Qing.

<sup>51</sup> See p. 96 of Liang Qichao 梁啓超, *Zhongguo Jin Sanbainian Xueshushi* 中國近三百年學術史 (Beijing: The Eastern Publishing Co., Ltd., 1996)

<sup>52</sup> See “Fu: Chūgoku Taisei no Keikō” 附：中國大勢之傾向 in *Munakata Kotarō Nikki* 宗方小太郎日記 (p. 129, “Zhong-Ri Zhanzheng (6)” 中日戰爭 (6), Qi Qizhang 戚其章 et al. eds. *Zhongguo Jindaishi Zhiliao Congkan Xubian* 中國近代史資料叢刊續編 (Beijing: Zhonghua Book Company, 1993).

<sup>53</sup> See Munakata Kotarō 宗方小太郎 “Kaicheng Zhonggao Shibasheng Haojie” 開誠忠告十八省豪傑 (in Chinese) in *Nissin Sensō Jikki* 日清戰爭實記 (Tokyo: Hakubunkan, August 1894–January 1896).

The encouragement also has few differences from Sun Yat-sen's declaration for revolution for defeating Manchuria, aimed at expelling the northern barbarians and restoring the Chinese dynasty. The view of Gotō Shinpei requires readers to make more thorough considerations. Gotō said: "Zhu Shunshui as a *zhengjun* of Ming was a supreme treasure who was nominated for official positions. He devoted all-out efforts to his cause and pursued his academic aspiration for principles for imperial rule. However, he was not allowed to do so in his homeland, so he deeply loved his homeland and left his academic achievements in Japan. We should feel sorry for Zhu as a Ming patriot, but we should feel celebrate Zhu Zhiyu (Shunshui). . . Zhu did not accept Qing as his country to firmly protect his cause, just as Lu Zhonglian did not accept Qin as his country. Zhu finally crossed the sea, coming to know Tokugawa Mitsukuni personally and becoming immortal together with the monument [dedicated to Kusunoki Masashige] at Minatogawa-jinja Shrine. Compared with Japanese royalist patriotism, his pure and loyal patriot spirit he left has been enhanced and fostered in silence while being officially suppressed though mixed with Japanese patriot spirit for some two hundred years. His spirit has been finally incorporated into the proposals of modern Japanese patriots and has immensely contributed to restoring imperial rule in Japan. As a result, our country is enjoying its current prosperity. We have learned really valuable lessons from Zhu Shunshui. . . I know that we were commended for the reasons for our acceptance of him, but I believe it can be said that the reasons why Zhu entrusted his aspiration to us are clear. If we wish to achieve ambitious goals, we should accept excellent people. That is the case with Zhu Shunshui's settlement in Japan. I hope that we will further rely on Zhu Shunshui and make our national history consistent by maintaining our loyalty to him. . . If we were able to inform Zhu in his grave of our current prosperity, he would express his delight so strongly that he couldn't notice that the supports of his *geta* clogs are broken." Gotō also expressed his apology to him, as we expect, saying, "If we had informed him of the dangerous situation that his country is currently in after the disturbances of war, would he breathe a deep sigh of sorrow?"<sup>54</sup> In this sense, the controversy aroused in the early 20th century between the Chinese and Japanese academic worlds over whether or not the "*zhengjun* of Ming" had been already naturalized clearly had another implication.<sup>55</sup>

<sup>54</sup> See Gotō Shinpei 後藤新平 "Zhu Shunshui Quanji Xu" 朱舜水全集序 (pp. 796–797, Volume 2 of *Zhu Shunshui Ji* 朱舜水集).

<sup>55</sup> See Li Dazhao 李大钊 "Dongying Renshi Guanyu Shunshui Shiji zhi Zhengsong" 東瀛人士关于舜水事迹之争讼 in "Zhu Sheng Jian Ying Lou Ji Cong" 筑声剑影楼纪丛 (the original published in the monthly *Yanzhi* 言治 in the second term of the first year, May 1, 1913; republished on pp. 24–27, Volume 1 of *Li Dazhao Quanji* 李大钊全集, Beijing: People's Publishing House, 2006). Also see Han Dongyu 韓東育 "Guanyu Zhu Shunshui 'Ribei Guihua' Wenti de Zaisikao" 关于朱舜水 "日本归化"问题的再思考 in Xu Xingqing 徐興慶 ed. *Zhu Shunshui yu Jinshi Riben Ruxue de Fazhan* 朱舜水與近世日本儒學的發展 (Taipei: National Taiwan University Press, 2012).



## 口頭発表



## 日本研究と社会科学—インドにおける日本研究の現状から

ランジャナ・ムコパディヤヤ

◎ランジャナ 再び日文研に来て、本当にうれしく思います。所長の小松先生と磯前先生にお礼を申し上げたいと思います。2人の、フランスの事例やベトナムの大変おもしろい事例報告の後に、私が紹介するインドの事例はちょっと地味な発表になってしまうと思いますけれども、どうぞよろしくお願ひします。

直接本題に入りますけれども、日本研究と言ってもそんなに新しい研究分野ではありません。学問としては新しいのですが、以前から、2つの大きな流れがあります。1つは、地域研究の1つの分野としての日本研究、そこで日本の政治とか経済とか社会などを研究することなのですけれども、まだそこは地域研究としても東アジア研究の一環として日本研究が位置づけられることが多いのです。つまり、アジア諸国の中の中国、韓国と北朝鮮、台湾などとともに日本の研究を行うということなのです。

また、もう1つの流れは、外国語としての日本研究ということなのです。つまり、日本語を勉強して、そこから日本に関心を持って、日本の研究に取り組む、そういう2つの大きな流れがあります。

日本の研究の始まりは、明治維新の後ですね。アジアの国として日本が近代化、産業化を果たす一方で、同時にイギリスの植民地だったインドの知識人がそれに注目することになります。そこで、インドのそういう有力な方々と知識人が日本を訪問することになるのですけれども、1889年に、後でタタの財閥の創立者になるジャムシェトジー・タタをはじめ、産業界の人々が日本を訪問し、日本の事情についていろいろなことを書くのです。そこで今、記録として残っているのは、この2人の方の研究です。

1つは、インドの著名な土木技術者であったモークシャグンダム・ヴィシュヴェーシュヴァライヤが日本を訪問し、彼が書いた *Reconstructing India* (『インドの再建』) と *Planned Economy of India* (『インドの計画的経済』) はインドについて書いているが、その本のなかで日本の事情そして日本の近代化についても書いているのです。またサイド・ロース・マスードは、1922年に日本を訪問して、*Japan and its Education System* (『日本とその教育制度』) をあらわしました。そこで日本の教育制度が日本の近代化にどういう貢献をしたか、それについて書いています。

その後は、もう少し本格的に、岡倉天心が1902年にインドを訪問し、そこでノーベル賞を受賞したタゴールといろいろな交流して、タゴールが設立したヴィシュヴァ・バーラティ大学で最初に日本語の講座が始まります。

そこで、日本から研究者とかいろいろな人が入ってくるのです。インドへ初めて留学するその先駆者たちは、まずここへ来ました。そして講師にもなります。当時、タゴールが1916年に日本を訪問して、「ナショナリズム・イン・ジャパン」という日本への批判を含む『国家主義』という本を出しています。そういうふうには1929年から、いろい

るな日本からの学者とか芸術家などによる日本研究とか日本文化の講座が行われます。

その後、第二次世界大戦が始まると、そういう日本からの人々がインドに来られなくなって、一時停止されるのですけれども、インド独立後に、インドと日本との国際関係ができるし、また文化交流の協定もあるから、そこから日本の政府、文部省の支援で、インドから日本にどんどん留学生が送られるとか、また、そういう研究が始まるのです。

今、地域研究としては、インドで主に2つの大学でしか研究が行われていないです。1つはデリー大学です。もう1つは日文研で客員として招かれたアブラハム・ジョージ先生が所属するネルー大学です。デリー大学では1964年に中国研究のセンターとして始まるのですけれども、その後、日本学も加えられるのですが、また2002年に韓国学も加えて、それが今に至るまで、Department of East Asian Studies、つまり東アジア研究科になるのです。また、大学院の中では修士課程とか博士課程とか、いろいろな課程があります。

もう1つのネルー大学では、地域研究は国際関係をメインにして、Center of East Asian Studiesの中でやられているけれども、またもう1つはCenter of Japanese Studiesがあって、そこで日本語と日本文化の研究が行われています。それ以外に、日本語とか日本文学の研究、タゴールが設立したヴィシュヴァ・バーラティ大学をはじめいろいろあります。これの研究分野としてはやはり国際関係が一番多くて、その他は経済とか歴史になります。

ここから、日本の研究と社会科学とのどういう関係があるのか、特に我々がインドで日本研究をやるとき、どういう問題意識を持っているのか、また、ほかの専門分野とどうかかわっているのかということが一番重要なことだと思います。例えば私は修士課程まで社会学をやっていたのです。その後私は、社会学科から日本学科に入り、そこで日本語を勉強して、東京大学に留学しました。東京大学で宗教学を専攻しましたが、そもそも私がベースにしてきた専門分野といえば、社会学なのです。それは日本と関係ない単純な社会学なのですけれども、同じように、ほとんどインドの場合は歴史学とか政治学とか国際関係という、さまざまな分野の人が日本学に入ってきます。つまり、自分の専門分野の問題意識や理論とか、そういう観点から日本を見たり日本の研究に接近してきます。

ちょうど私が入ったときもまだ有力な議論だったのは、やはり日本人論という議論です。それは戦前もそういう研究があったのですけれども、日本人の民衆的な特徴性を主張する諸理論のことであるとか、日本の文化とか社会的な要素がユニークな現象であるという議論です。しかし、これはさまざまな問題を起こしてしまったのです。それはやはりそれぞれの分野で育ってきた人なので、日本が特徴的であるという立場からは研究ができなかったことです。

そこで、私は昔、ある学会で言われたのは、日本の研究はビジネスクラスであると。特別に扱わなければならないという見方があるのです。それは例えば戦前のベネディクトとか、オイゲン・ヘリゲルの研究とか、戦後になるとハルミ・ベフとか、吉野耕作の

文化ナショナリズムの研究です。それが西洋でも日本でも同じような見方で研究されてきたことがあるが、やはりインドにいる我々の研究にとってちょっと問題になることがあります。その1つは、日本研究がそういう日本人論とか独自の議論を出していたころは、割と独自の発展ができたのですけれども、一方、地域研究とか社会科学のほかの研究分野から孤立してしまったという結果もあります。それが、インドで日本の研究者が少ない理由の1つなのですから、やはりみんながそれぞれの分野の見方とか、それを大事にしていきたいし、そこから日本に接近したい。そこで、相手の研究者がもしそういう議論を受け入れないとか、そういう議論から離れてしまうと、それが1つの大きな問題になってくるのです。

ここで、事例として、私は日本の宗教、特に仏教を研究してきた者なのですけれども、特に明治維新の後、日本の仏教が近代化にどのように対応したのか、それが私の研究のテーマなのです。インドでも日本でも宗教の研究が非常に盛んなのです。その中で最も盛んなのは、1つは仏教の研究、もう1つは新宗教の研究です。でも、日本の研究者とインドの研究者の間に、その2つの分野ではほとんど交流がない。例えば東大でお世話になった島藺進先生や、それ以外の先生が、日本の新宗教の研究をやっています。同じような新宗教の研究はインドにもあるのですけれども、でも、インドの新宗教の研究論集を取ってみれば、島藺先生や他の日本の先生の研究にはあまり引用されていないのです。それが1つの大きな問題なのです。

不思議なことに、問題意識は同じなのです。例えば、宗教と国家とか宗教的ナショナリズムの問題は、今でもインドで非常に議論されていることなのです。もう1つ、宗教をどうとらえるかということも大きな課題でしたが、あまりその辺でも交流がないし、どこの国でも文化と民族的なアイデンティティーの問題、それが一番みんなの議論するところなのです。それが接点になるはずなのですが、今のところインドと日本の場合はそれが接点になっていないということです。

私は2015年から日印関係における仏教というプロジェクトにかかわっているのですが、明治維新の後に日本の各宗派が、鎖国の時代が終わったから、いろんな使節団やインドに巡礼に行くようになるのです。それで、インドへの訪問とかインドの巡礼研究、特に仏跡巡回の研究が、日本の近代仏教の中ですごく大事な研究分野なのです。

日本の仏教者や僧侶たちがインドに行って、日記を書いたりや、いろんな資料を集めたりするのですけれども、その後に日本の研究者がその資料を使って研究するのです。そこで、大きく見過ごされてしまったことは、インド側の研究なのです。日本の方々もインドに行っていることが、インド側でもそれについて何か記述があるはずなのです。でも、ほとんどそういう資料の扱いが日本の研究の中で見られない。日本の近代仏教の研究の中でも見られない。

そこで、我々がやっている研究は、これは日本の学術振興会とインドのICHRという歴史研究のために支援している政府の組織団体なのですけれども、初めて日本の研究のために、特に日本の仏教研究のために助成金を出したのです。やはりそれだけ日本の仏

教を研究する価値があるのです。

この研究で、私が調査したいことは 1930 年代に日本の巡礼者がインドへやってくると、やはりイギリスがそれを監視していました。イギリスはそれをスパイ活動ではないかと監視していました。そのような資料は、例えば British library (ロンドンにある英国図書館) に保蔵されています。この日印共同研究では、我々がそのような資料を発見しようとしたのです。だから、それは全く違う観点から日本の研究をするという試みなのです。このような日本研究は、日本語の資料とか日本でしか見られない資料に頼らずに、海外の資料に基づいて日本仏教を研究しようという国際化とか学際化、さっきの論文に出てきた言葉なのですけれども、それをやろうとしているところです。

もう 1 つは日本語の問題なのですが、外国語としてインドでは日本語の人気があるのです。それは日本からいろんな企業がどんどんインドに進出していることで、結構仕事が多いから人気があるのですけれども、日本研究のための日本語力がやはり足りないのです。それで一番起こってしまう問題が、欧米の資料とか欧米の研究者の日本研究に頼ってしまうことなのです。それは、日本人の研究者による外国語での研究報告が少ないことなのですが、その結果として、欧米の日本研究に見られる偏見とか偏りがインドの研究にもあらわれてしまう。それが一番今、我々が見ているところなのです。やはりそれが日本の研究者による外国語での研究報告が重要であるということです。

もう 1 つの言いたいことは、地域研究としての日本研究についてです。地域研究として戦前では植民地の歴史とか、また、戦後になると国際協力、国際関係、地学や経済の視点からいろいろ研究があるのですけれども、問題はそこで東アジア研究といって、中国学、日本学と韓国学があるのですが、これらの学問分野の研究がそれぞれ独立的に行われてきています。つまり、1 つの研究分野の課題とか方法論について、中国をどう調査するのか、日本をどう研究するのか、日本の研究者が中国をどう研究するか、また、中国の研究者が日本をどう研究しているか、そういうところの交流があまりないのです。まだ、インドの場合は、欧米の研究者の日本研究がよく知られているのですけれども、アジアの研究者による日本研究がほとんど知られていない、それも問題です。

今、日本研究のもう 1 つの問題は、1970 年代までは日本研究がすごく盛んだったけれども、その後は中国研究と韓国研究がだんだん盛んになってきているし、日本研究の学生はそんなに減っていないけれども、最初は日本を研究して、後で中国研究に入ってしまうことがあります。このようにほかの学科との競争があることが、難しいところです。

それで、どのように日本研究を取り上げるのか。そこで最近インドでよく話されているのは、オルタナティブ・モダニティのことなのです。オルタナティブな近代化、つまり、アジアの近代化というのは、西洋の近代化と異なる現象であったということです。そこでよく事例として、インドとか日本が取り上げられています。そのために最近、日本が注目されてきている。それが、近代化やポストモダニティの研究の中で日本が取り上げられる大きな理由なのです。

文化ナショナリズムの研究があるのですけれども、そこから最近ソフトパワーの研究がすごく盛んになって、特に大衆文化の研究の中で、文化の特殊性と、その文化のグローバル化、つまり国際的にどう展開しているのか、どう受け入れられているのか、それがソフトパワーの研究の大きなところなのです。

最近になると、インドの中で、今までの仏教史研究は、経典に遡る研究がほとんどだったのですが、ソフトパワーとして仏教を利用することも探られだしています。それは海外にどう受け入れられるか、対外的にどう展開できるかということが、インドでも盛んに論じられ、それが1つの研究分野になっているのです。だから、今、1970年代の日本人論的な研究が、だんだんそういうソフトパワーの研究の中でどう入り込んでいけるかということが、もしかするとこれからのすごくおもしろい研究分野になると思います。

あまり長くないように、最後にまとめたいと思います。やはり日本学と社会科学の諸分野とをどう関係づけるのかや社会科学に日本研究がどう貢献できるのかが大きな課題なのですけれども、そこでそれぞれの分野の問題意識や議論の観点が、日本研究の場合どう受け取られるか、どう採用されるか、それが重要な課題になります。

そこから続いて、また地域研究として、今特にグローバル化の時代において、1つの国を独自の国として取り扱うことができなくなって、その国の影響がその地域にあるし、特に日本の大衆文化とかポピュラーカルチャーの影響が、東アジアとかインドとか南アジアにも見られ、逆に日本もいろんな周りの国の影響を受けているのですけれども、そういう事情の中で日本の研究がどう取り扱われるか、それも1つの課題です。

その次は、やはり語学とか言語の壁なのですけれども、日本語ができない世界の方々に、日本の研究とか、そこで議論されていることをどう伝えられるか、また、そういうダイアログがどのようにできるのか。それを我々があえてインドで意識するようになるのは、本当に人数が少ないからなのです。日本研究をしている人は5人とか6人しか集まらないように非常に人数の少ない研究分野なのです。人気があるのはあるのですけれども、もう少し幅広い研究をやらない限り生き残れないと思います。だから、日本のことばかりではなく、しかも日本の研究の中で議論されていることが、ほかの研究分野とどう接点ができるのか、それが我々が持っている一番大きなチャレンジです。

以上です。短い発表でしたが、どうもありがとうございました。



## 「自己本位」の日本文学研究のすすめ

尹相仁

◎尹 日本文学を勉強している尹相仁と申します。

私が日文研に参ったのが1994年です。初めて来ました。そのとき日文研で催された大きな会議があって、その会議に呼ばれて、まだ若い、助教授のころでしたけれども、日文研のすばらしい施設を見て驚いた覚えがあります。そのときは、大江健三郎さんのノーベル賞の受賞の知らせがあって間もなくのころで、ここで講演をしました。それ以降いろんな機会に日文研にはお世話になっておりました。もう既に30年になりましたが。

きょう私がちょっと触れる予定の作家の夏目漱石は、2017年が生誕150周年で、その前の年が死後100周年でしたね。いやあ、これはうらやましい話です。つまり、多くのひとが生誕を記念してくれて、死亡も記念してくれる。ただ、組織や機関は生誕については記念してくれるのだけれども、その組織の消滅や解散を記念することはないので、日文研もあと30年あるかどうかという悲観的な声も聞こえますが、どうか長く生き延びて、末永く日本文化研究者のために頑張っていたいだきたいと思います。

最初に私が触れなければいけないのは、きのうアリソン時田先生のご発表のときに私が質問した内容についてです。そのときはちょっと時間切れで、私の質問が途切れてしまった感じがありました。私が提起した問題は、学会のような知識社会に通用するということと、その知識社会に影響を与えること、その2つのことの意味づけをどうするかということです。では、これにちなんで、私の個人的な経験を少し述べたいと思います。

もう20数年前に韓国の慶州という古い都市で、ある学会がありました。それは韓国の学会と日本の学会が共同で会議を開いたのですが、そのとき私は発表者として何かをしゃべりました。日本人の方が多かったので、会議の言語は日本語でした。

私の発表が終わってからある韓国人研究者が手を挙げて、私の発表についてコメントをしました。内容はこうです。「あなたの発表は日本の学会でも十分通用する」。まあ、私を褒めるつもりでの発言だったのでしょうけれども、私はそれを聞いていて侮辱されたような気持でした。私はこの「通用」という言葉が持っている暴力に近い知的墮落に敏感に反応せざるを得ませんでした。「通用する」というのはメインストリームに認められるということでしょうけれども、突き詰めていくと、取り込まれるということでもあります。

私は自立した研究者であって、ただ単に誰かに認められたいがために研究するわけではないのです。できれば、通用されるよりは尊敬される研究をしたい。夏目漱石も日本の文学界に通用することを目標に作品を書いてはいなかったはずですが。やはりそういった異なる土俵を別に作るという強い志というのが必要ではないかなという考えを持っておりまして、きょうの話もそういった私の考えに基づいて展開しようと思っています。

私は夏目漱石の研究を留学の時代には熱心にしましたが、帰国してからはしばらく他のテーマに興味が移っていました。2000年代になってから、再び夏目漱石を読み始めたころ吉本隆明さんが漱石の本を出したので、それをすぐ買って読んだのですが、不要領で杜撰な内容と思わざるを得ませんでした。目新しい資料や見解も見当たりませんでした。吉本隆明という著名な評論家が晩年になって、漱石をめぐる言説体系のなかで「通用」しうることを書き並べていることに失望しました。

実を申せば、私は本当は「漱石の巨きな旅」というタイトルに魅かれてこの本を買ったわけですが、とくに「巨きな」という表現に惹かれていたと思います。しかし、読んでみて、吉本さんの語る「巨きな旅」が漱石という「巨人」の形成にどのような働きをしたかについては、ついにわかりませんでした。

吉本さんはこの本の中で「漱石神話」という言葉を使っていますが、つまるところ吉本隆明さんの本は「漱石神話」の増殖、拡大再生産に携わるという側面においてのみ、十分に「通用」しうるだろうという淋しい思いをいたしました。

それ以後、ある種の反発から夏目漱石のヨーロッパおよび満韓の旅を私なりに調べてみたいという思いが湧いてきました。夏目漱石はイギリス留学の間、小さい手帳にまめに日記をつけていました。その日記を読んでもと、夏目漱石という人がどのような経緯で脱西洋のための思想闘争を展開し、やがて小説家になったのかということが見えてくるような気がしました。

詳しく述べますと、夏目漱石という人、あのときは金之助でしたけれども、夏目金之助という人間の自己意識が崩壊して解体される過程が、このイギリス留学中の日記で見取れます。だから、吉本さんは「巨きな旅」と言ったのですが、そのような表現が成立するためには洋上の漱石の「小さな自己」をめぐる認識作用について触れることが前提となりますが、あの本にはそれについての言及は見当たりません。それから、満韓旅行記で見取れる夏目漱石は、それまで一貫して批判の眼を向けていた明治維新以降の日本の近代文明に対して、一転して肯定の見方を示しており、「巨きな旅」とは程遠い、安易な妥協をしているというふうに見受けられます。時間がないので、簡単に幾つかの事例を紹介します。夏目漱石の船には日本人は留学生が4人だけ乗ってまして、周りは全員西洋人です。夏目漱石の日記によりますと、漱石を苦しめたのは船酔いよりも多数の西洋人の存在だったのです。西洋人に囲まれて、自分が見すばらしくみえる経験をしていました。

旅が続く中、夏目漱石は東京にいる妻、鏡子にも手紙を送っているのですが、ある手紙ではこういうことを言っています。「其許（そこもと）は歯を抜きて入れ歯をなさるべく候。ただ今のままにては余り見苦しく候」、こんなことを言っているのですね。また、ほかの手紙では、髪は銀杏返しにしないで、洗い髪にしておきなさい。あとまた、船の上ですけれども、入れ歯のことをちゃんと守りなさい、つまり歯を全部抜いて入れ歯をしなさいと。

何でこんなことを言っているんでしょうか。こういった発言が出る背景は、日記をこ

まめに読んでいけばわかってくるような気がします。夏目漱石は船の上で一緒に乗っている西洋人の女性をよく見かけるのですけれども、その女性たちが、ミス・ノットを初めとして非常に美しい微笑みをいつも見せているのですね。その微笑みとともに歯列のきれいな歯も見えるわけですが、それは夏目漱石が今まで普通に思っていた、慣れてきた歯並びの日本人女性の容貌とは全然違う様子でした。

そういった歯並びがきれいな様子を夏目漱石は船の上で目撃して、自分の妻の歯並びがあまり美しくないと感じるようになるのですね。それで、入れ歯ならきれいに整列されているはずですから、「入れ歯にきなさい」と言っているわけです。

また髪の毛の場合も、西洋人たちが船の上で金髪をなびかせながら歩く姿が美しく見えたので、「洗い髪にきなさい」と言っているのです。

パリに到着してから送った手紙では、「こちらに来てみれば男女とも色白で、服装も立派で、日本人の私は黄色く見え候」、このような発言をします。

しかしながら私は今、ここにいらっしゃる井上先生も、また石川さんを見ても、どう見ても黄色く見えません。黄色く見えるはずがないです。黄色く見えると言ったのは、これは当時漱石も西洋人がつくり上げた人種観の観念の虜になっていることを意味するわけです。ですから、この過程をずっと追っていくと、夏目漱石は旅の間徹底的に西洋的な価値に取り込まれて、自分を小さく小さく、低くしていく、その過程が見えてきます。

その後、イギリスに行って憂鬱な留学生活を送るのですが、そのときはその解体された自己が少しずつ回復される過程と見ていいと思います。一遍地獄まで落ちた夏目漱石が、西洋と戦う一人の戦士として生まれ変わって日本に戻ってくるプロセスが、その日記から見て取れるのですけれども、いま述べたことについては日本の研究者からあまり聞いたことがありません。漱石のような偉大な作家となりますと、日本の学界の風土では偉大とみなされる人は、その人の能力だけでなく人格的にもそれらしくなければいけないという思い込みがあるせいなのか、夏目漱石のこういった姿はあまり伝わってきません。

つまり、夏目漱石神話をできるだけ無菌状態でつくり上げるためには、都合の悪いことは封印され隠蔽されるか、あるいは作家の本体と分断して例外化することが必要だったかもしれません。

それから夏目漱石の自己本位についてですが、夏目漱石は英文学研究をイギリス人たちがやっている仕方であることを拒みました。つまり、自己本位の実践の第一歩は、「しない」「なさらない」ことだったと言っているかもしれません。まあ、ひらたくいえば、まねしない、よけいに代弁しないということでしょう。夏目漱石は、英文学にたいしてみずから英文学そのものを信奉して、その本質にできるだけ近づこうとすることを止めて、英文学というのは日本人である自分が招いた客人のようなものだという認識に至ったように私は思います。

つまり、これは大事な考え方で、つまり外国文学というのはそれぞれの国の研究者にとってはお客であるということ。しかし実際にはその反対の現実が続いているわけです。

ね。夏目漱石も東大で英文学を勉強していた際は、英文学の金箔入りの本で埋め尽くされた書齋に呼ばれていくぶん委縮された客のような思いだったのではないでしょう。それを克服するための思想闘争がつまり自己本位の主張だと言えます。

では、自己本位という観点から、今後の日本文学研究をどうやっていくかということをちょっとのべさせていただきます。

韓国では日本文学という言葉は、中立的な意味を持ちえないのです。この日本文学というのは植民地時代には、朝鮮文学より高い権威を与えられたものでした。それは当時使われた言葉にもあらわれています。京城帝大では日本文学が「国文学」でした。朝鮮文学の場合は地方性を帯びる名の「朝鮮文学」で通しました。

そういった植民地時代の経験から日本文学という言葉は、いい意味でも悪い意味でも特殊性を帯びて使われていました。いい意味というのは、韓国で日本文学は概して人気があるという特徴を持っているということを指します。韓国では1960年代から日本文学の翻訳がされ始めたのですが、現在にいたるまで主な外国文学の一つでありつづけています。

そういった一方では、日本文学のもつ魅力、もう一方では日本文学に対するイデオロギー的な拒否感が入り混じっている、そういった意味が日本文学という言葉に付着しているのです。そこで私たち日本文学研究者としては、日本文学じゃなくて日本の文学をやるという思いで取り組まなければいけないと思っています。

ここでいう日本の文学という言葉はいままでの習わしからの断絶、あるいは転換を目指す方向性を指しているといえます。それはまず、フランスの文学、トルコの文学というふうに普通の外国文学として再定義する意志をあらわしています。再定義の方向はまずは「等身大」の日本の文学をお客として礼儀をもってお招きすることでしょう。そうするためには、日本の文学にたいする不毛な偏見を警戒していくことが大事でしょう。またその一方で日本において行われ、築かれた言説のなかで形成された漱石像というのは、決して等身大のものとはいえず、細心の注意が必要といえます。こういった日本文学に対する姿勢の変化が今行われている、そういった時代に差しかかっていると思います。

もうひとつ付け加えますと、いま私のいう「日本の文学」ということばにある助詞の「の」は所有を意味してはならないと申したいと思います。普通、多くの日本人の文学研究者たちは、日本文学は当然日本に属している、自然的に所有権が与えられたものであると認識しているようです。

その所有権について少し補足します。いま村上春樹の場合は、村上は日本の作家であるとか日本文学であるとはっきり言えないような状況といえます。つまり、世界で流通しているハルキ・ムラカミは日本語の作品が英語翻訳になる過程で編集者や訳者によって西洋の美的規範や文化的慣習との調整を経たものなので、日本語のテキストのみではハルキ・ムラカミは成り立たなくなっています。また、研究のほうでも村上春樹についての評論や論文の数は、英語で書かれたものが日本語で書かれたものよりはるかに多い。

とくにアメリカの大学から出た村上春樹の博士論文は、日本の何倍もあります。韓国でも村上春樹の博士論文が多く出ています。

それから、多和田葉子という作家。この作家は日本ではほとんど研究されてないですけども、ドイツやアメリカではたくさんの論文が出ています。本も研究書が何冊も出ています。ですから、多和田葉子を調べるためには英語やドイツ語を読まなければいけないというのが現実です。日本語で書かれているものもあるのですが、論点が異なっているので、海外の研究を積極的に取り入れることは避けられないといえます。

それから、例えば深沢七郎という作家がいます。その人の問題になった「風流夢譚」という作品が最近インターネットで読めるようになりましたが、授業で使おうと思い、関連する論文を探しましたが、日本語の論文は見当たりませんで、結局ただ一つみつけたのがエール大学のジョン・トリート教授が英語で書いたものでした。

このような政治的な環境、あるいは国際化という環境の変化により、日本の所有する文学ではなくて共有資産としての日本の文学とどうやって向き合うかということを実際に考えなければならない時代になったと思っています。

私はこの会議の冒頭に井上章一先生が提起した問題意識を全面的に共有したいと思います。日本文学もゆくゆくは、例えばインド文学研究はインド人もやるしアメリカ人もやるしドイツ人もやる。あるいは韓国人もやる。そういった幾つかの地域や国が研究のハブとなって、そのハブがあるいは国籍を異にする人たちが論争したりするような状態になればいいなと思っています。

では、これで終わります。ありがとうございました。



## 要旨集



## 新しい問題意識の共有へ

ーフランスにおける日本（文化）史研究の近況を一例にして

マティアス・ハイエク

2018年は、祝い事や記念の非常に多い1年であった。開国に伴って日仏交流の開始、明治維新、第一世界大戦の終戦といった歴史上の重要な出来事の記憶を蘇らせ、現在の世界情勢と一世紀以上前の状況との類似点、また相違点について考えさせられる。

そんな中で、日文研創立から30年経ったが、世界的な政治経済の状況が大きく変動し、それにつれて日本研究そのものも多大な変化を見てきたように思われる。

私は日文研創立当初は若年でこの変化を振り返って評価するのは困難ではあるが、21世紀の日本研究、とりわけ自分が関わりを持つフランスにおける日本史学（文化史・思想史・科学史なども含めて）の現状を紹介するとともに、「海外で日本を研究する」という課題と、そのような研究の展望と日文研の役割について思考を巡らしてみたい。まず、フランスの学界における「文明研究」と「地域研究」(area studies)という枠組みの問題に触れ、日本の研究の「紹介者」と日本研究への「貢献者」という、海外の日本研究者が持つ二面性について言及する。自国での研究活動と日本での研究活動は必然的に違っており、また各方面においてもいくつかの顔を持たざるを得ない。その中であって問われるのは自分が属する「学問分野」(ディシプリン)で、分野によっても状況が大きく異なっているように思われる。

近年、フランスの日本史学、特に近世史においては新しい動向が見えている。一時期に衰退したように見える比較研究の可能性が再度芽生えそうで、フランス近世史学界において日本近世の歴史への興味が上向する。また、我々日本を研究する者たちは技術史、建築史、書物史、商売史などの、広い意味での、地域と時代の制限を超えた「文化史」においても居場所を確保しつつある。これらの動向は、ヨーロッパ中心の普遍主義とポストコロニアルな相対主義（文化主義）を逸脱した新しい認識論の発見にも繋がっていくと思われる。

日文研は当初より、分野の縛りを超えて最先端で学際的な研究を世界に発信し、このような動きの支えとなってきたが、今後は他国の日本研究の支援のみならず、分野と地域を横断させた研究における問題意識の共有に如何に貢献できるかは重大な課題となるであろう。

## 日本研究の国際化及び学際化にむけて

ファン・ハイ・リン

日本史を含めた歴史学は人文学の一つのディシプリンであることはいうまでもない。一方、日本史はインターディシプリンである日本研究の一部ともいえよう。日本史を研究する日本人は歴史学を目指す意識が強いようであるが、日本史を研究する外国人は、自分の研究が歴史学に属するか、日本研究に属するかと問われる時に迷うことがあるだろう。グローバル化が進む21世紀においては、ディシプリンとインターディシプリンの境界線があいまいになり、どんな分野でも研究の実効性が重視され、国際的な視野及び学際的な方法が求められるようになってきたと言えよう。

本稿は「日本研究の国際化及び学際化にむけて」と題したが、江戸時代の貿易史から「象の貿易」と「松阪縞織のルーツ」という具体的な事例を挙げながら、資料源の国際化と研究方法の学際化に関して論じてみたい。筆者は近世における日越間の象貿易、とりわけベトナムへの象の要請、売買価格、日本までの運搬などに関して2008年から調べてきたが、ここで日本の資料の再考と、ベトナムや西洋の資料とのクロスチェックという研究の手がかりをまとめたい。一方で、2013年から松阪縞織のルーツがベトナムであるかどうかに関しても研究に着手し始めているが、歴史的記録が少ないため、文化人類学的手法を借り研究を進めることを試みている。現時点では、木綿、藍染、縦縞という3つのキーポイントで松阪縞とベトナムの中部に住んでいるコテウ族の織物の関連性を求めている。この5年間の研究で明らかになったことと、今後の課題を述べたい。そして、本稿の事例を通じ、21世紀における日本研究の日本国外への発信継続と共に、国内への発信の必要性も考えることにしたい。

## 世界の中の日本古典文学—翻訳と研究方法の問題点から

アンダソヴァ・マラル

日本古典文学の作品は世界の様々な言語に翻訳され、研究されてきている。こうした作品はその成立した時代の文体の特徴を有しており、他国の言語で伝達することとなると、多くの問題が生じる。例えば、『古事記』、『万葉集』、『源氏物語』の文体は主語を明示しないという特徴を有している。さらに、神や天皇、目上の存在に対してその行為を示すために敬語表現が用いられる。これらの文体の特徴は言語構造や表現方法が異なる言語にどのように翻訳されるのか、文体の違いから導き出される文化的な相違や研究上の課題について考察を試みたい。本稿において『古事記』および『源氏物語』の用例を取り上げ、それらの英語およびロシア語への翻訳を分析する。

本稿のもう一つの課題として日本の文学作品が世界の他の国へ紹介されることにおいて生じる問題を取り上げたい。西洋の文化において文学をそれぞれの時代の特徴を表すものとして捉え、発展段階的に捉える傾向が強いように考えられる。例えば、ロシア語圏において古代はオーラル文学あるいはフォークロアとして認識、中世は宗教が大きな影響を及ぼす時代、近現代はモダニズムの時代として捉えられる。文学の諸ジャンルはそうした中でそれぞれの位置づけを有している。日本の古典文学の作品が他国へ紹介されるに際して、すでにその文化圏において形成されている文学ジャンルに当てはめられて紹介され、あるいは、すでに形成されている概念で説明される。そうした中でどのような研究上の問題が生じるのか、ロシア語圏の研究の側から考察を試みたい。このように日本の古典文学の作品の文体・翻訳および受容・研究方法という課題を取り上げ、世界の中の日本古典文学研究について考察を行いたいのである。

# 韓国における日本研究の現状と課題—日文研創立 30 周年に寄せて—

李康民

与えられた課題は、韓国における日本研究の現状を報告し、国際日本文化研究センター（以下、日文研）の活動について提言を行うということである。ここでは、まず、韓国における日本研究の現状、そして日本古典文学の翻訳状況を概括し、次に日文研への提言を述べていきたい。

## 1. 韓国における日本研究の現状

— 大学及び大学院教育：韓国の大学教育において初めて日本関連学科が設けられたのは 1961 年のことである。1965 年の韓日国交樹立を見込み、その 4 年前の時点で外国語大学に日本語科が開設された。以後、1980 年代に至り、多くの大学で日本関連学科を新しく採択し、一時期は 90 以上を数えた。現在は、全国の 200 を数える大学（4 年制）の中で、83 の大学で日本関連学科が運営されている。大学院の場合は、主に 1990 年代以降、学科開設が増えているが、中でも博士課程を設置しているところは、現在 22 となっている。

— 学会：1973 年 2 月 1 日に韓国最初の日本関連学会として韓国日本学会が結成され、同 8 月には学会の学術誌として『日本学報』が創刊された。日本関連学会は、1990 年代に入り急速に数が増え、今は 22 の学会が活動を続けている。

— 研究所：現在各大学に附設されている日本関連研究所は 12 を数える。中でも、2000 年代に入り、人文学研究所を育成するための韓国政府の財政投入によって安定した研究基盤を構築した研究所が現れ、研究所が占める日本研究の寄与度は一層高くなっている。

— 転換期を迎えた研究環境：2010 年代に入り、韓国の日本研究は一つの転換期を迎えている。記録的な少子化による高卒人口の減少がその原因である。特に 2023 年には大学入学定員が高卒人口を 16 万人上回ることが予想され、韓国の各大学は、定員調整と構造改革を本格的に進めており、今後、人文社会系専門を中心に学科の統廃合が行われることが予測されている。実際、日本関連学科の中でも最近 3 年間に、学科単位を専攻（トラック）単位に改編されたケースや、学科を廃止し教養学部統合する事例が増えている。

## 2. 日本古典文学の研究状況

— 研究者：大学の日本関連学科や研究所に属し、専任教員として日本研究に携わっている研究者の数は 521 人を数える。このうち、韓国人教員は 415 人、日本人教員は

106 人の分布を示す。415 人の韓国人教員の中、日本語学専攻者が 178 人、日本古典文学専攻者は 56 人に至る。古典文学研究者に限って言えば、大学専任 56 人に専門大学教員や非常勤講師を合わせると、大略 75 人前後の研究者を確認できるのではないかと思う。研究者の性比は、男性 29 人、女性 46 人前後の構成になっている。

一 翻訳：韓国で翻訳された日本古典文学の作品は 70 種を超えている。中でも、『源氏物語』は 1973 年から、『古事記』は 1987 年から、それぞれ異なる翻訳者によって 10 回以上重ねて翻訳された。この 2 作品の他に、『万葉集』『松尾芭蕉俳句集』『徒然草』なども比較的翻訳回数の多い作品として紹介できる。また、最近の新しい傾向として、『源氏物語』や『古事記』、日本の昔話を題材にした絵本が多く出版され、日本古典の大衆化を先導していることが報告されている。

### 3. 提言

日文研は、創立されて以来 30 年間、日本研究における「一国中心主義」を止揚し、グローバルな複眼的視座の下に、国際的な比較や関連性を重視し、新しい研究方向を提示してきた。言わば日本研究の前衛隊としての役割を果たしてきたと思う。そのような研究姿勢は、韓国の日本研究者を刺激し、日本研究の多様化、研究領域の拡大に大きく寄与してきた。そしてこれまで集積された遺産を活かしさらなる発展を図るためには、何より新しい「日本の魅力」を発掘していかなければならない。そしてその「日本の魅力」を国際社会につないでいくためには、一層の海外発信力の強化が必要であろう。海外研究者や海外研究機関との連携を深め、海外研究者と共有できるような研究テーマの開発、共有できる活動空間の構築のために知恵を絞っていただきたい。また、日文研が国内外の日本研究者にとって魅力的な組織になっていただかなければならない。私が留学していた 1980 年代の日本社会は、積極的に外へ出ていく動く社会であった。それが今は、内向きで動かない社会になっているような気がする。このような雰囲気克服し、外へ向けて積極的に出ていく日文研の変わらない姿を期待したい。最後に、韓国の場合、日本研究の片一方の中心軸をなしている日本語学研究者との接触面をどのように持つべきかということも今後の課題として残るだろう。

## 日本音楽の研究の内と外

時田アリソン

日本音楽研究で起こりうるコミュニケーションについて考える。

まず「日本音楽」の定義。日本人にとって「音楽」はだいたい西洋音楽だが、外からいけば日本の音楽は前近代に発達した「日本伝統音楽」となる。

海外の日本音楽研究は民族音楽学になるが、日本では「民族音楽学」は日本音楽を含まない。日本の日本音楽研究は「邦楽」の研究であり、大学では民族音楽学と同じく「楽理科」で行われる。「邦楽」研究では音を中心とした研究より、資料の発見、記録、解説、翻刻が中心である。

日本研究の一部である日本音楽の研究にはもちろん、日本語の習得が基本条件になる。日本音楽の「音」に魅せられても、録音だけでは研究できない。楽譜や歌詞、先行研究を読むため特殊な日本語を読み、お稽古で師匠に師事し、学会で研究発表を聞き、日本人学生と同じ授業やゼミに出て、課題をこなさなければならない。外から来た人は内の人と並ぶ、いや、むしろ内の人にならないといけない。外からの視野は通用しないかもしれないので、内側のアプローチを身につけようとするが、これは民族音楽学、文化人類学のフィールドワークを行うことと同じである。

長い年月をへて日本語能力が身につくが、それでもコミュニケーションの問題は続く。社会言語的ルール、お稽古での礼儀作法など社会文化的な能力も身につけなければならない。そして待っているのは、学問的な期待の「食い違い」である。自分がしようとしている研究を分かってもらえない行き詰まり。

日本の音楽の世界は世界への発信が不十分で、外国人であることは有利な場合がある。英語などができるから、日本人の研究を紹介することができる。

自分の研究を日本で認めてもらうために大事なことは、日本語で論文を書くことである。しかし、反応が得られることはまずないし、ようやく手にした研究結果は日本人には通用しない、ということになりがちである。

それでも、外国人の研究が日本音楽の研究に大きな影響を与えた例がある。パラダイムシフトとともいえる、ローレンス・ピッケンの雅楽研究とケネス・バトラーの語り物研究の二つの事例を紹介する。

## 共同研究の力点を考える

### 共同研究「日本の舞台芸術における身体—死と生、人形と人工体」

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ

2015年9月1日～2016年8月31日の1年間、国際日本文化研究センターで、私が代表となって共同研究『日本の舞台芸術における身体—死と生、人形と人工体』を行った。23名の共同研究員（それに2、3名の院生など）の参加により大変充実した研究活動ができた。本発表では、そのような体験に基づき、日文研でのこの共同研究の実際と力点について語ってみたい。

研究テーマは幅広く、一人の力で取り組むことができないものだが、多数の各分野の専門家の協力によって検討すれば、多大な成果が期待できる刺激的な挑戦であった。そこに共同研究の一番のメリットがある。共同研究員は日本全国からの研究者と4名の外国の研究員で、舞台芸術をめぐる各分野の専門家であったが、能役者として実演にかかわっている研究員も、ダンスの演出などに携わる研究員も、音楽の専門家も、また日本文化だけではなくイタリア、スペイン、フランス、イギリスなど、ヨーロッパの文化と舞台芸術を専門としている研究者たちも参加した。

舞台芸術を中心に日本文化・思想における身体観を演劇史、美学、比較文化、宗教史、ダンス研究など、さまざま観点から検討した充実した討論の場であった。その成果としての報告書は、民俗芸能、沖縄舞踊、俄、能、歌舞伎、芝居絵、人形浄瑠璃、からくり人形、近代演劇、舞踊、ダンス、舞踏などにおける「身体」という課題を扱った各分野の専門家（共同研究員）による論文を集めたものである。

私が提案したテーマ自体はけっして新鮮味のある課題ではない。方法の面でも、独創的な共同研究とは言えないが、国際的、総合的なひろがりをもって、舞台芸術の本質に迫るテーマと思われる。なお、触れていない課題、扱われていない問題点がたくさん残っているが、事実、このような形で総合的に演劇専門家や一般の読者に「身体」というテーマをいろいろな角度から、多種多様な方法で取り扱い紹介するのは日本でも初めてのようである。

# 新しい「世界文学」を構築する試み

—堀田善衛の『歯車』を中心に—

王中忱

中国の大学における日本文学に関する講義はおもに日文科と中文科に分けられて行っている。後者の場合、殆ど比較文学或いは「世界文学」という授業科目に収められるため、日本文学は当然、「世界文学」の一環として扱われている。この文脈の中で、堀田善衛の小説『歯車』は取り上げるべき作品だと提言したい。というのはこの小説は国共内戦期の中国を題材とするだけでなく、中国現代文学の代表的な作家である茅盾の長編小説『腐蝕』と深く関わっており、しかも堀田本人が新しい「世界文学」の構図を意識しながら書かれた実験的な作品だからである。

ところが、近年までの『歯車』を巡っての論考を調べてみると、多くはこの小説が内戦状態の中国をとらえた題材及び「政治と人間」という主題設定に集中しており、『歯車』と『腐蝕』との関連性に関心を寄せなかったようである。先行研究のこのような状況を踏まえて、本稿は『歯車』と『腐蝕』との間テキスト性を確認しながら、「西洋かぶれの文学青年」を自認する堀田善衛が茅盾を始めとする同時代の中国文学に目を開いた意味を分析する。その上で、堀田は単に茅盾の「小説の構想」を自らの作品に取り入れただけではなく、その構想を書き換える作業によって、新たな語りの構造を作り出そうとすることを明らかにする。最後に、『歯車』を『腐蝕』の続編またはパロディとして戦後中国文学の系譜に置き直して読むことを通して、西欧中心的な「世界文学」の構図から脱する新しい「世界文学」を構築する可能性と困難性を検討する。

キーワード：堀田善衛 『歯車』 茅盾 『腐蝕』 世界文学

## 世界の中の日本研究 —批判的提言を求めて— オーストラリアの側面から

バーバラ・ハートリー

オーストラリア代表者として、私の知っている限りで、オーストラリアでの日本研究の事情などを発表させていただきます。本論の構成は、以下のとおりです。

第一節はオーストラリアでの日本研究の歴史を簡単に説明し、さまざまな研究分野の経緯も検討してみます。その上、1920・30年代のシドニー大学で日本語学科長として大きな影響を与えたA.L. サドラー教授をはじめ、さまざまな時代の要人の貢献も説明します。

第二節は、オーストラリアで「言語ポリシー」が連邦政府（国の政府）に導入された1980年代のいわゆる「日本語教育の津波」の原因を少し考えて、その「津波」の結果が日本研究にどのような影響を与えたか、探ります。12、3年前に日本の国際交流基金の代表者が「国際交流基金がこれまでオーストラリアで使ってきたお金はちょっと無駄遣いだった」というコメントをしたように、その「津波」の結果はあいまいでした。

第三節は、現在の日本研究の事情を考えてみます。よく言われているのは、すべての分野において、成功の「リトマス試験」は大学院生の人数です。オーストラリアで、院生の人数はどのぐらいか、どういう研究をしているのか、といったことを考え、またその院生が卒業してからどういう道が歩めるか、現在の就職環境はどうか、ということも考えてみます。そして、この十年ぐらい、人文学の研究や勉強、さらに存在を絶滅させようとする新自由主義の黒い雲が押し寄せてきています。その結果、オーストラリアの各大学で起こったリストラが日本研究にどのような影響をあたえたかを調査しています。（これは、独立したアジア研究学部がいいのか、あるいはすでにある学部にはめ込んだ方がいいのか、という討論と無関係ではないように思われます。）

第四節は、オーストラリアの日本研究者はどのような問題に立ち向かわなければならないのか、またその問題にはどのような原因があるのか、どのように解決できるのか、といった話題を考えてみます。その中にすでに述べたかもしれませんが、この10年間のアジア研究に対する連邦政府のポリシーの変遷も説明してみますし、（英語から直訳されていた）いわゆる「距離の専制」の問題にも触れます。そして、効果的に日本研究ができるためにはどの程度の日本語能力が必要か、という異論の多い問題も浮かび上がらせます。そして、日本研究者を長期にわたり、サポートしてくださっている国際交流基金のシドニー事務所やオーストラリア国立図書館のアジア部の職員の方々にもお礼を申し上げたいと思います。

最後に一番重要なことかと思いますが、将来はオーストラリアの側面からではなくて、世界中からも日本研究はどのように発展すればいいのか、またどのようにすれば国際社会に積極的な印象が残せるのか、といった話題も考察してみたいと思います。テッサ・

モリス＝スズキ氏や酒井直樹氏の考えに基づいて、近い将来日本研究は複雑な歴史や困難に満ちている「地域研究」から、「日本」という概念を包括的に問題化できる「トランスナショナル研究」に変換できたら、非常に価値ある業績を残すことができるのではないのでしょうか。このシンポジウムで、そのような第一歩が踏み出せれば、多くの人に感謝されるのではないのでしょうか。

## 日文研と私—「日本人論」から「日本から見た世界」の研究へ—

フレデリック・ディキンソン

日文研が設立されてからの30年間に、日本研究が一変したのはいうまでもない。そして、その変化は世界における日本の地位に直接影響されてきたというのも確かである。設立時の1987年は戦後日本の全盛期で、日本の繁栄の根本を探る「日本人論」が盛んだった時代で、日文研の研究者も、特に人類学や考古学をもって、日本人の独特性を強調する論議に大きく貢献した。しかし、時が変わり、バブルが弾けると日本文化を賞賛するエネルギーも段々軽減し、日文研では、徐々に文化の研究から政治学の研究へと手を広げることになる。アメリカにおいては1980年代まで続いてきた近代化論者の研究が段々とポスト近代化論の世代にバトンタッチされ、楽観論からかなりの悲観論へと一変している。そして、皮肉なことに、日文研がちょうど政治学へと手を広げる時期にアメリカにおいては日本関係の政治学が急激に人気を失っている。

一方に政治学が繁栄し始め、他方に同じ政治学が耐えていくことに契機があるとでも言えよう。しかし、その契機をうまく掴むにはアメリカの歴史学研究の最近の傾向に手がかりを得るのも良いかと思われる。今のアメリカにおける歴史学研究の大流行は「グローバル」な分析である。「グローバル」の定義は色々あるが、日本がもう世界の頂点から降りてきた今となっては、日本の独特性を強調するよりは、より広い世界に通じる日本近代史や政治学を追求した方が日文研、そして、日本の将来にとっても得策ではないかと思われる。

## 日本研究グローバル化の試み —日中戦争史の共同研究を中心に

黄自進

日中戦争は、両国間の近代史における最大の不幸であり、もっとも暗い過去である。戦争による日中間の相互作用を主軸としてこの暗い過去を回顧し、その実態を明らかにするとともに、戦争がその後、両国の歴史観の発展にいかなる影響を与えてきたのかを検討することが、筆者の願いである。

日中戦争を巡る両国の歴史認識には「非対称」な側面がある。日本側にとっては、日中戦争とは単に国家間の軍事的紛争に過ぎなかった。他方、中国側にとっては、伝統社会における旧秩序の全面的破壊に加えて、物理的・心理的にも多大な傷跡を残すものであった。筆者は、日中戦争における「非対称」な諸側面（国家対国家、国家対民衆、民衆対民衆）を明らかにし、戦後の日中関係の原点を考察したうえで、その分析を通して日中間の歴史認識問題の和解に貢献することを目指す。

2014年6月から2015年5月にかけて、国際日本文化研究センター（日文研）に外国人研究員として招聘された際、筆者は「日本の軍事戦略と東アジア社会—日中戦争期を中心として」と題する研究会を開催した。筆者が京都を去った後、同共同研究は、台湾の蔣経国基金会の後援のもと台湾・台北の中央研究院近代史研究所（以下、近史所と略す）に拠点を移し、「和解への道：日中戦争の再検討」と改題して、2015年9月から2017年9月までの3年間に亘る研究プロジェクトとして再展開された。

国際的な視野の下で日中戦争史の研究を推進してきた効果は、いかほどのものであっただろうか。とりわけこのような枠組みでの共同研究に、いかなる意義を見出せるだろうか。以上の観点より、本論文は、京都・日文研での共同研究及び台北での継続事業の経過を具体的事例として検証する。

## 朱舜水の「拜官不就」と「明徴君」の称号

韓東育

明朝の遺臣朱舜水は、「明清鼎革」前後で十二回「官を拝命して就か」なかったが、にもかかわらず「明の徴君」の称号を捨てなかったという経歴があった。この経歴は、彼に死に至るまで怠らなかった「復明」の職責とひたすら名実の符合することを求めた人柄への標準とは、矛盾した論理が発生した。本文では、この矛盾は彼の晩明政治の無法に対する軽々しい同意と清朝文化は決して認め難いという意識に基づき、また彼が直面しなければならなかった生存の危険さに由来すると考える。ただ、これは彼に苦難と同時に、幸運をももたらしたのである。しかし、朱氏の明清双方に対する拒絶は日本側の「中朝事実」の夢想と「華夷変態」の主張に迎合するための行動とは限らないとしても、「甲午戦争」前後の日本では上述の傾向を持つ世論が大和政治を拡張するのに利用され、それ以来、かえって「明徴君」の称号を使うのはもはや単純ではなくなったのであった。

【キーワード】 朱舜水 拜官不就 明徴君 討清檄文

## 日本研究と社会科学—インドにおける日本研究の現状から

ランジャナ・ムコパディヤヤー

インドの日本研究には二つの流れがある。一つは、地域研究の一つの分野として日本の政治、経済、社会、文化などについての研究である。東アジアの研究の一環として日本研究が位置づけられていることもある。もう一つは、外国語としての日本語および日本文学の研究である。前者の場合、社会科学の諸学問分野から日本研究を行うことである。後者の場合、日本語の学習から日本について関心をもち、日本研究に取り組むことである。その場合、主に日本文学や日本文化についての研究が行われている。

地域研究として日本の研究に取り組んでいる研究者らは、日本の社会、政治、経済や国際関係などについての研究をそれぞれの専門分野（社会学、政治学、経済学など）の観点から行うのは当然のことである。しかし、第二次世界戦争後、日本および欧米の研究者らによって展開された日本研究における一つの有力な学説は「日本人論」であった。つまり、日本は独特な国であり、その社会、文化的様相や経済発展はユニークな現象である。そのために、日本の社会現象は一般の社会科学の観点から理解しがたいことであるということが主張されてきた。そのために、日本学は、専門分野として独自の発展を成し遂げた一方、ほかの地域研究や社会科学の諸分野から孤立されてしまったこともある。これは、インドでは、日本研究者が少ないことの一つの理由でもある。インドの場合、政治学、経済学、社会学などの専門分野をベースとして日本研究に着手するケースが多いのである。研究者らの日本への眼差しはそれぞれの研究分野の課題や問題意識から生じるものである。つまり、地域研究として日本の研究を取り上げる場合、日本学と社会諸科学との繋がりが主要なことである。日本学を社会科学の一つの専門分野としてどう取り上げるのか。そして、日本研究は社会諸科学の発展に如何に貢献できるのかということが今後の課題である。

また、グローバル化の時代において一つの国の研究をその地域の他の国々の研究から切り離して行うことはできない。日本の研究をその地域の研究、つまり東アジアやアジア研究においてどう位置づけるべきなのかということも一つの課題である。

## 「自己本位」の日本文学研究のすすめ

尹相仁

夏目漱石は英文学に騙されているのではないかという不安と格闘した末に、「自己本位」という脱植民のイデオロギーを標榜した。彼の英文学研究書である『文学論』（1906）は、イギリスにおける英国文学研究への批判的な距離を徹底的に確保しようとした記念すべき戦果でもあった。

こうした議論を進めていくと、韓国の日本文学研究が置かれた袋小路的な状況の根源は、自ずと見えてくるような気がする。それは何よりも、外国文学としての日本文学という「外部」を見据える「自己」の視線の有無ではないだろうか。要するに、日本における日本文学研究の方向や慣習をほとんどそのまま持ち帰って、研究と教育に携わるとした場合、そこに外国文学者としての「自己」の自覚や実践があるはずがない。しかし「日本文学研究」という馴れ合いの「領土」への同和によりもたされるものは、「二番煎じ」という不名誉と韓国と日本の両方の学問共同体からの孤立であろう。

解放後、何もない荒蕪地に「日本文学研究」という領土を築くための過程において、韓国の日本文学研究者たちにとって「何をなすべきか」という自問は、文明開化期の啓蒙家たちの近代化（西洋化）理念に等しいものであったのではなからうか。韓国の日本文学研究者としての使命感と自負心に駆られ、本家本元の核心に少しでも近づこうとした素直な意志たちを尊重しないわけにはいかない。成長期には、「栄養」になるものなら何でも食べるに決まっているからである。しかし成長期を経て成熟の段階に進むために、同じプロセスが必要なわけではあるまい。むしろ、成熟のためには「何をなすべきか」という単線的な思考よりは、「何をなさざるべきか」という疑いと深慮の姿勢が求められよう。

たとえば、教科書の定番になっている夏目漱石は「国文学」という国民文化の花形のような存在であるが、ここで真摯に議論しなければならないのは、「日本」という共同体の価値に縫い目なく奉仕するのは夏目漱石なのか、あるいは夏目漱石についての「言説」なのか、という問題であろう。滅菌状態で作り上げられた漱石神話は何のために存在するのか。祭られる作品、記念される作家は文学のための望ましい在り方なのか。自己本位は「なさざる」ことから手に入れられるということを漱石から学んだ者として、自己本位の日本文学研究の可能性を探ってみたい。



# 世界のなかの国際日本研究を再考する

## —国際日本文化研究センター創立 30 周年記念シンポジウム 「世界のなかの日本研究 批判的提言を求めて」の反省から

稲賀繁美

### 総括討議から

#### 制度的状況

創立 30 周年を迎えた国際日本文化研究センター（通称「日文研」）だが、その将来は大きな岐路に直面している。任務のうえでは、一方では監督官庁や上部構造をなす法人機構からの助言のもと、国内の「国際日本」研究・教育機関を束ねるコンソーシアム組織の運営に取り組み、他方では国際的な規模で日本研究のハブ機能を完備遂行することが要請されている。さらに経営面では、国家が直面する財政破綻を背景に、期間限定の獲得型のプロジェクト予算によりこれらの新たな任務を遂行すべし、と要請されている。創設当初の 2 本軸であった国際的な「共同研究」と「研究協力」の維持継続だけでは、もはや機関の存続は許されない。加えて国内学会や学術団体の問題関心に沿い、その意向を反映した「公募型」研究活動の推進を要請されている。さらに、日本の「国立」大学法人すべてに当て嵌める事態として、片や次々と競争資金を獲得して休みなく「機能強化」を進めなければならないが、片や（こちらが原因だが）財政難ゆえに運営費交付金はこの 20 年にわたり毎年 1～1.6%減額され続け、もはや構成員の減員なくしては予算の逼迫に対応できない状況に追い込まれている。職員の非常勤化や研究者の処遇劣化（売り手市場下にもかかわらず、任期付き教員への依存が高率化し、予算難に伴う事実上の定数削減と後任人事凍結が日常化している）による体力低下のなかで煩瑣な業務拡大・機能強化を進める曲藝が、「働き方改革」法令化の環境下で求められている。国家非常時の無理難題に対処し兼ねる法人・機関は廃絶に瀕している。

元来、日文研は、国内における日本文化研究を「国史」「国文学」「国語学」といった内側に閉じた「国学」的枠組みから解放し、海外の日本研究者との交流による相互理解の回路を確保し、新たな視野を模索できる国際的な「共同研究」「研究協力」体制を確立すること目的として創設された。1980 年代、冷戦末期のバブル好景気に乗じた時節柄、国威発揚の国策機関と誤認され、蔭口も叩かれたが、そうした悪評はようやく払拭された。その背景には、教授定数 15 名（発足時）の弱小機関にして、毎年平均それと同数の 15 名を数える海外からの客員公募を、特定の国籍に偏ることなく実現し、さらにこれと匹敵する数の来訪研究員をも世界各地から受け入れる研究体制を、30 年に渡り維持発展してきた実績がある。だが霞が関や永田町では、日文研が属する上部法人たる人間文化研究機構ともども、その存在はまったく認知されておらず、創設時に関与した為政者や官僚、創設時に錚々たる世評を得ていた著名研究者の退場とともに、日文研の神話時代、英雄時代も、今や終焉を迎えている。卓越した個人技の持ち主にはなお恵まれ

ているが、もはやそれだけでは組織維持は儘ならない。

## 研究主体の国籍・文化的背景

国際的な日本研究とは、なにも日本の学会で評価される業績をあげることではあるまい。むしろ日本国内の日本専門家には期待できない着眼や論点を提起し、日本研究を日本という国籍から解放することに、国際日本研究の意義もあるはずだ。国内と国外の視点の交錯による学術の相互刷新と切磋琢磨とが、日本学の国際化、さらには学術の国際的連携には不可欠のはずだ。これは尹相仁さんから提起された論点である。特定の学会で認知されることとは、その学会の流儀に染まり、そこでの慣習に同化することに等しい。それはそれで結構かも知れず、学術賞などを授与されるのは名誉ではあろう。だが、日本国内市場で認知されることが自己目的化してしまえば、それはもはや国際的という形容詞のついた日本研究とは無縁である。かといって「地元」の学会でハナから相手にされないのでは、学術成果としても認証されないことになる。この発言は重い。サントリー学芸賞受賞者であり、日本研究が長らく不在だったソウル国立大学初代の日本研究学科主任たる尹さんの発言だからである。

日本の学会の体質を大雑把に括ってみると、一方では依然として本場・海外の「国際学会」での認知を希求する他者志向が根強い。自然科学の世界では『サイエンス』や『ネイチャー』など英語圏の権威ある学術誌への論文掲載ばかりが究極の目標となり、社会科学や人文学の世界でも、イギリス、フランスないしはドイツなどの留学先の、いわば「宗主国」で相手側に認められ、学者としての市民権を獲得することが、日本帰朝者の名誉となる。ノーベル賞候補群やオリンピック熱中症が、そうした相手の文化規範への依存傾向の典型をなす。

ところがこれとは対照的に、日本を対象とする学問分野となると、とたんに外来者を外様扱いする閉鎖性が露呈する。日本語はガイジンには分からない、日本文化の粋は日本人にしか理解できない式の、相も変らぬ文化的国粋主義・排外主義である。オーストラリアから来日し日本の伝統音楽研究を志した、アリソン・トキタさんの事例は、痛切な教訓に満ちていよう。理論先行の欧米学術と、文献研究や翻刻に傾注する日本の学会。日本でのお稽古事について回る煩瑣な社会慣習や困難な儀礼への習熟。そして部外者に閉じた体質。現場で通用する奏法に関する用語の英米学術用語への翻訳の不可能性。欧米側の学会からすれば「民族音楽」とは非西欧音楽を対象として「地域研究」に属するが、これは日本側の邦楽研究という視座とは背馳する。「語り物」というジャンルひとつ、日本の音楽研究者と『平家物語』などを専攻する文学研究者との間では、近年にいたるまで共通理解が乏しかった。それを乗り越えて、日本の学会や伝統保存、無形文化財行政の現場に、外からの介入ならではの影響を行使するに足る研究実績を築くには、研究者の生涯を費やし、実存を託す賭けが不可欠となる。地元の実践者や研究者は、そうとは知らず、競馬馬のプリンカーのようなものを装着し、無意識のまま視野狭窄に陥っている。そうした「目隠し」を取り除くことが、外国研究者の日本研究への寄与ではない

か。アリソン・トキタさんのこの比喩は、それ自体啓発的である。

## 「日本人論」の蹉跎

対欧米劣等感と日本領土内での内弁慶—これら両者の癒着から生まれたのが、例えば1980年代欧米で批判を蒙った日本人論だった。これを、日本側の増長した愛国心の発露として批判する傾向が顕著だったが、これはいささか短絡かつ筋違いだったようにも見受けられる。たしかにそこには、欧米「先進」文化圏に対する日本側の劣等感とも裏腹な、唯我独尊の居直りが顕著である。だが幼稚な日本特殊論が、北米や西欧をモデル視した「普遍」への憧れと疎外感の裏返しに他ならぬことも露見している。遡ればキリスト教神学から普遍性獲得の様々な武器を仕入れ、それでもって日本の神道を、アミノミナカヌシノカミを中心に体系化し、唯一絶対神を奉じる一神教に遜色ない教義へと改鑄した平田篤胤がその先祖だろう。

イギリス留学で本場の英文学に接した夏目漱石は、極東出身者の劣等感を払拭すべく、その晩年に「自己本位」を唱えた。ちなみに現代中国語では *appropriation* の翻訳にしばしば「本位化」が充てられる。北米の *Japanese Studies* も中国の日本研究も「本位化」は国是であって、すでに北米ではこの半世紀、中国でもここ30年、本国・日本の学術とは作法においても流儀においても、おおきな径庭を呈するに至っている。それはそれで慶賀すべき事態だが、かといって日本側の学者と非日本人学者の両者が、互いに相手の業績を等閑視したり、貶したりし始めれば、そこにはもはや学術交流は望めまい。だが、こと日本文化の精髓が対象となると、日本側専門家は、非日本人による業績を容易には評価しない。表向きの敬遠の蔭で、学問的意義を否定したりする。そこには日本を専門とする日本側研究者の、自らに閉じ籠り勝ちな性向、外国語使用の不如意、ガイジン苦手意識が、依然として払拭できない。

この30年で留学生の数は著しく増加し、人文系では院生や学部生の大半が留学生で占められる専攻も少なくない。だがこのような環境に置かれた留学生たちは、しばしば本国で受けた躰と、留学先・日本での流儀と間に、克服し難い格差や隔たりを感じ、そのどちらを選べばよいのかと、選択に悩むこととなる。出身国の学会作法や論法は、日本の国内学会では往々にして無礼にして御法度と見做されるからだ。中国の学会は外国専門家に「人民に奉仕」すべく百科事典的な鳥瞰や実用的な通詞役を求め、合衆国のアジア学会では、初心者にも理解可能な平易な米語の言葉遣いによる、広い視野に立った論文構築が要求される。だがこれは、日本の國文学や國史学その他の関連学会で、学術論文執筆や学会発表の際に要請され躰けられる作法とは、ほぼ対極にある。周知の事実は繰り返さず、学会の到達点を前提として、高見に立って立論することが、日本の学会では前提条件となるからだ。部外者には理解不能で、内通者だけに通用する術語や表現法に熟達することが重用される事態。そこにも、日本の学会が近代以降、欧米社会との競り合いのなかで「学習」した島国根性の自己保全本能の発現を見るべきやもしれまい。そしてこれらの日本語の歴史術語や、欧米語から日本語に訳された学術用語は、漢語で

は意味不明、欧米語に訳し戻しても通用しない変容を来している。

## 翻訳の問題

ここに学術上の翻訳問題が浮上する。日本の事例を欧米語で通用している学術用語に沿って流麗に説明する程度のことならば、学部水準で留学し、博士号を取得して大学院を修了するといった経歴を積み、さしあたりはクリアできよう。だがそうした経歴を積んだ学者には、往々にして、国内学会への復帰がままならない、という回帰不能現象が発症する。欧米学会では喝采を浴びるが、日本の学会からは、やっかみ、あるいは「お作法無視」を理由に疎外され、それが心身の外傷を生む症例も少なくない。英語が流暢にしゃべれる、あるいは対象とされる外国の語学が日本の先輩や師匠筋より巧み、となると、それだけでバッシングの対象となる。国内学会大気圏再突入失敗の事例である。

内外の学会に残る落差や両者を隔てる構造的な疎外体質が、どっちつかずの境涯に陥った個人に心身症として発現する。これはイソップ説話に見られる、鳥の王国と動物の王国との両方から疎外される蝙蝠症候群である。ここでは誰彼といった個別例を指摘することは慎むが、往年ならば、海外留学で注目された優秀な日本女性には、帰国しても日本市場には相応しい職場が見つからず、あるいは男性側からいじめを受け、結果として頭脳流出となり、海外で生涯を全うした事例にも事欠くまい。これに劣らず、帰国忌避の男性陣には、痛烈な日本批判者として名をなした著名人も少なくない。ジャパン・バッシングが歓迎される時代風潮下であれば、相手側の国に受け入れられるためには適切な適応事例。その逆に帰国後、国粹右翼と化す事例にも枚挙に暇ない。

こうした事例と、学問上の言語使用、さらに翻訳作業とは、密接に関係する。日本の事象を淀みない外国語に置換していると、受信側の相手側の受けはよいが、発信側の内面には、なにか自らを裏切っているような、おちつかない不安が過ぎる。逆に発信側の論理に忠実たらんと努めると、受信側からは理解困難とてお咎めを頂戴しがちだ。特殊をいかにして普遍と見做される土俵で通用するように改訂するか、この操作が翻訳作業と切り離せない。そしてこの改訂作業は、場合によっては出身内地に対する裏切りか、受信外地に向けた知的亡命か、といった決断と無縁でない。両者を器用に使い分ける手合いもあるが、これはこれで二枚舌、機会主義者の誹りを免れない。悪くすると多重人格にいたる精神障害が発症する。悪名高い「日本人論」も、むしろこうした病例として診断されるべき現象ではなかったか。

とりわけ、近代の日本語は、欧米語と漢語との橋渡しによって語彙を豊かにしてきた。後述する梁啓超などは日本亡命時に、その利点を生かして中国の白話改革に先鞭をつけた知識人である。インドや南米の場合には、植民地宗主国の言語支配によって、民族的な自覚までも剥奪され、あるいは抑圧される結果を招いた。国民国家としての近代日本はこの桎梏は逃れたものの、21世紀の通称「グローバル化」と呼ばれる流通システム・度量衡の地球規模での一元化の趨勢のなかで、世界有数の英語不得手国民たる自己評価・他者評価が固着し、かえって明治維新以来の「近代化」成功の思わぬ「ツケ」を払う巡

り合わせを迎えている。

ここで手短かにふたつの指摘をしておきたい。そもそも芭蕉にせよ蕪村にせよ、英訳その他の外国語訳を参照するのは、きわめて有益だ。とかく翻訳によって原語の本質的な価値が減衰する、翻訳では大切な勘所は分らないとの批判が横行する。だが芭蕉の「枯れ枝に鴉のとまりたり秋の暮れ」の鴉は何羽か、秋の暮れとは日暮れなのか晩秋なのかは、外国語に訳そうとしてみても、はじめて疑問として発現し、原文への意想外な問い直しを可能にする。マラル・アンダソヴァさんはロシア語を含めた外国語への『古事記』の翻訳を検討したが、敬語と受け身や使役が相互に互換性をもち、主語が示されない日本語の特徴に、実は神話が物語る政治支配の遂行的言表を成り立たせる語法上の策略が織り込まれていた。こうした視線は外国語を介さない限り可視化できない。『源氏物語』の場合でも、アーサー・ウェイリーによる英訳は、同時代の英国の文壇のみならず社会的規範や道徳観を照らす鏡となっており、原文との突合せは、古典学習と外国語習得にとって一挙両得となり、あわせて国際交流に必須の教養も身に着けうる。翻訳によってその素材を提供する作品が「世界文学」を形成する。

さらに、英語使用を国際化と短絡する傾向についても、一言触れておきたい。「国際日本研究」の土俵のうえでは、日本語は研究対象言語であるとともに、業務運営上の作業言語でもある。反対に英語といえば一枚岩と勘違いしがちだが、世界共通語となった言語は、実際には著しく分岐する。ノーベル文学賞受賞者の V. S. ナイポールなどは自ら英語の守護神であるかのように振る舞う折節もあったが、今や大英帝国旧植民地出身者が、大英帝国の威光を支え、その代理人を任じている。そうした脱植民地時代の趨勢に対して、日本における「海外認識」は数十年の遅れを冷凍保存しており、NHKの「英語でしゃべらナイト」など、あいもかわらず日本人を自称する人種の英語劣等感のうえに胡坐をかき、それをさらに助長・延命しようとする画策ではないか、と思われてならない。内向き志向が顕著な日本から隣国に視線を移せば、韓国や台湾は、国内市場の狭隘さを逆手にとり、いち早く「米国型」グローバル化に同化し、大陸中国は独自の「本位化」により世界基準設定を自ら舵取りしようとする機を窺っている。そのなかで倭臭ふんぶんたる漢語や和製英語の語彙をカタカナで量産し、ITや携帯電話などの器具で若い世代がそれらを増幅させている日本の大衆文化現象は、9.11以降にも日本列島に生き残った「ガラパゴス化」の顕著な事例として、あらためて注目に値する。ここには21世紀を迎えて初めて見えてきた、新たな翻訳問題がきざしているはずだ。

## Kritik と批判との落差

今回の会合では、海外からの参加者から、日本の、あるいは日文研の日本研究にたいする批判的提言を求めた。ここで「批判」という言葉を問題にしたのが、ドイツの文献学の伝統を具現する、マルクス・リュッターマンさんだった。Kritik という言葉は、欧州の学会では、少なく見積ってもデカルト以降の伝統を負っている。日本ではとかくデカルトは身体と精神を分離した哲学者として、批判も多い。だが実際にデカルトが主張

したのは、身体の原理すなわち物理法則だけでは解決のつかない領分として精神を確保し、そこに探りを入れるために彼が開発したのが、自己省察あるいは critique という方法だった。ところがそれに当てられた訳語の「批評」は、儒教世界では政治的な分別すなわち上下関係を前提とする。君主に対する臣下のあるべき態度という名分論を前提とした「批判」は、西欧世界のデカルト以来の伝統が語る Kritik とは似て非なるものではないか。そもそもそうした洞察に欠ける批判的行為が、日本の学術の「自己本位」を妨げる隠された要因のひとつではないのだろうか。

漱石の英文学の先生だったジェイムズ・マードックは、離日するや、オーストラリアに移住し、かの地で日本研究の礎を築いた。バーバラ・ハートリーさんの指摘である。ところで平川祐弘氏の研究によれば、漱石の「マードック先生」に触発されたのが、ほかならぬ魯迅の「藤野先生」。この説は中国革命の旗手たる模範的作家を、日本のブルジョワ小説家の亜流と見做し、剽窃者扱いするとは何事か、として、発表当初、竹内好らから猛反発、それこそ「批判」を食らったという。だが、平川説は、現在では大陸中国でも広く支持され教科書に言及される定説へと変貌を遂げた。国境や国籍・文化圏を超えた師弟関係は、しばしば思わぬ自己批判意識の発芽を促し、自己意識の牢獄からの解放を約束する。研究者共同体というものも、特定の学閥や学統への帰属意識を超えて、相互交流の出会いの網の目のうえに想定したほうが健全ではあるまいか。ここに日文研の果たすべき国際的役割の一端も見えてくる。

## 世界文学のなかの日本文学

ここで「世界」という尺度のなかで、日本をいかに位置づけるかが問われることとなる。先刻も手短かに触れた「世界文学」という概念を、今少し検討しよう。通念としては J.W. ゲーテの Weltliteratur の提唱に淵源を發するとされるが、ヴォルフガング・シャモニーさんの研究によれば、それに先立つ用例もドイツ語圏では知られている。共産主義圏では、「世界文学」は学術上の範疇としても、1950年代から市民権を得ており、大規模なロシア語への「世界文学全集」翻訳プロジェクトも推進されてきた。これに対して、冷戦体制崩壊後、近年では欧米圏の比較文学研究者を中心に、西欧の文学規範が脱近代主義、脱植民地主義の隆盛とともに崩壊した以降の現状認識に基づき、欧米規範の塗り替えが提唱された。かつての「非同盟」諸国の第三世界、さらには従来では視野に入ることも稀だった、アジアやアフリカ各国の文学がノーベル賞候補に指名されるようになった経緯も無視できまい。この30年ほどで現代の「世界文学」を再定義しようとする趨勢は、もはや押しとどめ得ない。とはいえここでも、主要な欧米語への翻訳が、未だに国際的文学賞受賞の前提条件となり、そのためには、欧米の文学市場の嗜好や趣味、さらには政治的正しさに合致した判断基準に沿うことが暗黙裡に要請される、という政治的な問題も無視できまい。先に触れた翻訳問題がここに関わるが、それと並んで、欧米社会の内部でも、複数の文化圏を跨ぐ話題が好んで取り上げられ、創作の過程でも多言語間の往還のなかで生成する文学現象を、「世界文学」と再定義する見方も浮上してきた。

単一言語を前提とした国民国家理念の破綻や、多国籍企業の活動が当然となった現今の世界の金融や物流、亡命者を含む移民状況への注目も、その背景をなす。

王中忱さんは堀田善衛の『歯車』を「世界文学」として扱われるべき作品とみなした。矛盾の『腐食』に堀田は触発されていることが、その根拠となる。以下は稲賀の補足だが、同じ矛盾の『子夜』とアンドレ・マルローの『人間の条件』さらには横光利一『上海』を、戦中期の上海を舞台とした実録仕立ての小説群として並べて読むことを、かつて仏文学者の故・渡辺一民が提唱していた。その延長上で、マルローの小説の主人公格のモデルであった小松清が日本敗戦直後のヴェトナムを舞台として、和平交渉の水面下を描いた『ヴェトナムの血』、さらには、近年の作例として、一方でカズオ・イシグロの『わたしたちが孤児だったころ』から松浦寿輝の『名誉と恍惚』にいたる系譜を、国際都市上海の租界をめぐるトポスとして「世界文学」の俎上にあげ、総合的に考察してみる可能性も考慮に値するだろう。

王先生は「世界文学」を、中国の大学での科目名という枠で構想しているが、それはあるいは歌舞伎でいう「世界」でも構わず、様々な「世界」の定義が可能となる。『上海日記』も公表された堀田が、狭い日本文学の土俵を離れ、「世界文学」の住人に遇されるのも、まことに相応しい。虚構と実録との垣根を越えて、松本重治の『上海時代』まで視野に含めるならば、『魔都上海』（劉建輝）の歴史的文化史の地誌・地形図のうえに、ひとつの多国籍都市文学も展望できよう。日本文学はもとより現在の日本領土に限定されるものではない。戦前の帝国の版図や植民地経営の現場には、様々な利害や視点が錯綜する。また日本語も日本人国籍保有者の専売特許ではない。外地日本文学、日本占領下の非日本語文学さらには非日本国籍者による日本語文学へ、と視野を拡大するならば、それと世界文学という枠組みとがどのように交錯するかに関しても、さらに突き詰めた理論的考察が要請されるだろう。

脱植民地現象とは、日本もまた無縁ではない。日本支配下の台湾や朝鮮半島の文学研究を言語別ではなく横に連らね、さらにブラジルや満洲国を舞台とした移民文学研究にも視野を広げることが、国際日本学に重要な試金石を提供する。いうまでもなく、ここでは支配・被支配の関係につき、図式的でない接近が不可欠だ。「慰安婦」徴用問題ひとつとっても、政治決着とは別途の次元へと回路を開くことが不可欠だろう。被支配を経験した社会の側の内的な必然性が、どのような歴史的経緯を経て現在の政治意識や民衆運動を醸成しているのか。その理解が、相互的国際日本学の構築には不可欠だろう。文学であれ藝術であれ、表象や表現は創作者個人の意思や為政者の解釈によって一義的に統御できるものではない。意味を育て、それを培ってゆくのは、関わる人々の意思である。異文化間の相互理解を律するためには当然なこの前提が、現在の国民国家の教育制度では蔑ろにされている。短絡な愛国教育は、国内での不都合な現実から国民の目を躲すための、眼くらましの囿に他ならない。

## アジア革命家の集積地としての日本

思い返せば、近代と呼ばれる時代にあつて、長崎や横浜そして神戸は、広東や上海に劣らず、亡命知識人の潜伏地となり、革命運動の発祥地とすら目された。韓東育さんは朱舜水の事例を取り上げたが、鄭成功の使節として長崎に滞在したこの儒学者が、徳川光圀に厚遇され水戸学の発展に寄与したことは、17世紀の東アジア文化史において看過しがたい事績である。スペインのフェリペ2世の没年が豊臣秀吉のそれと同じ1597年であり、徳川家康が三浦按針らを使って欧州との交易に前向きに取り組み、さらには明の遺民、近松門左衛門「国性爺合戦」の混血遺民・鄭成功が、西班牙の跡を襲っていた和蘭勢を追い落として台湾支配を開始した。そうした史実からは、海洋国家としての当時の日本の潜在的可能性も推測できる。

そのうえで所謂鎖国を選んだ日本の位置は、あらためて世界史のなかで再考されるに値する。バブル経済末期の日本では、徳川日本が称賛されたが、それはポスト・モダンの理想を安易に江戸時代に重ね合わせる時代錯誤に他ならぬと、批判もされた。とはいえ、敗戦後以来のマルクス主義史観は、徳川に近代以前の封建社会という暗黒像を貼り付けることに腐心したし、それに続く1960年代の北米を主軸とする近代化論は、今度は西欧近代をモデルとしてそれへの展開に先鞭をつけた幕末明治期の啓蒙を評価してきた。いずれも西欧社会を典型として非西欧社会を分析するという性向から脱し得ず、日本の主流学会もそうした拝外志向に追随するばかりだった。Pax Tokugawana を提唱した芳賀徹氏は学士院恩賜賞の対象となった近著『文明としての徳川日本 1603-1853年』（2018）で、そうした他者依存の視座から脱却して、各文明が他との相互交渉を通じて培った内在的特質を明らかにすることが、むしろ将来の世界のための範例を模索するためにも有効ではないか、と提案する。

ファン・ハイリンさんは江戸時代を通じて6回にわたって象が招来された事例を取り上げた。タイやヴェトナムの現地でのゾウの価格は、日本に齎されると額面では750倍にも上昇する。象の輸入へのヴェトナム商人の関与については、近藤重蔵の『安南紀略』にも象の招来に関わる価格や運搬船舶について詳細な記載があり、貴重品の交易がもたらす付加価値の大きさも歴然とするが、東南アジア現地では、象はまた木材運搬に従事する家畜であるとともに、北方の馬同様に、軍事用途の乗り物でもあった。さらにこれらの交易を司る銀は、清朝において決済の手段であり、清を中心とした銀の大規模な移動とアヘン戦争にまで至る金融の実態復元もまた、東アジア経済史では、近年とりわけ大きな注目を集めている研究課題である。ファン・ハイリンさんはさらに松坂を産地とする木綿織物、松坂縞についても研究をすすめて、伊勢の回船問屋、角屋七郎兵衛栄吉が1632年から41年間ホイアンに永住した事績をもとに、17世紀におけるヴェトナムから日本への綿織物の交易の実態復元に挑んでいる。これら交易に関する事実を丹念に再構築することから、いわゆる鎖国時代の東アジアや東南アジアを含む地域の海上交通の実態と、日本との関係も洗い直しがなされよう。評者は共同研究として『海賊史観からみた世界史の再構築』を取り上げ、海上交易の見地から現代にいたる世界史の見直しを提

唱しているが、ここでもヴェトナムの関与は看過しがたい。

東・東南アジアの近代化において、日本の福澤諭吉に類する役割を担った人物に、梁啓超を数えることが出来よう。実際、東海散士の『佳人の奇遇』を梁啓超は、横浜で創刊した『清議報』（1898年創刊）誌上で『佳人奇遇』として漢訳連載したが、それは追ってファン・チュー・チンにより、ヴェトナム語韻文に翻訳され *Giai Nhân Kỳ Ngộ Diễn Ca* つまり『佳人奇遇演歌』として流通する。クオック・ゲー（国語）で記された訳文は1926年に公刊され、ヴェトナム近代を代表する国民文学の一編として遇される。先述の韓東育さんによれば、水戸藩に厚遇された李舜水の事績を取り上げ、その梁啓超はこう述べていた。「舜水之学不行於中国、是中国的不幸。然而行於日本、也算人類幸了」と。晩年の『中国近三百年學術史』（1926）にみえる述懐だが、人類史という広大な視野にあって、東アジア史を鳥瞰する梁のごとき見識は、およそ現今の日本の歴史学者や国際関係論研究者には期待できまい。梁啓超自身も、朱舜水同様、日本に亡命して啓蒙活動を通じ中国近代化に尽力した人物である。亡命知識人の視点を借りた日本認識もまた、国際日本学という分野にとって不可欠の論点を提供する。

## 国際関係論再考 所有による正義から品位による評価へ

大正時代に視点を移しても、同様の視座はなお日本近代史研究において大きく欠落しているのではなかろうか。これは『第一次大戦と新たな日本の勝利』の著者、フレデリック・ディッキンソンさんの問題意識とも重なる。ランジャナ・ムコパディヤヤーさんはヴィスヴェスヴァラヤ M. Visvesvaraya (1861-1962) とサイド・ロース・マスード Syed Ross Masood とを、インドにおける日本研究者の先駆として取り上げた。ふたりはともに1922年に初来日を果たしているが、これはおよそ偶然ではない。第一次世界大戦が終結し、ヴェルサイユ体制が確立するが、その直後の1919年、朝鮮半島では三・一独立運動、中国の五・四運動、インド亜大陸ではアムリツァーの虐殺事件という植民地体制の病理の典型というべき事件があいついで勃発している。帝国主義植民地統治の実相が露わとなり、第三世界出身者たちが国際的な連帯を模索し始めたのが、この時期だった。アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞した詩人のロビンドロナト・タゴールは1916年に続き1924年にも来日している。また朝鮮陶磁とインドとの橋渡しを果たしたグルチャラン・シンの来日も1919年のこと。彼がイギリスの陶藝学校に留学せず、なぜ日本を選び、柳宗悦や浅川巧らと親交を結び得たのかは、こうした国際情勢を視野に収めなければ理解できまい。さらに言えば、コスモポリタン意識や民本主義が喧伝されるこの時期を理解するには、国際的な諜報スパイ網の研究も疎かにできない。1930年代のブリテッシュ・カウンシルや、日本ならば国際文化振興会などの活動がここに密接に関連する。また仏教諸派の海外布教や三井物産、大阪商船などの貿易活動も、無縁ではない。海洋交易史や移民史が、この時期を対象とする国際日本学の探究課題として浮上する。

翻ってみるに、こうした知識人たちの活動を、国境を越えて理解し、残された文献資

料を基軸に広義の「世界文学」の構成要素として鳥瞰するような視点は、敗戦後の戦争忌避に縛られてきた日本の学術には、とりわけ乏しい。日露戦争期の海軍に関しては、島田謹二の著作が先鞭をつけたものといえよう。その前後を含む時期を国際的に鳥瞰すべく、筆者は共同研究会の成果報告として『東洋意識』(2012)を編纂した。だがそれをあっけなく凌駕する企てをパンカジ・ミシュラ『アジア再興—帝国主義に挑んだ志士たち』(園部哲訳、白水社、原題は *From the Ruins of Empire: The Intellectuals Who Remade Asia*, 2013) が実現している。本書は、アル・アフガーニー、梁啓超にラビンドロナータ・タゴールを主要な主人公として、かれらの人間模様と思想の交錯とを、破綻なく見事に世界史大に展開してみせた、優れた読み物と評価したい。福沢諭吉や徳富蘇峰を同時代世界史のなかで評価するには、東洋全域への目配りは不可欠ではなからうか。国際日本研究とは、世界の沃野へと国内の研究を拓く場でもありたい。

こうした研究計画として、日文研を初動機関としながら、その後国際的な展開を実現した模範例としては、台湾の中央研究院に所属する黄自進さんが進めた事例に指を屈したい。日文研における黄氏主催の共同研究「日本の軍事戦略と東アジア社会—日中戦争期を中心として」(2014-15)はその後、中央研究院・近代史研究所における「和解への道—日中戦争の再検討」(2015-17)に引き継がれ、国際シンポジウムの開催へと発展した。さらに早稲田大学で2017年度から「和解学の創成:正義ある和解を求めて」が「新学術領域研究(研究領域提案型)」として新規採用されている。その詳細は黄論文に譲るが、特定の機関だけでは実現不可能な研究プロジェクトが多段式ロケット顔負けの発展を遂げるうえで、日文研が発信基地としての役割を果たし得た貴重な事例であり、今後のモデルとなることも期待される。

## グローバル・モルモット「日本」を国際的に研究する意味と可能性—小結にかえて

すべての議論に過不足ない講評を加えるのは、もとよりここでの意図ではない。最後に、コメントとして磯田道史さんから示された「グローバル・モルモット」Global guinea pigとしての日本という論点に触れておきたい。世界基準なる標準化に抗して、それとはコンパチではない、つまり共約性に欠けた列島文化に内没する傾向は、思えば pax Tokugawana の260年にもみられた孤立化政策だった。日本列島は孤立という理念を通して、世界と繋がり、活発な交流とりわけ物流を維持していたからだ。そしてこの「孤立」を改めてここ500年のスパンで世界史的に再検討する機運も醸成されてきた。日本列島は決して経済の世界システムから除外されていたわけではなかったからだ。21世紀を迎え、もっぱら内向き志向を指摘され、世界のなかでの孤立した実験場として日本文化を「批判的」に考究する——。それは、バブル経済崩壊後に一時期取り沙汰された「ガラパゴス」現象、長期経済的低迷下の日本原産の大衆文化の趨勢を捉える視点とも重なってくる。日本国籍者は内向きかもしれないが、列島には多くの外国人が流入しており、人口動態学や都市生態学も、もはや日本国籍者の人口構成だけで列島の社会を理解できる段階など越えている。そしてそれは世界各地の多くの都市圏に共通する。

中国近代史における蔣毛交代、すなわち蔣介石の国民党から毛沢東の共産党へという権力奪取が、長期的な視野からみてひとつの消耗戦でしかなかったとなれば、その傍らの周辺国の後期資本主義時代から脱近代への舵取りは、従来の通説的理解を塗り替える可能性を孕んでいる。禍福は糾える縄のごとし、と言われるが、世界は複雑な利害によって相互依存のネットワークで結ばれており、もはや国民国家単位での優劣の競い合いでは、東アジアや地球世界の現状を理解することは覚束ない。「国際」を冠した「日本研究」とは、こうした現状認識のもとで刷新されるべき頃合いを迎えている。韓東育先生は、国際政治への関与にあって、学術研究は対立の火に油を注ぐのではなく、むしろ消防車の役割を任じるべき、と指摘された。その顰に倣って蛇足を加えたい。およそ物事を壊すのはいたって容易い。兵器と呼ばれる死の産業はもっぱらそうした破壊行為に加担する。だがなにかを作り上げてゆくには、おそろしい忍耐と労苦が要求される。モノをつくるのは大変であり、教育や研究はそのモノツクリのワザの末端を支え、それを世代から世代へと手渡す。これを軽視する政府が没落し、国民が疲弊するのは当然であろう。官僚機構に対しては「拝官不就」を貫きたい。

とかく外国を調査地とする地域研究者は、出身の自国に深い関心を抱かない。日本の場合も、邦人の外国専門家は概して海外の日本研究者との交流が疎かであり、反対に日本の国学には、外国からの参入者に対しても、頭から日本の国内流儀を押し付ける傾向が否めない。この両者に擦れ違いと意思疎通不全が残る限り、日文研にはその間隙を埋め、流通を促進する役割が残るであろう。兩岸に電位差があり、両者の接触が化学反応を惹起する限りにおいて、徳川時代の象の交易同様に、双方がそこから利潤を得ることができる。平準化が完了しない限り、国際日本研究というプラットフォームは、存在価値を失うまい。そしてその兩岸とは日本と特定の他国との一対一の関係ではない。点と線ではない多面的な発着場、多方向的、双方向的な交流を確保する「接触領域」さらには、多文化への射程を組み込んで、将来への展開の基軸となる発信基地として、30周年を迎えた日文研を、あらたに再定義してみたい。

今回の記念シンポジウムは、小規模ながら、枢要な研究者の参加を得て、学界に内没した延命策に終始するような議論を乗り越え、過去を振り返り、将来への「文化的実験動物」の社会生態研究にむけ、有効な視野を拓くために格好の議論を提供したものと評価したい。

2018年5月18-19日執筆

\*シンポジウム出席者には「さん」、生存者には「氏」、執筆段階での物故者からは敬称を略した。

## 30周年のシンポジウムをおえて

井上章一

私事にわたるが、私はイタリアの建築史を、若いころにかじった。ルネッサンス期からバロック時代の本や論文に、しばしば目をとおしたものである。読んでいて気づいたのだが、イタリア人以外の研究もたくさんある。アメリカやドイツでなされる発表が、じつに多い。イタリア側は、イタリア人だけの都合で、解釈を左右しきれないんだなと痛感した。

いっぽう、日本文化史の研究は、そういう状況におかれていない。たとえば、安土桃山文化にいどむ研究者の、その大半は日本人である。日本人が日本の都合で、その読み解きを語りあってきた。海外の見解が日本の学界に影をおとすことは、考えにくい。

ルネッサンスの分析は、世界へひらかれている。だが、安土桃山文化についてのそれは、日本のなかだけで処理される。そこに問題はないのかと、私は以前から考えてきた。日本の学問を海外へ知らせることだけが、日文研の仕事ではない。外のとらえ方とであって、そのちがいにむきあうことも、たいせつな研究である、と。

2018年の5月20日と21日に、国際シンポジウムを開催した。日文研の創設30周年を記念するもよおしである。今後の学术交流をささえて下さるだろう16名の方を世界12カ国からおまねきした。肝煎り役をあたえられた私は、その特権で、今のべたような志を参加者につたえている。私たちに、発見をもたらししてほしい、と。そして、その出来栄えにも、おおむね満足しているしだいである。

\*本稿は、『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』(No.98)、国際日本文化研究センター、2018年所収のエッセイを、再掲したものです。

## 創立 30 周年記念国際シンポジウム

### 「世界の中の日本研究 批判的提言を求めて」

#### ■ 2018 年 5 月 19 日 (土)

- 13:00- レジストレーション (於: 日文研内 エントランス)  
17:00- ウェルカムパーティ (於: 日文研内 レストラン赤おに)

#### ■ 2018 年 5 月 20 日 (日) (於: 日文研内 第一共同研究室)

- 9:30-10:00 趣旨説明: 井上 章一 (創立 30 周年記念国際シンポジウム実行委員長)  
所長挨拶: 小松 和彦 (国際日本文化研究センター所長)

#### (1) 「歴史」 進行: 呉座 勇一 (国際日本文化研究センター助教)

- 10:00-10:40  
マティアス・ハイエク (パリ・ディドロ大学 准教授)  
「新しい問題意識の共有へーフランスにおける日本 (文化) 史研究の近況を一例にして」  
コメンテーター: 瀧井 一博 (国際日本文化研究センター教授)

- 10:40-11:20  
ファン・ハイ・リン (ベトナム国家大学 准教授)  
「日本研究の国際化及び学際化にむけて」  
コメンテーター: 榎本 渉 (国際日本文化研究センター准教授)

- 11:20-12:00  
ランジャン・ムコパディヤヤ (デリー大学 准教授)  
「日本研究と社会科学—インドにおける日本研究の現状から」  
コメンテーター: フレデリック・クレインス (国際日本文化研究センター准教授)

- 12:00-13:00 休憩 (於: 日文研内 第三共同研究室、第六共同研究室)

#### (2) 「古典・言語」 進行: 石上 阿希 (国際日本文化研究センター特任助教)

- 13:00-13:40  
アンダソヴァ・マラル (日本学術振興会外国人特別研究員/和光大学)  
「世界の中の日本古典文学—翻訳と研究方法の問題点から」  
コメンテーター: マルクス・リュッターマン (国際日本文化研究センター教授)

- 13:40-14:20  
李 康民 (漢陽大学 教授)  
「韓国における日本研究の現状と課題—日文研創立 30 周年に寄せて—」  
コメンテーター: 楊 曉捷 (カルガリー大学 教授)

- 14:20-15:00 コーヒーブレイク

#### (3) 「舞台芸術」 進行: 古川 綾子 (国際日本文化研究センター助教)

- 15:00-15:40  
時田アリソン (京都市立芸術大学 客員教授/モナシュ大学)  
「日本音楽の研究の内と外 The Ins and Outs of Japanese Music Research」  
コメンテーター: 前川 志織 (国際日本文化研究センター特任助教)

15:40-16:20

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ (ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 教授)

「共同研究の力点を考える」

共同研究『日本の舞台芸術における身体—死と生、人形と人工体』

コメンテーター：荒木 浩 (国際日本文化研究センター教授)

■ 2018年5月21日(月) (於：日文研内 第一共同研究室)

(4) 「近現代文学」 進行：石川 肇 (国際日本文化研究センター助教)

10:00-10:40

王 中忱 (清華大学 教授)

「新しい『世界文学』を構築する試み—堀田善衛の『齒車』を中心に—」

コメンテーター：坪井 秀人 (国際日本文化研究センター教授)

10:40-11:20

尹 相仁 (ソウル大学 教授)

「『自己本位』の日本文学研究のすすめ」

コメンテーター：牛村 圭 (国際日本文化研究センター教授)

11:20-12:00

バーバラ・トニ・ハートリー (タスマニア大学 上級講師)

「世界の中の日本研究—批判的提言を求めて— オーストラリアの側面から」

コメンテーター：プラット・アブラハム・ジョージ (ジャワハラル・ネリー大学 教授)

12:00-13:00 休憩 (於：日文研内 第三共同研究室、第六共同研究室)

(5) 「政治・思想」 進行：吉江 弘和 (国際日本文化研究センター助教)

13:00-13:40

フレデリック・ディキンソン (ペンシルベニア大学 教授)

「日文研と私—『日本人論』から『日本から見た世界』の研究へ—」

コメンテーター：磯田 道史 (国際日本文化研究センター准教授)

13:40-14:20

黄 自進 (中央研究院近代史研究所 研究員)

「日本研究グローバル化の試み—日中戦争史の共同研究を中心に—」

コメンテーター：楠 綾子 (国際日本文化研究センター准教授)

14:20-15:00

韓 東育 (東北師範大学 教授)

「朱舜水の『拜官不就』と『明徴君』の称号」

コメンテーター：安井 眞奈美 (国際日本文化研究センター教授)

15:00-15:20 コーヒーブレイク

15:20-16:30

総合討論 司会：稲賀 繁美 (国際日本文化研究センター教授)

総括：郭 連友 (北京外国語大学 教授)

16:30 閉会の挨拶

16:40- 創立30周年記念パーティー 受付開始 (於：日文研中庭付近)

17:15- 創立30周年記念パーティー 開始 (於：日文研中庭)

## 執筆者一覧

### CONTRIBUTORS

- 小松 和彦 KOMATSU Kazuhiko  
国際日本文化研究センター 所長
- マティアス・ハイエク Matthias HAYEK  
パリ・ディドロ大学 准教授／東アジア文明研究所（CRCAO）副所長
- ファン・ハイ・リン PHAN Hai Linh  
ベトナム国家大学 准教授
- アンダソヴァ・マラル Andassova MARAL  
日本学術振興会外国人特別研究員／和光大学
- 李 康民 YI Kang-min  
漢陽大学 教授
- 時田 アリソン Alison TOKITA  
京都市立芸術大学 客員教授／モナシュ大学
- ボナヴェントゥーラ・ルベルティ Bonaventura RUPERTI  
ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 教授
- 王 中忱 WANG Zhongchen  
清華大学 教授
- バーバラ・ハートリー Barbara HARTLEY  
タスマニア大学 上級講師
- フレデリック・ディキンソン Frederick R. DICKINSON  
ペンシルベニア大学 教授
- 黄 自進 HUANG Tzuchin  
中央研究院近代史研究所 研究員
- 韓 東育 HAN Dongyu  
東北師範大学 教授
- ランジャナ・ムコパディヤヤー Ranjana MUKHOPADHYAYA  
デリー大学 准教授
- 尹 相仁 YUN Sanin  
ソウル大学 教授
- 稲賀 繁美 INAGA Shigemi  
国際日本文化研究センター 教授
- 井上 章一 INOUE Shōichi  
国際日本文化研究センター 教授／創立 30 周年記念国際シンポジウム実行委員長

(所属はシンポジウム開催当時のもの)

Affiliation as of the symposium date

国際シンポジウム 53  
世界の中の日本研究  
批判的提言を求めて

(創立 30 周年記念国際シンポジウム)

非売品

発行日 2021 年 3 月 31 日 初版第 1 刷発行

編 者 井上章一

発 行 大学共同利用機関法人人間文化研究機構  
国際日本文化研究センター

〒 610-1192 京都市西京区御陵大枝山町 3 丁目 2 番地

電話 075-335-2222 (代表) fax 075-335-2091

ウェブ <http://www.nichibun.ac.jp/>

印刷・製本 創文堂印刷株式会社

〒 918-8231 福井県福井市問屋町 1-7

電話 0776-22-1313



Print edition : ISSN 0915-2822  
Online edition : ISSN 2434-3145

INTERNATIONAL SYMPOSIUM 53

INTERNATIONAL  
RESEARCH CENTER  
FOR JAPANESE STUDIES

世界の中のの日本研究 批判的提言を求めて

国際シンポジウム53

国際日本文化研究センター